

---

# 永遠の雨、雲間の光

吉野圭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永遠の雨、雲間の光

### 【Nコード】

N1911H

### 【作者名】

吉野圭

### 【あらすじ】

出会いの刹那、運命は定まった。古代〜超古代、一万年を遡る転生物語。序「青い河」…決して倒れることがないと言われた大国、東に生まれた僕。しかし十年前より各地で革命が起き、今まさに国は滅びようとしている。忌まわしい記憶から逃れるように旅をしていた僕たちは、青い河の傍らで真実を知る。メインストーリー「遙かなる始まりの国」…一万年前、理想郷と呼ばれたレイリア皇国。僕が本当の名を知った時、運命が動き出す。(サイトより転載)

## 序 「青い河」(前書き)

この小説は前作『我傍に立つ』に続く、一話ごと独立の転生物語と  
なっています。詳細解説はサイトへ。

## 序 「青い河」

東の果てに光が生まれ、新しい日が始まる。

黒から青に移りゆく空は、ひと時、世界を青く染める。水の底の廃墟のように、全ては透明の青に浸される。

やがて、山の先端がきらりと輝く。夜が朝に生まれ変わるのだ。そして黄金の光が、静かな大地を照らし始める。

……

踏み出した足が地に沈んだ。

一足ごとに小気味良い音を立て、氷の柱が潰れていく。

立ち止まって背後を眺める。転々と丸い足跡がついてきている。視線を上げて遠く眺めた。氷の欠片を含んだ大地は、新しい日の光を浴びて煌いていた。

夜の間、黒い影に過ぎなかった山々は朝陽に素顔を晒している。

尾根に雪の刺繍をまとい聳える姿は、恐ろしくも美しい。

「アン！」

呼ばれて、振り返った。

彼がこちらを見ている。小走りで追いつき、襟を整えて背を伸ばし前を向いて歩いた。

指で引いた時、着物の襟がまた破れる音を聴いた。家を出る時には立派だった着物も、今は薄汚れたぼろ布に過ぎない。寒さをしのぐため、むやみに着重ねたぼろ布の山が、僕たちの足を重くしている。

微かに足を引きずる僕を、彼が無言で眺めていた。彼の痩せた背の上で、弟はまだ眠っている。

「アンは強いな」

ふいに、彼が言った。

「一言も、足が痛いとか、母に会いたいと言わん。アンは、強い子だな」

僕は答えず、足元へ視線を落としたり。

弟は旅の間中、素直に苦痛を訴えている。歩けば足が痛いと言ひ、夜になれば母が恋しいと言ひ、すすり泣く。でも僕は、この旅で一度も苦しみを言葉にしたことはなかった。

「アンはもっと、我がままになっていいんだぞ。これからは、したいことを何でも言うようにしなさい。私が全てを聞いてやる。決して遠慮してはいけない」

かけられた声の意外な優しさに、はつとして僕は隣の人を見上げた。

陽に焼けた顔の中から、慈しむ目が僕を見つめていた。

「これからは私がお前の父になるのだから」

\*

その年、十二歳の僕は弟とともに、これから父になる人に連れられて旅をしていた。

本当の父が死に、僕たち兄弟は伯父に引き取られることになったのだ。ちょうどその頃、伯父が遠くへ越すことになったので、僕たちもついて行かなければならなかった。

故郷を離れた日のことは、ぼんやり覚えている。

陽を浴びて白々と光る道の果てに、母が立っていた。大きな家の門の前でたくさんの侍女に身体を支えられるようにして、彼女は呆然とこちらを眺めていた。たぶん今生の別れとなるだろう場面なのに、僕には泣いた記憶がない。弟の泣き叫ぶ金切り声だけが記憶の底に響いている。

その後、どうなったのか覚えていない。

旅の記憶の一部を僕は失ってしまった。

どうして馬もなく従者もなく、三人だけで旅をしているのか。どうして、着の身着のままなのか。

わざと遠回りの道を選び、何ヶ月も歩き続けてきたと感じる。山を越える時でさえ自分たちの足だけを頼りにした。

危険が身に迫っているという感覚はなかった。

けれど空白となった記憶の中に、何事か恐ろしい出来事があったことは確かだ。

それはきつと思いついてはいけない、思い出すことは危険な出来事なのだと思う。

\*

地平線が光った。

横一列に宝石を散りばめたように、きらきらと一筋の光が輝いている。

はじめ何が光っているのか分からなかった。しかし歩いて行くと、光の正体が水であることが分かった。地平線で輝きながら揺れている水。やがてそれは視界一杯に広がる青の絨毯になった。

「海……」

思わず呟いた僕の声に耳にして、伯父が訂正した。

「いや、海ではない。あれは河だ」

「河？」

息を飲む。まさかそんなはずはない。だって対岸が見えない。

「そう。河だ。天下を潤す大いなる水流、我ら祖先の命を養ってきた大河だよ」

あれが、話に聞く大河。

その大きさは想像を遙かに越えていた。向こう岸が見えないほど河は大きく、僕たち人間は小さいのか。

僕は東トウという大国に生まれた。我ら東人の能力は絶大で、東人が作った文化は決して崩れることがないのだと教えられた。ところが

今、各地で革命が起き、“偉大なる”東の国家は傾いている。盗賊は好き放題にうるつき回り、女と子供はさらわれ、男は殺されている。この十年間、人々が流す血と涙は絶えることがない。

けれど大河はそれら人々の悲しみさえ呑み込んで、今日も青い水を湛えている。この河はそうして長い歴史を、青いまま流れてきたのだ……

「海！ 海だ！」

いつの間に目を覚ましたのだろうか。

歓声を上げた弟が、伯父の背中を飛び降りて駆け出した。

河だ、と訂正する暇もなかった。僕も少し笑ってから、弟の真似をして河へ駆けて行った。

その夜は河原で野宿をした。

集めた枯れ草と枝で火を焚き、寒さをしのぐとともに動物を遠ざける。火の番は、僕と伯父とで交代ですることになった。弟は食事が済むと枯れ草の布団にくるまり、すぐに寝息を立て始めた。

夜中、僕の番が来て火の傍に座った。

伯父は疲れていたのだろう、弟の隣に横たわるなり眠りに落ちた。番が来るまで一睡も出来なかった僕は疲れた瞳を天へ向けた。

いつもこの瞬間は怯える。僕は夜空が、恐ろしい。

黒い天蓋に散りばめられた星屑は、冷たい光の矢を降り注ぐ。光と光の隙間、深い闇の底からも、得体の知れぬ気配が降ってくる。

膨大な光の矢と、闇の気配は地表に降りて渦となり、息巻いて僕の心を奪い去る。心を奪われた僕は、眩暈と敗北感を覚えながら、しんと孤独に浸されるのだ。

星を眺めていると、涙が出る。それはきつと、この孤独のせいだと僕は考えている。

頬を伝う冷たい感触に気付き、慌てて涙を拭いた。

伯父が僕の泣いている場面を見たらきつと心配する。故郷が恋し

くて泣いているのだと答えられるならいいけど、それでは嘘になる。泣いている理由を人にうまく説明出来ない。説明しても分かってもらえないだろう。たぶん、さらに心配を深めるだけだ。

だから、人に見られるような場所では、決して泣かないように気を付けていた。

僕は着物の袖でしつかり涙を拭い、夜空から目を逸らした。今日はいつもとより空が澄んでいて星がよく見える。こんな夜は特に上を見ないよう気を付けなければいけない。

爆ぜる火の音に耳を傾けながら、視線を正面に据えた。

少し離れたところで、今は黒い水を湛える河が流れていた。流れていることにも気付かせないほど、静かに、緩やかに。

時折、風に煽られた水面が波を立てる。

波は光を呼び、河はたくさんの光の粒を浮かべて揺れた。

眺めているうち、その光が星を映したものだ気付いて僕の鼓動は跳ねた。

気付いても目を逸らすことが出来なかった。

僕の瞳は光に捕まり、河に映る星を見つめ続けた。

次第に光の粒が大きく見え始めた。

いつも星を見つめていると感じる恐怖が、塊となって膨らんでいく。これ以上、見つめてはいけない。見つめていると何かを知ってしまう。

逃げよう、と思った瞬間、恐怖が弾けて光と闇の渦に呑み込まれた。

刹那、僕は自分の秘密を知った。

星に呑み込まれた僕の心が見たもの、飛ぶように移り去った一万年の景色。

それはここに生まれる前の出来事、“過去”の人生の記憶だった



## 第一話 「ただ一つの美しい星」(前書き)

第一話あらすじ： 遙か昔、西の果てにあつた小都市。

孤児としての運命を負つて生まれた僕は、謎めいた老人に拾われる。

「アテン。真実を照らし出す明るい光」

名前とともに授けられたのは、世界の全てを知るための学問だった。

第一話 「ただ一つの美しい星」

(1)

蜜色の光が、僕を包み込んでいた。

暖かい光に身を委ねてまどろむ。

次第に光の色が濃く、深くなつていく。色が増すごとに暖かさも増した光は、やがて熟した果実の色に変わる。

頬を撫でる涼風が、光を浴びて火照った頬に心地良い。

風は懐かしい薫りを含んでいる。

これは何の薫りだったろう。

今の僕が知らない、甘くて苦い薫り。

懐かしい。

とても、懐かしい……。

涙が落ちた。

そうだった。僕はずっと、この薫りを探していた。この場所に帰りたかった。ここは、

海。

波の音が蘇った。

意識に広がったのは、鮮やかな緑。

風に激しく波打つ、草の海。

草原の先に森が見える。秘密の寝床を守ってくれる、母の森だ。

草原をぐるりと囲む森は一方だけ途切れている。木と木の隙間から、崖下の海を見ることが出来た。

煌<sup>キラ</sup>きながら揺れる青い絨毯の上を、白い波が一定の間隔を保ち滑り来る。

崖の先に立つと、少し離れた場所に同じ高さの崖が向かい合って見えた。

向こう側の崖の上には、波の色に似た白い建物があった。朝は冷たい光にさらされ白々と輝き、夕には薔薇色の陽に暖かく染まる。何のための建物なのか僕は知らなかったが、近寄ってはいけないと感じていた。高貴な世界の建物には違いないのだから、僕には遠く眺めることしか許されない。

女神の横顔を覗き見るように、僕は朝と夕の二回、白い建物を眺めた。届かない世界への憧れを抱いて。

それは一つ前の人生の記憶だった。

この“東”の国から遥かに遠く、陽の沈む方角の果てに、美しい海を囲む小さな国々があった。小国はそれぞれ独特の高い文化を持ち、人々は豊かに暮らしていた。

国々の中でも特に豊かな国に、僕は孤児<sup>みなしこ</sup>としての運命を負って生まれた。

小さい頃だったのでよく覚えていないけれど、父と母の二人とも、戦争で死んだのだっと思ったと思う。

孤児となってから僕は一人で生き延びた。

街で食べ物盗み、飢えをしのぎ。冬の最も寒い時期は農家の小屋に忍び込み、夜を過ごした。冬を除くほとんどの季節は、街はずれの森の草原に隠れて暮らした。

そうして七歳まで成長することが出来た。

孤児の僕に未来はなかった。夢を抱いたことはなかったし、希望も見なかった。

街で捕まれば奴隷として売りさばかれる身だ。だからその一日を自由な体で過ごすことが出来れば幸せだった。願いは明日も自由に

生きられることだけだった。

友達も必要としなかった。誰かの愛や、温もりを求めたことはなかった。温もりがこの世界にあることさえ、知らなかったのだと思う。

ただ、一度だけ温もりを確かに感じたことがあった。あれは一人の少女に触れた時……

ルティア。

耳元で囁かれた彼女の名は、ルティア。

陽に透ける金の髪が美しかった、深い瞳の少女。

いつだか一人きりで森に迷い込んで来て、彼女は僕を見つけた。

怯えを知らない少女は、貧しい身なりの少年に迷いなく近付き、柔らかい笑みを見せた。

「こんにちは。私は、ルティア。あなたは？」

僕は応えることが出来なかった。僕には、名前がないからだ。けれど黙ってうつむく僕の手を取り、ルティアは言ったのだ。

「名乗らなくても、いいわ。あなたは精霊ね。今日から私の、友達」  
握られた手は暖かった。

記憶の奥底に眠る母の温もり、頬に触れたあの柔らかな衣のよう

に。  
暖かい手を握り返したその日から、彼女は僕の友達となったのだ。生涯ただ一人きりの友達、そして恋焦がれた愛しい人に。

日差しが蜜色を帯びる頃、彼女は森に現れる。

泉と一緒に水浴びをした後、草原の食卓に戻り果実をほお張る。

二人で草むらの寝台を転げ回っているうち、いつしか眠りに落ちて

いる。  
星屑が散りばめられた天のもとで抱き合って眠る僕たちは、まるで双子で生まれた兄妹だった。

二つの魂は始めから一つだったかのように、一緒にいることを当

たり前として夜を過ごした。

けれど朝になると彼女は消えている。

僕は夕方に戻るはずの彼女に恋焦がれながら、一日を過ごすようになった。

ルティアがどんな家の娘なのか、僕は知らなかった。毎夜、自分と一緒にいるのだから、家がないのかもしれないと思っていた。けれど子供の僕に出来た推理はその程度だった。もしかしたら彼女こそ本物の妖精かもしれない、という考えのほうが正しく思えた。どちらにしても、いつか彼女が消えてしまう日が来ることは、想像さえしていなかった。

ある日、僕は白い花を織り込んだ草冠を作って彼女を待っていた。彼女に似合うと思ったからだし、笑顔が見たかったからだ。

僕はルティアの笑顔が大好きだった。彼女が笑うと、垂れ込めた雲の隙間から光が差し込んで世界が輝く。

もう一度、あの笑顔が見たかった。

新緑の冠を戴き、僕に向かって柔らかく溶ける笑顔が。

ただそれだけの願いは叶わなかった。草冠は彼女の頭に載ることなく枯れ、僕の手中で崩れた。

何日も握り締めていた草冠を、ついに足元へ落として、届かない名を呼んだ。

「ルティア……」

## 第一話(2)

朝露が頬に落ちた。

耳元で草が揺れている。

衣は露を含んで忌わしい鎖となり、僕を地に縛り付ける。

どれほどの時が過ぎたのだろう。食べ物も飲み物も口にせず、ルティアを待ち続けた僕は草原へ倒れた。それからずっと闇の世界と草原を行き来した。こうして闇の世界に近付き自分は死んでいく。もしかしたらもう、死んでいるのかもしれない。

薄れる意識の中で足音を聴いた気がした。

濡れた草を踏みしめる、力強い足音だった。

足音は次第に近付き僕の傍で止まった。揺れる草の隙間から、足の先が見えた。白く太い、大人の足指だ。

力を振り絞って重い頭を持ち上げ、天を仰いだ。

柔らかな、白い衣の襞が風に揺れている。緩く羽織られた白地の外套の、縁に施された金の模様は、風に煽られるたび光を反射してちらちらと輝いた。

霞がかかる空を背景に僕は見た。

朝陽に透き通る、純白の長い髭に包まれた顔から、穏やかな黒い瞳が見下ろしているのを。

「……神、さま……？」

呟いた僕へ、彼は違うと言って笑った。そして衣が濡れるのも厭わずひざまずき、手を伸ばしてくる。

頬を包んだ大きな手の平は、始めひやりとして、けれどすぐに暖かくなった。

何故だろう。怖くはない。染みる温もりが、体の底から不安を溶かしていく。

「私のところへ来るか」

問われた言葉に僕は、微かに頷いたように思う。

ふわりと浮いた体を包み込んだ温もりへ、全てを委ねて瞳を閉じた。

壁の切り取られた長方形から空が見える。吹き込んで来る風は海の薫りがした。

重い瞼を開けてゆっくりと周囲を見回した。

室内の闇は濃く、深い。外の光があまりにも眩しいせいだった。取り戻したばかりの視界に映るものは、何もかも影のようにぼんやりと滲んでよく見えない。自分の身を包む外套だけが、闇の中でも白い光を放っていた。

「ここは……？」

言葉を発すると、戸口の椅子に腰掛けていた老人が振り返った。

「私の隠れ家だよ」

そう言っただけは微笑み、器を手にして近付いて来た。食べ物匂いととともに、花に似た香りが漂った。高貴な人々が付けている香油の香りだった。

老人に背を支えられて、僕は寝台の上に体を起こした。手渡された器には、穀物を煮溶かした汁が入っていた。微かに甘いそれを、僕が少しずつ舐める様子を、老人は寝台の横に座り静かに見守っていた。

暗闇で見ても老人の肌は抜けるように白かった。豊かな髪や、長い髭も、黄ばみ一つない純白だ。

神様でなければ、彼は貴族なのだとは僕は悟った。僕にとっては神様も貴族も同じだった。自分とは別の世界の住人たち。その別世界の住人が、どうして僕の近くに居るのだろうか。

怖くなって僕は老人から目を逸らした。けれど、老人は僕の頭を手を置いて、自分の孫にするように優しく髪を撫でたのだった。

「よく目を覚ました。強い子だな」

耐えかねて僕は疑問を口にした。

「……どうして」

どうして僕を救ったんですか。

問いを最後まで言う前に、老人は僕に笑いかけ、立ち上がって開け放してある戸の向こうを指差した。

「私は以前から君の姿を見て、君を知っていた。ほら、あの崖の上に立っている君を」

老人の指の先に、切り立った崖が見えた。崖の上には緑深い小さな森。ほんの少し木々の途切れたところの、向こう側にはきつと草原がある。するとここは、僕がいつも見ていたあの白い建物……。

「毎朝、毎夕、あの崖の上に立っていたね。その姿がこしばらく見られなかった。どうしたのだろうと行ってみて、草原で君を見つけた」

鼓動が高鳴った。

見られていた。そして、知られていた。大人に寢床を知られないよう気を付けていたのに。

この老人は僕を救ったのではなく捕まえたのだろうか。これから彼の家で奴隷として使われるのか、それとも、遠くへ売り飛ばされるのか。

怖くはなかった。けれど悲しみが襲って来て、僕は愛しい人の名を呟いた。

「ルティア」

老人が僕の呟きに耳を傾けている。

「誰だね」

「ルティア……。僕と同じ年くらいの女の子です。毎日、あの草原に遊びに来ていた。でも突然、来なくなっただんです。彼女がどこに行っただか、知りませんか」

もしかしたら、先に捕まって老人の家にいるかもしれないと思った。しかし老人は首を傾げただけだった。

「聞いたことのない名前だ。どこの家のお嬢さんか？ 父親の名は？」

「知りません。ルティアという名前しか、知らない」  
「そうか」

老人は寝台の傍に座った。僕の手から器を取り、近くの机に置くと、大きい手で僕の手を包み込んだ。

触れる手の優しさで、僕は老人が伝えようとしている彼女の運命を悟った。

「ルティアは君が嫌いになって会いに来なくなったのではないよ。きつと、遠くの街に越さなければならなくなったんだ。彼女は遠くで元気に生きていくだろう。だから君も、元気に生きていかなければならない」

老人が話している途中から、涙がこぼれて止まらなくなった。彼は僕の手をさらに強く握り締め、厳しい口調で言った。

「生きなさい。生きていれば、いつかまたどこかで会える」

大粒の涙を落しながら何度も頷いた僕は、もうこの高貴な老人を疑ってはいなかった。これから先、自分に与えられる運命がどのようなものでも、彼が決めたのなら従おうと思った。

しばらく高熱が続いた。食べ物を得た体が力を取り戻したのだろう、と老人が言った。

老人は昼も夜も、黙々と僕を見守り続けた。食事を与え、薬草の汁を飲ませ、額の汗を拭いた。静かに見つめる黒い瞳には、祈りに似た想いが籠められていた。

僕の体は老人の祈りに応えたのか、熱を越えるたび回復に近づいていった。

闇の世界から伸びる手は、もうこの魂へ届かないだろう。……

ある日、はつきり取り戻した意識で僕は老人の背中を見た。彼は部屋の中央の机に向かって、何かの作業をしている。肩が小さく動き、そのたびに鼠が木を齧るような音がする。

「何を」

思わず起き上がって声をかけた。老人は振り返り、瞳を見開いて僕を見つめた。慎重な顔つきで耳を傾ける様子に、彼が質問の先を待っているのだと感じた。僕は畏れを堪えて訊ねた。

「それは、何をなさっているのですか」

「書き物をしている」

「書き物？」

「文を綴っているのだよ」

「そう、ですか」

僕は老人の手の先を見つめた。唾を飲み、喉が鳴った。僕には未知の世界だった。触れてはならない貴族だけの世界。逸らしかけた瞳を追いかけるように、老人が訊ねてきた。

「君は、文字が読めるか」

「読めません」

「では、読みたいと思ったことは？」

正直に答えてはいけけないはずの質問だった。けれど老人の真っ直ぐな瞳は、本当の答えを知りたがっていた。

その瞳に誘われて抑えていた気持ちが溢れた。

「いつも。いつも読みたいと思っています。でも、こんなこと、願ってはいけないんです」

「何故」

「僕には、無理だから。求めてはいけないものだから」

老人はじつと僕を見た後、近付いて来て寝台へ腰掛けた。手には薄い木の皮が握られている。

「見なさい。これが文字だ」

言われるまま皮の表面を見たが、そこに刻まれた無数の線は僕には意味の分からない模様に過ぎなかった。首を振り、目を逸らそうとすると、老人に頭を支えられ視線を戻された。

「求めている。求めて、学ぶなら、必ず読めるようになる」

隣を見上げた。暖かい瞳が見下ろしていた。

「私が君に文字を教えよう」

それから幾日か過ぎた。

次第に僕の体はもとの力を取り戻し、寝ている時間よりも起きている時間のほうが長くなった。そして起きている間、僕は老人から文字の教えを受けた。

体の完全な回復と、文字の習得はほぼ同時だった。

与えられた文章を全て<sup>よど</sup>読みなく読み上げる僕を見て、老人は椅子から立ち上がった。

「優秀だ」

呟くと、彼は窓辺に立ち物思いにふけた。その真剣な横顔に僕は寂しさを覚えた。

元気になった自分は、これ以上ここにいるわけにはいかない。老人も、いつまでも孤児の僕を養うことは出来ないだろう。僕はいよいよ奴隷として売られなければならない。文字を覚えたことで価値が高まり、老人のもとに高い金が入ると考えれば嬉しかった。命を救ってもらった恩には満たないけれど、これで少しだけお返しができる。

深く呼吸し、一気に言った。

「どうか気になさらないで。僕は帰るところのない身です。明日にでも市場へ連れて行ってください。誰に買われても構いません。せめて高く売ってください。あなたには感謝していますから……」

そこで言葉を止めた。老人が僕を見つめていた。

「私は君を手放すつもりはない」

その言葉に驚いて息を飲んだ。でも、本当は待ち望んだ言葉だった。すがりついて、ここへ置いて欲しいとお願いしたくなった。けれど血の繋がりが無い他人の厚意にすがってはいけないということを、僕は短い人生でもよく学んで知っていた。

「そんなの無理でしょう。いつまでもあなたから食べ物をもらい、家に居座って、ご迷惑をおかけするわけにはいきません」

「迷惑だと」

老人は啞然と口を開けて笑った。

「迷惑なものか。君一人、養うのは何でもない。君さえ良ければ、いつまでもここに居なさい。ここを自分の家と思っただい」

「そんなこと、許されません。あなたは僕のお父さんでもないのに」「くだらない。血の繋がりがだけが家族ではない。私のことを父親か、祖父と思えばいい。こうして出会った以上、魂のうえではもう家族なのだから」

魂の、家族。

その言葉は真実だという気がした。信じて、いいのか。

「でも……どうして」

「巡り会いだ」

彼は若い青年のように瞳を輝かせ、僕に笑顔を見せた。

「これは神の導き。私は、君に巡り会い、人生の宝を見つけたのだ」「理解出来なくて見返すと、彼は分からなくていいと言うように笑みを浮かべ、海の方角を眺めて何事か考え始めた。

長く延びた陽が部屋の奥まで入り込み、老人の姿を照らし出していた。背の高い彼が、背筋を伸ばし真っ直ぐに光を浴びる姿は、天空の中心に居座る神の彫像に似て美しかった。

「君には名前が必要だ」

彼が呟いた。

「アテン」

不思議な響きだった。僕は自分に与えられた名を唇に載せてみた。

アテン。

老人は頷き、微笑んだ。

「アテン　　真実を照らし出す明るい光、という意味の名だ」

それだけ言って、また海を見つめている。

僕は彼の背中に訊ねた。

「あの。あなたのことは、何とお呼びすれば良いですか」

「君が望むなら」

振り返った老人の顔には慈愛とともに、威厳が生まれていた。  
「先生」と呼ぶといい。私はこれから君に、世界の全てを教える  
のだから」

## 第一話(3)

学問は星の物語から始まった。

黒い帳の降りた空に星が輝き始める頃、先生は僕を建物の外へ連れ出す。

崖下の暗い海は昼と変わらぬ時を刻んでいた。毎夜、優しく耳を撫でるこの波音に包まれて、僕は先生の言葉に耳を傾けた。

先生が夜空へ向かって差した指の先を、じつと見つめる。すると無秩序に並んでいた光の屑は見えない線で結ばれる。結ばれた集まりは星座という。星座に与えられた名前を、先生が教えてくれた。毎日、星の並びと星座の名前を学習しているうち、僕はすぐに全ての星座を覚えてしまった。夜空を見上げればたちまちにして星が結ばれ、神々の像が浮かぶほどに。そしてそれらの星座に物語が映されていることを、一つ一つ、丁寧な語りべである先生の話によって知った。

僕は先生の語る星座物語が好きだった。

心躍る勇壮な神々の英雄譚、女神や妖精たちの優しい愛の物語……。

夢中で耳を傾け、時を忘れた。夜が深く過ぎても、僕は物語の続きをねだった。先生は諫めることもせず、僕が求めるまま話を続けてくれた。

気付くと先生の膝で眠っている。

夜中にふと目が覚めて、視線を上げて見ると、焚き火を見つめる先生の顔があった。

赤く揺れる火の光を映すその顔は、穏やかで幸福そうだった。けれど瞳の端に、寂しさの影が見えた。

「先生……？」

泣いているのかもしれないと思って、そっと彼の頬へ手を伸ばす。すると先生は、夢から覚めたように微笑みを浮かべて僕を見下ろす。

し、結びの言葉を告げるのだった。  
「さあ、そろそろ今日の学びは終えて眠りに就こう。物語は明日へと続く」

僕が幼い間、先生はいつも傍に居てくれた。特に夜は片時も建物を離れることはなかった。彼は狭い部屋に自分と僕の寢床を並べ、僕が寝入るまで見守ってくれたのだった。

いつの間にか先生を本物の祖父のように慕い始めていた僕は、彼の世話を受けることや、甘えることさえ当然に出来るようになっていた。だから、彼が夜をこの建物で過すことも当たり前前と感じていた。

けれど後から考えれば、それは大変な恩寵だったのだ。

先生は街に本当の家を持っていた。その家に、彼を想う家族が大勢住んでいるはずだった。海辺の隠れ家を、家族は誰も知らない。いずこかに姿を消し、昼も夜も家に戻らなくなってしまった老人を、家族はさぞ心配しただろう。

家族に心配をかけてまでも、先生は僕と居てくれた。ただ幼子を、闇に蠢く危険から守るために。

この想像を越える愛情のもとで、僕は安心して眠った。まるで生まれた時から絶え間なく親の保護を受けてきた子供のよう  
うに、全ての恐れと疑いを忘れて。

「目を閉じてみなさい」

ある夜、先生が言った。

満天の星を見上げていた僕の瞳は、先生の大きな手の平で覆われた。  
た。

目の前が闇で満たされる。

先生の落ち着いた声が耳元で響いた。

「どうだ。まだ、君には星が見えているか？」

闇にはいつの間にか星が広がっていた。それは記憶の星。毎夜見つめ続けたことで、完全に僕の内へ刻み込まれた光の配置なのだった。

「見えます。星が見えます、先生！」

「そうか」

先生がふうと息を吐いた。目を閉じていても彼が微笑んだのだと分かった。

「では、その星を数えてみなさい。星座ごとに、正しい順を辿って一つ、二つ、三つ……」

「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ……」

僕は夢中で心の星を数え続けた。先生に教えられた星座の順を、迷うことなく辿りながら。

数を呼び続ける僕の声を止め、先生は肩に手を置いた。「よく出来た」そう言っ、力強く肩を握り締めて来たので、僕は瞳を開けて後ろを見上げた。先生が優しい瞳でこちらを見下ろしていた。

「今夜、こうして、星を数えたことを覚えていなさい」

「数えたこと？」

「そう。君は今、自分の心の中の星を数えた。目に見えないものを数えたのだよ」

「目に見えないもの……」

僕を見下ろす瞳は、穏やかだが確信に満ちていた。

「真実は、目に見えない。ほんとうに在るものは、目では決して見ることが出来ない」

僕は何かに衝かれて先生の瞳を見返した。淡く霞む霧の向こうで、神の啓示が煌いたのを見たような気がしていた。

霧の中で神が、いや、先生が呟きを続ける。

「見るべきものを目で見る事が出来ないから、人間は、心で見ると練習をしなければいけないのだ」

先生の深い考えを、幼い僕は正確には理解出来なかった。けれど、

おぼろげに感じたのは、先生の言葉がこの世の中心に触れていると  
いうことだった。

ぼんやり自分を見つめている僕の目に、微かに浮かんだ光を先生  
は認めただろうか。

嬉しげに声を立てて笑い、大きな手で僕の頭をつかんで揺らした。  
「さあ、アテン。私の可愛い生徒。今日の学びは終わりだ。明日か  
ら君には、心で見える方法を教えよう」

気付くと先生は隠れ家へ向かい歩き出していた。

降り注ぐ星の光を浴びて、白い服が薄っすら輝き揺れている。僕  
はまだ夢心地で、その背中を追った。

翌日から学習の時間が昼へ移った。そして僕は星の学問が序章に  
過ぎなかったと知ることになる。

先生は不意に言葉を減らした。あれほど表現巧みに、胸躍らせる  
英雄たちの物語を語った人が、まるで声を涸らせたかのように言葉  
少なくなった。

言葉の代わりに僕へ与えられたのは、数だった。

一つ一つの数に与えられた意味。それぞれの組み合わせ方、扱い  
方。

数で表される世界は静かで美しかった。数は言葉ではないから、  
熱い表現も悲しい表現もない。けれど言葉以上にこの世界の本質  
的な仕組みを表している。そして数は、言葉と違って嘘やごまかし  
で作り変えることは出来ない。数は世界の芯で、変わらないまま、  
永久に存在するものだった。

そう、目を閉じても見える、心の中の星のように。

先生の教えは、もしかしたらとても厳しくて、難しいものだった

のかもしれない。

彼は厳格な教師だった。波のように一定の間隔を保ち、淡々と教  
えを説く彼は、僕が順番を飛ばしたり速度を速めようとすると引き  
止めて連れ戻す。わずかな手抜きも、決して見逃すことはない。そ  
の態度は氷の巖いわおのようだった。声を荒げて叱責することはなく、威  
圧による恐怖は与えないが、打ち破って先へ行くことは不可能だと  
感じさせる。代わりに、順番を守って確実に歩みを進めるなら、氷  
は融けて道を示してくれるのだ。

どちらかと言うと物覚えが良かったらしい僕には、時々、単調な  
繰り返しの学習が苦痛に感じられることがあった。退屈する僕を先  
生は穏やかな瞳で眺め、「何事も、順番と速度が大切だ」と笑いな  
がら諭すのだった。

しかし、いつしか学習の速度が上がっていることを、僕は気付か  
ずにいた。

比べる対象がないので気付かなかっただけで、もし他に生徒が  
いたら、僕自身もその速さに臆していたかもしれない。

あれほど速度を大切にしていた先生が、ここに来て例外を許した  
のだった。その理由を、僕は後で知ることになる。

……そうだった。いつも僕は後で気付く。過去に存在したものの  
暖かさを、自分がいかに恵まれていたかを。……

あの頃、先生は何を想いながら、孤児の僕に学問を教えていたの  
だろう。

本当に僕と先生は教師と生徒でしかなかったのか。先生は、僕を  
ただの生徒として養っていたのか。そうではないと感じる。少なく  
とも僕にとっての先生は、ただの教師ではなかった。

先生は、僕の命を救ってくれた人。

食べ物を与えてくれ、寝床を与えてくれた人。

知識や学問や、可能性を与えてくれた人。

けれどそれ以上に、愛情を与えてくれた人だった。

手放して注がれた愛情の量は、きっと血の繋がりがある家族以上

だったと思う。人が生きるために必要なものを、先生は、人が成しうる最高の形で与えてくれたのだった。

僕も彼を愛していた。世界中で唯一、頼るべき存在として。本物の家族として。

先生と暮らした隠れ家、二人で星を見上げたあの暖かい場所を、愛していた。

僕にとつては、先生が世界の全てだった。

“世界の全て”から教わる学問は、肌を撫でる柔らかな風のように僕を真実へ誘い、<sup>いざな</sup>真実は渴いた喉を潤す水のように僕の魂へ浸み込んでいった。

僕は先生という教師から知識を植え付けられたのではなく、世界をそのまま受け入れただけだったのだ。

## 第一話（4）

白く細かい砂が床に降り積もっていた。

ひび割れた壁に囲まれた部屋の、海側に開かれた戸口から風が吹き込み、砂埃を巻き上げる。戸口の傍の椅子に腰掛けている僕の上に、砂は再び降りる。肩に頭に、砂埃は降り積もるけれど、僕は気にせず海を眺めていた。

手の中には固い物があった。ごつごつと手の平を刺す、白い石の立体。たくさんの四角錐が球状に集まった形なので、四角錐の先端が棘のように、手の平を刺すのだった。

これは星を模ったもの<sup>かたど</sup>だ、と先生は言った。

球の中心より伸びる四角錐は、星から出る光を表したものだ。

この光に宇宙の全て、真実が凝縮されているのだという。

数日前、先生は模型を僕に手渡しながら、「この星を大切に持ち続けなさい」と言った。真実を求める学習が終わるまで、世界を学び終えるまで。

学問はいつしか、数から図形へ移っていた。

床や板に描いた図形の学習から始まり、やがて複雑な立体図形の学習へ。

先生は石を削り出して作った精巧な模型を持って来て、僕に手渡し、その解釈を教えた。始めは単純な球や四角、三角の模型だったが、そのうち円錐になり、四角錐になり、二種類や三種類の立体の組み合わせになり……、最後に渡されたのがこの星の模型だったのだ。

星の模型を渡すと同時に、先生は難問を置いて行った。

この問題が解けたら、僕は“卒業”。

初期の段階の学問を終えたことになるのだ、と言われた。

先生から教わった知識を総動員し、必死で考えたけれど、さすがに卒業試験だけに問題は難しかった。それでも海を眺めながら、諦

めずに考え続けた。考え続けることが先生への恩返しであり、僕の幸福でもあったからだ。

答えを得たのはそれから間もなくのことだった。

一週間後、街の自宅に帰っていた先生がここへ戻った時には、僕は正確に難問の答えを口にしていただけたのだ。

その時、僕は十二歳か十三歳。

初期の学問を卒業するには、あまりに早過ぎる年齢だった。

けれど当時の僕はそのことを知らず、幸運であることの自覚もな  
いまま先生の導きに従った。

そして、僕は十代の前半で先生の教えの真髄たる“哲学”を学び始めることになる。

「アテン」

先生は言った。

「君は打てば響く楽器のようだ」

意味を解しかねた僕が見返すと、先生は指で楽器を弾く仕草をして答えた。

「弾けば弾いた通りの音を、長く響かせる、とても精度の良い楽器のことだよ。それも世界に二つとない、奇跡的に良質な楽器だ」

それから深い色の瞳で僕を長いこと見つめていた。次に、ため息とともに吐かれた言葉は独り言のようだった。

「ずっと探していた本物の生徒……今こうして、私は君に巡り会えた」

そう呟く彼の瞳には涙が浮かんでいた。

僕は驚いて声を失い、見開いた瞳で先生を見つめ返した。

「アテンよ。君には今まで話したことがなかったかな？ 私は若い頃、学校を作ったことがあるのだよ。真実の学問を後継者に伝える

ために」

「そうだったのですか。初めてお聞きします」

僕が素直に返すと、先生はふうと微笑み、視線を足元に落とした。「私の学校はとて有名になった。そのため、国内からも国外からも、たくさんの若者が集まった。入れ替わり立ち代り、星の数ほどの生徒たちが私の学問を求めた。私は彼らの情熱に真剣に応え、必死で学問を教えた。……しかし」

開け放した戸口の向こう、海へ向けられた瞳には孤独が浮かんでいた。

「一人として、私の学問を正しく理解した者はいなかった。ただの一人もだ」

ふつり、と先生は黙り込み、遠くの空を見つめた。

彼の声は苦しみに満ちて掠れていたが、空の青を映す瞳に怒りは感じられない。ただ、寂しげなだけだった。

しばらくの沈黙の後、先生は再び淡々と語り始めた。

「誰もが私の言葉を理解しなかった。言葉を言葉としてだけ受け止め、歪め、勝手な解釈をした。ある者は私に反発し、私のもとを去って他の学問を立てた。途中まではよく従ってついて来た者も、志なかばで力尽きた……。だからあれほどたくさんの生徒がいたのに、一人として、私の伝えるようとすることをその通りに受け取った者はいなかったのだよ。アテン、君の他には」

「僕は、」

驚きのあまり思わず口を開け、恐ろしさに震えながら否定した。

「僕はそのように仰っていただけ人間ではありません。孤児の僕なんか、まさかそんな、星の数ほどの先輩よりも質が良いなんて」「生意気を言っではいけない。口答えにはまだ早いぞ、アテン」

先生は軽く僕を睨み、それでも口元に笑みを湛えて言った。

「たくさんの生徒たちを見てきたこの私が、最高だと言っている。決して見誤ることはない。アテン、君は言葉を越えた真実を、そのまま魂に響かせる能力を持っている。これを良質な、魂の楽器と言

わずして何と言おう。間違いなくアテンは哲学をする者として最高の資質を持っている。最高の、……いや、私にとっては最後の、本物の生徒だ」

それからまたしんしんと想いの籠る視線を僕に注ぎ、ぽつりと呟いた。

「君は私の、最後の希望だ」

落雷に打たれたように感じた。言葉は僕を貫き、全身を震わせた。希望。

僕が、この人の。

呆然と、言われたことの重大さも理解せず、僕は自分の手元を見つめることしか出来なかった。

始め僕は、先生の言葉を信じなかった。自分が最高の生徒だとはとても信じられなかったし、信じてしまうことも恐ろしかった。

けれど間もなく実感した。僕は先生の語る哲学の、言葉の本質を直接に感じ取ることが出来たのだ。

頭で受け止めていては決して理解出来ない言葉も、心の目を開き、自分の中心にある魂に響かせてみる。すると、魂の奥から、共鳴が始まる。……

目を閉じ、耳を塞げ。

見えないもの、聴こえないものを受け止める。

真実は、「ただ在るもの」。

姿もなく、言葉でも語られないそれを、魂の光で映し出せ。

これだけが、僕が先生のもとにいて学んだことだった。他の細かいことは忘れてしまった。きっと忘れて良かったのだと思う。先生は僕に、真実を見る魂の瞳を与えてくれた。知識ではなく、世界の中心を見据えることの出来る瞳を。

その頃から先生は、少しずつ過去を語るようになっていった。哲学を学び始めた僕を、大人として認めるようになっていたのかも知れない。

先生の口調が最も熱を帯びるのは、国の昔を語る時だった。

すでにこの国は、かつての独立国家ではなかった。僕が生まれて間もない頃、異国が起こした戦争に敗北して独立権を失い、属国の一つとなっていたのだった。

属国とはなっても、支配国のこの国に対する尊敬の念によって、文化や学問は以前のまま保護されていた。人々の豊かな暮らしも変わらなかった。けれど誇り高きこの国の人々の心は、独立権を失ったことで無残にも打ち砕かれてしまった。先生も、かつて独立国だった頃を懐かしみ、心を曇らせていた者の一人だった。

「……輝かしい、この国家の伝統は失われてしまった」

繰り返し嘆く先生の瞳には、時に涙が浮かんだ。

「アテンよ。君の父母もおそらくあの戦争で死んだのだ。君も戦争の被害者だ。何より君が気の毒なことは、君の知っているこの国はもう本当の姿を持っていないということだよ。ああ、失われたあの頃を君に見せてやりたいものだなあ」

そう言いながら、先生は決して“悔しい”とか、“仇をとれ”などという言葉は口にしなかった。

話の合間に、僕の胸を指差して力強く言うだけだ。

「かつての誇り高い国家を、いつかここに蘇らせておくれ。君の胸の内に」

あとは楽しい思い出話が続くのが常だった。どうやら、煌びやかな思い出を僕に向かって語るのが、老いた人の楽しみになっていたようだった。

そんな先生の過去物語から窺い知ることが出来たのは、彼がとても、有名な人物だということだ。

偉大な哲学者として、彼の名は国内だけではなく国外にも知れ渡り、彼さえその気になれば国家の政治さえも動かすことが出来るはずだ

った。また実際、彼には国を動かすための実務力も、国を良くするための計画も持っていた。

けれど彼は国の中心から一步退いていた。

国を語る時の彼の瞳は静かで、決して政治が嫌いなわけではないと分かる。ただ何かに深く絶望していて、いや、絶望を通り越した落ち着いた諦観ていかんの心に至っていて、自分は国の中心には行かないと決めていたのだった。

“ 純然たる哲学者、一人の老人として生を終える ”

彼自身がそう語ったわけではないけれど、僕には彼がそのような思っていたと感ぜられる。

時おり彼の瞳に暗い影が過ぎることがあった。そんな時、僕は彼が過去を全て語り尽くしたわけではない、と感じた。彼の最も深い傷、触れてはならない過去は、諦観という壁の奥にそっと置き去りにされていた。

哲学を学ぶ日々は駆け足で過ぎた。

先生の話に夢中で寝る時間も忘れた幼い頃のように、僕は時を忘れた。気付くと僕の背は先生の肩を越すまで伸びていた。たぶん十五歳くらいになっていたのではないかと思う。

そんな終わりに近い日々のうち、ある一日の思い出だけが、鮮烈に蘇る。

その日、学習を終えた先生と僕は二人で崖の上に並んで立ち、夕暮れ間近の海を眺めていた。

海は透明の青から、次第に暖かい薔薇色に移り変わった。遠く、水平線で揺れている光の屑を散らしながら、異国に向かう船が滑って行った。

船を視線で追う先生は、海からの暖かい風を浴び、心地良さそうに瞳を細めていた。

初めて会った時よりもいくらか細くなつた髪や髭の先端は、夕陽

の色を吸い込んで金に輝いている。

金に縁取られ、穏やかで幸福そうなその横顔には、いつになく孤独の欠片も観られなかった。

「アテンは、将来、何をしたい」

ふいに先生がこちらを向いて質問した。

「将来……ですか」

「そうだ。どんな大人になるつもりでいる？」

その時、僕は口にすべき答えに気付けなかった。

本来なら、先生の後を継ぐ「哲学者」なり、先生の夢を実現する「政治家」なりと答えるべきだったのだ。

けれど僕は何も考えず、子供じみた憧れを口にしたのだった。

「船乗りになるつもりです」

「船乗り？」

「ええ」

僕は遠くの船を指差し、熱を籠めて語った。

「あのように、異国へ向かう大きな船に乗ってみたいんです。そして遠い場所の、色々な物や人を見てみたい」

「そうか。それはいい」

にこにここと、先生は顔中に笑みを浮かべた。

「船乗りは、とてもいい夢だ。アテンは必ず、その夢を叶えるのだよ」

そう言った先生は心から幸せそうだった。

何がそんなに嬉しいのかと訝しく思い、笑顔の先生を見つめると、「いい。とてもいい夢だ」と彼は何度も呟いて頷いた。そして、再び水平線へ視線を向けて、確認するように言った。

「けれど船乗りから気が変わったら、他のどんなことを目指してもいいよ。アテンは将来、何になってもいいから、自分の思う通りの人生をまっとうしなさい。だが、一点だけ守って欲しい。……戦場には近付いてはならない」

声が急に暗くなったので、僕は思わず先生の横顔を見た。その頬

は先ほどと変わり、硬く強張っていた。

「戦争には関わってはならない。無意味で何も得るものがない、あの戦争にだけは……。いいか、約束してくれるね？」

厳しく真剣な瞳に見据えられ、僕は思わず頷いていた。

「はい。約束、します」

老いた先生は僕の答えを噛み締めるように、まぶたを強く閉じて深い呼吸をした。

「良かった。これで安心だ」

彼は再び穏やかな表情に戻り、僕を見つめた。注がれる視線は沈む前の太陽のように、どこまでも優しく暖かった。

今でも僕は不思議に思う。

あの時、「船乗りになりたい」と言った僕の見当はずれな答えに、先生は何故あれほど穏やかに笑うことが出来たのだろう。

本当は、求めるべきことがあったはずなのに。

真剣に力と情熱を注いで教育した生徒には、恩返しとして求める仕事があったはずだ。いや、弟子を縛る命令として降しても良かった。彼には命令を降す、正当な理由と権利があった。

けれど先生は、それをしなかった。

結局、最後まで彼は僕に何も望まなかったのだった。

ただ一つ、僕自身が幸福な人生を送る以外には、何も。

## 第一話(5)

海を眺めて未来の話を交わした日から、間もなくのことだった。先生が唐突に僕の前から姿を消したのは。

いつものように街へ帰り、「七日後に戻る」と告げて去った先生は、それきりこの隠れ家に姿を現すことがなかったのだ。

長い間、僕は待った。

星の降る夜も、白い光に満ちる昼も。なだらかな丘の向こう、街へ続く道の先に先生の姿が小さく見え、揺れながら近付いて来るのを、家の傍らで何日も待ち続けた。

けれどいくら待っても慣れ親しんだ姿が見えることはなかった。

先生の姿が見られなくなってから、どれほどの時が過ぎたのだろう。

その日も僕は家の裏の草むらに座り込み、壁に寄り掛かってぼんやりしていた。食事や睡眠以外は、そうして何もせず過ごすようになっていた。

絶望に心を侵されていたのではない。ルティアの時とは違う。僕は先生が必ず戻ると信じていた。ただ何か事情があつて来られなくなっているだけで、先生がこの場所に戻るためには長い時間が必要なのだと思っていた。だから僕は先生が帰る時まで意識を眠らせ、辛い時を耐えることにしたのだった。

壁に寄り掛かっている僕の、瞳は開いているが景色は見えていなかった。肌を焼く日差しと、鼻先をかすめる虫の羽音だけが、時おり僕の意識を目覚めさせる。風が草を揺らして足音のように聴こえる時があるけれど、幻には決して振り向かなかった。

ところがその時、はっきりと僕は足音を聴いた。

風の起こした幻ではなかった。小枝がぼきりと折れる音は、強く

地を踏みしめる人の足音だった。

はっと顔を上げて辺りを見回した。

「先生……？」

しかし瞳に映ったのは白髪の老人ではなく、頬を高潮させた青年だった。

坂道を早足で登って来たのか、青年は肩で息をしていた。そして呆けた顔を向けている僕を見下ろし、軽く眉をひそめて訊ねた。

「君が、アテンですか」

どうしてこの人は自分の名前を知っているのだろう。訳も分からないまま、僕は頷いた。

「そうですか。君がアテン」

噛み締めるように彼は呟き、無言で僕を眺めている。その冷たい瞳の奥に、微かな熱が動いていた。

「先生はもうここへは戻りません」

青年は短く告げた。

「え」

「先生は、亡くなりました。もう三月も前のことです」

よろけながら立ち上がり、その場で呆然と立ち尽くしている僕を、青年は気の毒そうに見つめた。

「自宅で論文を書きながら亡くなったのです。学者としての人生を全うされた、素晴らしい最期でした」

何を言われているのか理解出来ない。頭の中で意味を結ばない言葉が、空洞の容器を叩く音のように響いている。

青年は小さなため息をつき自己紹介した。

「申し遅れました。私は先生の家、使いの者です。アテン、君にお願いがあつて来ました」

宙を泳ぐ視線を向けた僕に、彼は言った。

「私たちの家に来てください。君に来てもらえないと困るのです」  
「どうして……ですか？」

ようやく訊ねると、青年は硬い声で告げた。

「先生の遺言なのです。アテンを、我々の家族にしると」  
家族に。

頭の前から爪先まで衝撃が駆け抜けた。

先生が、この世に一人きりで取り残されてしまう僕に、家族を与えようとしている。

その瞬間、本当に先生がこの世から去ったのだと悟らされた。嘘だという心の叫びも、虚しくかき消えた。

「いいですか。これは先生の最後の願いです。あなたは先生の家の、家族にならなければならぬ。あの偉大な人の遺言を守らないわけにはいかないのです」

僕を真っ直ぐに見つめる瞳は真剣だった。

「街へ来て先生の名を伝えれば、誰もが知っている名だから、家まで案内してくれるでしょう。だから何も心配せず、街へ来てくださいね」

僕は黙っていた。答えが出せなかったのだ。

青年はそれでも僕の手を取り、強く握り締めて言った。

「お待ちしております」

立ち去った青年の足音が遠くなっていく。手の中の熱は少しずつ消えた。

顔を上げた。晴れ渡る空は遙か天の底まで青々と澄んでいた。

遮るもののない太陽の光が、容赦なく瞳を刺して痛い。堪えきれず広げた手の平を顔の上にかざした。

影となった五本の指の隙間から、光が零れ落ちてくる。

指を動かすたび、きらきらと光の粒が転がり、瞳の端で爆ぜた。

涙は流れなかった。代わりに冷たい風が胸の隙間から吹き出した。

いつか永遠の別れが訪れることは知っていた。その日が来たことも理解していた。けれどそれはあまりに早過ぎ、突然過ぎた。

悲しみと寂しさは凍り付き、言葉にならない痛みだけが周りを巡って心を切り裂いた。

## 第一話(6)

悲しみ疲れた僕は先生の面影を求め、街へ向かっていた。

海から続く長い道は砂利が多く、砂埃で黄色く煙る。埃に喉を詰まらせ、道の石につまずきながら歩き、ようやく街に辿り着いた。

久しぶりに見た街は強い陽に晒されて色褪せていた。広場に集まり買い物をする男女の姿も、店先に山と盛られた果物や野菜も、白い光に溶けてぼんやりと霞んでいた。

僕の知っている街とは違う。あの頃は、煌びやかに着飾った巨人们たちが、僕を見下ろして睨んでいた。今は同じ背丈か少し大きな人々が、こちらに関心も示さず通り過ぎていく。思えば、先生と会った日以来、盗みをはたらく必要のなくなった僕は街へ来ていないのだ。あれから七年が過ぎている。僕は時の経過と、自分の成長を感じた。

広場の片隅で、老人たちが寝そべて談笑していた。忙しく市場を駆け回る人々には声を掛けられないので、彼らに道を訊ねることにした。

子供の頃の癖で、僕は街人を恐れてしまう。それで始めは臆しながら近付いて行ったのだけど、老人たちは僕の質問を歓迎した。そして全員が口々に、先生の家までの道を教えてくれた。彼らが言うには、この街の誰もが先生の家を知っていて、また先生を訪ねて来る者も多いので、案内は慣れているのだという。

家まで送ると言ってくれる親切な老人たちの申し出を断り、教えられた道を歩いた。

街から少しはずれた先の、緑濃い森に囲まれて先生の家があった。高く広い壁は、森の奥まで続いていて先が見えない。風とともに鳥の声と、芳しいお香の薫りが運ばれて来た。貴族だけが付ける香。先生の服からいつも漂っていた薫りだった。

嬉しさで肌が粟立った。ここに、確かに先生がいる。

瞬間、先生が亡くなったのだということをおぼれた。貴族の家を恐れる気持ちも忘れてしまった。ただ先生に会いたくて、僕は扉を夢中で叩いた。

しばらくして扉の向こうから細い男の声が聞こえた。名を問われたので、答えた。

「アテン」

扉が勢い良く外側に開いた。

あの時、使いに来た青年が笑顔を輝かせていた。

「やあ……やあアテン、待っていたんだよ。あれから五日も経っているじゃないか。もう来ないのではないかと思った」

夢を破られて呆然とした。何を期待していたのだろう。あの、白い髭の老人が笑顔で自分を迎えてくれると思っていたのか。

「ようこそ、我々の家へ」

青年は芝居がかかった仕草で手を広げた。現実には打ちのめされて動けずにいる僕の手を取り、強い力で門の内に引き入れながら、早口で言った。

「私はペリウス。先生の弟子で、この家の手伝いをしている者だ。分からないことがあったら何でも聞いてくれ」

ペリウスの導きに従い、駆け足で邸の中を案内された。また、何人かの家族にも引き合わされた。

先生に妻や子供はいない。代わりに甥や姪たちが大勢いる。さらに先生の弟子たちも大勢出入りしている。皆を父と思ひ、母と思ひ、兄弟と思ひなさいと言われた。この家では全員が家族なのだから、と。

けれどペリウスの言葉と裏腹に、先生の親族たちの態度は冷たかった。彼らは短い対面の間、僕と目を合わそうともせず、硬い表情で形だけの挨拶を口にするのだった。

世間は知らないが鈍感ではなかった僕は、自分が歓迎されていない

いことに気付いた。

次第に僕は暗い気持ちになり、下を向いた。

隠し切れないと思つたのかペリウスは白状した。

「実は、ずっと揉めていたんだ。君を家族に引き入れるか否かで。

だから君を迎えに行くのに、先生が亡くなつてから三月も過ぎてしまつた」

彼はうつむいている僕の肩に手を乗せ、硬い声で言った。

「でも大丈夫。今は皆が君を家に入れることに納得している。あの偉大な人の願いを無視できる者は、誰もいないんだよ」

僕はペリウスの顔を見つめた。真つ直ぐに前を見る彼の横顔は青褪めていた。その瞳が他の家族たちの誰より冷たく見えたのは、気のせいだつたらうか。

宴は日の入りとともに始まる。

明るく灯のともされた広間に、たくさん卓が並べられ、着飾つた上品な人々が卓の傍らに寝そべつて談笑する。卓には山盛りのパン、干した果物、豆、汁物、肉や魚介の料理が溢れた。客の腹が満たされると、さらに広間の灯りが増やされ、奴隷たちの手で葡萄酒が運ばれる。宴会はここから本番で、夜が明けるまで酒盛りと談義が続くのだつた。

初日から宴に引き出された僕は、恐ろしさで身を縮めて過ごした。昼間のように煌々とした会場の明るさが恐ろしかったし、初めて見る大量の豪華な食事も恐ろしかった。

何より人の目が恐ろしかった。時おり僕のほうへ向けられる人々の視線は、ぎらぎら光っていた。その光は嘲あざわらっているようにも見えたし、僕のような身分の者がここに居ることを責めているようにも見えた。

単色の粗末な麻布を一枚、身体に巻きつけているだけの僕は、金糸の刺繍が施された衣を纏う人々の中でひどく浮いている。このみ

すばらしい姿で広間に居ることも罪なのだと思う。逃げたくてたまらなかつたが、逃げることさえ恐ろしくて出来ずに留まっていた。

一度だけ僕は先生の家族の卓に呼ばれて、質問を受けた。

「先生から何を学んだのか」

と問われ、

「天文、数学、図形、哲学です」

と答えると失笑を浴びた。人々は顔を見合わせて腹立たしげに言い合った。

「こんな少年に哲学とは！ お戯たわむれだ」

「先生も最後に、ずいぶん楽しい想いをしたものだ」

「年寄りのお遊びの後始末を、我々がせねばならないとは。まったく迷惑な話だ」

情け容赦のない言葉だった。小さな虫の体のように僕の胸は潰された。青褪めて黙り込む僕を見かねたのか、先生の弟子だという若い男が声をかけてきた。

「おい、少年。その若さで哲学を学んだというのは、たぶん何かの間違いだろう。だが君の年だったら、少なくとも、図形の学問だけは先生にみっちり仕込まれたのだよな？ だったら君は将来、軍隊の指揮者を目指せばいいじゃないか」

「軍隊……ですか」

「そうだよ。先生は仰っていないかったか？ 先生の図形学を伝授された者は、無敵の陣形を組める才能を持つんだ。つまり、君が軍隊の指揮者になれば、向かうところ敵なしということだよ」

「……そんな話は初めて聞きました」

「え、そう？ おかしいな。先生はいつも、戦争の能力は必要不可欠だと仰っていたのだが。青年たちは必ず軍隊へ行つて国を守らなければならぬ、とも仰っていたよ。君はせっかく先生のもとで学んだのだから、その才能を活かさなければ罰が当たるぞ。僕は近々軍隊へ行つて將軍を目指すつもりだ。君もどうだ、僕と一緒に軍隊へ行かないか？」

こちらに向かつて大きい手が伸ばされた。僕は体格の良いその男を眺めた。悪い男ではないようだった。けれど、何か勘違いをしている。先生は確かに、僕に「戦争と関わるな」と教えたのだ。僕は先生の教えを守らねばならない。

弱く笑って断ると、男はつまらなそうに口をとがらせて顔を背けた。

それきり僕の存在は彼らに忘れ去られてしまったようだった。

僕はこの家族に相手にされていないのだと悟った。居ても居なくても同じ、無価値な置物のような存在なのだった。

「おい、君。その少年！」

酒が全員に回って広間が騒がしくなってきた頃だった。独りで壁に寄り掛かり、ぼんやりと宴を眺めていた僕へ、不意に声がかかった。

「どうしてそんな隅っこにいるのだ？ こっちへ来なさい」

ある卓から、額の禿げ上がった中年男が手招きしていた。その卓を囲む全員がこちらへ視線を向けている。

彼らに近付くのは恐ろしかった。だが無視することはもつと恐ろしい。僕は観念して震える足で立ち上がり、男の卓へ歩いて行った。僕が近くに来ると男は身体を動かして自分の隣を空け、僕を座らせた。

「初めて見る顔だ。ずいぶん若いな。新しく入学した子か？」

僕は渴いた喉を唾で湿らせて声を絞り出した。

「いいえ、違います」

「そうだろうな。君のような年齢の学生は、今ごろ宿舎で眠りについているはずだ。では、君はいつたい？」

「僕は……、先生に呼ばれてここへ来た者です」

卓を囲む人々は顔を見合わせて不思議そうな顔をした。

別の男が興味津々の顔をして、僕に問う。

「少年、名は何という」

「アテンです」

おお、と声が上がった。

「では君があのアテンか。噂の、先生の愛童」

「これはこれは……。なるほど美しい。あの方が夢中になるだけある」

人々は容赦なく僕を見つめ続けた。それから互いに顔を見合わせ、口元から笑みをこぼすのだった。

彼らの笑みには嘲る気配はなかった。けれど奇妙な、ざらりと引っ掛かる感じを覚えた。

## 第一話（7）

「美しいとは……。どういう、意味ですか」

背筋を伸ばして訊ねた僕は男たちの視線を集めた。

彼らは僕の質問に本心から理解出来ないという顔を返した。

「君は鏡を見たことがないのかね？ 泉の水面に自分の姿を映した  
ことさえ、一度も？」

一人がおどけて言うと言った。

その笑いの意味が僕には咄嗟に分からなかった。泉に映った自分の姿に恋をした男の伝説は知っていたが、その男と自分とがあまりに遠くて結びつかなかったのだ。

「鏡を見たことくらい、あります」

正直に答えてしまった僕は、さらに大きな笑い声に包まれた。

「だったらどうして自分の姿に惚れなかったんだ？ 誰もが恋せず  
にいられない、その愛らしい顔を持ちながら」

「美の観念がないのだな、この少年には」

「悲しいことだ。君は、先生に申し訳ないと思わないのか。少なく  
とも君の先生は、君の美しさを愛でていたのだぞ」

聞いたこともない言葉が僕の頭の上を飛びかっている。

僕は泣き出したくなった。容姿を称えられたのは初めてだったし、その意味もまだ分かっていなかったが、心の深い部分が傷付いて血を吹き始めていた。

「違います。先生はそんな人じゃない」

僕が叫ぶと一瞬、周囲が静まり返った。その後、男たちは目に涙を浮かべるほど激しく笑い始めた。

「困ったものだ。あの人は肝心なことを教えていないのか」

「純粹に育てるにもほどがある」

「これほどの無知に育てるのは、罪だ。大罪だ」

僕を手招きで呼び寄せた男が、なだめるように僕の膝に手を置き

訊ねた。

「そんな人でなければ、先生はどんな人なのだ。君はどうして、自分が先生に可愛がられたと思う？」

「それは……僕が優秀な生徒だからだと、先生は仰っていました」  
卓がまた笑いに包まれる。

「優秀な学生なら他に、ごまんと居るのだよ。たとえば我々を見よ。我々も皆、先生の学校で学んだ者だ。今は政治や軍隊にも意見することの出来る立場にいる。このように君よりも遥かに年上の優秀な頭脳が、先生の学校から数多く巣立っているのだ。だいたい君のような素性の卑しい子供を、あの方が、真剣に学問のために育てるはずがない」

「そんな……でも、先生は……」

僕が続けようとする抵抗を男たちの言葉が踏みにじった。

「気の毒だが、はつきり言おう。君はその美しさゆえ、先生に遊ばれたのだよ」

「いや、遊びと言ってはあまりに可哀想だろう。老人は最後に、この少年に恋をしたのだ」

「そう、本気の恋を」

ついに僕は堪えきれなくなり泣き始めた。

僕は一人の子供、一人の人間として先生に愛されたのだと思っていた。けれどこの人々は、先生が、僕の見ただけを愛したのだと言っ……。

あまりにも胸の痛みが酷くて、もはや僕にはどちらが本物か分からなくなった。自分の知っている先生か、それともここにいる彼らが語る先生か。

「おお、よしよし、泣くな。可愛い子よ」

隣の男が、僕の腿をさすって甘い声を出した。

「泣いてはいけない。君は確かに、あの高貴な老人の恋心を独り占めにしたのだぞ。これほど幸せなことはないんだよ」

「分かりません……僕には、それがどうして幸せなのか、分かりま

せん……」

小さな子供のように泣きじゃくる僕に、やれやれ、とため息が集まった。

「見たところ、この少年は本当にまだ無垢むくのようだね」

「あの人のことだからまた、手を出さなかつたのだらう。ほら、例の、“体は愛さない”という彼の主義のせいだよ。それもこの少年には、気の毒なことだ。愛される悦びを知らないまま取り残されるとは」

顔を覆っていた僕の両手が無理やり引き剥がされ、中年の男に握られた。哀れみで歪められた男の瞳が僕を覗き込む。

「いいか、少年。君はまだ何も知らないのだ。それは良くないことだ」

僕は無抵抗にその瞳を見つめることしか出来なかつた。頷きも、目を逸らしも出来ない僕に、男は続けた。

「先生は君に本当のことを教えなかつたんだよ。それは先生の主義にもとづくやり方だつた。けれど先生のやり方では、人間は真実の愛を知ることが決して出来ないんだ。だから私たち学園の者の多くが、心の底では先生の主義に反対していたよ」

僕は声を上げて否定しようとした。  
けれど嘘だという叫びは、悲しみのために塞がれた喉の奥でつかえていた。

「君は全てを知らなければならぬ。知る気があるなら、私のところに来なさい。どうだ、来る気があるかね？」

中庭でペリウスとすれ違った。

「ペリウス」

僕は彼に小さく声をかけ、すぐる視線を投げた。しかし彼は僕から目を逸らしたのだった。

男はにこやかにペリウスへ告げた。

「こんばんは、ペリウス。この少年を借りて行くよ。私から直接、学びたいことがあるんだそうだ。きつと遅くなるだろうから、うちに泊めることにするが構わないだろうか？」

ペリウスは立ち止まり、僕の肩を強くつかんだ男の手にちらと視線を投げて言った。

「こんばんは、先輩。……助かります。迂闊うかつにも、まだその者の寢床を用意していなかったのです。どうか今宵は、アテンをよろしく」  
底冷えのする声だった。

月光の差し込む中庭で、青年の姿は死へ導く使者のように青白く輝いていた。

## 第一話（8）

真実を知ることの意味などあったのだろうか。

いや、そもそも、真実とは何だったのだろうか。

先生はいつも真実、真実と仰っていた。けれど僕はついに最後まで、真実の具体的な意味が分からずじまいだった。

本当は僕は、先生の話をつかっていたつもりになっていただけかもしれない。皆が言うように僕は愚かだから、褒め言葉を鵜呑みにして騙されたのか。美を愛でる老人の楽しみに、翻弄されたのか。

僕の知った、“地上の真実”は醜かった。けれどその真実は少なくとも厳しい人間界の掟おきてを教えてくれた。

自分を知らなければならぬ。そして他人に切り売り出来るものは売って、代わりに地上での居場所を得なければならぬ。

それがどれほど卑しい行為だと知っていても、運命は卑しさに落ちる以外に僕の存在を許してはくれない。

この世の現実を目覚めた今、僕には光が眩しかった。

抉られた傷を照らし出す、ただ明るいばかりの光が。

疲れ切った体を抱えて先生の家に戻り、暗がり求めて辿り着いたのは、庭の片隅に建てられた小屋だった。鍵はかかっておらず、そつと開けると埃の匂いが立ち上った。

明り取りの高窓から微かな光が差し込んでいる。薄っすらと埃の積もる棚には、巻物や冊子などの書物が無造作に詰め込まれていた。僕は思わず、ああ、と声を上げていた。

ここは書庫なのだった。先生の家の、先生が使っていたかもしれない書庫。

高鳴る胸を抑えられず、書物を一つ一つ手に取った。そのうち僕は、床の上に山と積んだ書物の前に座り込み、夢中で漁っていた。

「何を探している？」

背後から声がした。振り返ると、少し開いた扉の間に男の影があった。

その男の顔が見えた時、僕は怖くて目を逸らした。ペリウスだった。彼は歩いて来て傍に立ち僕を見下ろすと、ふ、と笑った。

「先生の書いた本を探しているなら、無駄だよ。ここにはない」

血の気の失せた顔でペリウスを仰いだ僕を見て、彼は笑いを噛み殺した。

「素直だな君は。そんなに、すぐる瞳で見ないでくれ。捨てられた赤子に見つめられているみたいじゃないか。……胸が痛むから教えてやろう、君の大好きな先生の御著書は学校で大切に保存されている。写本も全て学校のほうだ。こんな小屋にある本は全て捨ててもいいものだよ。残念だが、君の手に届くところに貴重な本はない」

「では、学校へ連れて行ってください。お願いします。僕も先生の本が読みたい。あの人の言葉に、もう一度だけ触れたいんです」

「駄目だ。君はそんな卑しい身分で、神聖な学校に出入り出来ると思っているのか？」

慄ふるえが身体を駆け抜けた。

顔を上げて、まじまじとペリウスを見る。彼の瞳は青い光を浮かべていた。それは確かに、昨夜、僕を待ち受けている苦役を知っているながら男に引き渡した瞳だった。

「卑しい身分だから……何をされてもいいと？ だからあの時、止めなかったの……」

冷淡な瞳が少し動いた。

「何のことだ？ 君だって承知して行ったんだろう」  
僕は弱く返した。

「何も知らなかった。嫌だと思っ間もなかった。終わるまで何をされているのか分からなかった」

いつしか自分の声から感情が消えていた。ペリウスも感情なく言った。

「そう。それでは驚くだろうな。でも、力づくではなかったはずだ。見たところ君の頬に殴られた痕もない。だいたい、あの人は悪人ではないよ。本当に君に大切な物を教えようとしてくれたんだ。良かったじゃないか、一つ勉強出来たわけだ」

怒りはなくただ不思議で、彼を見つめた。

「どうして……こんなことを」

「こんなことつて」

彼は少し眉を寄せた。本気で困った顔をしている。

「呆れた人だな。とても自然なことではないか。年上の男が、君のような子供に悦びを教えるのは、当然の義務だと昔から決まっているんだ。教えてもらったことに感謝こそすれ、恨むのは筋違いだ」  
嘘をついている顔ではなかった。当然、という言葉が僕を打ちのめした。

昨夜は恐ろしかった。訳も分からないまま捕らえられ組み伏せられていた。本能は嫌悪し悲鳴を上げた。込み上げる吐き気と、涙は堪えようがなかった。それでも僕は恐ろしさのあまり従ったのだった。ただ、何故、と繰り返していた。何故、こんな苦しみを与えるのか。その問いに男は本心から不思議そうな顔をして答えた。「当然のことをしているだけだ」

これは当然のこと。僕の年齢では必ず経験せねばならない、まともな人間になるための学びの一つなのだという。

たとえ僕が嫌だと訴えたとしても。それが苦痛なのだとは必死で叫んでも。その行為は、罪ではない。罪ではないなら、苦痛を口にすることさえ許されない。当然に悦ぶべきことは、当然に受けなければならぬ。叫んでも救われない……誰も助けには来ない。助けを求めても、“嬉しいはずなのに何故？”と不思議そうな顔をされる。ここは永久の地獄。氷の棺だった。身動きの出来ない氷の世界に、僕はこの時、落ちたのだった。

呆然としている僕の顎に指がかかった。持ち上げられた顔はペリウスの瞳に晒された。

「ふうん。本当に可愛い顔をしている」

薄っすらと口元に笑みを浮かべた彼は、人の顔を美術品のように評価する。

「神も恥らうような美形ではないけれど、少女のような可憐さがある。教師たちが最も好む、“ちょうど良い”顔だよ」

感心したように眺めていた彼の瞳が不意に嫉妬の熱を帯びた。

「君は幸運な人だ。その顔に生まれついたから、先生を独り占めに出来た。そしてこれからは、たくさん教師たちが君に人の道を教えてくれるだろう。ありがたいと思わなければならぬよ。多くの者は、君ほどの幸運には恵まれていないのだから」

目の前が暗くなった。気を失ったのだった。

夜中に目覚めた僕は書物の山に埋もれて月明かりを浴びていた。

寒くて、体がきしみ、嗚咽おえつした。

間もなく僕は宴の席で、「酒瓶持ちの少年」と呼ばれるようになった。酒の瓶をかついで卓を回り、客人の杯に酒を注ぐ役を負ったからだ。

本来、酒を注いで回るのは奴隷たちの仕事だ。家族は、客人が喜ぶから僕に酒瓶を持たせているのだと言う。けれどそれは体のいい理由をつけた奴隷扱いだ。僕に奴隷と同じ仕事をさせることで、僕が家族ではないのだということを周知させていたのだった。

またその仕事には別の役も含まれていた。

卓を回れば、各卓の教師たちが競って僕を賛美する。美しさを言葉尽くして褒め称え、好敵手ライバルを論駁ろんぱくし蹴落とそうとする。そして議論の勝者となった者が、その夜、僕に教えを説く教師となる権利を獲得する。僕には断る権利も、選ぶ権利さえない。

家族は見て見ぬ振りをした。むしろそうして教師たちを喜ばせることだけが、僕の存在価値だと思っただけだ。客人の誰もこのことを不思議に思わなかったし、教師たちを非難する者もいな

かった。当時は建前上、大人が子供を無理やりに寢床へ引き入れることは禁じられていたが、昔ながらの習慣が浸透した場所では建前は吹き飛ばされる。大人を非難する声が上がるところか、「何故あの少年ばかり引く手あまたなのか」と、妬む声のほう日々高まっていたのだった。

独りで苦しみに耐え続けた僕は、少しずつ自分の卑しさを悟り始めた。

僕は彼らが僕を欲しくて褒めるのだ、ということに気付いていた。どうすればよりその欲を煽り、賞賛を高めることが出来るかも知っていた。その知識に従い、彼らの求めに応じた振る舞いをする事も出来た。それは僕が、自分の心を殺したから出来ることだった。

僕は心の死と引き換えに、この世での居場所を得たのだ。男たちがあくまでも夜の教師を演じたように、僕も彼らの生徒を演じていれば、生きる場所を得ることが出来る。お互いに暗黙の、舞台の上での契約。

僕は夜な夜な自分の一部を殺して切り刻み、教師という獣に投げ与え、彼らが飛びつく様を眺めていた。

その光景に奇妙な悦楽を覚え始めてもいた。

彼らは僕なしでは生きていけなくなっている。僕が生徒を演じることを断れば彼らは発狂する。事実、眺めさせるだけで夜通し触れさせなかったこともある。そんな夜は、遙かに年上の教師が僕の足元に平伏し、涙ながらに肉をくれと請うのだった。

いつの間にか闇の世界での主導権は僕に移っていた。

支配されることによって、真に相手を支配する。

自らの身を生贄として捧げることで、地上を見下ろす高みに昇る。それはとてつもない優越であり、快樂だった。

優越の甘い蜜のような味を覚えて、僕は自分が本物の奴隷になったことを悟った。このような罪の快樂に身を浸すことこそ、自分を最も卑しい身分に落とす行為なのだ。

光の降り注ぐ昼間の世界は僕が歩ける場所ではなくなった。明るみでは、心を失った僕の顔はあまりに青く照らし出されるからだ。

先生が今の僕の顔を見たら、どう思うだろうか。

嘆くのだろうか、それとも、他の教師たちと同じく「美しい」と褒め称えるのだろうか。

## 第一話（9）

昼の間、僕の隠れ場所は、あの見捨てられた書庫となった。埃の積もる床に座り込み、高窓から差し込む光を頼りに書物の頁を眺めて過ごす。書庫に収められていた書物は異国語の写本が多かった。そうでなければ、くだらない政治家の美辞麗句を連ねた宣伝書。または学生か誰かの書きかけの論文や、教師の覚え書き等。

ペリウスが言ったように、ここには捨てても良い書物ばかりが放り込まれていたのだ。貴重な書物の材料だけ捨てるのを惜しみ、いつか代用するためにとりあえずここに保管しているのだろう。しかし代用する時は永久に来ず、ここにある書物はいずれ全て、人の目に触れることなく朽ち果てる運命にあった。

まるで僕のような書物の山。

その書物たちは同類の僕だけに眺められ、僕だけを救った。

僕には異国の書物は読めなかったし、政治家の宣伝書を読んでも何も感じなかった。けれど、文字を眺めているだけで、地の底へ引きずりこまれそうだった僕の心は引き止められたのだ。

意味など要らなかった。頭の中で意味を結ばない文字列でいいのだ。文字でなければ数字の羅列でもいい。正しい形で並ぶ細かい点をただ視線で追うことで、僕は一時的に闇から目を逸らすことができるのだから。

しかしやがて本物の闇が迫って来て、文字を視線で追うことが出来なくなる。

そうなるが無抵抗に闇に飲み込まれなければならない。

無情な時の警告に追い立てられ救いの場から立ち上がる。

夜の始まり。

楽しむべき宴の時が、始まる。

そうして闇の場をいくつ渡り歩いたろう。

僕は光の世界を忘れかけた。ここに自分が留まる理由さえ、もはや忘れ果ててしまった。居場所を得て食物を得るためだけに、この身を存在させているだけなのだった。

けれどある日、何故だか書物に疲れた僕は闇が迫るより早く立ち上がった。

日が沈むより先に外へ出るのは久しぶりだった。扉を開けると蜜色の日差しが書庫に差し込んだ。まだ昼の強さを残す太陽は、弱った僕の肌を容赦なく焼いた。それでも眩暈を堪えて、陽だまりに足を踏み出した時だった。

視界に光が飛び込んで来た。

大木の陰に翻る、白い光。

それは柔らかく風に揺れながら、幾度も幾度も僕の前を横切り、瞳を射抜いた。

光の衣を纏っていたのは若く美しい女性だった。彼女は夢見る表情で、木の枝に吊り下げたブランコに身を委ねていた。空に浮かぶ雲のように透き通る白い肌を、衣の緩やかな襞が覆っている。ブランコが揺れるたびにその襞は風に流れて、光を跳ね返すのだった。

輝きを放つ女性は畏れを覚えるほど神々しかった。女神が降りて来たのかもしれないと思った。けれど、そうではない。

新緑の冠を戴いた彼女の横顔を見た時、僕は呟いていた。

「ルティア……？」

夢に誘われて、ふらふらと近付いて行く僕に気付き、女性はブランコを止めた。

目の前に立った僕を不思議そうに見上げる。赤い唇は微笑みの形に変わった。

「あなたは？」

問われた僕は、名を名乗るのを躊躇した。かつて僕には名がなかったからだ。僕はいつかのように、ルティアが名のない僕を認めてくれるのを待った。けれど彼女は小さく笑った後、優しい瞳を僕の

顔に向けて言ったのだ。

「もしかして、あなたはアテン？」

落胆が僕の心を押し流す。

ルティアに似て見えた女性は、よく見ると僕より年上のようにだった。僕がアテンであることを認めると、彼女は深く息をついて感慨深げに僕を見つめた。

「そう。あなたが、あのアテン。先生から話を聞いていた。会えて嬉しいわ」

彼女は自分のことを、先生の“孫”だと自己紹介した。正確に言うと、先生の兄弟の孫なのだが、先生に養い育てられたので彼のことを“お祖父さま”と呼んで慕っていたのだと言う。

「ずいぶん前からあなたの話を聞いていたわ。とても会いたかったのよ、アテン。でも、初めて会うのね？ どうしてかしら」

僕は昼間ほとんど寝て過ごし、宴の時間に起きているからだろうと答えた。宴に女の人は出席しないから、会う機会がなかったのだ。聞くと彼女は「そう」と小さく返して、口元だけに微笑みを浮かべ悲しげな瞳を僕に向けた。

それから彼女は思い出話を始めた。先生には、自分と同じように育てた女の孫たちが四人いた。自分はその中で最も年下で、最も可愛がられた孫だった。三十歳に近い今は、結婚して離れた場所に住んでいるのだが、時々この家が懐かしくなって遊びに来るらしい。

「お祖父さまは差別のない人だったわ。女の私にも学問を教えてくれた。私は学問が楽しくてたまらなかった。短い間だったけど、学校にも行かせてもらったし」

「学校に……！」

驚いて僕は叫んでいた。女性が学校へ入ることが、許されたのか。「ええ。そうよ。どうして驚くの？ だってお祖父さまの学校なのよ、当然でしょう。お祖父さまは男とか女とかで、人間を分けたりしない人だもの。私のほかに、学校で学んでいる女性はたくさんいるのよ」

うつむいてしまった僕を、彼女はまた不思議そうに見る。

「……あなたは学校へ行つたことがないの？」

「僕は……入つてはいけないそうです」

「どうして」

言いかけた彼女は僕の絶望を見て取つたのか、黙り込んだ。

長いこと彼女は黙つたまま僕を見つめていた。僕も言葉を出せなかった。風が木の下を通り、知らぬ間に頬に流れていた一粒の涙を冷やした。慌てて拭おうとした僕の腕を止めて、彼女が自分の指で優しく拭つた。彼女の囁きが耳元でする。

「好きなことをすればいいのよ。やりたいことを、やりたいようにしなさい。そして、嫌なことはしなくていいの」

頬に触れた手は始め冷たくて、少しずつ温もりを帯びていった。

僕は零れ落ちそうな涙をため息に変えて、微笑んだ。好きなことをすればいいと言われても、今の僕は何が好きなのか分からなかった。どうすればこの場から抜け出せるのかも分らない。何故自分がここに留まっているかさえ、自分で分らないのだから。

かつて先生に「船乗りになりたい」と言ったことがあつたけれど、今はそれが子供の夢に過ぎなかつたと知る。毎夜の苦役以外に、いたい僕に何が出来るといふのだろう。僕には仕事の能力がない。

僕は何も出来ない。僕を必要とする人はこの家の門から出たら、一人もいない。

だから今ここで、たとえ肉としてでも自分を求めてくれる人がいることは、幸せなのだと言える。

「僕は、幸せです」

そう答えると彼女は寂しげな顔をして、僕の頬から手を離れた。

先生と同じ深い色の瞳が微かに濡れていた。

僕は彼女に笑顔を向けて訊ねた。

「一つだけ、教えていただいてもいいですか」

彼女は頷いて先を促した。

「先生は僕のことを“美しい”と仰っていましたか」

少し驚いたように瞬きしてから、彼女はふつと笑った。

「そうね。“美しい瞳を持つ子だ”、と仰っていたわ」

今度は僕が瞬きする番だった。彼女が僕の目を真っ直ぐに見つめた。

「とても綺麗な瞳の子、とあなたを呼んでいた。それは本当だったのね。真実を見通すような澄んだ瞳をしている」

恐ろしくなつて僕は彼女から目を逸らした。きつと彼女の勘違いだと思つた。自分の心は汚れている。そんなふうに言ってもらえる人間ではない。

「でも皆は、遊びだったのだと言います。つまり……先生が僕を、慰み者として可愛がつたのだと」

「先生は、そんな人ではないわ」

明るい声で放たれた言葉は僕の耳を強く打つた。

先生は、そんな人ではない。

いつか自分も口にしたことのある、けれど忘れかけていた言葉が暖かく心に染みていく。

「あのね。お祖父さまは、いい人なの。でもあまりに、いい人過ぎて、意地悪な人がこの世に存在するということが分からないんだわ。たとえ自分の家族でも、信頼出来ないかもしれないなんて夢にも思わない」

少し首を傾げて、疑うように僕を見る。

「だから、アテン。お祖父さまがあなたをここへ呼んだのも悪気があつてのことではないのよ。本当に家族へ迎え入れたかったの。あなたが何の不安もなく、幸せに生きていけるように」

僕は頷いた。それだけは分かつていた。

先生は悪くない。誰も悪くはない。意地悪をしているように見える先生の親族たちも、そう振舞うしかない、仕方のない理由があるのだ。だから本物の悪人なんて、ここにはいない。

不意に彼女が堪え切れない声で呟いた。

「ああ、どうすればいいの。どうすれば、あなたは本当に私たちの

家族になつてくれるの？」

柔らかな温もりが僕を包んだ。ブランコから降りた彼女が、僕の頭に腕を回して抱き寄せていたのだった。

「私の子供になりなさい。私が、あなたを家族にする。母としてあなたを守るわ」

温もりが苦しかった。身を委ねて涙を落としそうになるのを堪えて、彼女から離れた。こんなところを誰かに見られたら二人とも殺されてしまう。

退きながら笑みを浮かべ、言った。

「生まれ変わったら。……次に生まれ変わる時は、あなたの子にしてください」

駆け出した僕の背を、彼女はいつまでも見つめていたように思った。その視線は、死ぬまで闇の世界で生き続けた僕の、一筋の光となつた。

## 第一話（10）

三年が過ぎた。

十八歳になつた僕は兵士として、遠くの戦地へ行くことに決まつた。

あれほど先生が嫌い、厳しい言葉で禁じられた戦争に、僕はこの身を捧げることになつたのだつた。

自分で選んだ道ではなかつた。教師たちが、僕を遠方へ追いやるよう家族に頼み込んだのだ。復讐を恐れてなのか、僕を見るたび恥を思い出すからなのか分からない。どちらにしても僕には抵抗する術がなかつた。それに、心が死んだ僕に希望する未来があるうはずもなかつた。

旅立ちの前日のことだつた。

僕は足を投げ出して地に座り、家の壁に寄り掛かつてぼんやりとしていた。午後の日差しは強かつたが、今の僕には全てを白く染め抜く光が心地良かつた。何一つ色が映らない瞳に、すぐ傍の大木の葉の影だけが黒く揺れていた。

ふと木の背後から大きな影が現れて、こちらへ近付いて来た。

影は日差しから僕を守るように立つた。光が遮られ、急に辺りの景色がはつきりと見えるようになる。

見上げると難しい顔をして僕を見下ろすペリウスがいた。彼の整つた眉間が、いつかのように微かに歪んでいた。

「明日、出立なのだろう」

彼が何を言いに来たのか僕には解せなかつた。けれど問われたことには感情もなく、頷いた。

「そうだ」

「それでいいのか」

「何が」

僕は本当に彼の質問を不思議に思つて、ペリウスに問い返した。ペリウスは息をついた。組まれた腕に苛立ちが見えた。

「兵士になるのは若者の当然の義務だ。青年になれば皆、国家の軍隊に行く。私も昔は軍で訓練を受けたことがあるよ。だが、君はどうして傭兵の道を選んだのだ。なにも外国の傭兵になることはなかっただろうに」

「周囲の奨めに従つたまでだ」

僕が答えると、彼は嫌悪を顔に表して言った。

「教師たちのことが。きつと君の復讐を恐れてのことだろう」

「復讐」

可笑しくなり、笑つた。

「あの人たちに復讐などする気は毛頭ないよ。だって、当然の教えを与えてくれただけなのだろう？」

するとペリウスの顔が苦しげに歪んだ。

「だが君の場合は常道を越えていた。私も、君があればほどに酷い扱いを受けるとは思つていなかったんだ」

本気で言っているのだろうか。だとしたら、良家出身の彼は幸福過ぎる人生を歩んで来たために、人の世の掟を知らずにいるのだ。

僕は笑みをたたえて淡々と諭した。

「人の欲は留まるところを知らない。多くの人の場合、抑えがきくのは権力を前にした時だけだ。そして僕には守ってくれる権力が無い。親も、地位も、何も。だから僕に対する彼らの扱いは当然のものだ」

ペリウスは眉間にはっきりとしわを寄せて黙り込んだ。

首を少し傾げ、悲しげな視線を僕に注いでいた彼は、やがてぼつりと呟いた。

「私は君と、もっと話がしてみたかった」

それは独り言のように小さな声だったが、はっきりと僕の耳に届いた。目を合わせようと視線を上げた僕から、ペリウスは顔を背け

て続けた。

「アテンの名は先生が亡くなる数年前に聞かされた。素晴らしく見込みのある少年だということだった。その頃、すでに先生はご自分の寿命を悟られていたのだろう、君の面倒を必死で私に頼み込んできたよ」

横顔を向けたままで彼は微笑んだ。初めて見る柔らかな笑顔だった。

「悔しかったな。それまでは自分が、最も優秀な生徒だと思っていた。だが十歳以上も年下の、素性の分からない少年に一位の座を奪われた」

苦しげに瞼を一度閉じてから、彼はすうと息を吸って言った。

「二十歳下の男を知っているか」

不意の質問に驚いて僕は、真っ直ぐ向けられたペリウスの視線を受けた。ペリウスが問いを繰り返す。

「先生より二十歳下の弟子のことだ。先生から話を聞いたことがないか」

「いや。聞いたことがない」

「そうか。知らなかったのか」

彼は納得したように笑い、呟いた。「あの人は君に話さなかったのだな。自分の傷を」

傷。その言葉を聞いて脳裏にひらめいたのは、先生の諦めた横顔だった。彼が何か深い悲しみを抱いていることは知っていた。けれど先生がその悲しみのもとを話すことはなかったし、僕から訊ねたこともなかった。

「その男は、先生の弟子の中で最も優秀だったと聞いている。素直で正義を愛する性格で、先生の仰ることを全て正しく聞き取り、実行したという。先生はその二十歳下の男を、弟子の中で最も愛した……  
そして一人の人間としても、深く愛していた。彼が生きていたら一番弟子の座には、永久に彼が座り続けたことだろう」

「生きていたら？」

「そう。先生が愛した男は死んだのだよ。先生が仰った正義を、実現するための戦争で」

渴いた心が一瞬、痛みを取り戻した。

先生につきまといていた絶望の影が、ようやくはつきりとした映像として見えた。それは戦場で血を流す男の姿だった。

次にその血を流すのは自分。僕は先生を二度も絶望させ傷付けることになるのか。しかも“二十歳下の男”と違い、先生の正義を実現するためではなく、ただ人生を諦めて無駄に命を投げ棄てるのだ。僕は周囲に負け、苦しみにかけて流されたことを悔いた。でも、もう遅い。全ては過ぎ去ってしまった。あの暖かい過去には戻れない。黙り込み俯いている僕に、ペリウスは優しい声で語りかけた。

「先生が愛する男を失ったのは十年前だ。ちょうど君と先生が出会った頃だね、アテン。その頃、私は卑しくも一番弟子が死んだことを喜び、その座を狙えると思っていた。しかし先生の傷を癒し、一番弟子の座におさまったのは、無名の子供だったのだよ」

そこで声を震わせると、彼は僕から目を逸らし空を仰いだ。

ペリウスの頬に涙が一筋流れた。

「私はね、先生に憧れて外国から来たんだ。貴族の位も、家族さえ捨てて、必死で学問に励んだ。しかし先生はついに私のほうへ振り向いてはくれなかった。どうやら努力ではなく、生まれつきの才能が運命を決定するようだ。……なあ、アテンよ。この世とは不公平なものだな」

僕は知っていた。ペリウスは根がひどく真面目で、几帳面な人だ。学問に対しては真剣そのもので、書物を繰り返し何度でも読む。細かなことも決しておろそかにしない。疑問があれば解けるまで追求するのだった。

まともに書物を読んだことがなく、何事も直感で捉えようとする僕などより、遥かに優秀なうえに努力していた。それなのに評価してもらえなかったのだとしたら。努力をしたこともない年少者が自分より上の評価を与えられたなら。誰でもペリウスと同じ、少し意

地悪な気持ちになるのではないか。

「けれど私は君のことが嫌いではなかった。本当に心から、君がこの家に来ることを望んでいた。先生があればどこまで認めた生徒と、話がしてみたかったんだ。もし違う機会を与えられたなら、私は君ともっと深く話をしていたと思う」

ペリウスはそう言い、僕が寄り掛かる壁に並んで隣の僕を見下ろした。そしてまた深く息をつき、僕に問うた。

「私を恨んでいるか」

僕は言葉では答えずに笑顔だけを返した。

すると絞り出すような声が降って来た。

「済まない。本当なら私が、兄として君を守るべきだったのに……それが先生から私へ託された唯一の使命だったのに。ついに守れなかった……」

ペリウスの瞳から、今度は止まらない涙が溢れ出した。

胸を突かれて僕は涙が流れるその頬を眺めた。冷たい純白の肌の下に、暖かい人の血が透けて見えていた。

「僕も、あなたが嫌いではなかった」

言つと、ペリウスは驚いた瞳を向けた。

僕は彼の方へ手を伸ばして言った。

「あの時の手の温もり、忘れていないよ。僕はあなたと友だちになれそうない気がしていた。本当は僕もあなたと、もっと話がしてみたかった」

澄んだ青空を映す瞳が見開かれた。

彼はその瞳で僕の手を見つめていたが、思い出したように衣の内から何かを取り出し僕の手へ握らせた。

「持つて行ってくれ。先生が最後の夜に書かれた手紙の一部だ。誰に宛てた言葉なのか分からないが、君なら理解出来るかもしれない」

手の平に、小さく折り畳まれた薄茶色の物が乗っていた。一度開けば壊れてしまいそうな、植物の皮で作った薄片だ。僕はそれをそつと衣の内に隠して上から手で包んだ。

「ありがとう」

心からの笑顔で言った僕に、ペリウスは強い眼差しを向けた。

「生きて帰って来い。再び会えたら、その時こそ友だちになろう」

僕はここへ生きて帰るつもりはなかった。だが、差し出された熱い手を握り返した。胸に言葉を響かせてみる。

ペリウス。再び来世で会えたら、友だちになろう。

異国へ向かう前、懐かしい隠れ家に寄った。

海を見渡せる崖の上に白壁の家はまだあった。壁に走る亀裂が少し深くなった気がした。床には足跡がつくほど砂が降り積もっていた。

砂の中を歩くと、足先にぶつかる物があった。

星型の立体模型だった。

僕は星を砂の海から救い出し、丁寧に砂を払った。そのままの形では戦場で持ち歩けないので、岩で叩いて細かく砕き、先生の手紙とともに麻袋に入れて衣の内側に縫い付けた。

目を閉じ、麻袋を縫い付けた左胸に手を当てた。冷たかった石の粉が温もりを帯びていく。

星の形はなくなった。真実を追い求める僕の力も失われてしまった。

けれど先生と過ごした日々の記憶だけは、この温もりに封じ込められている。

## 第一話（11）

「アテン」

石に兵士たちの名を刻んでいた管理者は、僕が名乗ると顔を上げて眉根をひそめた。

「それは通称だろう？ 通称では名簿に載せられない。正式な、親から与えられた名を言いなさい」

「通称ではありません。本名です」

「それにしておかしな名だ、“光明の神”とは」

「しかし……自分にはこれしか名がありません。たった一人の親からもらった名です」

「では父の名、家の名を言いなさい。または雇い主の名を」

僕が家の名を告げたとたん、管理者はさつと顔を青くして椅子から立ち上がった。

「有名な家柄の名ではないか。貴様、嘘をついているのではあるまいな」

「いえ、嘘など」

近くに事情を知る者いて、管理者の耳へ事実だと囁いた。管理者はまだ納得しかねる様子で、粗末な身なりの僕を眺めてから、顔を近付けて低い声で問うた。

「来る場所を間違えているのでは？ ここは最前線へ行く傭兵の登録所ですぞ。奴隷出身者や、日銭を稼ぐ労働者が集まる場所だ。君のような、いい家の若者が来るところではないでしょう」

「間違えてはおりません。家族に望まれ、自分で望んでここへ来ました」

きつぱり告げたので、管理者は口を噤み椅子に座りなおした。それから無表情で石の名簿にアテンと彫り込むと、「次！」と僕の背後に向かって叫んだ。

僕は一礼して列を離れ、後ろを振り返った。

埃臭い海岸に伸びた列が長い影を落としている。列に並ぶ男たちの中には、荒くれた経歴を表す体格の良い男もいれば、痩せた病人のような男もいた。しかしその誰もが同じように暗い表情をしており、人生に疲れた深いしわを顔に刻んでいるのだった。

たびたび、彼らの間からこちらへ向けられる視線は何を語っているのだろうか。好奇心。敵意。いや、その両方か。先ほどの話を聞いていたのか、または早くも違う臭いを嗅ぎ付けたのか。どうやら貴族に飼いならされた僕は、彼らに受け入れられない臭いを発しているようだった。

結局、自分はどこの集団でも孤立する。

だとするならばやはり孤独を受け入れ、早い死を望むしかない。

当時は外国の偉大な王が、長きにわたる征服戦争を起こしていた。僕はその王の軍隊の、最も遠方の、最も危険な戦場を飛び回る部隊に配属された。

最前線に送られる戦士たちは、最下層の階級から出て来た者たちだ。奴隷上がりの貧民、家と財産を失った者、零細な労働者、労働者を装った侠客集団、等々。

それまで僕が見たこともなく聞いたこともなかった、劣悪な世界で生きてきた民たちだ。この世で最も強烈な恐怖と戦って来た者たちとも言える。当然、犯罪に手を染めなければ生きては来られなかった人々もいた。彼らは弱い者を見れば本能的に、自分たちの餌食にすることしか考えられないのだった。

この集団の中で僕が無傷で過ごせたとと言えるだろうか。  
否。

どれほど自分をごまかそうとしても、記憶は嘘をつけない。幕の奥に包まれた暗がりには、犠牲となった記憶がある。華奢だが健康な体を持つ人間は、戦場では当然に欲望の対象として見られるのだ。まして貴族のもとで、かつてそのような役を押し付けられた経験ま

でもが滲み出ていたのだとしたら。狙われることは避けられなかったろう。

けれど犠牲となる日々は長くは続かなかった。

深夜、欲に満ちた者たちが闇の奥から近づく気配がある。素手では集団に抵抗のしようがない。ここで剣を振り回して相手を切り刻むわけにもいかない。だから僕は抜いた剣を振り回す代わりに、傍らの地に突き刺し、短く告げるのだ。

「好きに。だが代償として全員の命をもらおう」

肉に目のくらんだ獣たちは皆、僕との契約を嘲笑った。

「阿呆か、こいつ。仲間を殺せば自分も処刑されるだろうに。だいたい、お前一人で全員が殺せるわけねえ」

ところがその近日、彼らの遺骸は必ず全て戦場で積み重なっているのだった。しかも敵陣の、最も戦闘が激しかった場所で、他の遺骸と綺麗に折り重なって。

司令官たちの目には、彼らが敵に殺されたかのように見えた。

しかし、僕の属する部隊では皆、僕と彼らとの契約が果たされたことを悟った。一人として僕が彼らを斬る場面を目撃した者はいなかったが、その容赦ない切り傷から、誰の仕業なのか即座に知ることが出来たのだった。

間もなく僕は戦場で、“最高の戦士”とまで呼ばれる殺戮の腕を持つようになった。

剣の技術が優れていたのではない。ただ容赦しなかっただけだ。

どのような悪人でも、人を殺す時はわずかな躊躇ちゆうしゆを持つ。血を浴びることを厭いとい、罪をかぶることを恐れる。

だが僕にはその一瞬の躊躇さえなかった。なぜなら僕はこれまでに何度か、自分で自分の心を殺し続けた。自分を殺せる者は、人を殺すことに躊躇しない。自分を深く斬りつけて来た時と同様、迷いなく相手に深い剣を突き刺すことが出来る。

迷いが必要ならばその分、剣が早くなる。

剣と剣とのやりとりに、人としての対話が欠片もないのだから、相手は調子を狂わせているうちに死ぬ。

体格や運動能力の有無など最期の極みでは無縁だ。

より人間性を失い、精神が異常となり、悪鬼に近付いた者が相手の命を奪える。

戦場とはそういうところだ。

戦士は殺人のための道具でしかない。剣の技術の鮮やかさで賞賛されることなど、貴族たちの宴の席でしかあり得ないことだ。

現実の戦場では、心を失い道具に徹した戦士こそが最高の腕を持つ。

もし魂がなくても動く機械があれば、その機械が全ての英雄に勝利するだろう。

僕はその機械に似ていた。だから同じ部隊の兵士たちは僕の戦場での腕を認め尊敬したけれど、決して普段は近付かなかった。欲望の対象として僕を見ていた者たちさえ、心の底から怖がって指一本触れようとはしなくなった。

やがて僕は精神を病んだ。

いつからそれが始まっていたのか分からない。先生の家で教師たちの餌食となり、傷を負ったことが病の原因だったのかもわからない。

長い時間をかけ、緩やかに壊れ始めていた僕の精神は、戦場で人を殺すごとに自壊を加速させた。

迷いなく人を殺していた僕でも、罪だけはかぶっていたのだ。他人の命を奪った罪は、現実の重量として自分の上に積み重なって行く。

ねっとりとした黒い油ぎった影が、自分の肩に重なって行く様子を、僕の目は映像として見ていた。

その黒い油は、罪の化身。

自分が殺した人々の亡霊だった。

積み重なった影の重みで僕はまともに歩けなくなり、ふらふらと斜めに歩くのが常となった。

「なあ、あんた。どうして、そんなふうに斜めに歩いているんだ。足でも悪くしたのか？」

ある日、親切な兵が僕に訊ねた。

僕は当然のように答えた。

「そうじゃない。戦場で殺した死者たちの霊が、肩に積み重なって重くて重くて歩けないんだ。もうすぐ僕はこの亡霊たちに押しつぶされて、死ぬんだよ」

相手は恐怖で顔を青くして、僕から素早く離れた。間もなく、その兵が大声で皆に語っている声が聞こえて来た。

「おおい、あいつはもう駄目だ！ 完全にイカれてるぞ。いくらなんでも、もう使いものにならねえよ。早く医者のもとに連れて行ってくれ。一緒に戦場に行けば、俺たちが危険だ」

皆が彼の言葉に「そうだ、そうだ」と頷き、腐ったゴミを見る目つきで僕を眺めた。しかし誰も、僕をゴミとして追い出せる者はいなかったのだ。

司令官たちなど上の人々にしてみれば、僕は最も優秀な剣士で、最強の戦力だったからだ。彼らが僕を手放すはずがない。手放すどころか、僕が壊れれば壊れるほど、ますます引き立てて重要な戦地へ送るのだった。

人が魂を病み、人としての心を失えば、戦場では最高の役に立つ。皮肉なものだな、と、僕は幻覚の亡霊に語りかけて笑った。

## 第一話（12）

戦場はいつも曇りだったと記憶している。

厚い雲が垂れ込めた空の下、あるいは灰青の霧雨の中で、僕たち戦士は敵の血を浴び続けていた。

むせ返る草の青い薫り、倒れた時に鼻を突く湿った土の泥臭さ。そしてたった今、生きていた人間の体から吹き出してくる血の、降り注ぐ温もり。

それらの映像や感覚は、何の感情も伴わず淡々と再生される。

僕はあるとき確かに戦場にいたのだが、離れた場所からその光景を見つめている気がする。

野原の濃い緑に飛び散る、鮮やかな赤い飛沫を、綺麗だとさえ思いつながら眺めている。

狂気と殺戮の日々に明け暮れ何年を過ごしたのだろう。正確には年を数えられないが、僕は二十五歳に近付いていたはずだ。

その戦闘の前日には生臭い風が辺りに漂っていた。

相変わらず僕は亡霊に取り囲まれる幻覚の中にいた。体に乗る黒い影がいつもに増して重かったので、「重い、苦しい、つぶされる」と喘いで他の兵士たちから気味悪がられた。

時折、はつきりとした意識に目覚めて周囲を見渡してみた。待機所とされた倉庫に押し込められた兵士たちは、僕の幻覚の亡霊たちより蒼褪めた顔をしていた。なにしろ明日に、勝敗を決する重要な戦闘を控えていたのだ。誰もが今度の戦闘は簡単には終わらない、生き残れないかもしれないという予感に怯えていた。

夜が更けるにつれて、僕の衣の内側に縫い付けてある袋が奇妙に熱を帯び始めた。

僕は壁に背を当てて座り、衣の上から砂袋を握り締め、自分の鼓

動と砂の熱を味わっていた。それは生贄が自ら胸を開いて心臓を握り、悪魔と語り合う仕草に似ていた。

前を通り過ぎる兵士たちが僕の仕草を見て、「またコイツ気味の悪いことしてやがる」と怒鳴り唾を吐き捨てて行ったが気にならなかった。僕は儀式を続けなければならない。僕の命を狙っている、亡霊たちの願いが明日こそ叶うように。

明け方、緩んだ手の中で何かがかさこそと鳴った。

乾いた風が、枯れた落ち葉をかき混ぜる音のよう。

何が鳴っているのかは思い出せなかった。けれど懐かしさが心を刺した。痛みは暖かい液を目の端から押し出した。

最後に見る朝の光が、手元で弾けた雫<sup>しずく</sup>を輝かせた。

凄絶な戦闘が始まった。

両軍ともこれまでにない大戦力がこの戦闘に注がれた。大軍はぶつかり合い、敵も味方も入り混じり、見分けがつかなくなり、しまいに僕たちは剣を振り回して周りの人間を切り刻んでいた。

次々と肉の塊が積み重なって行く。

斬らなければ自分が肉の山に重なる。

歩くために斬る。斬ればまた少しの間、歩いていられる。

立ち塞がる木々の枝を薙ぎ倒すように、低い姿勢で剣を振り払い歩き続けた。

僕が歩いた後には両側に肉の壁を持つ道が出来た。敵だろうと味方だろうと、こちらに近寄る者は皆その壁の一部となる。

「魔物だ」

と叫ぶ、誰かの金切り声を聞いた。

「魔物が憑いている」

味方の兵士が恐怖で顔をひきつらせて僕を指差し叫んでいた。その男も、すぐ肉の壁に連なった。

両の壁から浴び続けた血で鎧が濡れ、全身が重い。

いや、人の体を斬ることに肉からあの黒い影が浮かび上がって来て、次々にこの肩の上に重なって重みを増しているのだ。

重い。

歩けない。

もう、一步も。

誰か。

神よ。

助けて！

……心の叫びとは裏腹に体は自然と動き、目の前の肉を斬っていく。そしてまた大量の血を浴び続ける。あと、どれだけの血を浴びれば終わるのだろう。どうして誰も終わらせてくれないのだろう。

誰でもいい。どうか終わらせてくれ。

もうこれ以上、僕は罪を背負うことが出来ない。

ふっと体が軽くなった。

人の叫び声が聞こえない。剣がぶつかる音も、血が飛び散る音も消えている。

剣を止めた僕の視界に入ったのは、見渡す限り一面に転がる死屍だった。

気付かないうちに戦闘は終わっていたのだった。立っている者は自分以外、一人もいなかった。草原を渡る風は生臭い血の匂いを運んで来る。

日暮れてから長い時間が経っていたようだ。明け方に近い夜は透明の闇だ。

天上に瞬く星の光に照らされて、死屍の上を流れる血が青々と輝いていた。

静かな光景だった。

恐怖も嫌悪も、恍惚も興奮も、幸福も悦楽も、ここには何もなかった。一切の感情や感覚が消え去って、ここにあるのは魂の抜け殻

に過ぎない肉塊の原。

この景色は夜空と似ている。満天の星と同じく、純粹に無機質な物がただ一面に在る。

血で濡れた鎧だけが、重くて煩わしい感覚を残していた。僕は鎧を脱ぎ捨て、自分の体を見回した。手と肩をじつと見つめてみる。あの黒い影が消えていた。耳元で囁く亡霊の姿も見えない。

罪が赦されたのか……？

そうではない。罪など始めからなかったのだ。

罪も、死も、恐怖も。全ては幻だった。世界はただこうして永遠に在るのみだ。

初めてこの世界に生まれた想いで僕は目を見開いた。新しい景色は馴染み深い故郷のようにも見えた。胸が静けさに満たされ、心の傷が霧散していった。疲れ果てた腕は剣を構えるのをやめ、切先が足元を向いた。

と、その時、足元で生物が動く気配がした。

生き残りか！

反射的に剣を振り上げた。そして切先は足元に倒れている敵兵の体突き刺さろうとした。

だが、視界の端に映るものが剣を止めさせた。

死体の上でうごめいていたその影は、剣に驚き、バサバサと激しい羽音を立てて舞い上がった。

フクロウ？

巨大な白い梟はくちうが、真っ直ぐに黒い森の上を目指して飛び去った。

飛び去る前に梟は僕へ視線を投げた。智恵を湛えた瞳の黄金は何事かを僕に語りかけていた。視線を追いかけ、梟の飛び去った森の方角へ顔を向けた時だった。

どっ。

腹に重い物が当たった。

じわりと、熱が広がる。

自分の腹を見た。

長剣が深く突き刺さっていた。

足元に伏せていた生き残りの敵兵が、僕へ剣を突き立てたのだ。

敵兵はとどめを刺すため、剣を横に捻った。

「う、う」

たまらず唸って膝を突く。

さらさらと胸から何かが零れ落ちる音がした。

何の音だろう。

そうだ……あれは、白い砂だ。砕いて麻袋に入れ、衣に縫い付けて持ち歩いていた、先生からもらった星の……。

染み出した熱が衣の内側に広がる。僕は薄れ行く意識を必死で繋ぎとめ、力を振り絞って衣を引き裂いた。砂袋の中へ手を入れ、薄片をつかんだ。

瞬間、敵兵が剣を引き抜いた。

体から血が勢い良く吹き出す。

引き抜かれた剣とともに高く舞い上がった砂が、きらきらと輝きながら降りて来る。僕は震える手で開いた薄片を頭上に掲げ、星の明かりにかざして読んだ。

『 なにも 恐れる 必要はない

思い出せ

君は 世界の全てを 知っている 』

懐かしい先生の文字の向こうに白み始めた空が見えた。

まだ暗い森の上には、一つだけ消え残った星が浮かんでいる。

夜の訪れとともに輝き始め、夜の終わりに他の星が消えても輝き

続ける星　　ヴィーナス（金星）。

あまりにも孤独なあの星は、孤独ゆえに美しい。

ああ。

そうだった。思い出した。

先生が言った、“世界の全て”が何であつたかを。

それはこの世でただ一つ。

始まりであり、終わりでもある。

世界はその一から生まれ、一に帰る。

それはこの世の物質ではない。細かな粒子などでもなく、力でもない。手でつかめず、目で見ること出来ない。けれど遠い異世界ではなく、この世界の別次元に、確かに存在する一つの真実。

全てを生み出したそれは、全てとともに存在し続ける。だからその一を知れば、世界の全てを知つたと同じことになる。

僕は、その真実を知っている。

本当はずっと昔から知っていた。

この世に生まれた時から。始めから。本当は世界の誰もが知っているはず。

知っていることを知らなければならぬ。全ての魂がそのためにここにいる。皆が知っていることを知れば、真実がこの世で叶う。

星へ向かって伸ばした剣に光が降りて来た。

降りて来た一筋の星の光は、黄金の波となつて体を包み込んだ。

今、僕はようやく真実を得た。

けれど遅過ぎた。もうすぐ命は尽きる。真実を誰にも伝えることなく。真実をこの世で叶えることなく……。

頬に流れた涙が冷たかった。

森の上の星とともに、僕の命は太陽の光に飲み込まれて消えた。

## 第一話（終）

草原は蜜色の光に包まれていた。

光が熟した果実の色に変わり、緑の波が揺れる。

海から訪れる風が、穏やかな波の音を運んで来る。

傍にルティアがいる。

新緑の冠をかぶった彼女は、金の髪を夕陽に輝かせて笑っていた。とても幸福そうに。僕も幸せで、微笑みに溶けた。

ルティアと僕は抱き合って草原に転がった。太陽の光が二人を包む。

暖かいね……、ルティアが言った。

うん、暖かい……。僕も返す。

とても暖かい。涙が出るほど。

ざあ、と風が渡り、視界が広がった。

ルティアはいなかった。

僕は波打つ緑の絨毯の上を飛んでいた。森の木々の途切れた先、向こうの崖の上に、朝陽を浴びている小さな白い建物が見える。

ここは懐かしい草原、母の森。あれは先生と過ごした建物。

僕は思い出を見ているのか。

いや、そうではない。

ルティアがいない。先生がいない。ここは思い出の中ではない。

これは今の、現実の景色。この懐かしい場所に別れを告げに来た。

僕は、死んだのだ。

風に乗る思い出の場所を飛び回る。凄まじい速さで下の景色が流れていく。

草原が、森が、白い建物が、輝く緑の島が、太陽を映す海が……、遠くなる。

さよなら。僕の好きだった景色。

ありがとう。僕を生かし、暖かい思い出をくれた場所。

虐げられ、傷付けられ、最後まで無名のまま生き、何事も成せない人生だった。

でも僕はこの人生が好きだった。

海に閉じられた小さい場所の、ささやかで美しい景色。限られた人たちから受けた、深い愛と精一杯の優しさが。

他にどれほど激しい人生を過ごそうとも、僕はこの人生でもらった小さな宝石を大切に携えていくだろう。

景色が飛び去った視界に満天の星が広がった。

星屑の影に先生の面影が滲んでいた。

先生を感じて、僕は悟った。彼が二度とこの地上へ戻ることはない。

先生。

先生は、上の世界に行かれたのですね。

あなたは、とうの昔に真実を得ていた。本当はもう地上にいるべき人ではなかった。けれど地上の人々に真実を伝えるために残られて、孤独に耐えながら教えを続けられた。

今、想いを果たし、あなたは上へ行かれた。

もう地上であなたに会うことは出来ない。

ただ一つの真実を託されたのが僕だとしたら、僕は一人ここに残り、生きていかなければいけない。

先生、僕に何が出来ますか？

次に生まれ変わった時、飛び立つ翼を得ることが出来るでしょうか。

次の人生で日暮れとともに生まれる僕は、厚い帳の降りた空のもと、光を忘れず飛び続けることが出来るだろうか……。

## 第二話 「自由と孤独の旅路」 (前書き)

第二話あらすじ： 町の片隅で泣いていた赤子の僕を拾ってくれた兄貴。

彼は僕に「魔法使い」という名を与え、相棒と呼んだ。

けれど僕は自由を手に入れるために、兄貴から逃亡する。

## 第二話 「自由と孤独の旅路」

星とともに溶けた意識は闇を漂い逆の道を辿る。

過去への旅は始まりに過ぎなかった。

僕はまだ思い出していないことがある。

決して忘れてはならない記憶。

失ってはならない絆。

伸ばされたあの手……。

再び白い光が訪れた。

光で満ちた視界に、地上の景色が蘇った。

\*

がらがらと激しい音を立て、目の前を車輪が過ぎた。

大きさの揃わない巨大な石が敷き詰められた道は、荷車を容赦なく跳ね上げた。黄色い砂埃で辺りが煙っている。

道の隅、積み上げられた箱の陰に隠れていた僕たちは砂埃の中に駆け出した。砂粒が瞳を刺すけれど、止まらず駆け抜ける。

食べ物や並ぶ棚の下に滑り込むのは僕の役だ。

大人たちの目には留まらない素早さで、棚に手を伸ばし果実を奪う。

道を歩いている仲間へ投げ渡すと、彼らは背中で次々と盗んだ物を手渡して行く。

最後、受け取るのは……あの少年。

視線の先に、他の子供たちより少しだけ背の高い少年が立っていた。彼は大人と混ざり、道の中央に堂々と立ち、心地良さに昼の日差しに目を細めている。背中で獲物を受け取ると、彼は僕のほうへ瞳を向ける。その瞳は透き通る鮮やかな緑だ。

緑色の瞳を持つ少年。

あの人は、兄。

僕たちの、“兄貴”。

兄貴が緑の視線を僕へ投げる。

そして片方の口の端を微かに上げる独特の笑い方で、僕に笑いかける。

僕も頷いて笑顔を返す。

それが仕事完了の合図だった。僕は店の下から這い出し、兄貴と並んで市場を歩く。

僕たちの姿は、まるで買い物を楽しむ本物の兄弟のように見えたという。あまりにも幸福そうに歩く兄弟に、疑いの眼差しを向ける大人はいなかった。

それはまた一つ前の人生の記憶だ。

先の記憶よりさらに西の方角。海からは少し離れた土地。一年中暖かい風が吹き、柔らかい陽光の降り注ぐ田舎町に、僕はいた。

その人生でも僕は孤児だった。きつと貧しい家に生まれ、口減らしのため捨てられたのだろう。当時はよくあることだった。町は親に捨てられた孤児たちで溢れていた。

物心ついた頃の僕は、そんな捨てられた孤児の仲間と一緒に生きていた。

僕たちの孤児団は上から一の兄、二の兄、三の兄、四の兄……と年齢順に兄弟関係が決まっていた。それぞれの兄たちに名はあったけれど、最も年下の僕は仲間を全て「兄」と呼んでいた。呼んだこ

とがなかったから、兄たちの名は忘れてしまった。

僕を拾ったのは一番上の兄貴だった。町の片隅で泣いていた赤ん坊の僕を、兄貴が見つつけてくれたらしい。

その当時の兄貴は十歳くらいだったが、すでに仲間の長として弟たちの面倒を見ていた。新入りに名を付けるのも兄貴の役だった。

僕の名が決まった日のことはよく覚えている。

まだ拾われて間もなくのことだったと思う。隠れ家の中、石を積み上げて作った炉の、橙色の灯の光に周囲が照らされていた。僕は布に包まれて床に寝ていた。自分を囲んで見下ろす仲間たちの瞳が、濡れた宝石のように耀いていた。

最も長い時間をかけて僕を見つめていたのは緑色の瞳だった。その瞳が閉じられ、代わりに開いた唇から声が発せられた。

「カカ」

他の兄たちが彼の顔を覗き込んで、「カカ？」と繰り返した。

「それ、どういう意味の名？」

誰かが尋ねた。瞳を開いて瞬きをした兄貴は、ちよっと困ってかと言った。

「魔法使い、って意味さ」

皆が顔を見合わせる。

「魔法使い？ どの国の言葉？ 聞いたことないよ」

彼は唇の片方を上げて笑った。

「さあ、分からない。なんとなく浮かんだんだ。魔法使いっぽいだろっ」

うーん。

首を傾げている仲間たちを尻目に、兄貴は僕を抱き上げて高く掲げた。

「この弟は今日から、“カカ”だ。……カカよ。俺たちの魔法使いになって、俺たちを導いてくれ」

それを聞くと仲間たちもわっと叫んで赤ん坊を囲み、「カカ」、「魔法使いみたいに稼いでくれよ」などと口々に言っただ笑ったのだ

った。

仲間の期待通りに僕は“魔法使い”へと成長した。

魔法使いのように目に留まらない素早い手を持ち、大人たちの前から姿を消す技を身に付けたのだ。

一番年下の僕が一番の稼ぎ頭となった。僕の技術で獲物の数は増え、捕まる仲間の人数は減った。そのため誰もが僕の腕を認めだが、年下の者が目立つことを面白くないと思っていた仲間もいた。

ある日、仕事を終えて道を歩いていると、兄の一人が路地裏から手招きをしていた。

「力力。来いよ。面白いものを見せてやる」

疑いを知らない僕は彼のもとへ近付いて行つた。

「何？」

尋ねたとたん、背後に隠れていた他の誰かに背中を押され、前へ転がった。

僕が放り込まれたのは廃屋だった。仰向けに転がると剥き出しの地面に触れた背中が冷たかった。破れた屋根の隙間から、まだ明るい青空が見えた。

空を遮って大きな影が近付いて来た。五、六人の仲間だった。彼らは輪になって僕を取り囲み、にやけた顔で見下ろした。

「生意気なんだよ、チビ」

「年下のくせにひいきされて、いい気になってんじゃねえ」

頬へ熱いものが浴びせられた。

次いで、腹。

それからは止まらなかつた。次々と顔に拳が降り、腹や背に蹴りが入った。

頭を抱えて丸まり、涙を滲ませて、「何故」と僕は呟いていた。

何故こんなことをされなければいけないのか。自分がどんな悪いことをしたのか。何故、この兄たちは、こんな惨めなことでは自分

の嫉妬を晴らせないのだろう……。

意識が遠のきかけた時だった。不意に暴力の雨がやんだ。

張り詰めた静けさを不思議に思い、恐る恐る顔を上げて辺りを見回してみた。

皆が真つ青な顔で立ち尽くしていた。僕に向かって振り上げた拳もそのままに。

凍り付く彼らの視線の先を追った。

そこに、戸口から伸びる細長い影があった。

影の主は兄貴だった。

兄貴は奇妙に静かな表情で僕たちを見下ろしていた。瞳は澄み切つて冷たく、一切の感情を映していなかった。

「あの……。兄貴、これは……」

血の滴る拳を震わせながら、誰かが弁解しようとした。

兄貴は声のするほうへ一瞬だけ瞳を動かしたが、その瞳にも感情はなかった。怒る様子は微塵もない。しかし蒼褪めた頬に熱を超えた怒りを感じて、誰もが恐ろしさで声を飲み込み震えた。

冷たい視線が動き、淡々と僕へ注がれた。

僕は口元の血を拭って身を起こし、黙って兄貴の瞳を見返した。す、と長い手が伸ばされた。

兄貴の手は真つ直ぐに僕へ向かっていた。

「来いよ。相棒」

“相、棒”。

全員が息を飲む。僕も頭が痺れてしばらく呆然とした。兄貴が誰かのことを“相棒”と呼んだのは、その時が初めてだった。

兄貴は冷めた瞳のまま、けれど口元に微かに笑みを浮かべて僕へ手を伸ばしている。

僕も腕を伸ばしてその手を握った。

固く握り返された手は、強い力で僕を引き上げた。

## 第二話（2）

兄貴が僕を「相棒」と呼んだことは、すぐに仲間全体へ知れ渡った。

不平を漏らす者もいたが、ほとんどの仲間は何も言わなかった。

“上の者が認めた相棒は、下の者も認めなければならぬ”

それが兄弟関係の掟おきてだったからだ。

皆と食事している前でも、兄貴は上機嫌になると、はばかりことなく繰り返し返していた。

「力は俺にとって、なくてはならない存在だ」

兄貴と年の近い仲間たちは、あからさまな鼻<sup>ひいき</sup>に苦笑いしながらも兄貴の気持ちを確認していた。「なくてはならない存在」という言葉が、本当のことだと感じていたからかもしれない。ずっと前から孤児の長を務めてきた兄貴が、実は寂しがりであることを彼らは知っていた。ようやく見つけた“相棒”は、兄貴の仕事だけを支えるのではないと気付いていたのだと思う。

相棒となってから兄貴と僕は、常に組んで仕事をするようになった。

僕が最初の役をする。市場の棚の下に滑り込んでくすねた物は、仲間たちの手を次々に渡って行く。そして最後に受け取るのは、いつでも兄貴だった。

途中の人数は多い時もあれば、少ない時もあった。けれど最初と最後は、必ず僕たちでなければならぬ。

兄貴と僕と、二人だけで出掛けて行って大量の収穫を得ることもよくあった。

身体が小さくて身のこなしが素早い僕と、態度が堂々としている兄貴とは、お互いの欠けたところを補い合う最高の相棒だったのだ。

るう。

それに何故か兄貴と僕は、自然の兄弟のように振舞えた。市場を二人で歩いていても、疑われて声を掛けられたことは一度もなかったのだ。

決して顔が似ていたわけではない。少年らしい活発な笑顔を持つ兄貴と、女の子のように貧弱で大人しい印象の僕は、見た目では大きく違っていた。瞳も緑と青で、よく見れば血のつながりがないことは分かったはずだった。それなのに、何故これほど自然の兄弟らしく人の目に映るのか、誰も不思議がった。けれど兄貴と僕には、そのことは当たり前のような気がしていた。

いつだか二人でいる時に、兄貴は静かな視線を僕へ注いで、

「お前は他の奴とは違う」

と言った。

違う、と言われたことが不思議で僕は答えた。

「違うわけがないよ。僕は兄貴に育てられたんだし、皆と一緒に暮らしているのに」

すると兄貴は少し首を傾げ、斜めの視線で僕を観察しながら言ったのだった。

「いいや。お前は他の奴とは違うよ。どこか静かで、深く物を考えるところがある。そして誰よりも、遠くを見ている」

遠く。

言われて僕は空を見上げた。

青空の澄んだところを見ると、胸がちくりと痛む。いつものように。

兄貴は知っていたのだった。皆が子供らしくじゃれ合って大騒ぎしている時でも、僕だけは独りで黙り込み空を眺めていることを。

喋ることはあまり好きではなかった。兄貴と二人でいても黙り込み考え事にふけることがよくあった。こんな僕といっても退屈だと思

うのに、何故兄貴は僕とばかりいるのだろう。

申し訳なくてまた黙り込み、うつむく。

そんな僕に兄貴は告げた。

「俺はそういうお前が好きだよ。……そういうお前だから」

本当だろうか。僕が恐る恐る視線を上げると、彼はふつと笑い、自分でも何かを確認するように続けた。

「カカ。お前だけは、本当に血のつながりのある弟のように感じるんだ」

兄貴の顔は笑っていたが瞳の奥が真剣だった。僕は他の仲間へ悪い気がして、戸惑い、視線を逸らして問い返した。

「どうして」

すると彼はまたふ、と笑って、「さあなあ」と空を見上げながら言うのだった。

「何故だろうな。自分でもよく分からない。でもお前を見つけた時から、他の奴とは違う気がしていた。お前だけには肩の力を抜いて話せるし、本来の自分自身でいられる。何の違和感もない。ずっと昔から、お前とは兄弟だった気がするんだ」

嬉しかった。

他の仲間には悪いけれど、僕も同じ気持ちを感じていた。

「いつまでも、」

と兄貴はいつもの口癖を繰り返した。

「いつまでも兄弟でいような。大人になってもずっと。かけがえのない俺の弟、カカよ」

……けれど僕にはその兄貴の言葉へ答えた記憶がない。

曖昧にごまかし、微笑むだけだった気がする。

あまりにも嬉しくて答える言葉が分からなかったのか、恐れ多くて受け入れ難かったのか。

それとも、答える必要などないと思っていたのかも知れない。

兄貴から無条件に注がれ続けた大きな愛情を、いつしか空や水と同じように、当たり前前に存在するものだ。僕は感じ始めていたから。

街のはずれ、門の先には緑の丘が見えた。

視界いっぱい広がる、なだらかな丘の連なりは未知を隠していた。門から真つ直ぐに延びる一本道は、希望に満ちた未来へ誘った。ほろ僕は門に寄り掛かってその景色を眺めるのが好きだった。

緑の地平線と、青空とが交わるところまで続く道を見つめる。見つめているうち、未知の世界の空想が次から次へと浮かんで、膨らみ続ける。気付くと僕は何時間でも飽きずに景色を眺め、空想にふけているのだった。

「やっぱり、ここにいたのか」

夕方近くになると砂利を踏む音がして、慣れ親しんだ声がする。

振り向くと僕より頭二つ分、背の高い兄貴が苦笑いしてこちらを見ている。僕は彼に笑いかけて、呼びかける。

「兄貴」

「早く戻れよ。皆、探しているぞ」

「うん。もう少しだけ」

「相変わらず、お前は好きだな。この場所が」

頷いて笑ってみせる。僕がいつもここから外の景色を眺めているのを知っているのは、兄貴だけだった。

「ねえ……、兄貴。兄貴は、あの道の向こうに行ったことがある？」

その日、僕は初めての質問を彼にしてみたのだった。

兄貴は質問されて少し意外な顔をしたが、当然のように答えた。

「いいや。俺はこの街から出たことがない」

「じゃあ、あの道の向こうに何があるか、知ってる？ 誰かから話を聞いたことがない？」

兄貴は瞳を見開いて、まじまじと僕の顔を見返した。彼の瞳には微かな恐れが浮かんだが、その時の僕には気付けなかった。

「何故……そんなことを聞く？」

「何故つて。ただ知りたいたんだ。あの丘の先に何かがあるのか」

不意に兄貴は僕の両肩をつかみ、真っ直ぐに僕の顔を覗き込んだ。  
「そんなこと知らなくてもいいだろう」

「え」

「知る必要がないって言ってるんだ。俺たちはずっとこの街で暮らすんだから」

初めて見る兄貴の怖い顔だった。見開かれた瞳は強い光を放っていた。僕は思わず目を背けて言った。

「でも僕は他の街のことも知りたい。兄貴は、知りたいと思わないの？」

僕の肩に掛けられた兄貴の手から力が抜けた。手はずり落ち、素っ気無い答えが返って来た。

「……そんな気持ちは分からない。俺は、他の街のことなど知りた  
いと思わない」

「だけど、きつと他の世界を知れば楽しいと思えるよ」

無邪気に言った僕へ、き、と冷たい視線が向けられた。

「その必要はない。俺は、お前らがいれば十分に楽しい」

確信の籠こもった言葉は僕たちの間を切り裂くように落ちた。

蒼褪めた僕を見て兄貴は笑んだ。その笑顔は僅かに悲しみを含んでいた。背中を向け、先に立って歩き出した彼は、ようやく聞こえるほどの小さな声で呟いた。

「俺は、お前と一緒に生きている。それで充分だ。他に、なんにも  
要らない」

## 第二話(3)

時が過ぎ僕たちは大人に近付いていた。

兄貴は少年から青年へ成長し、僕も少年らしく背を伸ばした。

かつての仕事は新しく入った年下の者たちがするようになった。

年長者たちは既に他の仕事を始めていた。

皆が少しずつ変わり始めていたのだった。けれど街を出て行くこととする者は一人もいなかった。誰もがこの街で生きて行くことに疑問を持たず、仲間とともに楽しく人生を終えることが出来ればいいと思っっているようだった。たとえ外の世界に憧れを抱いていたとしても、憧れを口に出したり、実行する者はいなかった。

外の世界に興味を持っていて、実際に外へ出ようと考えていたのは僕だけだった。

相変わらず僕は暇さえあれば街はずれの門に立ち、外の景色を眺めていた。

丘の向こうへの憧れは日々つのった。

あちら側の景色を見たい。無限に広がる世界、満ち溢れる色の中に身を投じたい。そしてその中で変わっていく自分を見てみたい。……

“外へ出たい”という希望はいつのまにか、“そうしなければならない”という焦燥へと変わっていた。

遠くの世界への想いはほとんど切ないほどで、地平線を見つめながら涙を流すことがよくあった。

だが街を出ることは恐ろしかった。

衝動にかられて足を踏み出そうとしたことは何度もある。そのたび、兄貴の瞳が浮かぶのだ。「お前と一緒に生きているだけで充分だ」と言った時の、恐れを浮かべた瞳が。

街を出るといふことは、兄貴を捨てるといふことだった。

大切な人を、捨てる。

二度と会えなくなるだけではなくあの人の心を踏みにじり、傷を付けるのだ。最大限の優しさで恩返ししたかった相手に、反対のことをしてしまう。想像するだけで胸が深々痛む。

外への憧れと、兄貴への思慕に引き裂かれ、僕は長いこと苦しみ悶えた。

そのまま街に留まっていたら壊れていただろう。

自由を選ぶ決意をしたのは、ある年の秋の初めだった。数えたことがなかったから年齢は分からないが、身体は一人で生きられるくらいに成長していた。

その日、仕事が終わるとすぐ、自分で作った皮底の紐靴をしつかり足に巻きつけた。そして七日分の食料を入れた小さな布の包みを持ち、棲家から抜け出した。

誰にも別れは告げないつもりだった。姿を見られないために、また自分自身の決心を揺るがせないために早足で街はずれに向かった。だが、門の手前で僕の足は止まった。

門に佇む人影が見えたからだ。

夕陽を浴びて長く伸びる影。

兄貴。

何故、気付かれたのだろう。何かの理由で僕の旅立ちを知った兄貴は、先回りして待ち伏せしていたのだった。

愕然と見つめる僕を、彼は堅い表情で見返した。それから穏やかな日の風に似た声で囁いた。

「この日が来るのは分かっていた」

彼を見上げた僕の顔は蒼褪めていたと思う。

止めないで、と言うより先に、兄貴が言った。

「行けよ。止めるつもりはない」

打たれて僕は目を見開いた。

彼の声に冷淡な響きはなく、顔にも責める表情はなかった。ただひたすらに優しい瞳が、僕を見下ろしているだけだった。

「分かっていたよ。ずっと前から。お前をここに留めておくことは出来ない。お前がどれだけ外の世界へ憧れを持っているか、俺は知っている」

胸に沁み込んだ兄貴の言葉は、熱い涙となって僕の瞳から零れ落ちた。

「だから、行けよ。お前の思う道を、真っ直ぐに。ここへはそれを告げに来た」

「でも兄貴」

心が揺れ始めた僕へ兄貴の叱責が飛んだ。

「迷うな！ もう俺に遠慮することはない。俺の願いは、お前が自分の思い通りに生きることだ。お前が思い通りに生きるなら、俺は報われる。二度とお前に会うことがなくても構わない」

手の甲で涙を拭って僕は顔を上げた。再び涙が落ちないよう堪え、兄貴の目を見て告げた。

「ありがと。……さよなら」

兄貴は頷いた。微かに瞳が揺れたが、顔は笑っていた。

「早く行け。振り返るなよ」

暖かい手に背中を押されて僕は歩き出した。門を潜り、真っ直ぐに前を向いて、一歩そしてまた一歩を踏み出し続けた。

しかし最初の丘を越える前に立ち止まり、出て来たばかりの門を振り返って見た。“振り返るな”という兄貴の言葉を忘れて。

兄貴はまだ僕を見ていた。

門に片手をかけ、腕に額を預けてこちらを見つめている兄貴は、完全に無防備だった。作り笑いと強がりの仮面を脱いだ、生来の彼として僕を見送っていたのだった。

あの人はなんて寂しい瞳をしていたのだろう。

皆の前で生き生きと輝いた緑は光を失い、底の孤独が見えるほどに透き通っていた。まるで遠い空の果て、闇の向こうへ遠ざかる星を見つめているかのよう。涙さえ浮かべることなく、呆然と悲しみに身を委ねている。

彼の孤独の冷たさは、彼自身を切り刻んでいた。

その瞳を見てしまった僕も、凍て付く悲しみに射抜かれた。

一瞬、痛みで目が眩み立ちすくんだ。けれどももう後戻りは出来なかった。

僕は再び前を向いて歩き出した。

このまま歩き続けねばならない、と思った。あれほどの痛みを越えて兄貴が与えてくれた自由は、彼の愛そのものだから。

## 第二話(4)

旅は驚きに満ちていた。歩くごとに移り変わる景色に僕はたちまち心を奪われた。

最初の幾日か、丘の景色が続いた。丘を覆う緑は陽の角度で少しずつ色を変える。朝は露が光を反射して、白に近い透明な緑に。昼の光には濃く明るい緑が照らし出される。夕に近付くにつれ薄っすらと黄色がかり、最後に金の粉をまぶしたように輝いてから、夜の黒へ溶けていく。

やがて緑の丘が終わり、黄金の田畑が始まった。豊かに実った穀物の穂先は、風が吹きたびざあつと音を立て同じ方向に揺れる。遠くから幾度も寄せ来る穂の波に、僕はまだ見ぬ海を思った。

時折、青黒い雲が太陽を隠し、大粒の雨を降らせる。雨を凌ぐ場所などないから、全身を濡らしながら、ぬかるんだ道に足をとられて歩くことになる。だが、そんな苦労さえ僕には新しく楽しいことに思えた。一面に灰色の幕が降り、いつもと違う表情になる景色も好きだった。それに雨音に包まれた世界は他の音を失い、静かで、自分が一人きりであることをいつそう強く感じさせてくれる。孤独に満たされた胸は深い満足を覚えるのだった。

旅に出ることで僕は自由とともに孤独を得た。けれど寂しくはなかった。孤独は、寂しさではない。

自分が一人であると知ること。一人の世界を味わうこと。本当はそれが魂の自然の姿なのかもしれない。孤独を味わうことによつて人は一步、神の世界へ近づく。

兄貴を忘れたことは片時もなかった。友情は遙か後方に、確かに存在していた。愛された日々の思い出は僕を支え続け、生かしてくれた。けれど僕が彼のもとへ戻ることは二度とないだろうと思えた。思い出は過ぎ去ったもの。たとえ過ぎ去っても価値あるもの。この思い出がある限り、同じものを求めてもとの場所へ戻る必要はない。

誰かと一緒にいて笑い合ったり、言葉を交わしたり出来ない退屈は、旅の楽しみがすぐに忘れさせた。

食べ物がなくなると村や町に寄ることにしていた。

人々の仕事を手伝い、代わりに食べ物をもたらうのだ。着る物をもらったり、冬の間の寝床を借りることもある。

働く代わりに物を得る経験もまた、生まれて初めて味わう幸福だった。僕はもう人から盗まなくても生きていける。自分の力で生きられる。そのことがたまらなく嬉しく、楽しかった。

夢中で旅を楽しんでいるうちに季節が幾度も巡った。

いつしか僕の体は大人へと変わっていた。目線の高さが周りの大人と同じになり、腕は細いながらも力がつき、出来る仕事の数も増えた。

仕事をもらえると嬉しくて、僕はいつも懸命に働く。体一つで食べ物を得られることが幸せなので、仕事に没頭してしまうのだ。そのため村や町で歓迎を受け、共同の食事場に迎え入れられることが多かった。

多くの村では、村長の家に村人たちが集まって食事をした。広い部屋に集まった人々が好きな場所に座り食べ物を口に運ぶ。年寄りも若いのも、男も女も一つの卓を囲み語らいながら楽しく食べる。よそ者の僕でさえ、食事場に迎え入れられた日から、その村の住人であるかのように食べ物を楽しめられるのだった。

僕は見知らぬ大勢の人と食事をすることに初めは戸惑ったが、すぐに馴染んだ。兄貴や仲間たちと過ごした日々に似ていたからだ。

一つだけ昔と違うのは、同じ部屋に女の人がいることだった。食事中、何度も女たちと目が合う。彼女たちは僕が気付かない間も、ずっとこちらを見ているらしい。今まで関わったことのない女というものの、その瞳に映る奇妙な光が、僕には不可解だった。

「ねえ」

毎晩、食事が済み皆が帰り始める頃、誰かしら女性が隣に来て声をかける。彼女たちは年上の未亡人だったり、若い未婚の娘だったりしたが、皆よく似た甘い果実のような匂いを漂わせていた。僕はその匂いが嫌いではなかった。

「あんたのことが好きなの。これから、家へ遊びに行ってもいい？」  
甘い匂いを発しながら彼女たちは僕の耳元で囁いた。

まだ何も知らなかった僕には初め、女たちが家へ来たがる理由が分からなかった。面倒には思ったが断る必要も感じなかったのも、彼女たちの好きなようにさせた。その後は流されるまま言うなりで、求められるものを与えた。

それは恐ろしい罪なのだと学ぶまでに時間はかからなかった。求められるものを与えることで、相手はさらに求めるようになる。体を、言葉を、時間を、心を、そして人生の全てを。

もし要求に応えきれなくなれば、そのうち手足を縛り付けてでも持つて行こうとする。最終的に力づくで関係を断ち切ることになり、相手に深い傷を負わせてしまう。

何度か同じ苦悩を味わった僕は恋に恐れを抱くようになった。

以来、女とは距離を置いた。女たちが近付いて来ると露骨に逃げようになった。なるべく視線も合わせたくないから、女を見ることさえやめた。女が多い村からは、逃げ出すように去っていた。僕のような態度は初心つひに見えたかもしれない。

ある年の秋遅く、小さな村の傍を通りがかった。ちょうど収穫が済み、皆が冬の支度に駆け回る頃だった。道の脇の、木々の隙間からそつと村を覗き見ると、大きな家の屋根の修繕に人々が苦心している様子が見えた。

僕は急ぎ村へ降りていって、「その仕事を手伝いましょう」と申し出た。代わりに食料を戴きたいと。

村人たちは僕の若さと陽に焼けた肌を気に入り、快く受け入れて

くれた。

この時も黙々と働き続けた僕は、間もなく村人たちの信頼を得て、一冬を過ごす家を借りられることになった。

僕に与えられた家は村長の屋敷の離れだった。普段は物置に使われている石造りの小屋だったが、寒風を遮る壁があるだけで僕には充分暖かだった。干草を積み上げて作られた寝台も、秋の陽だまりに似た薫りがして心地良い。

食事もまた村長の家で戴くことになった。この村では、村人が村長の家で食べる習慣がなかったので、女たちを避ける必要もなく安心出来た。

村長の家には、村長の奥さんと、一人の娘がいるだけだった。

僕より少し年下の娘はリディといった。恥ずかしげに微笑む、大人しい性格の子だった。柔らかくまとめられた赤毛が幼さを醸し出していた。他の女たちのように、余計な仕事を僕に求めてくることはなさそうだった。きっと純真な娘の頭に、そんな欲が浮かぶことはないのだろう。

僕はリディを女として警戒することなく近付いた。リディも会った時から僕に心を許していたようだった。

僕たちが、兄妹のように打ち解けるのに時間はかからなかった。

冬の間、僕たちは干草の寝台に腰掛けて語らった。僕のほうからは、話したいことが次々と湧き出て止まらなかった。仲間と過ごした幼い日のこと、兄貴のこと、旅で見た景色……。彼女はたまに頷いたり、自分の感想を挟みながら耳を傾けてくれた。

話しながら、僕はそんな彼女を見つめるのが楽しいと感じていた。扉から差し込む夕陽で赤く染められた彼女の頬が、笑顔で輝くのを見た時、ああ僕はこの子が好きで話しているのだと気付いた。

唇に触れてしまったのは春の訪れが近付いた頃だった。ぎこちなく、触れ合うだけの刹那だったが、それは僕たちを変えてしまった。

少女は見開いた瞳で僕を見た。瞳に驚きと恐れが浮かんでいた。

彼女は、今まで兄のように見ていた相手が別の者だと気付いたのだ  
った。

同時に、僕も僕自身の間違いに気付いた。

求められなければ安心なのではない。

本当に恐ろしいのは、自分が求めてしまうことだ。

強烈な熱が内側から噴出していた。目の前の少女を自分の物としたい。それから永久に自分のもとへ縛り付けておきたい、という欲。今まで他の人々が僕に対して求めて来たその欲を、今度は自分がこの愛しい人にぶつけてしまいそうになっている。守りたい、可愛がりたいという願いが、残酷な欲望へ変わってしまう。もしこの欲に手を出してしまったら、僕自身も欲に絡めとられて二度と逃げられなくなるだろう……

「出て行きなよ」

僕は腕で自分の震える体を抱えてリディへ告げた。熱が胸を焼き  
呻き声を上げそうになるのを、必死で抑えながら。

「君がここに居たら、君に酷いことをしてしまう。もう二度と一人  
でここへ来てはいけない」

言つと彼女は栗色の大きな瞳から涙を零したのだ。

「何故？ それを酷いことなんて思わない。あなたが望むなら、私  
は」

驚いて彼女を見返した。迂闊だった僕はその時、彼女の本心を初  
めて知った。

「いいか、そんなことは僕へ二度と言うな。本当に自分を幸せにし  
てくれる男だけに言え」

「あなただから言うの。私はあなたとずっと一緒にいたい」

「出来ない。僕のことは忘れてくれ」

彼女の背中を押して追い出したその夜、僕は母屋に呼ばれた。村  
長は僕を目の前に座らせ、重い口を開いた。彼はにこやかに話し始  
めた。

「君は良い若者だ。私たち村の者は皆、君のことを気に入っている」

「ありがとうございます」

頭を下げた僕に最も恐れていた言葉が告げられた。

「カカよ。リディ　うちの娘をもらってくれないか。あれは君のことが、好きで仕方ないのだ。君さえ良ければ、リディと結婚して、ずっとここに住みなさい」

うな垂れて僕は断りの言葉を告げるしかなかった。

リディでは不満かと聞かれ、違うと答えると他の理由を問われたが、答えることは出来なかった。旅を続けたいと、間抜けに繰り返した。

ただ僕は自分の中のリディへの愛が恐ろしかったのだ。愛に縛られて自由を失うことが恐ろしくてたまらない。

翌朝早く、誰にも別れを告げず旅立った。

足を鈍らせるリディの思い出が怖くて、凍る道を強く踏みしめて前へ前へ歩いた。

## 第二話（終）

それから幾つの夜、幾つの朝を過ごしたろう。気付けば僕は地の果てに辿り着いていた。

風に苦味が感じられた。汗を乾かさないう、肌にとわりつく暖かい風だった。それが海から吹いて来る風だと知ったのは、不意に陸が途切れて水の世界が目の前に開けた時だった。

両手いっぱい視界に溢れる、青、青、青。

水の青、空の青。そして青の上で弾け散る、光。

青と光が揺れながら混ざり合い、見渡す限りの世界に広がる。

これが、海。

生まれて初めて見る海は何故だろう、恐ろしく懐かしかった。逃げたい、けれど何時までも眺めていたい。風とともに低い音を立てこちらに押し寄せる青に呑み込まれる錯覚を覚え、眩暈がした。

思えばかつて見た黄金の穂の波は、確かに海の景色に似ていたのだった。話に聞いていただけの海が、何故これほどまで正しい景色で胸に焼き付けられていたのか。人の魂には生まれながらにして、海の記憶が刻まれているのだろうか？

港町の石畳は海の匂いがする。

道のあちこちに水溜りがあり、石は水気を吸って黒ずんでいた。

僕は何度も水溜りに足を踏み入れながら、飽きることなく町中を歩き回った。大通りには船乗りたちの勇ましい声が響き、路地裏からは男や女の囁き声が聞こえて来た。これまで歩いたどの町や村とも違う、活気に満ちた空気が楽しくて心が浮き立った。

港にはちょうど船が着いたところだった。

美しく巨大な白い帆を持つ船だった。外国へ行って色々な物を買って来ては、国で売りさばいている商人の船らしい。近ごろ大儲け

している有名な船だとかで、港は船を一目見ようとする見物人でごった返していた。

荷を降ろしている船乗りたちは皆、遅しい体つきをしていた。荷を持つたび腕の筋肉が隆々と盛り上がる。

僕は自分の腕を見た。自分も仕事をして少しは筋肉がついたと思っていたけれど、あの船乗りたちと比べれば女みtainな細腕だ。遠く眺める船乗りたちが英雄のように見えて眩しかった。

その夜は僕も船乗りの真似をしたい気分で、滅多に行かない酒場に寄った。

薄暗い店の奥からは下卑た男たちの笑い声が聞こえた。きつとあの船に乗っていた船乗りたちだろう。普段は恐ろく感じる種類の人々だが、今日は憧れを持って眺めることが出来る。彼らの粗野な会話や振る舞いも、僕の目には格好良く映った。だがやはり近寄り難く、少し離れたところで酒を飲むことにした。

どこに座ろうかと店内を見回している時、ふと目の合う人がいた。その男は入り口近くに一人ぼつんと座っていた。

年は四十くらい。遅しいが締まった体格で、それほど背は高くない。着ている物から見て船乗りのようだが、他の船乗りたちと比べれば小柄なほうとも言えるだろうか。

彼は何か気になることでもあるのか、少し目を細めながら僕を見ている。

あまりにも長く見つめているので、僕も不思議に思い見返した。

その時、彼の瞳が吸い込まれるような緑であることに気づき、思い出した。

兄、貴。

見間違っことなどない。その男は兄貴だった。懐かしい人。

「……カカ……？」

ようやく兄貴も自分の既視感の謎が解けたようで、目を大きく見開いて呟いた。

「兄貴ですね」

僕が呼び返すと、彼の顔にはあつと明るい笑みが広がった。彼は立ち上がってこちらへ駆けて来て、僕の肩を何度も強く叩いた。

「カカ！ お前、本当にカカなのか！」

「そうです、カカです。お久しぶり、兄貴」

「ああ、ああ。まったく久しい。まさかこんなところで会えるなんて思わなかった。懐かしいなあ」

僕たちは抱き合つて再会を喜んだ。あのまま永久に会えないと思つていたのに、奇跡の偶然が導いてくれたこの機会に感謝した。

兄貴と僕は再会を祝い、酒を酌み交わし合った。

話は尽きなかった。あれからどうしていたのか。今、楽しく健康で暮らしているのか。嫁さんと子供はいるのか。

残念ながら僕も兄貴も妻はなく、子もいなかった。僕は旅の人生が楽しくてたまらないのだと話し、当分は妻を持たないつもりだと言った。

兄貴は今、大きな船の船長をしているのだという。あの時の仲間とともに最初は小さな船を持ち、たくさんの外国を回って稼いだ。おかげで今では船員の数も増え、大きな船を持つことが出来た。

すると今日僕が港で見かけたあの巨大な帆船は兄貴の船だったのだ。

英雄のように遠く憧れて見ていたあの船員たちは、かつての僕の仲間か。

自分のかつての仲間たちが活躍して名を轟かせている。痺れるくらいに驚きだったし、嬉しくて涙が出た。もう彼らは後方に居残る、僕の思い出の中の少年たちではない。成長して遠くへ飛び立った人々なのだ。

「あのまま町に留まっていたら、俺たちは腐っていた」

と兄貴は遠い目をして呟いた。その後、僕へ向けた目は赤く潤んでいたが真剣だった。

「カカ。今の俺たちがあるのは、お前のおかげだよ」

僕は驚いて否定した。

「僕の？ まさか。僕は何もしていない、ただ町から逃げ出しただけだ」

「いや。その旅立ちが俺たちを町から連れ出してくれたんだ。お前が出て行った後、俺たちは皆で考えたのさ。このまま町にいいののかと。そしてお前の後を追って俺たちは町を出ることになった」

「そう、でしたか」

「お前が俺たちを導いてくれたんだよ」

けれど僕は独りで無為な旅を続け、兄貴は仲間とともに上昇している。そう考えると自分の人生がいかに虚しいものかと気付かされる。最初の一步を踏み出したのが僕だとしても、僕は進歩せざりたい仕事も成し得ない。皮肉なものだと内心、自分を嘲笑った。

兄貴はそんな僕の暗い心に気付かず呟いた。

「俺はよく夢を見るんだ。俺たちを導いてくれる者がこの船にいてくれたらなあ、と。今日その夢が叶うかもしれない」

思わず見返すと、彼は一気に杯を飲み干してから僕を見つめ、言った。

「カカ。俺たちの船に乗る気はないか？」

「船に……？」

「そうだ。また昔のように、俺たちと一緒に仕事をしないか。お前がいたら勝ったも同然、全てうまくいく気がするんだ」

鼓動が激しく鳴り出した。

仲間と一緒に仕事を。また昔のように兄貴と相棒として過ごす。そんな未来の想像は夢のように楽しかった。けれど自分の現実を見据えると、とうてい叶わぬ夢に思えた。

「でも……僕は何も出来ない。荷を持ち上げる力もないし、船のこととは何も知らない」

遠慮がちに断ったのだが、兄貴は瞳を輝かせて僕を見つめるばかりだった。

「荷など持つ必要はない。船のことも後から学んで知ればいい。お前はただ、居てくれるだけでいいんだ。そして俺たちの方向を示し

てくれるだけで」

兄貴が何を言っているのか分からなかった。ただ居るだけで役に立つなどと、そんな馬鹿げた道理があるだろうか。船旅の幸運をもたらす女神の像ではあるまいに。役立たずのまま船という箱に閉じ込められるのは、僕自身が辛い。

僕の不安を察したのか、兄貴は宥めるなだ口調になった。

「なあ、お前は自分のことを分かっていない」

そう言ってから彼は酒で満たされたままの僕の杯を手に取り、揺れる液体の表面を見つめて続けた。

「力力……お前は俺たちという船にとつて、水のようなものなんだ。水は船を浮かべ、先へ先へ運ぶ。水さえあれば船は動ける。しかし、水がなければ、船は僅かも先へ進めない」

その時。

遠く、どこか遙かに高い場所から降りてきた恐怖のひと雫くずしが、僕の心の底に落ちた。

雫の起こした波紋は心に広がり、静かに全身へ及び、肌の外まで溢れた。冷たい汗が背筋を伝っていく。

兄貴の声が耳元で聞こえた。

「お前という水が必要なんだ、これから俺たちがさらに先へ進むために。頼む。どうか俺と一緒に生きてくれないか？」

そして手が伸ばされた。

昔、“相棒”と呼んで差し出してくれた、あの暖かく強い手が。

僕はもう一度、その手を握り締めたと思った。また、皆とともに生きたい。この人と一緒に行きたい！

高まる衝動は心臓をはち切れんばかりに打ち鳴らしていた。けれどその時、すでに、恐怖は僕の全身を満たしていたのだ。この手を握り締めたという衝動と、握り締めてはいけないという恐怖で、体が二つに引き裂かれそうだった。

気付くと兄貴が不思議そうに僕を見上げていた。

僕は恐怖のあまり無意識に立ち上がっていたのだった。震える歯

の根を噛み締めて告げた。

「申し訳ないけれど、お断りします」

その瞬間の兄貴の顔を忘れることが出来ない。

彼は崩れ落ちる表情を見せた。全ての希望が崩壊して流れ去ったかのような力ない顔だった。少し前まで輝いていた瞳から一気に光が消えうせた。

「何故？」

確認するだけの静かな問いが掛けられた。僕は涙を飲んで答えた。「怖いんです……自由を失うのが、怖くてたまらない。自分は孤独に慣れ過ぎた。今さら、あなたや仲間にも束縛されて生きていくことは難しい。きつと一緒に生きてても、またすぐに逃げ出したくなるでしょう」

「そうか。分かった」

兄貴はそう言って、笑った。

柔らかな笑顔だった。しかし、瞳は泣いていた。流れ落ちない涙が、緑の底に凍える孤独となって再び居座った。

泣いた笑顔のまま彼は言った。

「今日はありがとう。カカと会えて嬉しかった。いつかまたどこかで会おう」

その言葉を聞いて激しい後悔が僕を襲った。僕たちが二度とこのような奇跡に巡り会うことはない。僕がこの人に会うことは、二度とない。これは、今生の別れ。

その場に平伏して詫び、撤回したかった。けれど遅かった。兄貴の心と僕たちの未来は閉ざされてしまった。

泣き叫ぶ寸前で僕は兄貴に頭を下げ、逃げるように店を飛び出した。

翌日、兄貴を乗せた船は港を出て行った。

僕は海の見える崖の上から、船影が水平線に消えるまで眺めてい

た。

知らずに頬を濡らしていたのは後悔の涙だった。

仲間たちと一緒に行きかけた。兄貴と生きたかった。あの時、どうして僕は彼の手を握ることが出来なかったのだろうか。何をあれほどまでに恐れたのだろうか。

自分の臆病を責めたが全ては取り戻すことの出来ない過去だった。

その後の人生を、僕は兄貴と別れたことを悔いて過ごした。

日ごと旅の楽しみは色褪せた。孤独はただ寂しく味気ないばかりで、もはや神の世界も垣間見せてはくれなかった。

生涯、妻もなく子もなく友達もなく、定まった仕事さえなく、放浪し続けた。

年を取り体の自由が利かなくなると、外国の城で警備兵として暮らした。そうして冬のある日、老衰で死んだ。誰にも惜しまれることのない死だった。遺骸は引き取り手がなかったので、塵のように城の裏の草原へ放られた。

警備兵として過ごした城から、海が見えたのを覚えている。海が見えるからこそ最後の場所を選んだのだとも言える。冬枯れの大地の向こうに薄っすらと垣間見える輝く青を、僕は死ぬまでの毎日、切ない想いで見つめ続けた。

けれど水平線の向こうから待ちわびた船影が近付いて来ることはなく、仲間たちの噂もあれきり耳にすることはなかった。

僕は最後まで人生を悔いていたように思う。

自分はこの人生で二度も兄貴を捨てた。

一度目は自由と成長のために。

それは確かに正しい選択だった。僕は独りで旅をしたことで楽しみを得て、大人に成長した。あのまま町に閉じ込められていたら、

僕の心は死に、魂そのものが腐っていただろう。

けれど二度目の逃亡は無意味だった。

あの時、僕は彼の手を握るべきだったのだ。全てはあの瞬間のために仕組まれた人生だった。けれど、僕には決定的な機会をつかむことが出来なかった。ひとえに僕が臆病で、恐怖を乗り越える勇気を持ってなかったせいだ。

自由を選ぶ、束縛が嫌だと言いつけていたが、他の恐怖から逃げていただけだった。本当の恐怖が、束縛以外にあることを気付けなかった。

僕が自分の恐怖の意味を悟るのは、遥かに遠い未来のことになる。

### 第三話 「流転の果てに」(前書き)

第三話あらすじ： 記憶を遡る旅は続く。

細切れの人生の記憶が幾度も繰り返された。

数千年の長きにわたって孤独の旅を続けていたことを知る。

### 第三話 「流転の果てに」

遷ろう意識の底に青を感じた。

幼い頃からそう、僕は青を感じていた。瞼を閉じるといつも青い景色が見えた。

青に浸された世界の底に、樹氷のごとく白が連なる。

一切の音はなく、動く物もない。上も下も横も、青。青の底で白は永遠の眠りにつく。

不思議と心が落ち着く光景だった。暖かく、柔らかな青に浸されて、僕も永遠の眠りに誘われる。僕の肌にはすでに青が沁み込み、魂の奥深くまで浸透している。このまま本当に青の中で眠りについてしまいたい、と思う。

けれど眠りかけると恐怖に襲われる。

そして恐怖が音を蘇らせる。

恐怖で震えて動き出した青は、音に変わるのだ。一定の間隔を保って弾ける水音に。

水。

そうだ。

あの時、あの人は何故、僕のことを「水」と呼んだのだろう。もし僕に向かい直接にその言葉が発せられなければ、恐怖に捕まることはなく、あの人から逃げもしなかつただろうに。

……遠く、水音が跳ねる。

再び闇の向こうで記憶の光が閃いた。

僕はまだ転生の記憶を辿る旅を続けていたのだった。

星の光は僕を呪縛し続け、緩やかに遡る時の流れに乗せて僕自身

の軌跡を見せた。

たくさんの、細切れの人生の記憶を見た。

その全ての人生で僕は孤独だった。家族もなく、友達もなく、愛も得られないまま一人きりで死んでいった。

多くの場合、貧しい家に生まれ、親に捨てられて孤児として生きた。

飢えや病気は幼い僕を容赦なく襲った。そのため僕は大人に成長する前に死ぬことがほとんどだった。

誰かに拾われて大人に成長したとしても、教養のない僕にはろくな仕事が出来なかった。そのうえ体が弱く、激しい労働に耐えるだけの力も持たなかったので、必ず二十五歳になる前に死んだ。

そうして短く孤独な人生が、幾度も幾度も繰り返された。

数千年の長きにわたって僕は、孤独の旅を続けたのだった。

自分自身で選んだ孤独だったようにも思う。

何かとても重い罪を背負い足を引きずりながら、孤独の道のりを歩き続けていた。巡礼者のように遙か遠い地の果てに辿り着いたなら、罪が赦されると信じていたのだろうか。

僕は誤っていた。赦しはそこまで来ていた。あの時、僕自身が手を伸ばしさえすれば約束の時は訪れたのだ。

あの暖かい手をつかみさえすれば。

彼は長い長い時を越えてようやく巡り会えた相手だった。完璧に用意された人生、いとも簡単に結びつくことが出来たはずの出会いで、僕はこの数千年の孤独を脱する機会を与えられた。

しかし、僕は逃げた。兄貴の手を握ることが出来なかった。

ただ「水」という言葉に含まれる恐怖に打ち勝つことが出来ず、数千年越しの機会を逸してしまった。

折り重なる過去の僕の死体が、暗い青の底からじつと未来を見つめて来る。

あの数多の瞳は、次の機会はいつだろうかと待っている。

僕はその瞳に答えるために記憶を遡る旅を続けなければならない。  
恐怖の源、僕自身の罪を知るための旅を。

### 第三話（2）

細切れの記憶の中には、女として受けた生も幾つかあった。だがたいてい一月も生き延びることが出来ずに死んでしまった。女は役立たずとされていた当時、女の孤児を拾って育てる人が少なかったからだ。女に生まれて親に捨てられたなら、放り出された時の形のまま、飢えて干からびていくしかなかった。

一度だけ女に生まれて大人になるまで生きることがある。捨てられた赤子のうち、幸運にも神への捧げ物として国に選ばれ、生かされたのだった。

生き延びはしたけれど、人生は得られなかった。「捧げ物」は生涯を神殿で過ごさなければならなかったのだ。物心ついた時から目にする事が出来たのは、神殿の白い壁と中庭の緑、壁で四角く切り取られた空の青のみ。

複雑な言葉を覚えることさえ許されなかった。「捧げ物」を世話する多くの女官に囲まれていたが、話を交わすことは禁じられていた。女官たちの仕事は、「捧げ物」を生かし美しく磨き上げることだけだった。

幼い頃より、朝から晩まで、徹底して体を磨かれる日々を過ごした。

やがて見る者の多くを魅了する美しい娘に成長した。その頃から、高貴な人々の訪問を受けるようになった。

彼らは儀式として「捧げ物」に触れた。貴族は神に近いため捧げ物に触れる権利がある。触れることでさらに神に近い力を得ることが出来るのだと言う。昔から当然に行なわれていた貴族の慣わしだったらしい。おそらく低俗な娼婦では不足を覚える貴族たちが考えた遊戯だろう。

自分がそのために拾われ作り上げられたことを、当時は知らなかった。

罪を罪とも知らぬ少女は、神官に命じられるまま貴族たちの相手をした。それが神へ仕える自分の当然の務めと心から信じて。

女で生まれ、物として生きるとはそれほど辛くはなかった。

自分が人であると知らずに過ごせたならば。

だがひとたび人であることを知り、魂が目覚めたなら、心から噴き出し流れる血は止まらなくなる。

目覚めは不意に訪れた。

ある日、務めを終えて建物から出た時、中庭の隅に一人の青年が佇んでいるのを見つけた。

兵士の姿をした彼はじっとこちらを見ていた。初め驚きで見開かれていた瞳は、しばらくして憂いに満たされた。

青年は貴族の付き添いで来た兵だった。それからも何度か青年の主人は神殿を訪れたので、彼と中庭で顔を合わせるようになった。

青年と言葉を交わしたことはなかった。彼は遠く離れた木の陰に立ち、近付いて来なかったからだ。

先に近付いたのはこちらからだと思ったと思う。それまでに見たことのない表情で自分を見つめる人が不思議でたまらず、興味を覚えたのだった。

しまいには木を挟んで向かい合う所まで近付いた。

神官や貴族以外が「捧げ者」に近付くことは罪で、触れたり言葉を交わしたりすれば処刑される。青年はそのことを知っていたせいか蒼褪めていた。しかし、逃げ出すことはせず、相変わらず憂いを帯びた瞳で見つめるのだった。

見つめ合うだけで何日が過ぎたろう。

突然、青年の手が頬に触れた。

暖かい手だった。頬を包み込む大きな手の平から伝わる温もりが肌に沁みた。

青年の手は頬から動くことがなかった。乱暴に踏みにじられることに慣れていた体に、それはあまりにも優しい手だった。

経験したことの無い出来事に驚いて、青年の瞳を見た。底まで澄んだ緑の瞳は、愛を湛えて見つめ返して来る。

青年の唇が動いた。

「君をここから、救い出したい」

難しい言葉は知らなかったが、青年の簡素な言葉は理解出来た。

「今のままでは君は水に沈められるだけの運命だ。逃げよう。遠くへ。新しい世界へ。そこで僕と一緒に生きよう。……僕は君を救い出すことが出来れば幸せだ。頼む、ついて来てくれないか？」

力強い手が自分の細い腕を握り締めた。

瞬間、訪れたのは爆発的な恐怖だった。握られた腕の熱さで混乱し、わけが分からなくなり、ただただ恐ろしくて腕を振りほどいて後退った。

手を振りほどかれたことに青年は衝撃を受け、それから怯える女の顔を見て、自分の命懸けの申し出が拒絶されたことを悟った。

落胆が青年の瞳から光を奪った。

崩折れた表情で彼はふつと息を吐き、微かに口元だけほころばせて視線を向けた。その瞳は涙を流さずに泣いていた。

何も言わずに背中を向けた青年は壁を乗り越えて出て行った。そしてそれきり、二度と神殿には姿を現さなかった。

青年が去って間もなく後、壁に細い隙間があることに気付いた。

壁に額を当てて隙間を覗くと、一面、緑の丘が見えた。なだらかな線を描き重なり合う丘。遠く、空と緑が交わる先に、青年の背中が消えたはずだった。

毎日、毎日、隙間から丘を眺め続けた。あの丘の向こうから、再び青年が訪れることを願って。

けれど青年の姿は見え、時だけが虚しく過ぎた。

いつしか自分は二十五歳になっていた。人間界での役目を負え、いよいよ神のもとへ旅立たなければならぬとされる年齢だった。

抗う言葉も知らない生贄は運命に従った。

神殿の前に泉があり、生贄は泉に沈められる。自らの足で泉へ歩いて行かなければならなかったが、不思議と怖くはなかった。

安らかな気持ちで泉に浸かった。これが自分の運命だと最初から分かっていたからだ。ただ水に全身を預けた時、青年の手の温もりを思い出した。自分はある青年について行くべきだったのだと悟って、少し涙を流した。

泉の底には朽ちた古代の神殿が沈んでいた。

青に浸る世界の中、水面から降り注ぐ陽に照らされて、柱に残る神々の彫像が白く輝いていた。

神々は冷たい微笑みで生贄を迎え入れた。

沈み行く水の底から、囁きが聞こえた。

“おかえり”

…… “おかえり、元の場所へ”

### 第三話（3）

生贖として死んだ人生は幾度かある。

民の怒りを鎮めるために犠牲となったこともあった。

一つの儂い人生を思い出す。

生まれたのは海沿いの小さな国だ。片方を海、片方を山に囲まれた国で、狭い地域に人々が密集して暮らしていた。国制は王制だったが文化教養は高く、国民は緩やかな法律のもと、自由で贅沢な暮らしを享受していた。

その国でも僕は最下層の貧しい家に生まれた。

幸いにも孤児とはならず十五歳まで両親に育てられた。だが両親からの愛が感じられたことは一度もなかった。親のどちらにも似ていなかった僕は不吉な子として嫌われていたようだった。兄弟はたくさんいたが、彼らも僕を嫌っていた。苛めを逃れるため、よく家を抜け出して浜辺で海を眺めて過ごした。

今の僕は遠く離れた意識から当時の自分を眺めることが出来る。

孤独の陰を<sup>かげ</sup>負い、白浜に立つ少年の肩は華奢で危うかった。薄い衣から伸びる手足もすんなりと細い。艶のある黒々とした髪が、紺碧の海によく映えている。その海に似た深い青の瞳は、濡れているように輝いていた。

他者として眺めれば美しい少年だ。容姿において神からの恵みを受けたと言えるだろう。けれど僕はその恵みに恐怖を覚える。姿形の美しさはまともに生きるためには必要のないもの、むしろ障害となることがある。

十代の始め頃から僕の評判は街に広まり始めた。街を歩けば大勢の人の目が集まった。路地では男からも女からも好意的な声をかけられたり、金品を与えられたりした。

街で目立つ少年の噂はたちまち国王の耳にも届いた。そして国王は臆面もなく少年の美を求めた。

ある日、皮袋に一杯詰まった金を持った使者が僕の家を訪れた。両親は迷わず金を受け取り僕を使者へ引き渡した。息子を奪われて悲しむどころか、疎んじていた子供が大金に代わったので彼らは涙を流して喜んだ。

そうして僕は巨大な鷲に捕まり連れ去られるように、国王のもとへ飛び去ったのだった。

宮殿での生活に苦はなかった。

丸顔の国王は温和な人で、いつも優しい笑みを浮かべていた。僕のご馳走を与えてくれた。代わりに僕が王へ捧げた務めに関しては記憶がないけれど、それほど苛酷な要求はされなかったはずだ。

世間に対する名目上、僕は国王の相談役ということで彼の近くに置かれることになっていた。

けれど十五歳の少年に国家の政策や戦争の理屈が分かるはずがなかった。

そこで僕には星占いの盤が与えられた。占いの勉強は形だけではないと言われたのだが、退屈な人生でようやく与えられた課題に夢中になり、占いに関しては相当の深い知識を得ることが出来た。さらに王には内緒で大臣たちのもとへ通い、政治や戦争、外交のことも少しは学んだ。

数年を経て僕は一人前の占い師へ成長した。

現実的な政治の知識もある僕の読みは的確で、未来予測は次々と当たった。

奇跡のように予測が当たると驚いた王は、やがて僕を本物の“相談役”として頼りにするようになった。国の重大な決め事をする際には、必ず僕へ相談しなければ安心出来ないという様子。

そのような王の態度が周囲の不審を招くのに時間はかからなかった。

始め、噂は王に仕える女性たちの間から起こったのだと思う。

“王は美少年を飼い、情欲にふけっている”

“王が情欲に溺れた結果、国事がおろそかにされている”

“あの少年は悪魔の化身に違いない”

“このままでは悪魔に国が乗っ取られてしまう”

女性特有の嫉妬だろうか。彼女たちの立場を脅かす者として僕は疎まれていたようだ。廊下ですれ違うたびに投げられる嫌味は強烈な毒を含んでおり、男の僕にはとうてい太刀打ち出来なかった。若い僕は彼女たちの苛めにずいぶん怯えたものだ。

その苛めがついに現実の障害として現れたのだった。

王は「女たちの噂だから気にしなくていい」と笑い飛ばしたが、しばらくして男の家臣たちも同じ噂を囁くようになった。

またたくうちに噂は国民にも伝わった。枯れた草原を走る火の手のように、気付いた時には噂は国中にあまねく広まっていたのだ。全ての悪事が僕のせいにされた。

雨が降らないのは僕のせい。雨が降り続けるのも僕のせい。隣国との仲が険悪なものも僕のせい。国が傾きかけているのは僕という悪魔の仕業。……

実際には国は傾くどころか、的確な政策によって前より安定していたのだが。人々は冷静さを忘れ真実を見る目を失ってしまった。民の怒りは次第に盛り上がりを増した。やがて、「悪魔を殺せ」と叫んで宮殿の周囲を歩く集団が毎日見られるようになった。

不運にもその頃、大きな災いが国を襲った。

国の背後に聳える山が噴火したのだ。

地は低く唸り、山は業火を噴き上げ、血のように赤い溶岩が流れた。空はどす黒い雲で覆われ、太陽さえ姿を消した。地獄が顕現した景色の中で国民は恐怖に狂い暴走した。

国中の人々が宮殿に殺到して叫んだ。

「この災いこそ悪魔のせいだ！」

「王が悪魔を飼うから天罰が降ったのだ！」

「王は今すぐ悪魔を差し出せ！」

「悪魔を磔はりつけにしろ！」

「悪魔を殺せ！」

殺せ、殺せ、殺せ……。

大合唱の響く宮殿で王は青くなり、震え上がっていた。

このままでは自分が国民に殺される。彼の頭はその恐怖で占められていた。涙を浮かべて僕へ向ける瞳も、もはや自分に災いをもたらしたやつかい物としてしか見ていなかった。

王は僕に「死んでくれ」と言った。

謝罪の言葉はなかった。抵抗する間もなかった。僕は王自身の手で、国民へ差し出された。

怒り狂った人々が見張る広場で、王は兵に命令し処刑用の柱に僕を磔にした。

人々は僕が磔となった姿を見るだけで納得し、石も投げず罵声も浴びせずに立ち去り始めた。時が迫っていたからだろう。既に国を焼きながら埋め尽くす火の粉が降り始めていた。

国王も家臣たちを連れて素早く逃げ去った。

宮殿はもぬけの殻となった。街からも人々の気配が消えた。

国に一人残された僕は、磔にされた柱から山をぼんやり眺めていた。

赤く燃える山は恐ろしく美しかった。

山から噴き出す火は神の怒り。流れ出る溶岩は神の流す血なのだ。神の怒りを自

贗沢に溺れ傲慢となった人々は神を踏みにじった。神の怒りを自

分は人々の代わりに受けたのだ、と悟った。

何も知らず、自らの不満や恨みを生贄へぶつけて解消し、人生から逃げ惑っている魂は愚かだ。真実を見る目を失った魂たちを憐れに想い、僕は死ぬ前に少し泣いた。

この人生に愛はなかった。愛することを知らず、愛されることさえ一度もなく、ただ僕は人々の憎しみを背負う者として死んだ。

愛があるかないかで人生は大きく変わる。状況が似ていても愛があれば違う結果となっただろう。王は始め僕に優しくしてくれたが、それは愛ではなかった。体や心という代償を欲しての優しさは愛ではない。きっと王には僕を魂から求めることが出来なかったのだ。何故なら、この時の王と僕とは関わりの浅い魂だったのだから。

この人生にあなたはいなかった。  
人と状況は少しずつ入れ替わる。

時を経て、状況と人が距離を縮めていく。僅かに装いを変えた過去の状況が、未来の僕たちを追いかけて来る。

### 第三話（4）

憎しみを負って死ぬ人生は繰り返された。

僕はそれらの人生に愛しさを覚える。

僕の魂は嫌われることに慣れている。長く続いた疎外が、孤独へ親しみを抱かせる。

ある、おぼろげな人生の景色が見えた。

いつの時代のどこの国だろう。西か東かさえ分からない。赤茶けた、岩肌がむき出しの山々が連なっていた。その山の一つの頂に過去の僕が立っている。

女だった。

浅黒い肌の少女だ。決して醜くはないが、磨かれたことのない容貌はくすんで見えた。瞳だけは意志の輝きを宿し黒く濡れている。体には擦り切れて汚れた布をまとって、獣と見分けがつかない。ただ丁寧に編まれた長い黒髪が、かつて人間世界で生きていた経緯を表していた。

彼女の足元は一面の緑だった。山の麓には鬱蒼とした森が広がるばかりだ。原始的な時代のような。辺りに高度な文明らしきものは見当たらない。

見上げれば、遙か高みまで澄んだ青空があつた。空の中央で、巨大な翼を広げた鳥たちが輪を描き飛び交っていた。手を上げて呼ぶと、気高い鳥たちは従順に降下し、周囲に留まり幸福そうに羽を休めた。

鳥たちはこちらの心を理解し、言う事を何でも聞いた。どうやら過去の僕は鳥たちに好かれているようだった。

人間は彼女を嫌った。彼女は人間の世界から追い出された。食べる物がなく、飢えて死にかけていた時、救ってくれたのが鳥たちだ。

だから鳥たちは親であり兄弟であり、唯一の友達だった。

人々が過去の僕を嫌った理由は何だったか。

そう。思い出した。

耳が聞こえないからだだった。

森と森の間に小さな貧しい村があった。その村に、当時の僕は女としての生を受けた。

生まれつき耳が聞こえず、喋ることも出来なかった。それでも両親がいれば幸せに生きることが出来たのだと思う。けれど不運なことに、父と母は病で死んでしまった。

村人たちは口のきけない女の子を引き取ろうとはしなかった。お荷物となった子供を彼らは殺すことこそしなかったが、村の隅に捨て置き、家畜と同様に扱った。

酷い暮らしを強いられた。

動物と同じ食べ物を与えられ、寝床は外の冷たい土の上。殴られたり蹴られたりで痣あざの絶える日はなかった。

森で生きるようになったのは村人たちに追い出されたからか。

それとも自分の足で逃げ込んだのだったか。

はつきりとは覚えていないが、逃げなければいけないと早くから感じていた。

逃げることは正しい選択だった。森に逃れ、鳥たちに助けられ、初めて命を得ることが出来たのだから。

鳥に育てられた女の子はやがて、細いながらも強い体と意志を持つ少女に成長した。

そして不思議なことに、いつの間にか人智を超えた力を身に付けていた。

鳥を呼び、操ることが出来た。声も出さずに動物たちと心を通わ

せることが出来た。人が落ちれば死ぬような高い山の頂から、ふわりと飛び降りることさえ平気だった。

まるで神仙のようだ。

人の世界から離れ、魂を鍛え上げたなら、彼女のような神仙の力を身に付けることが出来るのか？

今の僕にはとうてい信じることが出来ない記憶だった。

理解出来ないと思った瞬間、僕の意識は過去から分断された。僕は、“過去の自分”であるはずの彼女に同化することが出来なくなった。それから先は、少し離れた意識から、過去を眺めることになる。

少女はさらに心を鍛え上げ高度な次元に昇りつめようとしていた。どうやら村人たちへの復讐を考えているようだった。

復讐……？ いや、そうではない、もっと深い愛から発した計画だ。

弱い者を差別し、殺すよりも残酷な行為で苦しめる、愚かな魂たち。彼らは愚かな故に、神を踏みじめる罪さえ平気で犯すのだった。

愚かであることは憐れだ。

愚かさに無自覚であることは憐れだ。

このままでは彼らは永遠に、お互いを貪り合う地獄に暮らし続けることになるだろう。

あの憐れな魂たちに真実を知らせたいと彼女は強く願っていた。

そのために彼女は何か恐ろしいことを計画していた。復讐よりも厳しい教えを降そうと。

少女は十五歳くらいになっていただろうか。

時が満ちたと感じたある日、彼女は森を出て村へ帰った。

成長した姿で戻って来た少女に村人たちは驚愕し怯えた。彼女は

とうに死んだものと思っただからだ。

静かに立つ彼女へ、村人たちが恐る恐る近付いて、周囲をぐるり取り巻く。

話しかける者は誰一人いなかった。もともと人と話すことが出来ない少女だ。少女も、声を出さず何の仕草さえ見せず、無表情で立ち尽くしている。

どれくらい無言の時間が過ぎたろう。

不意に、村人の一人がひっと声を上げた。

少女の体が微かに赤く発光していることに気付いたのだ。

見る見るうちに、赤い光は強くなった。肩から、腕から、胸から、瞳から、赤い輝きは鮮烈に放たれた。人の目が見つめるには耐え難い強い光となったが、誰一人として目を逸らすことが出来なかった。皆、体が硬直して動かないのだった。

赤い光に包まれた少女の口元に微笑みが浮かんだ。

村人たちの顔に戦慄が走る。

恐怖のあまり叫び声を上げようとした者たちがいた。しかし、その声さえ音にはならず熱風に掻き消された。

“目を逸らしてはいけない”

言葉ではない少女の声が、人々の心へ直接に届いた。

“よく見よ。この痛みを受け止めよ。これがお前たちの為した罪そのものだ”

焦げた臭いが辺りに漂う。

ぶすぶすと音を立て、少女の足元の草が焦げている。

再び、僕は少女に同化して体を感じた。

熱い。ひどく熱い。

体の内側が熱かった。火だ。炎が体に付いている。

火はどこから来たのだろうか。誰かが付けたのか。油をかぶって自分で火を付けたか。

違う……、信じられない、信じたくはないが、自身の体から火が生まれたのだった。体を作る一つ一つの組織が自ら熱を発し、熱が

集まり高まった。臨界点に達した熱は炎として生まれ変わった。

そして、そして、……ああ！

気が狂いそうな苦痛が全身を包む。

肩から発した炎は胸に、腕に、顔に移り、あっという間に肌や髪を焼いていく。

苦痛で今の僕は呻き声をあげた。意識は暗闇を転げ落ち眩暈を覚えた。

しかし、少女は叫び声一つあげない。

地獄の苛みさいなの中で冴えた意識を保ち、恍惚の表情で村人たちを見下ろし立っていた。唇が焼け落ちるまで、変わらぬ微笑みが浮かんでいた。

炎の柱と化した少女を、村人たちは血の気を失なった白い顔で見つめている。気の毒に、逃げ出すことも出来ない彼らは、自らの罪を見ながら恐怖の涙を流すことしか出来なかつたのだ。

少女の生んだ炎は人々を巻き込み罪とともに焼き尽くした。

少女が最期に流した涙は空に溶け、天に昇った。

少女が自らの体を焼いて届けた伝言は、あの時の魂たちに届いたのだろうか？

否……。

僕は知っている、人々は簡単に伝言を受け取りはしないと。

たとえ地上の全苦痛を一人で背負い、自らの体を永遠の炎にくべて煌々と照らしたとしても、闇に慣らされた魂たちは真実の世界を見ようとはしないだろう。

それでもやはり僕は過去の伝言を携えて旅を続けるのだ。

永い時をかけて打ち込み続けた楔くわが、いつかあの厚い雲に孔を開けると信じて。

### 第三話（終）

意識はさらに過去へ飛ばされた。  
遠い、とても遠い過去だ。

黄色い大地が見える。

灼熱の太陽が大地を焦がしていた。砂塵は渦を巻いて高く舞い上がる。

いつの時代なのだろう。どのくらいの時を遡ったのか分からない。西、という方角だけ感じられた。僕の意識は過去へ遡るにつれて、西へ、西へと帰っているようだった。

僕は鳥のような高い視点で景色を眺めているのだが、見えるのは黄色い砂ばかりだ。

砂漠と呼ばれる土地なのだろうか。砂丘が連なる砂の海と、乾いてひび割れた荒地が交互に続いている。どこまで見渡しても緑は見えず、青く光る水の気配もない。

そんな死の世界に一つだけ動いているものがあつた。  
独りきり、人間の男が歩いているのだ。

男は荷物を持たず、動物にも乗らず、この荒れた地を横切っている。全身を薄汚れた布で覆っているが、顔の覆いがわずかにほころびて黒い肌が見えた。隙間から見える瞳は、異様に鋭い光を放っていた。

その鋭い瞳を見た時、あつと思った。  
あれは僕だ。過去の僕。

今までの自分とは似ても似つかぬ姿をしているけれど、その男は確かに自分の過去生の一つなのだった。

過去の僕は長い期間、旅をしていた。

砂漠に入ってもう数ヶ月が経っていただろう。その間、一切の食べ物や水を口にせず、一滴の水も飲んでいなかった。

それなのに生きて旅をしているのだった……、とても信じられない。

だが当時の僕には人を超えた能力があり、飲まず食わずでも生きていくことが可能だったようだ。

僕は彼を理解するために、過去と同調しようと試みた。けれどもどうしても彼の意識に入り込むことが出来なかった。

どうやら今の僕にはこの人生を味わうことは出来ないようだ。格が違う過ぎて、当時の自分と意識を合わせることが出来ないのだ。完全に意識と感覚を遮断された状態で、僕はその人生を観客として眺めるしかなかった。

一つの輪廻転生を形作る存在 “魂” の様々な表れ は、各人生において、それぞれ違いを持つ。

ちょうど多面体に削られた宝玉のように、光が当たって輝く人生もあれば暗い影となる人生もある。

輪廻転生とは、この宝玉がくるくると回って、全ての面を“現世” という見える位置に出して磨いていくこうとする活動だ。

だから過去の自分がどれほどかけ離れた人格に見えても、同じ一つの魂であることは確か。

けれど中には格が違い過ぎて、他者のように理解しがたい人生もある。たとえば格が低い人生から見ると、格の高い人生のことは理解出来ない。理解するだけの能力が備わっていないからだ。

僕の魂の中でこの“砂漠の男”は、最も格が高い存在だった。

つまり彼は限りなく神に近い域にある者なのだ。だから人に近い僕にはとうてい理解出来ないし、同調することも不可能なのだった。

(無論、僕だけがこのような格の高い前世を持つのではない。全ての魂が様々な格の前世・来世を持つ)

砂漠を歩く男は旅を続ける。

黙々と、飲まず食わずで黄色い土地を歩き続ける。

激しい陽に焼かれても彼の体が朽ちることはない。

彼の身を包む布だけが陽に焼かれて日々衰え、ぼろぼろに破れ、風に散っていく。

やがて男は地の果てに出た。

そこは崖で、崖の向こうには広大な青い海が輝きながら揺れていた。

男は歩みを止めて崖の上に佇んだ。水平線を眺め、満足げに微笑む。

その崖が男の目的地だったようだ。彼は海を見つめ安らかな顔をしていた。そのまましばらく動かなかった。

……いったい、過去の自分は何をする気だろうか？

そう思った時だった。

不意に、男がこちらを向いた。

こちら　あろうことか、この場面を眺めている“僕”のほうを振り向いたのだ！

男は“現世の僕”に向かい、にやりと笑った。

仰天して呼吸が止まりそうになった。

今までこんなふうに過去の自分と面と向かい接触したことはなか

った。

始めは気のせいだろうと思った。けれど布が擦り切れてはだけた黒い顔の中の、強烈な瞳は、確かに“今の僕”を見ているのだ。

男の唇が動いた。

激しい恐怖に襲われている僕に男は笑顔のまま言った。

「お前にはまだ理解することは出来ないだろう、自分がほんとうは何者であるかを」

僕は意識を鎮めて男の声に聞き入った。その声は直接、心に響いてくるようだった。

厳格で恐ろしいが、穏やかで、深い落ち着きに満ちていた。

「理解しようとする必要はない。

お前にはまだ、力が足りない。

何もかもお前に理解させようとするればお前は壊れてしまう」

男は笑顔を消して僕を見据えた。

「ただ覚えておけ。

この地で全ては終わり、始まったのだ。

お前も、今まで見てきた人生も皆、ここで始まった新たな旅の途上だ。

これより過去に失ったものがある。

お前は未来の世界で、失われた過去を完結させなければならない。

完結させた時、お前は自分が何者であるか知るだろう」

言い終わり、海のほうへ向き直った男は、両腕を水平に広げた。海からの風を受けて彼の着物が大きく膨らみ、裾が高く舞った。と、彼の体がぐらりと前へ傾いた。

見ている間にゆっくり、ゆっくり、海のほうへ傾いていく。

鮮やかな十字の姿勢を保ったまま、着物の裾を翻し、彼は海へ吸い込まれて行った。

彼の死を眺めて悟ったことがある。

それは“身を焼かれた少女”や“国民に殺された少年”が人類の罪を背負おうとしたこととは違い、“砂漠の男”は、僕という魂の罪を負って死んだということだ。

魂の中に彼という存在があるから、僕は人生の旅を続けることが出来た。そうでなければ僕は罪に留まり一步も歩むことが出来なかつただろう。

長い長い孤独の旅は、この地の果てで始まった。

しかしその孤独の人生ですら、砂漠の男が罪を負って死ななければ選ぶことが出来なかつた。

それだけ僕の罪は深く重い。人類の罪に似て重い。

そして罪の源はこれより過去にあるのだという。

恐ろしいけれど僕はもう過去へ遡る旅をやめることが出来なかつた。答えを見つけるまで、この旅を続けることになるだろう。

#### 第四話 「遙かなる始まりの国」(前書き)

第四話あらすじ： 一万年前の世。

西北の諸島に、理想郷とつたわれるレイリア王国が栄えていた。

皇族の善政により国の平和は保たれているかに見えた。しかし…。

孤島で静かに暮らしていた僕が本当の名を知った時、僕と世界の運命が動き出す。

#### 第四話 「遙かなる始まりの国」

“アテン”

僕の意識はまた過去へ遡っている。  
闇の向こうから声が聞こえる。

“アテンよ”

懐かしい声だ。  
穏やかで優しく、僕を包み込んでくれた声。  
あれは最初に思い出した人生の。  
そうだ。先生の声だ。

「アテンよ。今日は、君に不思議な物語を聞かせよう」

ザンツ……

波が碎ける音がした。  
闇が消え光の世界が広がる。視界いっぱいには海があった。  
僕は再び、アテンの記憶の中にいた。日の当たる頬が熱い。眩しくて目を細めた。水平線に向かう太陽が、赤い日差しを投げかけて来る。

傍らには先生がいた。苦い潮の薫りに混ざって香油の薫りがする。長い衣の裾が海風に揺れていた。

「物語を聞かせよう」

そう言った先生が力強い腕を伸ばし、真っ直ぐ太陽の方角を指差した。

確信のこもった声で彼は語り始めた。

「あの水平線の向こうに、かつて天国のように栄えた国があった。人々は神に等しい力を備え、光から力を作り出し、水や空中から物を取り出すことが出来た。何不自由のない豊かな暮らしだった。しかし皆がそれ以上の暮らしを求め、欲を貪り過ぎたために、大きな災いが降りかかって国は一夜にして消えてしまったのだ」

それは何の星座にまつわる伝説ですか、と僕は訊いた。

けれど先生は笑って答えたのだった、「伝説ではない。本当にあったことだ」。

消えた国を懸命に想像しようとしている僕を見て、先生は笑みを浮かべた。そして迷いのない瞳をこちらに向け、言った。

「いつか君もあの遠い国のことを知るだろう。君自身の物語として

」

……ザア……

……ザン……

波の音が繰り返される。

アテンの記憶に幕が降り、意識はまた闇に引き戻されていた。

波音が響くたび、ゆっくりと意識が過去へ近づく。

ふと光を感じた。意識の底に一段と闇の色が濃い場があり、向こう側が仄かに明るい。

少しだけ恐怖を感じた。あの光の場に待っているのはきっと思い

出したくない……思い出すと何かが変わってしまう真実かもしれない。

けれど僕はそれを知りたい。知らなければならぬ。

僕の意識は自ら光の世界へ飛び込んで行った。

\*

自分の叫び声で目覚めた気がする。

寝台から落ちた足の先に触れる床が冷たい。背中と額が汗でびっしょりと濡れている。

「アン」

僕の名を呼ぶ声が遠く聞こえて来た。年配の男の声。伯父だろうか。ほっとして息をついた。残念だけど過去への旅は途中で終わってしまったらしい。僕は現世に目覚めたのだ。

長い、夢を見ていた。どれくらい眠りこけていたのか。眠っている間に目的地へ着いてしまったのかもしれない。伯父が僕の体を運んでくれたのだろう。伯父も弟も、さぞ心配したろうな。申し訳ないことをした。

遠くから足音が近付いて来る。

僕は身を起こして髪を整えようとした。その時、すくった髪の手ごたえのなさに違和感を覚えた。

さらさらと髪は手から滑り落ちる。指先で髪を伸ばして見た。長いはずの僕の髪が、顎までの長さしかない。

そして髪は光を浴びて金に輝いている……。

ああ。違う。これは、現世ではない。

完全な意識の一致で思い出している過去なのだ。

これまでは過去の自分を外の視点から眺めた後、過去と意識を重ねてその人生を思い出してきた。けれど今回は、すぐに中の視点か

ら人生を眺めることが出来ている。ということは、この時代の僕が、とても現世の僕に近いということだ。そしてたぶん今の僕と深い関係にある。探し求めていた答えは、きっとここにあるのだ。

周りを見回してみた。

体に掛けられていた白い布は薄く、羽のように軽い。でもどういうわけか風を通さない布で、包まれていると暖かい。敷布は空気を蓄えた袋なのか、やんわり体を支える。寝台に寝ていると思っていたが台はなく、床に直接、分厚い敷布が置かれているようだった。

床は不思議な色をしていた。白に近い銀色。よく磨かれて光っている。金属で出来ているのだろうか、足先が触れるとひやりと冷たい。

床を覗くとそこに自分の顔が映り込んだ。

青い目。金の髪。十五歳くらいの少年。容貌はアテンに似て弱々しい。現世の僕と同じであり体を動かさないのだろう、肌は血の気なく青褪め、体つきも華奢だった。

顔を上げてぐるりと部屋を見渡した。

壁と天井も、床と同じ素材で出来ているようだ。家具のない、がらんとした広い部屋には装飾らしき物が一切ない。まるで金属の壁で囲われた牢のようだった。無機質で冷たい印象。それなのに部屋の空気は不思議と暖かい。

この部屋が牢ではないことを示すのは、左手の壁があるはずの場所だった。そこだけ壁がないのだった。壁一面の広さから明るい日差しが降り注いでいる。外の木々の緑が目眩しいほど鮮やかだ。

緑の隙間の向こうに、輝く青が見える。あれは海、だろうか。

海を見つめて気付いた。

海に白い波が立っている。そういえば外の木々も揺れている。風があるのだ。けれど頬に風を感じない。揺れる葉の音もしない。何かがおかしい。

僕は寝床から出て外の方へ歩いていった。外へ足を踏み出そうとした時、そこに壁があることを知った。何も無いように見えるとこ

るに、透明の壁があったのだった。

斜めの視線で空間を見つめた。部屋と外の間、間に薄っすらと光が変わる部分がある。澄んだ水のように透明な壁だ。継ぎ目も傷もない。触れると少し冷たかった。指で弾けば固い音がする。この壁は何で出来ているんだらう……削った水晶？ まさか、こんな大きな結晶があるか。

「アン。起きたのか」

先刻から僕を呼んでいた声の主が部屋に入ってきた。

扉がなかったはずの銀の壁に、人が通れるほどの四角い穴が開いている。その空間に立つ男を見て僕は心の中で叫び声をあげた。

知っている人だった。

白い長衣。豊かな白い髭、白い髪。優しい灰色の瞳が僕を見下ろしている。

僕は思わず呼びかけた。

「先生……」

老人は当然のように頷き、瞳を微笑みの形に細めた。

「おはよう、アン。おいで。新しい日が始まる」

## 第四話（2）

先生！

心が騒いでいる。

よく見れば老人の顔や体つきはあの時の先生と少し違った。あの先生より幾らか柔らかい顔立ち、小柄な体をしている。羽織っているのも彼の物とよく似た白い長衣だが、この老人の長衣を縁取る金は刺繍ではないようだった。

でも瞳の奥の光を見誤ることはない。

目の前の老人の体に宿っているのは、あの先生と同じ魂だ。僕は数百年前に別れた人と、長い記憶を遡って再会したのだ。

懐かしさで胸が痛くなる。飛びついて泣きながらその足元に平伏したい。言葉を交わして、時を越えた再会を喜び合いたい。

けれど“過去の”僕と先生は落ち着いている。毎朝、当たり前を訪れる時としてこの瞬間を迎えている。

彼と僕は朝の光の中で、ただ軽く微笑みを交わした。

「おはうございます。ダイ先生」

と、過去の僕は言った。

「おはよう、アン」

先生はまた繰り返してから、少し咎める視線を僕に送る。

「先ほどからずっと呼んでいたのだよ。なかなか起きて来ないので

ね。何をしていた？」

「クオートを」

僕は手で透明の壁を撫で、壁越しの空を見上げた。澄んだ結晶を通して見る空の青は眩しい。

「クオートを眺めていました。よく出来たものだ」と

今さら何を言うのかと不思議げな表情で彼は僕を見たが、しばらく

して「ふむ」と頷いた。

「そう。よく出来ているものだ。我々は得難い物を得ている。神に感謝し、世界に感謝せねばならない」

「やんわり笑って僕も頷く。心のどこかが冷たい罪の意識でうずいた。

クオート。水晶の呼び名だった。透明の壁は確かに水晶で出来ているものなのだった。ただしそれは今の僕など想像もつかない高い技術で、人の手により生成され加工された、特殊な水晶だ。

この国はクオートの恵みで支えられていた。建物の多くの箇所はクオートで造られ、身を包む装飾にもクオートが使われ、さらに衣の糸にまでクオートが混ざり、そのうえ……。

「さあ、早く来なさい。朝食を済ませよう」

先生が戸口から手招きを言う。

僕は急ぎ足で先生について部屋の外へ出た。

通り過ぎてから間もなく、壁に開いていた空間は自然に閉じた。後には継ぎ目も傷もなくなった。

窓のない廊下は金属で出来た洞窟のようだ。しかし天井全体が白く光っているので、廊下は真昼の外と同じくらい明るい。廊下の突き当たりで立ち止まった先生が壁に触れると、そこに空間が開いた。扉や取っ手は見当たらなかった。そもそも、この建物には扉がないのだった。指先で壁に触れさえすれば、最も近い部屋への道が開くのだ。

ゆっくりりと、現世と過去世の僕が融け合い、記憶を思い出している。

ここは今から一万年ほど前の時。

今、この地点（東の国）から見て、遙かに遠い西北の地。

霧のたちこめる冷たい色をした海の上に、よく似た島が双子のように向き合い浮かんでいた。

この二つの島をあわせた国が、僕の生まれたレイリア皇国だった。少し大きいほうの島が“本国”で、王や多くの人々が住む都市があった。小さいほうの島は“影島”と呼ばれ、当時はほとんど人が住んでいなかった。かつて影島にも人が住み、栄えたことがあったと先生から聞いたけれど、人が住まなくなっただのが何故なのかは分からなかった。

僕はこの時代でも孤児として生まれていた。

親のことは知らなかった。まだ赤子の頃、この島の海岸で泣いていたところを、ここに一人で住むダイ先生に拾われたという。

それからずっと、ダイ先生は親代わりとして僕を育ててくれた。

国のことや世界のことは、ダイ先生から教わって勉強した。

ダイ先生から学んだ国史によればこの国は、初代皇帝が砂漠の土地から民を引き連れて辿り着き、多くの苦難を越えて建てた理想の国だという。その後、代々の皇族が受け継いだ善政により、レイリア皇国には長い平和がもたらされた。実に千年もの長きにわたってレイリアの民は平和を享受したのだった。

長い平和はレイリア皇国に富をもたらし、国力を高めさせた。

高い国力に支えられてレイリアの技術は進歩した。新鋭の技術は他国の脅威となった。国土にすれば僅かに過ぎない島国が、東の大陸や、南の大国に住む人々から畏れられるようになったのである。

こうして霧の海に浮かぶ二つの島は、名実ともに理想郷となった。人々は国家の庇護のもと、何不自由のない幸せな暮らしをしている。

僕は本国を見たことがない。

一度もこの島から、この建物周辺の土地から出たことがないからだ。

それでもダイ先生に国史を教わり、自分の国に誇りを持っていた。孤児という取るに足らない存在である僕でも、レイリア皇国の一員

として生きられることを幸運に思った。

国民としての誇りはクオートの恩恵を日々受けるたびに確認される。

けれどクオートをありがたく思うのと同時に、僕は胸のどこかが罪の意識でうずくのを感じた。

その罪は幼い頃から感じていたものだったけれど、大人に近付くにつれて強くなっていくようだった。

#### 第四話（3）

その朝は体を取り巻く空気がいつもと違う気がした。微かに風が動いている。風の中に知らない匂いを感じる。

外を見れば明るい青空に緑が映えていた。見慣れた景色が何故か、眩しかった。

「先生」

朝食の席で、食事の手を止めて卓の向こうに座る先生に話しかけた。彼は少し青褪めた頬をして、食事もせず外の景色を眺めていた。「お加減でも悪いのですか？」

ん、と先生は夢から覚めた表情をし、僕の方へ顔を向けて微笑んだ。

「いいや。何故だね？」

僕は彼の前に置かれた食事を見た。やはり減っていなかった。

レイリアの食べ物、まるで仙人が食べる霞かすみのようだった。殺した獣の臭いはせず、切り倒した草木の苦味もない。生きるために必要な純粋な成分を、人の手で作り出して形にした物だ。その食物の素を口にすれば、色や味や香り、固さまでも想念で自在に変えられる。今の僕の考えが及ばないためうまく思い出せないのだけど、とにかくそれは、病気の時でも口に出来るようなものだった。食べられないのは、よほど死に近い重病人だけだ。

難しい顔で先生の食事を眺めている僕を見て、彼は逆に労わるように笑った。

「いつもと変わらないよ。何も心配することはない」

「だけど」

僕はまたクォート越しの空を見上げ、呟いた。

「いつもと違う気がするんです」

「違う？ 何が」

「風が。……風の、匂いが」

先生は微かに眉を曇らせた。息をつき顔の前で腕を組むと、真っ直ぐに僕の目を見つめた。

「それはアン、君にとって特別な朝だからではないだろうか。今日が何日か思い出してごらん」

「あ」

僕は心の中で、太陽が天を通り過ぎた時を数えた。

「七番目の月の、十三回目の日です」

「今日で君はいくつになった」

頬が熱くなるのが分かった。なんとということだろう、自分にとってこれほど特別な日を忘れていたなんて。

僕が答えないので、代わりに先生が言った。

「十五歳だね。おめでとう」

灰色の瞳が僕を見ている。その瞳は心なしか濡れていた。あまり見つめられるので気恥ずかしくなり、うつむいて頭を下げた。

「ありがとうございます」

「もう立派な少年だ。……大きくなった。ほんとうに、ここまで大きく」

「先生のおかげです。あなたに救われ、育てられた。僕はあなたから命をいただきました」

僕がそう言うと先生はつと立ち上がり、透明な壁の前に立って木々の向こうの海を眺めた。十五年前を思い出しているのかもしれない。遠い視線が時を遡る。

彼の顔に過ぎった暗い影を見て、僕も自分の生まれた日へ想いを馳せた。

僕にとって誕生日は喜ばしい日というだけではない。

親に捨てられ命を奪われかけた、悲しい事実を刻む日なのだった。

十五年前の、今日。

この国で不吉な出来事があった。

昼なのに太陽が姿を消し、地上を暗闇が覆う。つまり日食が起きたのだ。

日食があることは前もって計算され曆にも記されているから、暗闇の下でも国民が混乱することはない。だが、その日の朝、皇帝お抱えの預言者マルロが

“本日生まれた子供の中に悪魔が紛れ込んでいる”  
と宣言したため国中が大騒ぎとなった。

悪魔とはクオートを濁す悪い気のこと、またその気を持つ生物のことだった。預言者は身体的な能力で、気を感じ取ることが出来る。彼らの能力は安定していないが、時にクオートよりも強力なことがある。このためクオートを通じて得られる情報よりも、預言者の言葉が優先されることがあった。

そのマルロが言うには、一年前に地下から悪魔が這い登って来て、人の女と契り子をなしたという。太陽が隠れるこの不吉な現象こそ、国を滅ぼす悪魔が生まれたという証なのだった。

レイリアは全世界から称えられる理想郷だ。国を滅ぼす悪魔が生まれたなどという不吉な預言は、見過ごすことが出来ない。

時の皇帝アテラン二十七世は、マルロの進言を受け、日食の日に生まれた子供を漏れなく殺すよう全国民に命じた。

命令に従わない親は、子供ともども処刑するという。

その日、親たちは泣く泣く生まれたばかりの我が子を殺した。

僕も親に殺されなければならぬ子供の一入だった。

けれど僕の親は気が小さかったのか、自らの手で子の命を絶つことはしなかった。代わりに籠へ乗せ、海へ放り出したのだ。自分の手で殺すのも海に投げ捨てるのも同じこと。赤子の弱い命は波の間に消えるはずだった……。

しかし、あくる日の朝、僕はこの影島の浜辺で泣いているところを老人に見つけられた。

先生によれば、赤子は波に揺られて少し弱っていたが、大声で泣きじゃくっていたそうだ。

当時、著名な学者だったダイ先生は隠居して、この島で一人暮らしを始めたばかりだった。生涯、妻もなく子もなく過ごして来た彼が、泣き喚く赤子を見て初めて“家族を持つ”と決意したという。一人の生活に飽いていたのだ、と彼は自分で笑う。

以来、十五年。

先生と僕は“家族”となり、この島で二人きり暮らして来た。

「十五歳といえばもう、大人に近い年だ」

先生が遠く海を見つめながら言った。

その表情に陰りがあるのを見て、僕は先生の次の言葉を察し答えを返すことが出来なくなった。

「本国では親元から旅立ち、高等教育を受ける年齢だよ」

先生は言い、僕を振り返って笑った。弱い笑みだった。

「そう、なんですか」

「ああ。本国の子供たちは十五歳になると家を出て、学校で暮らしながら仲間とともに勉強をし、未来を自分で選び取って行く」

楽しげに語っていた彼はそこで言葉を止めた。

注がれる視線に憐れみがあった。彼の瞳は僕に、“どうしたい？”

”と問うている。けれど言葉にして問うことの出来ない苦しみが、老人の顔を曇らせている。

僕はうつむいた。

分かってている。もう十五歳。大人になる時が近付いて来る。このままここで暮らしていたら立派な大人にはなれない。だからと言って、どうしたらいいのか？

僕の運命は最初から狂っている。僕は自分を棄てた国のことを恨んでいない。恨むどころか、先生から学んだ国の歴史に誇りを持ち、本国の暮らしに憧れを抱いている。しかしこれほどに国を愛している僕が、本国の土を踏むことは決して許されないのだ。

出自を隠して外国へ渡り、生きて行くことは可能だ。レイリア人

としての誇りを抱きながら、新しい人生を獲得して行けば良い。でもこの島しか知らずに育った僕が、そんな冒険を乗り越えていけるだろうか？ いや、その前に、僕自身が冒険したいのかどうか分からない。そんな冒険に興味があるようには全く思えない。

「こここの暮らしが幸せだから、  
生きていくことが、あまりにも幸運過ぎて。」

「僕は……」

視線を伏せたまま、ぼつりと答えた。

「ただ生きていけたなら、それで幸せです」

恐る恐る視線を上げて老人の顔を見た。彼は泣いているような瞳で微笑み、僕を見つめていた。僕は彼の瞳を真っ直ぐに見返して続けた。

「十五年前に失っていたはずの命です。こうして生きていられるだけ奇跡だと思います。だから何も望みません。学校教育など要りません。どこか他の地で果たすべき力など、僕にあるはずもありません。ただこの島でこうして暮らし、年を取っていけたらいいと思います。いつまでも……ここに居たい。駄目でしょうか。……先生は、僕を棄てますか？」

彼は驚いた顔をして、ふっと笑った。

「まさか。棄てるものか」

怒るかと思っただが意外にも先生は穏やかに言った。

「構わないとも。ここに居たいならいつまでもいい。私の生きていくうちは何もかも君に授けよう。だが、時が満ちてここから出て行きたいと思う日が来れば――」

彼は僕が泣きそうな表情でいることに気付き、先を続けるのをやめた。そしてまた少し寂しげな目をしたが、いつもの優しい顔に戻って告げた。

「君は君の、好きなように生きなさい。私の願いはそれだけだ」

彼は自分の食事を片付けると、通路に向かって歩き出し言った。

「来なさい。十五歳の祝いに見せたいものがある」



#### 第四話（4）

海から少し離れた丘へ先生は僕を導いた。そこに古い時代の、閉ざされた塔があるのだった。

空に向かつてずっと立つ白銀の塔は、地上から伸びる氷の柱のように見える。上へ行くほどに細くなる塔の先端が陽を反射して、強い光を放っていた。

僕は目を細めて塔を見上げた。

透ける壁の奥に、太い銀の柱が見えたのでどきりとした。思わず目を逸らす。

十五年間、先生は僕にこの塔へ近付くことを禁じていた。近付いてもいけないし、遠くから見つめてもいけないと言われていた。僕は先生の言いつけを堅く守ってきた。その禁じられた場所に今、先生が僕を導いている。

緑の丘の頂上に立つと足が震えた。

聳え立つ塔にわけも知らず恐れを感じる。一望出来る海岸線の景色に浸る余裕もなかった。丘の下の住まいへ駆け戻りたくなる。

しかし先生は躊躇ためらいなく塔へ進み、巨大な扉の前に立ち　この塔には二つに開く形の“扉”があるのだった　、扉に刻まれた丸い窪みに手を当てて力を籠めて押した。

僕が不思議そうな顔で見ているのか、先生が苦笑する。

「旧式の扉だね。こうして念じながら押してやらなければ開けることが出来ない。最初は慣れないだろうが、君ならすぐ自由に出入り出来るようになるだろう」

扉は始めだけ重く見えたが、開き始めるとするする自動で滑り出した。やがて先生の手を離れ、奥まで滑り静かに止まった。

扉の止まる、クオン……という音が塔を微かに震わせた。

塔に開いた穴から冷たい風が流れ出て来た。長く封じられていた時の香りがした。塔の中には透明の壁を通して降り注ぐ光が満ちて

いた。けれど長く留まった空気のせいも薄暗く感じる。臆している僕へ、先生は振り返って言った。

「さあ。入りなさい。恐れることはない」

歩き出した先生の後をついて仕方なく足を踏み出した。埃を立てないよう恐る恐る歩いたのだが、意外なことに床には一片の塵も積もっていなかった。まるで今朝、人の手で磨かれたように、光を反射して靴音を響かせる。

廊下は透明の壁に沿って、緩やかな傾斜で上へ通じていた。この螺旋状の廊下がり取り巻いているのは、銀色の壁。外から太い柱のように見えた銀色の部分が実は塔の中核なのだった。この銀の壁の内側に、たくさんの部屋があるらしい。

壁に手を触れても部屋への道が開くことはなかった。堅く閉ざされた、“旧式の扉”と先生が呼ぶ切り込みが所々にあるだけだ。

塔の中ほどまで廊下を登った時だった。先生が一つの扉の前に立ち、僕を振り返った。そして扉の取っ手の位置にある、銀色の丸い印を指して言った。

「ここに手の平を当てて、開くように念じてごらん」

言われるまま手の平を当てた。しばらく念じていると、すつと扉が横に滑った。先生は笑顔で頷いた。

「そう、表の扉もそのように念じて開けるのだよ。この塔の扉は、許された者が念じなければ道を開けることはない。君も今日からは許された者として、自由にこの塔に出入り出来るのだ」

言われてもそれが嬉しいことなのか何なのか分からなかった。ぽかんとしている僕に先生は笑いかけ、開いた部屋に僕を招き入れた。「ようこそ、我が大学校へ」

巨大な空間が目の前に開けた。

高い、とても高い天井。住まいの建物を二つ重ねても届かないほどの。

部屋の両側一面は、分厚い透明の壁　クオート。

床からあの高い天井までのクオートを通して、真昼の陽射しが降り注いでいる。陽を浴びて白く輝いているのは、階段状に並べられた細長いたくさんの椅子だった。この広大な部屋にこれだけ多くの椅子があれば、千人以上の人々が座ることが可能だろう。けれども、何のために。

「ここは……」

聞くともなしに呟いた。

大学校、とさつき先生は言った。大学校とは、本国の若者たちが行くという最終学校のことではないか。ダイ先生はかつてその学校で講師をしていたと聞いた。でもそれはやはり本国での話だったはずだ。

かつん、と音がして見上げると、いつの間にか最上階の中央に立っていた先生が僕を見下ろしていた。

「十五歳となった君に、真実を教えなければならぬ」

先生は足音を響かせながらゆっくりと壇上を左右に歩いて話し始めた。

「アンよ。これまで私は君に半分しか本当のことを教えて来なかった。残りの半分は隠したり、嘘をついたりした。……どうか許して欲しい。君が真実に耐え得る年になるのを待っていたのだ」

先生の声が遠く聞こえる。

思ってもみないことだったから驚きさえ感じられない。僕はぼんやり先生の話の話を傾けた。

「ここは私の建てた大学校。私は本国の学者ではなく、ここの講師だった。かつてこの大学では多くの若者が学び、巣立って行った」

彼は不意に言葉を切り、手を高く掲げた。

すると耳元で風が吹くような音がした。次の瞬間、大勢の人々が椅子に座っている映像を僕は見た。

生き生きとした顔で講師の話に耳を傾ける若者たちの姿。僕の立つすぐ横の椅子にも、幻の若者の姿がはっきり浮かび上がった。衣

服の装飾が揺れて音を立て、額の汗が光り、吐息の気配がこちらの肌が届いた。

わっと声を上げて後退った僕に、先生は落ち着いて説いた。

「怖がらなくていい。これは過去の記録だ。クオートが光を集めて作り出している、立体映像だ」

「立体、映像？」

「そう。君には初めて見せるものだが、今の本国では当然に使われている。言葉は形として残すことが出来ないだろう？ だから、こうして時をそのまま記録して後世の人に伝えるのだよ」

未来の僕には理解し難いことだが、この時代の人々は文字というものを持たなかった。このように他の手段で記録することが出来たので、文字が必要なかったのだ。しかしその記録手段すら知らずに育った当時の僕は、この時初めて過去を保存出来ることを知った。

「この塔は全てクオートで造られており、塔そのものが記録を刻む媒体となっている。この巨大なクオートには、国の内外で起きた過去の出来事が刻み込まれている。これから君は、ここに来れば、あらゆる歴史を私の口を介さずに知ることが出来るのだ」

先生が手を振り下ろすと過去の映像と音が消えた。

かつん。かつん。

静けさの戻った構内に再び、壇上をゆっくりと歩き回る先生の足音だけが高く響き始める。

「この大学校が閉ざされた理由。そして、この影島に人が住まなくなった経緯。君はそれら全ての歴史をここで知ることが出来るだろう。……もちろん、君が望むならば、だが」

何故だか先生の声は泣いているように聞こえた。

遠く壇上から見下ろす灰色の瞳はまた、“どうしたい？”と僕に問うていた。

「少しずつ。……先生のお許しがあれば、少しずつ本当のことを知りたいと思います」

僕の答えに先生はうむ、と頷いた。彼の口元は笑顔だったが、瞳

はやはり悲しげだった。

映像の扱いには少し練習が必要だった。

クオートが人の思考を読み取り、命令を実行して映像を映し出す。だから人はクオートの読み取り機に手の平を向け、心の中で得たい情報を思考すれば良い。ひとことと言えば、“念じる”だけで求める映像が映し出されることになる。しかし、情報は鍵となる抽象的な概念で組み合わせられていたから、自在に情報を引き出すためには複雑な思考能力が必要だった。

求める情報が深くなればなるほど、高い思考能力が要求される。

僕は幼い頃から先生に、抽象的な思考を操る学問を叩き込まれていた。なので、なんとか最初から少しは扱うことが出来た。けれど思い通りに使うためには、もう少し訓練を続けなければならぬと感じた。

その日初めての訓練を終えて丘を降りたのは、海が藍色に染まり始める頃だった。

学習の疲れを癒すため先生と僕は海を見下ろす崖の上に立ち、景色を眺めていた。

まだ夜の帳の降りない空に一つだけ星が輝き始めた。

先生はその星を見上げながら、ふと僕へ訊いた。

「アン”　これは十五年前、私が付けた名だ。この名の意味が分かるか」

僕は分からない、と答えた。

すると彼は星を指差して強い声で告げた。

「アンは、外国の言葉で“星”の意。空が暗くなり始める頃に、一つきり輝き出すあの星のことだ」

なるほど、日食の日に誤まって生まれてしまった僕に相応しい名

ですね。

僕がそう言うのと先生は、叱りつけるかのような真剣な顔で僕を見て言ったのだった。

「そうではない。希望の星ということだ。この世に生まれた希望、最後に残った希望だ」

大げさです。

孤児に過ぎず、何の価値もない僕には釣り合いの取れない名でした。すっかり名前に負けてしまいましたよ。

笑いながら言う僕に先生は言葉を飲み込み、ただ優しいだけの視線を注いだ。しばらくしてから、ぽつりと呟いた。

「少なくとも私にとって君は、ただ一つの大切な希望だよ」

希望。

夕闇に輝き始め、朝を目指す光。

その名の本当の意味を僕が知るのには、それから僅かに数日先のころになる。

#### 第四話（5）

次の日の朝。

寒気を覚えて夢から醒めた。

世界はその朝も静かだった。しかし、空気に含まれる知らない臭いが昨日より濃くなった気がした。

嫌な汗が背を伝う。

「先生」

寝台から降りて呼びかけてみた。声は天井に虚しく反響した。

「先生。先生！」

呼びながら、部屋を駆け出していた。建物のどこからも返事はない。裸の足裏が床を蹴るひたひたという音が廊下に響いた。

外へ飛び出した僕の足は、海を見下ろす断崖の手前で凍りついた。見たことのない生き物の姿が目には飛び込んで来た。

頭から足先まで、赤銅色の殻で身を覆った生き物たちがいた。巨大な虫にも見えるが、二本足で立っている。それが数え切れないほどたくさんいるのだった。蟻のように真っ直ぐ二列に整列してこちらを見ている、不気味な生き物たち。

恐怖の声を上げようとした時、一つの頭が金色であることに気付いた。

一匹だけ頭の部分の殻を脱いでこちらを見ている。その顔は先生や僕と同じ肌色だった。風に揺れている髪は僕の髪とよく似た金だ。

あれは 人間？

気付いて足から力が抜ける。

そうだ。あれは殻のような衣を着た、人間の集団なのだ。

絵や映像ではない人間を見るのは、先生以外では初めてだった。

何故、誰も立ち入らないはずのこの島にたくさん人間がいるのだ

ろう。

向こうから金髪の人間が歩いて来た。近くで見ると、男だと分かった。絵でよく見るような整った顔ではないが、広い胸と頑強な肩を持つ、先生より遙かに若い男。

金髪の男は僕の前に立ち頭を下げた。花に似た香りが漂った。

「お待ちしております。さあ、こちらへ」

始め言葉が通じることに驚いた。次に、気品ある発音と丁寧な物腰が、先生にも似ている気がして不思議に感じた。

その男の案内に従い、わけもわからないまま僕は崖の方角へ歩いた。従うしかないように思えたのだ。しかし歩いた先に待ち受けていたのは、最も目にしたくない光景だった。

「先生……」

崖の先端で白い衣の裾が翻っていた。

年老いたあの人が、長身の者に羽交い絞めにされていた。さらに喉元に何か、細長くて銀色に光る物を当てられていた。

「……いつたい……これは……あなたたちは、先生に何を？」

悲鳴に近い声が僕の口から漏れた。

まだ僕は状況を飲み込めていなかった。先生が人々に向けている厳しい視線の意味も、彼の喉に突きつけられている物の正体も分からなかった。だが、目の前で起こっている出来事がとても恐ろしい事態だということだけは分かった。

金髪の男が僕の耳元で囁いた。

「私どもは、あなたをお迎えにあがったのですよ」

「迎えに？ 何のことです？ それに、あの、先生の喉に当てられている物は何？」

子供じみた質問をすると、笑い声が僕を取り巻いた。金髪の男が眉を上げて大げさに驚いた表情を作った。

「おや。ご覧になったことがないのですか、剣を」

「剣？」

「なるほど。刃物をご存じないのですね。便利な暮らしに慣れたお

子は、クオート以外の物を必要としないから。食事も、人殺しも、クオートさえあれば出来る世の中だ」

男は言葉を止め、腰に吊るした長い道具入れから“剣”を抜いた。「教えて差し上げましょう。これはこのように使うですよ」

彼はそう言い、持ち上げた“剣”の先端を自分の手のひらに押し付けた。赤色の線がその肌を描かれた。彼の顔が微かに苦痛で歪み握り締められた拳から赤い雫がしたり落ちた。

ようやく先生の運命を悟った僕は言葉にならない叫びを上げていた。あの光る“剣”が、人の喉に食い込んだら、人は。先生は……。

金髪の男は出来の悪い生徒に対するように「やれやれ」と苦笑し、丁寧に説明した。

「お分かりいただけましたか。これは剣といって、肉を斬るために使う物です。原始的で野蛮な道具ですが、少ない人数の相手を殺すためには、これが最も便利なのです。ご承知の通り、クオートの兵器を使えば一瞬にして大量の人を殺すことが出来る。でも、このように至近距離から一人を殺すのは難しい。……ああ、それに」

剣を空に向かって掲げ、軽く振って見せる。

「ほら。このように、粗野な金属にはクオートが反応しないのですよ。クオートの兵器を持ち込むと、気が乱れて近くのクオートが騒ぎ出す。もし我々がクオートを持ち込んでいたら、昨日からこの警報が大騒ぎしていたことでしょう。それでは我々の潜入がばれてしまっていた」

可笑しくてたまらないといった様子で、男はくつくつと笑った。

足下が崩れるように感じた。この男たちは昨日から島に侵入して潜んでいたのか。

昨日の朝から、違和感を覚えていたことを思い出す。あれは金属と人間の臭いが風に混ざっていたからだ。今まで嗅いだことがない臭いだったから、僕だけが違和感に気付くことが出来たのだ。それなのに、先生に強く違和感を訴えなかった。危険だと騒ぐ自分自身の直感を、気のせいだと見過ごしてしまった。

腹の底から怒りが湧き上がる。

それは、このささやかで優しい生活に侵入した暴漢たちへの怒り、気付いていながら危険を防げなかった自分への怒りだ。

「離してください」

僕は言っていた。自分の声ではないような低い、獣の唸りに似た声だった。

「あなた方が何者で、どこから来て、何の目的でこんなことをするのかは知らない。でも、先生を傷付けるのは許さない。今すぐあの人を離してください。人間を殺す必要があるなら、代わりに僕をその“剣”で突けばいい」

周りの者たちが視線を交わす気配があった。今度は笑い声が聞こえない。溜息と、「さすが…」という囁きが漏れ聞こえた。

さすが？

何のことだ。

思いがけない方向から声が飛んで来た。

「アン」

先生の声だ。耳にしたこともない激しい叱責の声音だった。思わず肩をすくめて、縛められていた先生を見た。

彼は喉元に突きつけられた刃物が目に入らないかのように、ひどく冷静な表情をしていた。ただ真っ直ぐ僕だけを見て、厳格な教師として生徒を叱責する。

「逃げなさい。そして、全て、教えた通りにしなさい」

とたんに先生は、彼を羽交い絞めにしていた男に殴られた。血を吐き、その場に膝を突きながらも瞳だけ輝かせ、周りの人々を睨みつけて叫んだ。

「あの子は渡さない。貴様らの、汚い手には、決して  
再び殴られた先生は地に伏して呻いた。

金髪の男が先生のもとに歩いて行き、彼の耳元で言う。

「ダイ教授。あなたについての悪い噂は本当だったのですね。私は信じていなかったのですよ。でも今日、あなたご自身の口からその

お言葉を聞かされて、噂が本当だったと知りました。あなたともあろうお方が、欲に目が眩んでしまうとは。残念です」

口元の血を拭って先生は金髪の男を睨み付けた。「ティオン……」小さく彼は呟いたが、男は聞こえない振りをして彼から顔を逸らし、鼻で笑った。

「それにしても汚いのはどちらなのでしょうね、先生？ 生かされた恩を忘れ、権威を独り占めにしようとなされるとは」

先生はティオンと呼ばれた男の言葉に答えなかった。代わりに絞り出すような声で言った。

「アンは、大切な子だ。貴様らなどには、渡さない。この命を賭しても」

それから彼は赤く染まる瞳できっと僕を見据え、前を指差して叫んだ。

「走れ！ 今すぐ！」

先生の叫びは電流となり僕の体を駆けた。

それが最後の教え、最後の声だった。

彼が立ち上がり叫んだ瞬間、傍らの男は反射的に動き、剣で彼の喉を掻き切った。老いて痩せた喉に、鮮やかな赤い筋が刻まれた。ゆっくり先生は背中から海側へ倒れて行く。前を指差した形のまま止まった腕が、一瞬、空の高みを指した。そして彼の体は、ふうつと崖下の海へ吸い込まれて行った。

赤々と、風に散る血しぶきだけが残像のように崖上を舞った。

僕は叫んだ。何度も先生、先生と叫んでいた。けれど周りは奇妙に静かだった。老人の唐突な死に誰もが驚き、呆然と彼を見送っていたのだ。僕もやがて虚しい叫びを止めた。束の間、静寂が訪れた。

その刹那、

“走れ！”

耳奥で先生の声が蘇った。

電流にはじかれ僕は走り出した。脇目もふらず、屈強な人々の垣根を潜り抜けて。

背後から慌てふためく男たちの声が聞こえたが、振り返ることはしなかった。どこへ向かって走ればいいかは分かっていた。息が切れてもひたすらに、先生が残した教えに従って走り続けた。

#### 第四話（6）

濡れた草が行く手を阻む。

幾度も滑り、丘を転げ落ち、そのたび必死で立ち上がって駆けた。目指すは丘の上。

先生が指差したあの白い塔……。

塔に辿り着いた時には息が切れ、意識は朦朧としていた。最後の力を振り絞り、手を扉に伸ばした。指先が銀板に触れただけで扉は滑らかに開いた。まるで待っていてくれたかのようだった。力尽き倒れ込んだ僕を、塔は優しい祖父のように迎え入れた。

倒れた僕の足元で扉の閉まる鈍い音が響いた。

ほとんど同時に、丘を登って来た追っ手が塔に集まって来る気配があつた。剣らしき物で扉を叩く音がしたけれど、あの野蛮な道具ではクオートの扉に傷を付けることも出来ないだろう。

意識が薄れて行く。扉を叩く音が次第に遠のいていった。入り口でうつ伏せに倒れた姿勢のまま、僕は気を失った。

意識を取り戻した時、辺りは闇に満ちていた。

夜更けに鳴く梟の声が遠く聞こえた。

咄嗟に自分が何故ここに居るのか分からなかった。こんな夜中に、こんなところで何をしているのだろう、と思った。

体のあちこちが痛んだ。体を触って調べてみた。すりむけた両膝からは血が流れ、手足の皮膚にも草で切った細かい傷が付いていた。夢では、なかったのだ。

昼間の記憶が蘇るとともに、重苦しい不安がどつと押し寄せて来た。

先生はもうこの世にいない。海に落ちて死んでしまった。そう考えてみるのだが、悲しみが湧かなかった。

涙さえ出ない。悲しみという感情が消え失せてしまったようだった。ただ、頼る人はもういないという実感だけはあった。自分は何も知らない身で、この世界に一人きり放り出されたのだ。そして訳も分からずに今、恐ろしい人々に追われている。

これからどうすればいいのか。

じつとり体にまとわりつく不安の中で、考えだけを巡らせた。

しばらく後、僕はふらつく体を支えて立ち上がった。踏み出した足は少し前に先生と歩いた廊下を辿り始めた。

まず手掛かりを得なければと考えたのだ。

自分が今置かれている状況と、この先どうしたらいいかを考えるために。

そして何故、先生が死ななければならなかったのか、僕たちを襲った運命にどういう意味があるのか知りたいと思った。

廊下を歩いていている時、透明の壁越しに外が見えた。追っ手は塔をぐるりと取り巻いていた。丘一面を覆うほどの大勢の人々だ。今、僕は彼らに恐怖を感じながら別の感情も覚えていた。それは生まれ、初めて感じる、腹の底から湧きあがる黒い怒りだった。ティオンという男があればほどの数の人々を動かし、ひっそりと暮らしていた無害な老人を襲った理由を、自分は知らなければならぬ。

大学の扉は音も立てず横に滑った。

薄暗い講堂には月明かりに照らされた細長い椅子が、仄青く光り並んでいた。

かつん。

足音が聞こえた気がして最上段を見た。しかし、そこには静かに降る青白い月光があるだけだった。

ほんの、一日と少し前には、陽を浴びながら先生が歩いた場所。その場所にあの人が立つことは永久にない。

さっき聞こえた音は僕自身の心が再生した、思い出なのだった。

ようやく涙が溢れ出た。自分を育ててくれた人の温もりが、思い出になってしまった事実には打ちのめされていた。

床に崩れて嗚咽した。しばらく息も出来ずに泣き続けた。しかし、そうして泣いているうちに憎しみが薄れ、僕自身を動かす命の力も尽きてしまう気がした。

“教えた通りにしなさい”

先生の声が再び耳奥で蘇る。僕は歯を食いしばり、涙を拭いた。そして両の手を天へ向け、命じた。

「全てを。先生と僕の運命に関する、全ての過去へ導きたまえ」

クオートの塔は僕の命令に応え、小さな唸りを立てて震えた。やがて塔は断片的な像を映し始めた。

荒涼とした景色が映し出された。

見渡す限りくすんだ赤茶色に染まった土地。空までが灰色に霞んでいる。

緑の葉がない。風に揺れる草もない。

地平線の先まで、生きて動いている物の姿が見えない。

視界の右側、遠くにただ一本、黒い棒が斜めに刺さっている。いや、棒ではなく、あれは木だ。黒く焼け焦げた木が、かろうじて幹だけ残し立っているのだった。

時々、風が吹く。

すると灰色の粉が舞い上がる。

目を凝らしてよく見ると、地面に大量の灰が積もっている。所々、山となって盛り上がる灰の形は、人が倒れた姿によく似ていた。

これはいったい何の光景だろう？ まるで熱波が通り過ぎ、地上

を焼き尽くしていったようだ。

“クオート”。

僕の頭にその馴染みある単語が浮かんだ。

クオートは人を殺す兵器にもなり得る、と教えられたことがあった。クオートが集めた光を放てば、一瞬にして大量の物を焼くことが出来るという。クオートの光が舐めた後の世界は、ちょうどこんな光景になるのではないだろうか。では大地を埋め尽くすこの灰の山は、人間に似た形の物ではなくて、大量の人間の死骸……。

吐き気を覚えて口元を押さえた時、背後から近づく人の足音を聞いた。

歩いて来たのは初老の男と、黒髪の少年だった。彼らは立ち止まり、この荒れた土地を眺めて眉間にしわを寄せた。

「なんと……恐ろしい……」

少年が目には涙を浮かべて震えながら呟いた。初老の男は深く息をつき、厳しい声で言った。

「目を逸らさずに見るがいい。これが、人間の所業だ。これこそが、クオートの業だ」

しかし少年は耐え切れずその場に座り込み、激しく嘔吐した。初老の男は灰の山を見つめ微動だにしないが、顔には怒りと憂いが刻まれていた。

よく見れば初老の男は先生だった。

六十歳を過ぎた頃だろうか。顔や体にはまだ力強さが残っていたが、瞳には既に何かを諦めた色があった。

「先生……。もう終わりですね」

地面に目を伏せた少年が先生に話し掛ける。苦しげに拳を握り締め、彼は呟いた。

「何もかも、終わってしまった。我々は、……私はこれからどうすれば？」

先生は少年を立ち上がらせ、両手で彼の肩を握り強く揺さぶった。「ユインよ。君の人生はまだ終わらない。生きるのだ。生きていれ

ば、いずれ希望も見出せるだろう」

「でも、どのようにして生きるといふのですか」

「ティオンのもとへ行け。奴がお前を求めている。ティオンの家臣となれば少なくとも、処刑されることはないはずだ」

少年は絶望した声で「ティオン！」と叫んだ。

彼は全身を震わせて何事か堪えていたが、しばらくして声を振り絞った。

「承知しました。私はティオンのもとで生きる屍となりましょう。そして、いつの日かまた、あなたにお会い出来る日を夢に見ております」

一礼した少年の青い瞳から大粒の涙が落ちた。

背を向け駆けて行く少年の背を見送った後も、先生はその場に立ち尽くし、灰の山を見つめていた。

#### 第四話（7）

場面が切り替わった。薄暗い建物の内部だ。ばしゃっ。

果物が弾けるような音が聞こえ、目の前に赤い華が散った。

「！」

宙に散る華をぼんやり見ていた僕の頭上に、落ちて来た大量の赤が降り注いだ。しかしそれは僕の体をすり抜け、背後の床に落ちて飛び散った。

瞳を見開いて映像を見つめた。

赤い。至るところに赤がある。床は一面、赤に染まり、壁にも赤い模様が散っている。

「あ、あ……」

本能から恐怖が込み上げて声を漏らし後退った。が、背後に人の身体が転がっていることに気付いて動きを止めた。

よく見ると周りにたくさんの人々の身体が折り重なっているのだ。青褪めた皮膚の人々は、意志の消えた瞳を薄っすらと開いた瞼から覗かせていた。見れば身体の一部がない者がいる。頭だけの者もいる。そして全員が、身体はどこかしらから大量の赤い液を流している。たった今、斬られたばかりの傷から流れているのだろっ、それは生々しく鮮やかな赤だった。

断末魔の叫びが響き渡ったので、僕は声のした前方へ目を向けた。そこでは武器を持った数人の者が、武器を持たない人々を切り刻んでいた。

あの野蛮な人殺しの道具、“剣”というものが幾度も振りかざされ、振り下ろされる。そのたび薄い衣を身にまとっただけの無力な若者たちの身体から、鮮血が噴き上がった。

そうして次から次へと死体が積み重なっていくのだ。

やがて室内は静まり返った。

悲鳴と呻き声は消え、代わりに幾つもの無言の山が出来上がっていた。

殺戮を終えた者たちは満足気な表情をしていた。その中の一人が額の汗を拭う。男の額には金色の髪がまとわりついていて、髪の下から覗くのは、陰りのある細い瞳だった。どこかで見たことのある顔だと僕は思った。

あれは……そうだ。昼間見た顔。この平穏な島を踏み荒らし、先生を死へ追いやった男。ティオンだ。

映像の中のティオンはまだとても若く、十五歳か十六歳の少年に見えた。けれど瞳には既に昼間見た光、残忍な行為を愉しむ暗い光が宿っていた。

彼は部屋の一段高いところに昇って死体の山を眺め回した。彼の薄い唇が開く。

「友たちよ。私は君たちを欲していた。心から、欲したのに……」  
部屋に響くティオンの声は薄ら寒い。どうやら彼は死体に語りかけているようだった。けれど言葉と裏腹に、彼の顔に悲しみの表情はなかった。

ふと、ティオンが何かに気付いた様子で言葉を止めた。人の足音が聞こえたのだ。

廊下を駆ける足音はこちらへ近付いて来た。扉が横に滑る。

開いた扉の向こうにいたのは、黒髪の少年だった。先ほどの映像で先生と並んでいた少年だ。

部屋に足を踏み入れた少年は瞳を大きく見開いた。口も開いたが喉から声は出ない。見開いた瞳いっぱい恐怖を浮かべ、青褪めて壁にもたれ掛かりずると腰を落とした。

ティオンは表情を変えず少年を一瞥した。

「なんだ、ユイン。遅いじゃないか」

大げさに息を吐いて見せる。

「今日の講義は終わったよ。残念だったな」

言いながらティオンは仲間を引き連れて扉の方へ歩き出した。死

体の山を平然と踏みしだいて。

剣を担いだ男たちが、扉口の少年に近付く。少年は逃れようと必死で足を動かすが、腰に力が入らないのか立ち上がれず、僅かに身をずらすことしか出来なかった。

少年の前でティオンは立ち止まった。震えている彼を冷たい瞳で見つめる。その口元が不可解な悦びで、薄っすら笑みの形に変わった。

そして、くつと笑い声を漏らした。

それだけだった。ティオンはあたかもユインの姿が見えなくなっただかのように目を逸らして行ってしまった。他の者たちは黒髪の少年を殺すべきか迷っていたが、ティオンが少年を無視して廊下の先へ行ってしまったので、慌てて後を追った。

そうして静かな部屋に、死体の山とユインだけが取り残された。

ユインはしばらく浅い呼吸をしていた。救われた自分の命を確かめているようだった。呼吸が落ち着いてからは、長い間、呆けた表情で部屋の光景を見つめていた。

長い時間が過ぎた後、唐突にユインの瞳からぼろっと涙が零れた。

彼は呟いた。

「終わった……。皆、死んでしまった」

ユインの悲しみが胸に迫って僕は目を閉じた。

何故だろう。ただの立体映像のはずなのに。たまに映像の人物の気持ちや、直接心に響いて来る時がある。

共感しているのとは違う。この細切れの場面では理解出来ず、共感するのは不可能だ。

何かがおかしいと感じ始めていた。

考えてみれば僕は先刻から何度も目を閉じている。血が降って来た瞬間や、人が切り刻まれる瞬間にも。それなのに映像はきちんと見えていた。まるで心で観ているかのよう。

そもそも、この映像は誰がどのようにして記録したものなのか。殺戮者と死人ばかりの場所をどうして残すことが出来たのか？

考えて集中が途切れた際に、映像はまた脈絡なく違う場面へ飛んだ。

今度は昼間の明るい景色。晴れ渡った空が見える。

どこかの建物の中庭が映し出しされた。白い壁で囲われた、石畳の敷き詰められた狭い空間だ。

壁の向こうには高い建物の頭が幾つも見えた。僕は一度も見たことがない、しかし絵では何度も目にしていた本国の建物だった。巨木のごとき建物から伸びる通路は網目状に交錯している。まるで空を覆い尽くそうとする欲望を形にしたよう。レイリア人の偉業に僕は興奮を覚えるとともに、恐れを感じて身震いした。

中庭に立つ男の姿が見えた。青空を見上げているその初老の男は先生だった。

先ほどの映像で見た先生と同じくらいの年齢。しかし先ほどより青褪めてやつれている。

誰かが中庭に歩いて来た。

姿を現したのは数人の男たちだった。腰に剣を帯びている。白い衣には大量の血痕を付けていたが、気にする風でもない。

中の一人が何かの包みを、ぐいと先生の胸に押し付けた。先生は無言でその包みを受け取り、悲しげな瞳で男たちの衣の血を見つめた。

「ダイ。頼んだぞ」

男たちはそれだけ言う足早に立ち去った。

一人取り残された先生は腕の中の包みを少しだけ解き、覗き込んだ。

それは生まれたばかりの赤子だった。薬でも使われたのか、不自然に身体を強張らせ眠りこけている。死んでいるかのようにも見え

る。だが額に薄っすら浮かんだ汗が、赤子に宿る健全な命を示していた。

赤子の額に丸まっている髪は金色だった。

先生は指でそつとその髪を撫でて、囁いた。

「必ずあなたを生かしてみせる。必ず、人間にしてみせる。……我々の希望、最後の一つ星よ」

塔が震えた。

映像が消える。一瞬で暗い講堂の景色が戻って来た。

「そこまでです」

背後から人の声が聞こえた。

見ると扉が開いていた。赤銅色の鎧を着た人々が講堂に入ってきた。先頭はティオン。昼間見た時と同じ年齢、同じ姿で立っていた。咄嗟に何が起きたのか分からなかった。これは現実か？

呆然とする僕にティオンは微笑みかけた。

「しつかりなさってください。私どもは映像ではありません、現実ですよ」

そんな、まさか。この塔には許された者しか入ることが出来ないはずなのに。

「……どうして」

思わず呟くと、ティオンの合図で彼の背後から一人の男が進み出した。

黒髪の男。大人の男だが、その目元には見覚えがあった。

「ユイン……？」

呟くと彼は固い表情で直立し、僕へ向かって頭を下げた。

「タオ・ユインと申します」

ティオンが彼の周りを歩き回って楽しげに説明した。

「この男はかつてこの大学の学生でした。つまり、この塔に自由

に出入り出来る者の一人です。あなたがここへ閉じ籠ってしまわれたので、わざわざこの男を本国から呼び寄せねばならなかった。そのため、お迎えが遅くなってしまうたのです。お待たせして申し訳ありませんでした」

気付けば僕は武装した男たちに囲まれていた。

逃げようと立ち上がった瞬間、両側から腕をつかまれて身動き出来なくなった。それでも抵抗して身をよじる僕をティオンは笑みを浮かべて眺めた。

「私どもが遅れてしまったので、お暇を持って余されたのですね。つまらない映像をたくさんご覧になったようだ」

彼は外へ向かって歩き出した。他の者たちも彼の後に従ったので、僕は無理やり引きずられて外へ出る事になった。

「今日見た映像は全てお忘れくださいますよう」

廊下を歩きながらティオンは僕に言った。ちらと振り返ったその瞳の冷たさに、身体の芯が凍えた。

#### 第四話（8）

塔を出たところで目隠しをされた。二人の兵士に両側から腕を抱えられて歩かされ、気付くと揺れる床の上にいる。

波音が周囲を取り巻いていた。一定の波音とともに床が揺れる。船の上にいるのだ、と分かった。

床が大きく一方向に傾ぐ。

もう一度反対方向に揺れてから、安定して左右に揺れ始めた。

船が動き出したと気付いた。影島から 故郷から遠ざかつて行く！

「止めてください！ 島に戻して！」

立ち上がり叫んだ僕を、周りにいた大人たちが押さえ込んだ。なおも叫び続けようとしたので、口に布を噛まされて塞がれた。

耳元でユインの声がした。

「ご無礼をお許しく下さい。あなたが舌など噛まれて、お怪我をされては大変です。」

言いながら、彼はさらに後ろ手にした僕の手を布で固く縛った。

その間も船は無情に揺れ続けていた。故郷の島が遠くなる。もう戻ることは出来ないのだろう。無力感が全身を覆い尽くした。もはや泣くことしか出来なかった。情けないけれど僕はまだ子供なのだ。圧倒的に力の差がある大人たちに取り囲まれ、自分が完全に無力であることを悟った時、強がっていた心は打ち砕かれた。子供らしい不安と寂しさに胸を締め付けられ、涙を流し続けた。

背後から苦しげなユインの声が聞こえた。

「そんなにお泣きになつては、お体に障ります。泣く必要などないですよ。我々は……ティオンは、あなたに危害を加えるつもりはないのですから」

腹が立って声のした方へ顔を向けた。

危害を加えるつもりはない？ これのどこが“危害”ではないの

だ？ 先生を殺し、僕の故郷と自由を奪って。

目隠しをしても睨みつけた気配が伝わったのだろうか。ユインの声が心なしか弱くなった。

「我々はあなたをお迎えに上がっただけです。本来、あなたがいらつしやるべき場所へお帰しするため。ダイ教授が亡くなられたことは……まことに残念ですが、あれは運命のようなもの。おそらくこうなることは始めから決まっていたのです」

“運命”と言った時のユインの声には絶望的な響きがあった。

気持ちが悪くユインから顔を逸らした僕の肩に、彼の手が載せられた。そして彼は内緒話をする時のように僕の耳元で囁いた。

「実は、ダイ教授はあなたを外国へ連れ去る準備をしていたのです。ご存知でしたか？」

動揺を抑えて僕は首の仕草で否定した。考えれば度々、先生が外国での新しい生活の話に触れることはあった。あの誕生日の朝もそうだった。けれど現実の計画として話されたことは、一度もなかった。

「ご存知なかったのですね、とユインが息を吐く。

「あなたを十五歳で本国へお戻しすることは、ダイ教授と我々との以前からの約束でした。ところがダイ教授は、密かに、外国へあなたを連れ去る手配を進めていたのです。これは国家に対する裏切り行為、反逆罪です。教授の計画を察知した我々は、始め、通信で警告を發しました。けれど教授は黙殺した。そこで止むを得ず、このように野蛮な方法で島に潜入したのです」

何を言っているのだろう、と思う一方で、薄々真実を悟っている僕の心が騒いだ。

ユインの言う“反逆の罪”とは、海に流された孤児を拾って、こつそり育てていた老人の同情心を指すのではない。

その反逆行為とは僕の知らない過去を前提とするもの……国家を確実に傷付けるもの……そして僕の信じた全てをも覆すもの……、つまり、

「ダイ・アイデウは、あなたを外国へ連れ去って傀儡かいらいとし、新しい国を建てるつもりでいたのですよ」

塔で見た映像を思い出す。

映像の中で先生は赤子を抱いていた。

数人の男たちが彼に託していった赤子だ。男たちはあの時、言った。

“ダイ。頼んだぞ”

布に包まれた赤子の髪は金色だった。

映像を見た時に直感したことを、今、確信する。

あの赤子は、僕。

自分は海辺で泣いていた孤児ではなかった。寂しい老人に拾われ、愛情を注がれて育ったのではない。老人は僕を任務で受け取り、何らかの考えを持って育てたのだった。

では、僕は。

僕とは、誰だ。

混乱を起こしかけた僕の肩を支えるユインの手に力が籠った。彼は低い声で、ゆっくりと発音した。

「ご無事で何よりです。我が国家の光、アン皇子」

……運命と呼ぶものがあるとすればそれは厳格な債務でしかない。過去の選択の果実を未来に受け取るという、決して反故ほんごには出来ない債務だ。

僕の債務はこの時代、この場所に生まれてしまった過ちで生じた。犯した過ちは償わなければならない。

世界に付けられた傷は必ず修復されなければならないのだ。

自らの運命を知った後は涙も流れなくなった。ただ呆然と揺れる床の上に転がっていた。多くの嘘と答えに踏みにじられた心が感覚を失い始めていた。心が小さく固まり冷たくなっていく。

口の覆いを解かれた後、僕は一つだけユインに質問した。

「アンという名は先生が考えて付けたのでしょうか？」

しかし最後に縋りついた希望も、ユインの少し悲しそうな声で切り刻まれたのだった。

「アンとは、古代の言葉で“一つの星”。すなわち皇位を継ぐ、ただ一人の“皇子”の象徴。我が国では、代々皇位継承者に付けられる名です」

## 第四話（9）

覆いを解かれた瞳に映ったのは跪く人々の姿だった。

「お待ちしておりました！ 我らが皇子」

訓練された大合唱が僕を包む。

後ろ手に縛られ、追いつてられて歩いている罪人のごとき僕へ、立派な服を着た大人たちが頭を下げている様は滑稽だ。

「即位式など要らん！ 今、この場で、皇子は皇帝となる！」

いつの間に僕の前を歩いていたのだろう。ティオンが高々と片手を上げて宣言した。

どおお……と人々の間からどよめきが湧き上がった。

「アテラン二十八世！」

「二十八世、ばんざい！」

新皇帝に平伏す人々は歡喜の涙を流していた。だがその涙の奥に、怒りの光が垣間見えたのは気のせいだろうか。

本国の地を踏んだ感慨はなかった。

船から降りてしばらく目隠しのまま歩かされた後、ようやく目の覆いを解かれた。そこは天井の高い巨大な建物の中で、幅広い廊下の両側に、大勢の人々が整列し跪いていたのだった。

船から歩いて来た道の、足に触れる感触は固く冷たかった。風を感じることもなかった。船着場からここまで建物の内部を通って来たようだ。

あれほど憧れた本国。

この地の土を踏むことを切望していたのに、土に触れることはおろか風を感じることもさえ出来なかった。

廊下の片側の、透明な壁越しに見えるのは、高い塀に囲まれた緑の庭と青空だけだった。

景色を見ることを諦めた僕はうつむいて長い廊下を歩いた。やがて人の列が途絶えた。顔を上げて見回すと、前を歩くティオンと、背後に付き従うユインの姿しかなかった。

「ここは皇族の方々と、側近しか立ち入ることの出来ない領域です。私はあなたのお世話係として出入りさせていただきます」

ユインが僕の耳に囁いた。

僕はティオンの背中を見た。皇族と側近しか立ち入ることの出来ない領域？ では、僕の前を堂々と歩いて行くこの男は、皇帝以上の位にある者なのだろうか。

ユインは僕の疑問に気付いたはずだが、その答えに触れることはなかった。代わりに厳かな監禁宣言をした。

「あなたは今日からこの宮廷でお暮らしいただきます。我が国家の光として。天にお隠れになる日まで」

この時、心の隅ではまだ何もかもが嘘であればと願っていた。

誰かが手を打って、「こんな馬鹿らしい劇は終了だ」と告げてくれる瞬間を待っていた。

しかしついに誰も劇の終了を宣言してはくれなかった。

僕は自分が皇子の生まれだと本心から信じたわけではない。塔で見た映像は、僕が浜辺で泣いていた孤児ではなかったことを証明した。それでも僕の父親が皇帝だと示す場面はなかったのだ。幼い頃から聞かされた先生の話が嘘だったことは確かだが、ユインの話も作り話かもしれない。

けれど作り話だとしても、自分がこの陳腐な劇の、最も愚かしい“皇帝”という役に選ばれたことは現実なのだった。

選ばれた限りは、死ぬまで役を降りることは出来ないのだろうか……。

この数日で僕は諦めを学習していた。圧倒的な力や、覆すことのできない現実の前では、心を凍らせて感覚を鈍らせるしかない。だ

から淡々と目の前の展開を眺めた。広い部屋へ閉じ込められ、輝く薄い衣を着せられて、身に合わない大きな椅子に押し込まれた。その間一言も声を発することなく、無抵抗に従った。

そんな僕をテイオンは薄笑いを浮かべながら見ていた。

「美しい人形の完成だ」

自分が創作した芸術作品のつもりなのか、彼は満足気に呟いて皇帝の姿を堪能した。

それから、つかつかと真っ直ぐこちらへ歩いて来ると、指先で僕の顎を持ち上げて無遠慮に顔を観察した。ユインを振り返って叫ぶ。「見ろよ、この顔！ 母親にそっくりだなあ！」

ユインはぎよつとして青褪めた。

「陛下に対して、そのようにご無礼な言動は慎まれますよう」

深く頭を垂れて諫めたユインを、テイオンは鼻で笑った。

「生意気な口をきく。お前も偉くなったものだな。まあいい、この麗しい皇帝様に免じて赦そう。しばらくは慎んで上品に振る舞ってやるよ」

そしてわざとらしく僕へ向かってお辞儀をし、高笑いを残して部屋を出て行った。

ユインが小さく溜息を吐いた。じつと見つめていると、視線に気付いた彼が僕を見た。目が合い、すぐに逸らされる。うつむいたユインの口元から細い声が聞こえた。

「このたびは数々のご無礼、どうかお赦してください。これも全て、あなたのため。国家のため……」

ユインの声は小さくなり消え入った。

身じろぎもせず黙っている僕に、彼は思い出したように言葉を繋いだ。

「さぞお疲れのことでしょう。寝室へご案内します。それともお食事なさいますか。この本国では、影島で召し上がっていらしたような模造品ではなく、本物の肉や魚がご堪能いただけますが」

「その前に」

僕は彼の言葉を遮った。自分でも驚くほど冷めた声だった。

「説明してください」

ユインが目を大きく開いてこちらを見た。僕が声を発したことから、その声が冷めていたことが意外だったのだろう。

「説明？ 何をでしょう」

「全てです。特に、ティオンのことを。あの男は何者なのですか？」

ユインは瞬きし、それからまた目を伏せてしまった。僕は食い下がった。

「ティオンとはどういう立場にある者なのですか。皇帝より先に立つて歩き、皇族しか立ち入れない領域に堂々と出入りしているあの者は。それに、無礼な態度。僕が本当に皇帝だとすると、あのような振る舞いが許されるものなのでしょうか？ 僕は、レイリア皇国の皇帝とは、もっと丁重に扱われるものだと思っていた。そのように先生に習いました」

ユインはうつむいて答えを躊躇した。それでも答えを待っていると彼は決意の顔を向けた。

「ティオン様は皇族のお方です。皇位継承者の兄君。……つまり、あなたのお兄様です」

告げた彼の瞳が、底まで冷たい青に光った。

#### 第四話（10）

「先帝が崩御されてから長い年月が過ぎました。二十八世となる皇子の行方は知れず、我が国は光を失うことになった。」

この暗闇の十五年間、執政として我が国を支えてきたのが、ティオン様です」

うつむき加減で歩き回りながらユインは話し始めた。彼の暗い声と緩慢な足音が室内に響く。

「かつて先帝には四人の皇子がいた。」

「ご世継ぎとしてお生まれになった最初の皇子、アン様は病で亡くなられた。」

その次の皇子レン様は、反乱軍を征する戦で亡くなられました。」

そしてその次の皇子……ティオン様は」

ユインの灰色の長衣の裾がふと止まった。彼は立ち止まり苦しげに僕を見つめていた。僕が見返して先を促すと、彼は吐き出す息とともに言った。

「廃嫡はしやくされています。反乱分子と関わっていたかどで」

「反乱分子？」

聞き返した僕にユインは頭を垂れ、かろつじて聞き取ることに出来る小さな声で告げた。

「反乱を起こしたのは我々、大学の学生たちです」

彼の肩は微かに震えていた。震えながら先を続ける。

「学生たちは誰に指揮されることもなく自ら反乱を起こしたのです。しかし、彼らの教師であったダイ教授は、反乱分子を育てた者として責を負うことになりました。そしてそのダイ教授は、かつてティオン様の家庭教師でもあった。ティオン様は反乱に加担したわけではありません。むしろ、大学校に潜り込んで学生を抹殺し、反乱を鎮圧した功績者です。しかしながらダイ教授の教えを受け、大学校

の学生たちと友人関係にあったティオン様を、皇位につけるわけにはいかないと二十七世はご判断されたのでしょうか。ティオン様は、ご世継ぎの候補からはずされました」

もう何を聞いても驚くことはないと思っていた僕の心が、またゆるりと揺れ始めている。

あの残虐な男が僕の兄。僕はあの男と血を分けた。

先生は反乱組織の教師だった。反乱の首謀者として殺されても仕方なかったところを救われ、昨日までティオンによって保護されてきた。

ではいつたい、誰が僕を守ってくれ、誰が先生を殺したことになるのか。

僕の憎むべき相手は誰なんだ？

混乱して吐き気がした。ユインが嘘を話しているのかもしれないと思った。けれどこの男が最初から最後まで作り話をしているわけではないと、僕は知っていた。

塔で見た映像とユインの話が繋がる。

無抵抗に斬られる学生たちの悲鳴、ティオンの振り下ろす剣の鈍い光、宙に舞う血しぶきの赤。

あれは過去の大学の映像だったのだ。

かつて“反乱”を起こした学生たちが、ティオンによって処刑される場面。

「その直後に、あなたがお生まれになったのです。アテラン様」

力強い声で言われ、はっと顔を上げた。

僕の目の前にユインの眼差しがあった。彼は熱を帯びた声で言う。

「あなたは先帝の最後の御子です。あなたがお生まれになってすぐ、先帝は崩御された。ですからあなたお一人だけが、我が国に残され

た希望なのです」

今度は僕がユインの眼差しから目を逸らす番だった。納得出来ない考えが喉元に留まっていた。何に納得出来ないのか分からないまま、疑問を口にする。

「何故……？」

「は」

「何故、反乱分子の教師だったダイ先生のもとへ、僕は預けられたのでしょうか。そもそも何故、僕は隠れていなければならなかったのですか？」

再びユインの瞳に冷たい幕が降りた。彼は感情のない声音に戻って言った。

「あなたのお命を狙う者がいたからです。ダイ教授に預けられたのは、ティオン様のご判断です。影島で幽閉される身となったダイ教授のもとにいらつしやるとは、誰も想像出来ない。私もでさえ、つい先日まで存じ上げなかったことです。賢明なるティオン様は、この手段が最も安全とお考えになったのではないのでしょうか」

「僕の命を狙う者とは？」

「預言者マルロです。しかしマルロはもうこの世にはおりません。最後まであなたが皇帝となることを反対していたマルロとその弟子たちは、あなたが十五歳になられた日の朝、処刑されました。これでもうあなたに反対する者おりませんので、ご安心ください」

「……」

言葉を失うしかなかった。悪寒が背筋を走る。堪えて唾を飲み、質問を続けた。

「マルロが、僕が皇位につくことに反対していたのは何故ですか？するとユインは視線を宙に泳がせた。

「さあ。あのような者たちの感覚は私には分かりかねます。“日食に生まれた御子だから不吉だ”、と主張していましたが。彼らの感覚は曖昧で当てにならないものですから、今の宮廷では本気で信じる者おりません」

僕はもう一つ唾を飲み、訊いた。

「その日食とは本当にあつたのですか」

深い理由で訊ねたわけではない。何気なく思い付いて口にしただけだった。しかし、その問いに返って来る答えはなかった。

冷たいユインの瞳が僕を見下ろしていた。彼は淡々と言った。

「……少し、お話が過ぎたようです。……お疲れでしょう、寢室にご案内します。宮中の些事については明日から少しずつご説明することに致しましょう」

ユインとの間に厚い幕が降りてしまった。これ以上、僕には過去を探ることは許されていないようだった。

寢室に連れて行かれ寢台に横たわると、気を失うように眠りに落ちた。ユインが言う通り僕の心と体は傷付き、疲弊しきっていた。

朝までずつとうなされていたように思う。

瞼の裏で幾度も、血と肉が散る光景が繰り返された。生死がどろどろに融け合った赤黒い渦の底へ、引きずり込まれる夢に苦しんだ。どうしてこの運命に生まれ落ちたのだろう。運命から逃れることは出来ないものだろうか。

人は誰かが創った筋書きに閉じ込められ、意思を失って従うことしか出来ないのか。

明け方、青い薄明かりの中で目覚めた僕は、ぼんやりそんなことを考えていた。恨むべき対象を失い、逃げるべきなのかここにいるべきなのかも分からない。信じるものも、目指す所も、自分の意思すら分からなくなってしまった。

ただ僕は四方を分厚い壁に囲われた空間に閉じ込められている。ここで大人しく息をするだけで満足していれば生きてはいられるようだ。

命を得る代わりに、絶望を負わされたのだった。

#### 第四話（11）

朝の光が部屋に満ちてきた。

目が冴えた僕は寝台の上に身を起こし、室内を観察した。

石を積み重ねて造られた壁は湿り気を帯びて黒ずんでいる。床は平らで、滑らかに磨かれていたが、こちらも灰色の石で出来ていた。扉は分厚い木。人の手で二つに開く形の扉だ。

寝台も木で組まれた粗野な造りだった。布団は動物の毛の織物だろうか。重くて固い手触り。影島で使っていた、軽くて薄い不思議な布とはまるで違う。

ここの素材の全てが素朴で、現代（東国の時代）の僕にも馴染みのある物だった。

違う時代に来たかのような。時代を遡ったか、あるいは進んだと言うべきか……。

扉が叩かれた。

鼓動が跳ね上がる。怯えを隠して返事をした。音もなく扉が押し開かれ、廊下に立っていた男が頭を下げた。

「朝食をご用意いたしました。どうぞ、いらしてください」  
ユインだった。昨日と同じ長衣を着ている。

彼の後ろをついて歩きながらその背中を眺めた。日当たりの良い廊下で、着物に織り込まれた金糸がちらちら輝いた。

僕は薄い白金の衣を羽織わされていた。布を肩と腰で軽く止めるだけの、肌の露出の多い衣だ。ちょうど暑い国に住んでいたアテンの衣によく似ている。ここは寒い地だけれど、クオートの素材が全身を暖めてくれるのだろう、肌を出しても心地良かった。

対照的にユインの着ている長衣は分厚い。植物の繊維で織られた衣を幾重か着込み、腰の辺りを紐で結わえたその衣は、どこか東国

の着物に似ている。暗い灰色の長衣は喪服のように見えたし、男としての人生を棄てて帝に仕える役人の官衣のようにも見えた。

「こちらです」

ユインが一つの部屋の前に立ち止まって頭を下げた。扉の向こうではティオンが待っていた。

ティオンは椅子の上に肩膝を立て、頬杖を突いてこちらを見ていた。今朝は鮮やかな朱色の短衣に、袴ズボンをはいている。短衣には過剰な金の装飾が施されていて目に眩しい。日に輝く金髪がさらに派手を加えていた。

金髪の下の青い瞳が吊り上がった。鋭い叱責が僕へ飛ぶ。

「遅い。皇帝たるもの朝陽より先に目覚めねばならん。明日からは俺より早く起きろ」

下品な命令口調だった。初めて会った時の慇懃な言葉遣いは何だったのだろう。兵士たちの前での装いに過ぎなかったのか。少し気分を害したが、無言で頷いた。従うしかなかった。ここでは僕の“兄”であり“執政”であるティオンが、最も強いのだろうから。

細長い卓の端と端に、兄と弟が向かい合わせで座ることになった。ティオンは容赦なく僕を観察している。しかし僕は恐ろしくて彼と目を合わせることが出来ず、視線を他へ移した。

壁際にはぐるりと十数人の男たちが立ち並んでいた。警護の者たちだろう。僕やティオンを守ってくれているのだ。しかし腰に剣を帯び、鋭い目つきで部屋を監視する態度には異様な圧迫感があった。緊張で僕は早くも吐き気を覚えた。

そこへ赤い物を載せた皿が運ばれて来た。よく見るとそれは小動物の形そのままの肉塊だった。

ティオンは迷わずその肉塊に喰らいつき、噛み千切って飲み込んでいる。

僕にとっては未だかつて見たこともない生臭い食べ物だ。赤い塊はティオンに惨殺された人々の肉片を思い起こさせた。込み上げる吐き気を必死でこらえる。

「どうした。顔が青いぞ」

ティオンが顔を上げて僕を見咎めた。黙っていると血で赤く染まった彼の口が大きく開いた。

「何故、食べない？ 獲ったばかりの兎の生肉だ。これほど旨いものはない。新鮮なうちに食べ」

僕はうつむき、「無理です」と答えた。小さい声だったが、ティオンの怒りをかき立てるには充分だった。

「なんだと」

「肉は……食べられません。食べたことがないから」

ティオンは激昂し椅子を蹴って立ち上がった。

「甘えたことを抜かすな！ クオートで育った軟弱者めが。お前は皇帝だろう。生き物の血肉を喰らわねば、世界を制することは出来んぞ！」

叫び、つかつかこちらへ歩いて来たと思うと、彼はいきなり肉をわしづかみにして千切った。そして僕の顎を持ち、口をこじ開け、肉片を無理やり押し込んだ。

口いっぱい生臭い血の薫りが広がる。

ティオンが口を押さえているので吐き出すことも出来ない。肉から染み出した汁が喉の奥へ流れた。こくりと、喉が勝手に動いて飲み込んでしまった。生温い物が喉から腹を汚していく。

たまらず身をよじってティオンの手を振りほどき、吐いた。

何も入っていないはずの腹から何度も吐き気が込み上げ、床へ吐き続けた。

周囲は不気味に静まり返っていた。十数人の警護兵とユインがこの様子を見ていたが、誰も助けてはくれなかった。床に膝を突いて苦しむ僕に、冷たい視線が降り注いだ。

ティオンは唾を吐き棄て自分の席へ戻った。それから苦しむ僕を眺めながら悠々と食事をたいらげ、部屋を出て行った。

ティオンの足音が聞こえなくなってからようやくユインが僕を助け起こした。

「大丈夫ですか」

例の感情のない声だった。

「後ほど粥かゆをお持ちします。少しずつ、ここでの食事に慣れていただけましょう」

形だけのいたわりに背筋が凍り付く。彼が僕の背をさするたび、空恐ろしくて鳥肌が立った。

僕は悟った、これから自分がどんな目に遭っても助けしてくれる者はいないのだと。ここではティオンが君主であり、神なのだった。彼の行為を止められる者はいない。たとえ彼が僕を喰らおうとしても。

自分は皇帝の名を与えられた兎に過ぎない。ティオンに飼育され、捕らえられ、今は料理される時を待つことしか出来ない身だ。一日でも長く生き延びるためには、せいぜいティオンのご機嫌を損ねないよう注意しなければならぬ。

惨めだった。

床に伏して汚れにまみれている自分。惨めでたまらない。人間ではなくなくなってしまった気がした。

けれど怒りも覚えなかった。屈辱に慣れ、堕ちていく。始めから人間ではなかったかのように、自分には屈辱を与えられることが相応しいように思えた。

男の姿を見かけたのはその惨めな日の午後だった。

自室で、ユインが持って来た穀物の煮汁を舐めていた時だ。

開け放した扉の前を、ふと赤い光が過ぎった。気になって顔を上げた僕の目に、翻る赤い外套マントと、こちらを見る男の瞳が映った。

顔をはつきり見たわけではない。だが男の視線は強烈な光を放ち、僕の瞳に焼き付いた。

時が止まったように感じたがそうではなかった。男がこちらへ視線を投げたのは一瞬に過ぎなかった。彼は立ち止まることもせず、

すぐに前を向いて足早に通り過ぎて行った。

「あの男は？」

僕は傍らのユインに訊ねた。僕がここへ来て人の名を訊ねたのは初めてだったので、ユインは微かな驚きを見せた。

「誰です？」

「ほら、今、そこを通った男。赤い外套を着ていた」

ああ、と彼は呟いた。

「ラウス・ロウです」

「ラウス……ロウ」

「発音しにくいでしょう。あの男は外国から来た者です。大陸のほうから海を渡って来たようです。もとは貴族の出だと言いますが、実際はどうだか。素性の分からない流れ者ですよ」

「そんな男がどうしてこの宮中に？」

「ティオン様に気に入られ、ティオン様の身边を警護しているので。本日、食堂にいた警護兵たちも皆、あの男の家臣です」

「ティオンはどうしてそれほど外国人を信頼しているのだろうか」

僕の問いにユインは少し考えてから続けた。

「ティオン様は素性など気になさらず、才能さえあれば誰でも重用されるお方です。ラウス・ロウという人物にはティオン様がお認めになる何かがあったのではないのでしょうか。……それに、近年は暗殺未遂の事件などもありまして、ティオン様は国内の人間に疑いをかけることが多くなりました。とりわけ外国の者に信用をおかれているのは、そのせいかもしれません」

「そうか。……ラウス・ロウ」

ユインの話は上の空に聞いていた。男の素性が知りたかったわけではない。ただあの強烈な瞳が気に掛かり、名を記憶しようとした。何故だろう。

恐ろしかったせいかもしれない。

後で分かることだが、男は殺気を秘めていた。閉ざされた凍土のごとき瞳の奥に、固い決意を隠していたのだった。僕が男を気にし

たのは確かにその殺気を感じ、不吉な予感を覚えたためでもあった。だが、それ以上に、僕は自分の運命の変化を感じ取っていたように思う。

目と目が合った時、瞳の奥でお互いの魂が衝突し、光の粒子が弾け飛んだ。それはお互いを結び付ける決定的な作用で、遙かな未来まで波を及ぼした。

刹那、僕たちの運命は定まったのだ。

#### 第四話（11）（後書き）

東国の時代： この“前世の記憶”を追体験している主人公が、  
実際にいる時代です（前作の舞台）。 だいたい2000年ほど前を  
想定しています。

## 第四話（12）

その朝、ぱたぱた、という音で目が覚めた。

乾いた地へ雫が落ちる音だ。雨が降り出したのだろうか。

身を起こし、寝台の上に立てば窓に手が届く。壁をくり抜いただけの窓に手をかけ、伸び上がって僕は外を覗いた。

空は思いのほか青く晴れていた。淡い雲が空を流れているだけで、雨雲の影はない。不思議に思っただけ下を見た。

赤い模様が目に飛び込んで来た。中庭の白い石床に描かれた、鮮やかな赤の丸い点、点……。

放射状の点が多く集まる方へ視線を移す。そこに三人の男たちが立っていた。彼らの輪の中心に、人が倒れている。赤い点はその体から飛び散ったものと分かった。倒れた体の下から、赤い染みが見るみる大きく広がっていく。

生温い風が吹き上がって来た。

風につられるように男たちがこちらを見上げた。

血に染まる剣を持って立つ男と目が合った。　　ラウス・ロウ。

ふつと体の力が抜けて座り込んだ。腰が抜けたのだった。歯の根が合わない。必死で歯を食いしばり喉元に昇る恐怖を堪えた。

宮廷という牢獄の中で日は無為に過ぎていた。

悲しみはとうに消えた。感覚も鈍り月日を数えることが出来なくなった。

ティオンと顔を合わせることがほとんどなかったのは救いだっただけ。最初の日以来、僕はティオンと伴に食事をすることを拒絶していた。幸い、ティオンは何も言っただけで来なかった。僕がここで大人しく存在さえしていれば、食事を伴にしなくとも文句はないらしい。

皇帝としての仕事は、僕には何も与えられなかった。僕に許され

ていたのは宮廷や庭を歩き回ることでだけだった。だが外を歩き回って、ティオンや彼の警護兵たちと顔を合わせることは恐ろしい。必然、僕は自室に籠ることが多くなった。

食事は部屋へ運ばれた。湯浴みの湯や着替えも部屋で用意された。それは孤独だが苦しみのない日々だった。

粥から始めた食事にも次第に慣れ、野菜の煮たものや、魚まで口に出れるようになった。

しばらくして、食べ物を目指と感じられるようになった。汚れも体から出た。少しずつ、肉体の世界に降りて行く感覚があった。そのぶん体は重くだるくなった。

話し相手はユインしかいなかったが、彼は必要なこと以外を喋るうとしない。

拷問的な退屈と孤独を僕は眠ることで紛らわせようとした。

日がな一日寝台に寝そべっていることが多くなった。考えることもやめてしまった。このまま思考を失い、動物のように食べて寝て、一生を夢の中で過ごすことが出来たら幸福だろうと思っていた。ぬるま湯の中でゆっくりと死んで行くのもいいかもしれない、と思いはじめた。

そんな頃の朝、あの惨劇を見たのだ。

「ティオンの犬」

廷臣たちの間でラウス・ロウについて囁かれる陰口を僕は耳にしたことがある。

彼は密かに“ティオンの犬”と呼ばれていたのだった。いつもティオンの背後に付き随い、その命令を忠実に実行したからだ。

既に何人も処刑しているという。

僕が見た朝の光景も、ティオンの命を受けてラウス・ロウがなした処刑の場面だった。

殺された男はコオスという廷臣だ。学者出身の男で、ティオンの

相談に乗って彼を支えて来たそう。僕自身はコオスと話を交わしたことがなかったが、以前に廊下で見かけた時は優しい眼差しをくれた。物静かで真面目な印象があった。

そのコオスが殺されたのは何故なのか。誰もはっきりとした理由を知らなかった。

陰で囁かれていたことには、コオスは「余計なことを言い過ぎた」のだという。ティオンの相談役だったコオスは、年長の教育者としてもティオンに接していた。誰もがティオンを恐れて口を噤んでいた宮中で、コオスただ一人、正直に彼の政策を諫めていたらしい。それがティオンの癪にさわったのだ。要するにティオンは、うるさい説教を言う年寄りがわすらわしくなった。ただそれだけの理由で殺したのだった。

しかしティオンがその本心を明らかにすることはなかった。それどころか、表向きにもコオスの罪状を公表しなかった。

常にティオンは理由を告げず刑を執行する。一時前にティオンと談笑していた相手が、次の瞬間にはこの世にいないことさえある。いつ、どんな理由で処刑されるか分からない。生死はティオンの気分次第。だから皆、ティオンが恐ろしい。

皆が恐怖で縛り付けられている。ただ一人の男が生み出す恐怖に奇妙なことだった。

処刑を見た日から、僕は部屋を抜け出して宮中を探り歩いていた。思考を失っていた頭がまた少しずつ動き出している。白い石床に散った赤が、眠っていた僕の頬に平手打ちを喰らわせたようだ。

「なあ、ユイン」

久しぶりにユインを呼びつけて話し掛けた。

「どうしてコオスは死ななければならなかったのだろう。彼の罪状は？」

ユインの頬がひきつった。まさかそのようなことを訊かれるとは思っていなかったのだろう。僕も訊ねてはいけないことだと分かっている。返って来る答えも分かっていた。

「私は存じ上げません。賢明なるティオン様のご裁断です。コオスには何か重大な罪があったのでしょうか」

「そうか。そうだろうな」

しばらく迷い、勇気を奮って僕は言った。

「ではティオンに訊くしかない。ティオンを呼んでください」

ユインは啞然と口を開けた。

「それは……」

「弟が兄を呼びつけても、来てはいただけないか？ では、僕のほうから行く」

ユインの顔は青褪めた。彼の動揺と恐怖が僕へ伝わる。

僕も恐ろしかった。しかし衝動が優った。心の底へ閉じ込めたはずの怒りが、またじわりと染み出して僕を動かしている。

ティオンは執務室で廷臣たちと話をしていた。

彼の執務室は宮廷の中央にあり、僕がいる“皇帝の間”より遙かに広がった。扉を押し開け、その広い部屋に飛び込んだ時、驚いた廷臣たちの視線が僕に集中した。ティオンも瞬きして僕を見ている。彼の背後にはラウス・ロウの部下たちが剣を携えて控えていた。

覚えず足がすくんだ。

「これはこれは。おめずらしい。陛下が私にお顔を見せてくださるとは。いったいどうされました？」

廷臣たちの前だからだろう、わざとらしく慇懃に言ってティオンは口端を吊り上げ笑った。恐怖が蘇り、喉が渴いた。細い声を絞り出す。

「お……お兄様、」

初めてそう呼んだのだった。呼びたくはなかったが恐怖が僕を卑屈にした。廷臣たちは仰天して顔を見合わせている。

「お訊ねしたいことがあります」

ティオンは冷ややかに僕を見返した。

「そのように呼ぶ必要はありません。兄ではあっても私は陛下の臣僕。私のことは呼び棄てて構いませんよ。……それで？ 私にご下問とは、何でしょう」

「コオスのことです。彼が、どうして処刑されたのか、知りたい」  
廷臣たちが息を飲む。僕を追って駆けて来たユインも、背後で慄然と立ち尽くしている。

皆がティオンの怒りの爆発を覚悟した。けれど意外にもティオンは破顔した。

「なんだ、そのようなことですか。お答えしましょう。コオスは大変な悪人だったからです」

「悪人？」

あっけに取られ、次の瞬間、怒りを覚えた。

「僕は小さな子供ではないのです。きちんと説明してください。彼はどのような悪いことをしたのですか」

「ほう。子供ではないと？ それではきちんとお答えしましょう。

彼は、少年を食したのですよ」

意味が分からぬ僕は言葉をそのままに受け取り眉根を寄せた。

「人肉を食したのですか」

するとティオンは心から可笑いというように笑い出した。

「あなたはさつき、子供ではないとご自分で仰った。子供ではないなら分かるはずだ。コオスという極悪人は、嫌がる少年を無理やり組み敷き、肉欲を満たしたのです。それもそのような対象の奴隷を、ではない。貴族の子をです」

周囲は静まり返っていた。

ティオンは椅子の肘掛に肘を付き、理解出来ずぼんやりしている僕を楽しそうに眺める。

「分からないはずはないでしょう。あなたがダイにされていたことですよ。あなたもずっと、ダイにそうされていたのでしょうか？」

廷臣たちが一斉に僕を盗み見てから、視線を伏せた。

「何……のことです」

「あなたもダイに肉欲を教わっていたのだらう、と申しているのです。肉の愉しみというものをダイから学んだはずだ」

はつきりと意味は分からないながらも僕は、ティオンの表情から本能的に侮辱を感じ取った。

「先生は、何も。僕が嫌がるようなことは何もしなかった」

「あなたが嫌かどうかは存じませんが。子供を騙して自分の肉欲を満たそうとする者は、ゴミだ。死んでいい」

“死んでいい”。

その言葉はコオスではなく、ダイ先生に向けて放たれたのだった。海に落ちて行く先生の記憶が胸の奥底から引きずり出された。凍り付いていた怒りの芯が弾け、心の中で激しく鳴り響いた。

音を立てて血が上昇するのを感じた。頬が火照り、全身に震えが走った。

「ティオン！ あなたは大嘘つきだ！」

気付くと僕は叫んでいた。

「嘘、つき？」

ティオンの声は恐ろしく冷めている。

「そうだ。嘘つきだ。コオスはきつと悪いことなど何もしていない。ティオン、あなたはコオスに、本当のことを指摘されたに過ぎない。自分にとって都合の悪い、嫌なことを言われただけだろう？ ちよつと説教されたから邪魔になって、ありもしない言いがかりをつけて殺したのだ」

ティオンは何も答えない。

周りの者たちは蒼白な顔で僕を見ていた。だが誰も止めには入ることはなかった。

「あなたはいつもそうだ。邪魔だから殺す。自分にとって都合が悪いから殺す。しょせん、その程度の、狭量な人間なのでしょう。先生も……先生のことも邪魔だから、殺した。先生が僕を操り人形にしようとしていたなんて、やはり嘘だ。あの人に濡れ衣を着せて、殺したんだ！」

どつと涙が湧いて僕はその場へ伏した。泣きながら叫び続けた。  
「兄よ……あなたは汚い。とても、とても汚い人間だ。僕はあなたと血が繋がっていることが恥ずかしい……。人殺しに言い訳をしないでくれ。肅清を、綺麗な話で飾り立てるな。もし仮に、コオスの人格が卑しかったのだとしても、あなた自身の都合のために、命を奪っていいはずがない！」

しばらく僕の泣き声だけが室内に響いた。

泣き尽くして顔を上げた僕の目に、遠くの壁際に立つラウス・ロウの姿が映った。彼は静かな瞳で僕を見つめていた。

既に廷臣たちは恐ろしさのあまり退室したようだった。ユインは紙のように白い顔で僕の傍に立ち、僕を見下ろしている。

囁くように小さな、ティオンの声が聞こえた。

「ダイ教授がお前を外国へ連れ去ろうとしていたのは、事実だよ。可哀想だが」

ティオンの声は驚くほど優しくかった。彼は幼名で僕に呼びかけた。「アン。お前は、賢い子だ。だからこそ私はお前を愛しているのだ。……しかしお前は、あまりにも無知だ。憐れなほどこの世について何も知らない」

愛。

思いがけない言葉に呆然とした。

「さっきお前が自分で言ったように、お前はもう子供ではないのだぞ。そろそろ、大人にならなければならぬ」

ティオンの声の優しさに僕は新たな悲劇の臭いを嗅ぎ取った。そしてその悲劇は僕自身の身に降り注ぐのだ。

#### 第四話（13）

明くる日、僕はティオンに呼び出され言い渡されたのだった。

「后を娶れ」

短い命令だった。ラウス・ロウら側近たちは今日も無表情で上座のティオンの背後に立っている。下座の僕の隣に立つユインだけが、ほんの少し眉を動かした。

「結婚しろと？」

「その通りだ。相手は決まっている。私の娘、つまりお前の姪だ。明日にでも婚儀を挙げるぞ」

僕の狼狽を見て取ったティオンは口元に薄ら笑いを浮かべた。

「どうした？ 后を娶って早く子をなしてくれ。お前は、子供ではないんだらう？」

“子供ではない”と嫌味に強調する。それは昨日、自分が口にした言葉だった。“早く大人にならなければ”と言った彼の優しい声を思い出して血の気が引いた。

「お待ちください。畏れながら、婚儀は皇帝が十八歳になられてからと代々決まっております。陛下はまだ十五歳。今婚儀を進めるのは伝統に反するのではないでしょうか」

意外にもユインが跪いて進言した。しかし勇氣ある進言をティオンは一笑に付した。

「伝統だと。それがどうした。陛下が、“自分は子供ではない”と言ったのだぞ。ならば伝統など覆し、早々に婚儀を挙げていただくべきだ。そうだろう、アテラン様」

ティオンが僕へ瞳を動かした。冷たく底意地の悪い瞳だった。

「僕は……」

ようやく口を開いた僕に皆の視線が集中する。

「僕は、結婚などいたしません」

「何」

唾を一つ飲み、真っ直ぐティオンを見て答えた。

「結婚などしないと云ったのです。我が国では、結婚する者など少ないと先生から聞いています。男も女も、異性でも同性でも、伴侶を見つけたら“ともに生きる”約束を交わすだけなのだ。肉体の形や、地位や年齢や、容姿など関係ないはず。まして人から押し付けられて見ず知らずの相手と結婚するなど、野蛮です。罪なことでもあるでしょう。人間は、心と心で結ばれるべきなのだから…」

「だから。何だ？」

ティオンの声の冷たさに臆しながらも僕は言い切った。

「だから僕は押し付けられた結婚などしません。運命の伴侶を見つけれぬのなら嬉しいですが、もし出来ないのなら、生涯独りで過ごすつもりです」

「ほう」

予想していたことだがティオンの声が殺気を帯び始めた。彼は瞳を細めて僕を見下ろした。

「それで？ お前は自分のことを、人間だと思っているのか？」

声を失った。きつと顔が青褪めたに違いない。僕の顔を見てティオンは堪え切れない様子で、くつくつ笑い始めた。

ひとしきり笑うと彼は椅子から降りて来て僕の前に立った。僕の顎を指先で持ち上げ、冷めた視線を顔に注いで言った。

「お前は人間などではない。皇帝だ」

抵抗は無駄だった。

僕はティオンの人形に過ぎない。ティオンはどのような手段を用いても僕を操ろうとするだろう。

操ることが出来なければ僕や、僕の大切な物を壊してしまうまでだ。

断り続ければ皇后がどれほどの酷い目に遭うか分からない、とい

うユインの進言に従って、僕は結婚を受け入れた。

たとえ我が娘であっても道具として用いることを躊躇しない。それが、ティオンだというのだ。

皇后のもとへ案内すると言うユインの後について宮中の廊下を歩いた。

四人の兵士たちが数歩後をついて来る。日ごろ立ち入りを許されない場所であるから、彼らは少し落ち着きを失っているようだ。

長い、曲がりくねった廊下を歩き続けた。いつしか廊下の両側はクオートの壁ではなくなり、光も失われた。ユインは壁際の柵に用意されていた灯りを手に取り、暗い廊下の先を進んだ。

しばらく歩いて気付いた。廊下は少しずつ降っているらしい。ぐるぐると螺旋状に地下へ降りているのだ。ちょうど影島の塔を地下へ掘り下げた形だ。

どれくらい螺旋を降りたろう。時間の感覚を失いかけた頃、行き止まりに辿り着いた。

そこは正四角形の小部屋だった。奥の壁を岩が塞いでいる。

ユインが指示して兵士たち四人がかりで岩を動かした。洞窟の入り口が姿を現した。乾いた冷たい空気が奥から流れて来る。

ユインは兵士二人をその場に残し、洞窟へ入った。僕と兵士二人も恐る恐る後に続く。石壁は仄かに光っていた。石自体が光を発しているらしい。クオートではない。他の発光する原石だろうか。壁が真っ直ぐに切り出されていることから、自然の洞窟ではないと分かる。おそらく、囚人を閉じ込める牢として掘られたのだろう。

ティオンに怒りを覚えて呟いた。

「僕が会いに行かなかつたから后を閉じ込めたのか？ これほど奥深くの地下牢に閉じ込めるとは。実の娘に何という仕打ちだ」

ユインは答えず歩き続ける。しばらく歩いて、立ち止まった。

「こちらが皇后の御所です」

彼が指す壁にはまた小ぶりの岩があった。指示されるまま二人の兵士が岩を動かす。四角く切り取られた部屋の入り口が現れた。

ユインは何も言わず強張った顔を前へ向けていた。

見ると、兵士たちが口を開けて立ち尽くしている。彼らの顔に浮かぶのはほとんど恐怖の表情に近い。不思議に思っただけも歩を進め、入り口から部屋を覗き込んだ。兵士たちの視線の先を見る。

そこに光り輝く衣を纏った少女がいた。

薄いクオート素材の、淡い白の光を放つ衣。

衣の下に透ける肌は白く、波打つ長い髪は黄金だった。

そして大きく見開かれた瞳は青。

「……僕……？」

鏡を見ているのだと錯覚した。それくらい、少女と僕の顔はよく似ていた。ただ向こうは丸みを帯びた少女の体を持ち、金の髪は足元まで伸びているのだった。

少女の瞳が僕のほうへ動いた。

僕と少女は見つめ合った。お互いの心が、一瞬で通い合った気がした。まるで遙か昔からの知り合いのように。

#### 第四話（14）

少女は無垢な瞳で僕を見つめていた。恐れも嫌悪もない。ただ幼子のごとく、初めて見る相手へ瞳を向けているだけなのだった。

僕のほうが恐れをなして後退った。

「どうなさったのです。皇后はあなたの姪。血が繋がっているのです、顔形が似ているのは自然なことですよ」

さあ、と言つて彼は僕の背を強く押した。

不意を突かれて僕は牢へ転がり込んだ。驚いた少女は立ち上がった。クォートの衣がさらさら僕の耳元で鳴った。

彼女は少しの間、戸惑うふうに立っていた。それから膝を折つて床に倒れる僕へ手を伸ばした。恐る恐る僕はその手に触れながら訊ねた。

「君、名前は」

しかし少女は瞬きしただけで答えなかった。

「レアです」

ユインが後ろから答えた。代わりに答えたことをなじる視線を送ると、彼は悲しげな目をして首を振った。

「この方には答えられません。声を出すことが出来ないのです」

「声を、出せない？ 何故」

「幼い頃に声を出す器官を切り取られました。また言葉もきちんと教えられたことがないので、短い単語以外は理解することが出来ません。今、我々がこうして話している会話も、ほとんど理解出来ないでしょう」

にわかに信じられなかった。

「まさか。どうして、そんな酷いことを」

「彼女は声を出す必要がないからです。レア様は皇后としてお生まれになりました。アテラン様の御子を宿すためだけに、この地上におわすのです。そのような女性が意志を持ち、言葉を発する必要な

どない、と」

「テイオンがそう言っただけで彼女から声を奪ったのか！」

怒りと悪寒が全身を駆け抜けた。言葉を奪い、意志を奪う。物としての生を強いる。体を切り刻む以上に残酷だ。人間に対する仕打ちとしてこれほど惨いものがあるのか。

「テイオンは彼女を“我が娘”と言った。実の子なのだろう。父親が、自分の子にどうしてこんな仕打ちが出来るんだ？」

「彼女だけではありません、アテラン様。我が国では多くの女性が同じような扱いを受けております。始めから子を成すためだけに存在する女性が多くいるのです」

初めて聞く話だった。再び自分の耳を疑った。

「先生からそんな話は聞いたことがない。我が国では、女性も男性も区別なく、等しい学問を受けていると聞いた」

「確かにそのような時代もありました。しかし、もう二十年も昔のことです。男女が等しく学問を受けたのはダイ教授の大学が最後でした。今では男女は正しく分けられ、女性が教育を受けることはありません。またレア様のように特別な目的で生まれた女性は、正しい道理に従い、このような処置を受けます」

淡々としたユインの声の奥に抑えた悲しみがあるのを僕は感じ取った。

「正しい？ それが本当に正しいことだと信じているのか。先生の学問を受けたあなたが。全ての人間には等しく同じ価値の魂が宿っている、と習ったはずだ」

ユインは目を閉じて答えた。

「お忘れなさい。それは古い教育です。時代が違います。我々は生まれ持った肉によって振り分けられ、相応しい運命を負って生きなければならぬ。これが地上の理。進化のための道理です。我々は地上に結びついて進化するために、正しく分類されなければならぬ」

彼が何を言っているのか理解出来なかった。問おうにも、ユイン

は目を閉じて質問を拒絶している。

僕は救いを求めて周囲を見回した。不思議そうな少女の瞳と、兵士二人の怯えた目が僕を見ているだけだった。

「誰か……教えてくれ。この国では何が起こっているんだ？ 誇り高きレイリア皇国は。皇帝アテランの、僕の国はどうなっているんだ！」

誰も何も答えない。問いは虚空に消えた。

重苦しい沈黙の中で僕はレアの元に這い寄った。冷たい手指に口付けする。

レアはそんな僕を黙って見つめるだけだ。

憐れが込み上げて目の前の肩を抱き寄せた。硬い彼女の体は、何の抵抗もなく僕の胸に収まった。その体が異常に冷たいことを知って僕は小さな悲鳴を上げた。思えば膝下に触れる石は冷たい。

「ユインよ。言われた通り彼女に会いに来た。もういいだろう。早くこの人を、ここから出してやってくれ。ここはとても、寒い」

背後から静かな答えが降った。

「それはなりません。ここがレア様のお住まいです。皇后は生まれた時からここで暮らし、死ぬまで出ることは許されておりません」  
彼女の肩を抱く腕が震えた。

僕の目から流れる涙をぼんやり見つめるレアを抱き締め、何度も叫んだ。

「かわいそうに……かわいそうに……！」

「よろしいですか」

螺旋の廊下を昇りながらユインは言った。

「皇后に会いに行くためにはこの廊下を通らねなりません。道筋をよく覚えてください。この廊下は複雑な迷路です。今、こうして戻りながら、私はこの迷路を最高度に難しく設定しています。普通の者はここに踏み込めば迷ってしまい、二度と出ることは出来ない。」

けれど、あなたなら抜けられるはず。ダイ教授の訓練を受けたあなたならば」

廊下は一筋に続いているように思えた。しかしよく意識を凝らすと迷路の穴が、そこかしこに開いているのが分かる。

「思い出すのです。ダイ教授の法を。鍵となる言葉を繋いで辿り、意識の奥へ向かうのです。明晰な意識だけがあなたを目的の場所にお連れします」

この場所はやはり影島の塔と似ていた。

塔では、鍵となる意識が映像を見せてくれた。同じように、ここでも意識の鍵が道を開いて行く。建物が人の意識を読み、鍵となる命令に応じて先へ案内するのだ。誤まった意識を辿るとたちまち道が閉ざされ、永久に抜けられない迷路へ落とし込まれてしまう。

ユインも極度に集中しているのが分かる。額には汗が浮かび、背中では緊張して硬くなっていた。

ユインのように訓練を受けた人でも気を張り詰めなければならぬのだ。普通の人間がここを通るのはまず不可能だろう。ましてあの無垢な少女が逃げ出すのは。

「着きました。さあ、光のもとへお進みください」

ユインの宣言で視界が白くなった。

そこは宮廷の中庭だった。白い石床が眩しい。

長い時を地下で過ごしたらしい。案内された時は夕だったはずが、今はもう頭の真上に太陽がある。翌日の昼ということになる。一晩以上も過ごしてしまったのか、と僕は考えて首を傾げた。それほど長い時を過ごした感覚がなかった。

考え込む僕の背後で、突然厳しい声が出た。振り返るとユインが兵士たちに何か言っている。

四人の兵士たちのうち二人は怯えきつた目で後退し、残りの二人は困惑した顔を見合わせていた。再びユインが厳しい声で指示を出す。

と、兵士二人が剣を振り上げ、逃げようと背中を向けた二人を斬

った。

赤い飛沫が散り石床に輪を描いた。どさつと音を立てて二つの体が崩れる。

痺れた頭で僕は目の前の出来事を理解しようとした。二人の兵士が殺されたのだ。洞窟の奥まで連れて行った兵士たちが。しかし、何故。

「ユイン。何をしている」

虚ろな僕の声が中庭に響いた。

昼の中庭は恐ろしく静かだった。風の音もない。剣先からしたたる血の音が、時おり響いた。ユインがこちらを振り向いて事も無げに言った。

「皇族の方々と私以外、皇后のお顔を見ることは許されておりません。彼らは皇后のお顔を見たので、殺さなければならなかったのです」

「何を言っている。見せたのはお前だろう」

「御所の岩を取り除くために、二人の兵士が必要でした。そして岩を取り除いたならば、皇后のお顔を見ないわけにはいかない」

つまり始めから使い捨てで彼らを連れて行ったのだ。

生き残った兵士たちの足が震えていた。死ぬのは彼らだったかもしれない。この宮廷では、たまたまの運で生きるか死ぬかが決まる。人の命はクズ同然。使い捨てに出来る道具に過ぎない。

「アテラン様。次回からはお一人で行くのですよ。そのために岩の扉を開けたままにし、迷路を複雑にして来たのです。私としまして、こう何人も兵士を無駄に殺すのは忍びない」

“忍びない”と言ったユインの声は乾いていて本気とは思えなかった。

その時、中庭を通り抜けた風に腐臭を感じた。

僕は周囲を見回した。高い壁に囲われた中庭からは、薄い雲を浮

かべる青空しか見えなかった。

空はどこまでも穏やかに晴れ渡っているように見える。

しかしその空の下を抜けて来た風に、確かに僕は腐臭を嗅ぎつけた。

おかしい、と発作的に悟った。

ティオンだけではない。ユインも、黙って殺される兵士たちも。

この国は誰も彼も狂っている。

今まで僕は狂っているのは宮中だけだと思っていた。たとえ宮中がおかしくなってしまうのだとしても、外の世界は無事に保たれているはず。子供の頃から憧れて来たレイリア皇国は、まだこの堀の外に存在しているはずだった。皆が言うように、ティオンの執政としての能力は優れているから、表向きの仕事だけは立派に行なっていると信じていた。

けれど、そうではないのかもしれない。

腐臭は外からも漂って来ていた。

腐った世界の中心にいる者は腐臭に気付かない。悲劇の主人公に甘んじていた僕も、いつの間にか鼻を狂わせていたのだろうか。

#### 第四話（15）

冷たい石床に身を横たえレアは眠る。

無造作に投げ出された金の巻き毛に指をからませ、僕は今日も一人で話し続ける。

「なあ……レア。外の世界はどんなふうなのだろう」

石牢には窓一つない。石が仄かな光を発していなければ、完全な闇となるはずだ。空気はどこから入って来るのか。食事はどうしているのか。この場所と、レアについては分からないことばかりだった。ユインに訊ねても答えてはくれなかった。

「君は外の世界を見たことがある？」

目覚めてもまだ眠そうに瞼をこすっているレアに訊ねた。

もちろん意味が通じるはずがない。何か問われていることだけ分かるのか、しきりに首を傾げている。

意味が分かったとしてもレアの答えは決まっていた。見たことがない、だろう。

幼い頃からたった一人この場所に閉じ込められて来た少女。僕より遥かに孤独な人生を彼女はどのように耐え、生き長らえて来たのだろう。

瞼が熱くなった。彼女の頬を両手で包み、真っ直ぐ瞳を覗き込んで言った。

「僕は外の世界が見たいんだ。自分の国の本土をこの目で見てみたい。国民の姿を見たいよ。民の声が聞きたい。レア……出来れば君と一緒に」

青い瞳を見開き彼女は僕を見つめ返す。

次の瞬間、頬を輝かせて笑った。嬉しそうな、心から幸せそうな笑顔だった。

言葉を理解したのではなく、心を読んでくれたのだと思う。君と一緒に外へ出たいという気持ち。

あれから毎日、石牢に通っていた。

脅迫されているからではない。僕自身が通わずにいられなかった。レアに会わずにいられない。

思えばティオンは始めから確信していたのだ。一度でも僕がレアに会えば、必ず魅了されると。何故なら僕とレアは同じ存在　　たった一人、同じ絶望の境遇に置かれた者同士だからだ。

レアは僕の鏡であり、もう一つの現在という気がした。もし女に生まれていれば僕も声を奪われ石牢に閉じ込められていたに違いはない。だから彼女とは、叔父と姪という血の繋がり以上に強い絆を感じた。言葉は通じなくとも、人として扱われない同じ痛みが僕たちを結び付ける。

日ごとに愛しさは深くなった。先生の他に、心を許せる人間に会ったのは初めてだった。先生に対する気持ちと違うところは、僕自身の手でこの人を守っていかなければ、と思うことだった。

その思いは危険な希望を静かに育んだ。……

ティオンはしばらく何も言っては来なかった。いつもの通り大人しく言うことを聞いてさえいれば、ティオンは納得する。石牢へ通っていることで、僕が素直に后を受け入れたと思っていたのかもしれない。

少しの間、僕の平穩は約束された。

レアも安全な身となった。ティオンが勝手にレアの部屋に出入りして、危害を加えることは出来なくなったからだ。今後はティオンがレアの部屋に立ち入ることはないし、兵士が無駄に死ぬこともないだろう。最高度に設定された迷路を潜り抜ける能力は、あの男にはない。

“優秀な頭脳を持つ”と廷臣たちに賞賛されるティオンでさえ、鍵となる言葉を解読することは不可能だ。幼少時からダイ教授による特殊な訓練を受けた者、たとえばユインや僕のような人間のみ解

読出来る。

ダイ教授はティオンに学問の真髄を授けなかったのだった。あの反乱事件で彼の学習が中断されたからなのか、それとも始めから先生はティオンの本性を見抜いていたのか。

どちらにしても、これでユインが重用されている理由が分かった。そして僕が何故、ダイ先生に託されたのかも。

風は日ごと変わった。

霧深い日は濃い緑の薫りに満ち、晴れた日は潮の薫りを運んで来た。

しかし注意深く感覚を研ぎ済ませば、どんな日の風も微かな肉の腐った臭いを含んでいるのだった。

「楽しいですか」

背後で砂利を踏む音がして、低い声が響いた。

この時を待ち侘びていたのだが、近くで彼の声を聞くと体が震える。

「ラウス・ロウ」

ラウス・ロウは剥き身の剣を両足の間に立て、長い外套で身を包むようにして立っていた。高い身長から僕を見下ろし、口端を上げてゆっくり発音する。深くて静かな、遠い波音に似た声だった。

「あなたはいつもここで空を見ている。空ばかり見ている、それほど楽しいのですか？」

レアのもとへ行って螺旋を抜け出た後、僕はいつもこの中庭でしばらく過ごすことにしていた。ぼんやり空を眺めている振りを装っていたが、本当はこの時を待っていたのだ。ここで待てば必ず、彼が姿を現すと思った。

今、ようやく昼の中庭で二人きりだった。

何人もの粛清に使われた剣が、相手の足元にある。怖くないと言えば嘘だった。しかし不思議にすらりと言葉が出た。

「楽しいです。空は美しい。それに、切なさを含んでいます。遙か遠い昔に全ての魂が一つだった頃の、懐かしい記憶。我々はあの空から来ました、そしていつかは空へ還るのです。空を見ていると早く空へ還りたいと思います。……還りたくてたまらない」

知らず一粒の涙が頬に落ちていた。

ラウス・ロウは少し驚いたように眉を上げたが、すぐ元の落ち着いた表情に戻った。

「還る前に、他の地から空を眺めたいとは思いませんか」

僕は柔らかく笑みを吐いた。賭けは正しかった。この男には言葉が通じる。

さらに勇気を奮い、彼の方へ一歩進んで言った。

「僕は他の地の空が、どんな色か知らない。知らないから見たいかどうか分からない。ラウス・ロウよ、教えてはくれないか。外国の空の色を。あなたは外国から来たのだろうか？」

ラウス・ロウは表情を変えず僕を見つめた。

二人の間を風が吹き抜けた。また強い腐臭がした。

「ほっ」

彼は呟き、片頬を上げて笑った。

「ようやくお目覚めか？ 眠れる王子さま」

くっ、と喉の奥から笑い声が聞こえる。

「遅いお目覚めで。王子さまの長いお昼寝に付き合わされて、民は待ちくたびれているでしょう」

笑いながら彼は背を向けた。僕の問いに答えもせず行ってしまふ。

しかしその抑えられた足音で、僕は彼の誠実を知った。今日の会話がティオンに報告されることはないだろう。

身震いして空を見た。

希望は限りなく無に近い。けれど自分は、完全な孤独ではないのだった。

#### 第四話（16）

道は見出された。

螺旋の途中、迷路の隙間に隠された横道があったのだ。幾度も螺旋を昇り降りしながら暗号を解読し、ようやく見つけ出した道だった。

このような抜け道があることをユインは知らないのだろうか。それとも知ってはいたが、まさか僕ごときが見つけ出すとは思っていなかったのか。

慎重にならなくてはいけない、と思った。迂闊うかつに行動すれば僕の企てはユインに悟られてしまうだろう。横道を歩いて行って、外へ通じているか確かめたかったけれど、実際に入るとは危険だった。横道へ入るのは一度きり、レアを連れて脱出するその時だけ。運命をその一度に賭けるしかなかった。

救いは、ラウス・ロウが敵ではないと知ったことだった。

決して彼は僕の味方ではない。しかし、ティオンの味方というわけでもないようだ。

ラウス・ロウと彼の部下たちはティオンに心服しているわけではなかった。彼らはティオンに雇われているから、ティオンの命令に従って動いているだけなのだった。

中庭を監視している彼らが僕の脱出を阻止することはない。あの日、中庭での会話で、ラウス・ロウ自身がそう答えてくれた。その保証が僕にとって唯一の希望となった。

ある日、早い時刻に目覚めた僕は裸足で寝台を滑り降りた。

朝の廊下に人影はなかった。

あまりにも静かで、高まる鼓動と荒い呼吸が誰かの耳に届くのではないかと恐れた。けれど部屋から出て来る者はいない。後をつけ

て来る者の気配もないようだった。

中庭を駆け抜ける際、一人の警護兵の姿が目に入った。ラウス・ロウの部下だ。兜の下から鋭い視線を投げた彼は、何も言わず目を逸らした。

螺旋の入り口へ辿り着き、安堵で足から力が抜けた。

あと一步を踏み出せば救われる。希望で震える手を灯りへ伸ばした時だった。

「アテラン様」

背後から声が聞こえた。喉元に刃物を当てられたような戦慄が走る。

その声は廊下の隅の闇から聞こえて来た。目を凝らしてよく見ると闇の中に、黒い衣服を頭から被った者の姿が見えた。

「そのままです。灯りをつけずにお聞きください」

黒い影が言った。若い男の声だ。ラウス・ロウの部下たちが発する外国訛りはない。僕は灯りへ伸ばしていた手を止めた。

「これからレア様のもとへ行かれるのですね？」

男の問いに、大人しく頷く。

「不躰ぶじつげながら、ご忠告いたします。あなたは、レア様と契ちかられてはなりません」

「何を言っているのだ」

僕の声は上ずって震えていた。低いが毅然とした男の声が返って来た。

「レア様と子を成してはならない、と申し上げているのです。決して、決して、どのようなことがありましても、あなたとレア様は子を産み落としてはならない。それは神を裏切る罪。世界を滅ぼしかねない罪なのです」

意味がよく分からなかったので黙っていた。すると男は声を落として付け足した。

「あなたが何もご存知ないようなので、こうして危険を冒しお伝えにあがったのです。私の言葉をどうかお忘れなきよう。もしお忘れ

になったならば、レア様ともども、死んでいただかなければなりません」

冷たい汗が背筋を流れた。この男は何者なのか。ラウス・ロウの部下ではなく、テイオンに忠誠を誓う者でもない。彼の忠告の真意は分からないが、言われるまでもなく僕は最初からその忠告の通りにするつもりだった。

「分かっている……分かれている」

応えると影が引く気配があった。

足音も立てず廊下を戻って行く黒衣を見送ってから、僕は灯りを手に取った。

「逃げよう。一緒にここを出よう」

そう言って伸ばした僕の手を、レアは躊躇う様子もなく握った。

生まれて初めての外の一步を、彼女は僕の手を強く握り締め、しっかりとした足取りで踏み出した。石牢の滑らかな床とは違う、砂利の転がる道に始め驚いていたが嫌がることはなく、むしろ樂しげに足裏の感触を味わっているようだった。

この手を絶対に離してはならないと僕は気を張り詰めた。

もし手を離したらレアは迷路の闇に落ちてしまう。それはレアの死を意味する。

知らず力が入ってしまったのか、レアが少し痛そうに顔をしかめた。慌てて手の力を緩め、もう一つの手を重ねて言った。

「痛かったね、ごめん……。でも、ここから先は痛くても絶対に手を離さないで。手を離したら僕たちは二度と会うことが出来なくなる」

言葉の意味が通じたのだろう。レアは不安そうに瞳を大きく見開き僕を見た。それから何を思ったのか、自分の長い髪を数本、抜いた。抜いた髪を自分の小指と、僕の小指に巻いて強く結び付けた。そうして得意げに指を持ち上げて見せる。淡い光に照らされて二人

の指の間がきらりと光った。

「ありがとう。これでずっと一緒だ」

僕の言葉で笑顔になったレアは唇を動かした。

「ア」 「テ」 「ン」

唇の形だけで僕の名を呼ぼうとする。「ラ」を表すことは出来なかったが、彼女はその名を大切そうに唇に乗せたのだった。

横道に逸れてから螺旋は永久に続くように思われた。昇っているのか降っているのかも分からない。

途中、油が切れて灯りが消えた。

目が見えなくなっただのではないかと思うほどの完全な暗闇が僕たちを包み込んだ。恐怖で汗ばんだレアの手が僕の腕を掴んで来る。

僕も恐ろしくて気がおかしくなりそうになるのを必死で堪え、意識を思考に向けた。

暗闇では思考が灯火となる。

心を澄まして先を読めば闇を歩いて行けるのだ。

やがて道は少しずつ上へ向かい始めた。

そしてついに小さな一点の光が目に見え込んで来た。頭上辺りで瞬いていた光は、次第に大きくなり、四角い形となって前方に揺れた。

出口の光だ。

風が入り込んで来ている。足元に細かい砂が渦巻いているのが分かった。この道は確かに外の世界へ通じていたのだ。

レアが転ばないように注意しながら、ゆっくり慎重に一步步つ前へ進んで行く。

光へ。

あの光の下へ、早く、飛び出したい。

内と外の境界に立った時、むっとする熱気に頬を打たれた。経験したことのない熱さと風の臭いに少し怯んだが、希望の魅力が勝つ

た。僕はレアの手を強く引き、迷わず光のもとへ踏み出していた。  
瞬間。

激しい熱に打たれ、天地が回った。

背後のレアの体が揺れる。しゃがみ込んだ彼女の体を支えようとした僕も眩暈を起こし、その場に崩れた。

そこは圧倒的な光の世界だった。光は業火のように肌を焼き目を射る。一瞬にして白くなった視界にぼんやり映じているのは、見渡す限りの黄色い海だ。

海……？

いや、違う。水ではない。

手に触れるのは細かな砂。目の前に見えているのは、一面の砂の土地なのだった。

「ここは、いつたい、何処だ……」

灼熱の光に焼かれて溶ける意識で僕は呟いた。

僕たちはどこへ辿り着いたのだろうか。闇から逃げるつもりで、光の地獄へ転がり落ちてしまったのだろうか。

#### 第四話（17）

踏み出した足は灼熱の砂に埋まり、くるぶしまで焼かれた。痺れる熱さで気が遠くなる。堪えて次の一步を踏み出した。レアもよく耐えてついて来た。

先は地獄だと分かっても僕たちは歩かなければならなかった。背後には暗い洞窟が口を開けて待っていた。あの闇に戻れば生きてはいける。でも引き返すことは死ぬよりも恐ろしい。暗闇の底で魂を殺して生きるくらいなら、僅かな希望に賭けて光の地獄へ進むべきだ。

けれど、いったい、何処へ向かえばいいのか。

四方八方、同じ景色だった。空は冷酷に青く澄み、黄色い砂の海は視界の果てまで続いている。地上を焼き尽くす太陽は飽くことなく白銀の光を放ち続ける。

暑さを感じているのに肌が乾いているのは、吹き出た汗が一瞬にして消えてしまうからだ。薄いクオートの衣から出た肌は陽に晒され、たちまち赤く腫れていった。

始め悲鳴を上げるほどに痛かった足はすぐ感覚を失った。代わりに絶え間ない眩暈が襲い、意識が朦朧とした。

空腹や疲労はもはや感じることも出来ない。

ただ、猛烈に、水が欲しい。

ずっと握り締めていたレアの手から次第に力が抜けて行った。

そしてついにレアは膝を突き、砂の上に崩れて倒れた。レアの名を叫ぼうとした僕も声が出ず膝を突いた。せめて彼女の体を太陽から守ろうと覆い被さり、そのまま意識を失った。

風に運ばれ降り積もる砂が二人を包み、飲み込んで行った。

……

「いかにも不吉な顔をしている」

「まさに魔物の化身であるだろう」

「闇と光に分かれし、忌まわしき双子」

囁かれる声と、ひたひた頬に当たる冷たい物で目を覚ました。

薄目を開けると上から覗き込む三つの黒い影が見えた。全身を覆う黒衣から、目だけが覗き白く光っていた。僕の頬に触れる指は蛇のように冷たい。

死の使い、だろうか？

不思議な言葉を話す。レイリアと同じ言語だが、低く乾いた発声をする。しゃがれた声は男のようにも女のようにも聞こえた。

彼らの姿が、螺旋の入り口で忠告して来た黒衣の男と同じだと気付いて、声を絞り出した。

「人間……？」

僕の頬に手を当てていた者が、おや、と呟いて目を細めた。

「意識を取り戻されたか。そう、我らは人である。砂漠の民、楽園より還りし民であるぞ。我らのことはお聞き及びか？ レイリアの御子よ」

正体を知られていることと、聞いたこともない話に呆然とし、僕は知らないと言った唇を動かした。

「なるほどレイリアの御子が無知だという報告は事実のようだ」

三人の黒衣は目を見交わして頷き合い、気の毒げな視線を僕へ注いだ。

それから彼らは僕の体から丹念に砂を払い落とし始めた。その指は優しく慈愛に満ちているようにも感じられたが、実は死体を清める儀礼的な指に過ぎなかった。既に彼らは僕を死者として扱っている。これから死に行く者へせめて礼儀だけでも示そうと、丁寧に扱っていたのだった。

僕の下に埋もれていたレアの体は、急いで荒々しく掘り出された。「愚かな御子よ。妹を殺す気だったのか？ 地下で暮らして来た身

を外へ連れ出せば、どうなるか分からなかったか。まして、このよ  
うな苛酷な地に。……妹君は建物の力で生かされて来たのだぞ。建  
物が光と空気を力に変え、彼女の体をこれまで養って来たのだ」

首をもたげた僕の目に、地平線に揺らぐ三角形の建物が見えた。

そうだ、あの建物の地下から僕たちは這い出て来たのだった。不思  
議な形をしたあの建物がレアに養分を与え、レアを生かして来た  
というのか？

「あまりに不憫だ。妹君は我らが家に連れて帰り、名もなき女子おなこと  
して生かしてやろう。しかし御子、あなたは」

再び冷たい指先が僕の頬に触れた。見下ろす視線には蔑みを感じ  
られる。

「あなたを連れて帰るわけにはいかない。あなたのような危険な存  
在をかくまえば、我らの民は滅びるだろう。いや、あなたが生きて  
いれば地上の生物全てが滅びるかも知れぬのだ。死んでくれたなら  
世界にとって幸いであろう。気の毒だが、あなたはここでこのまま  
干からびて、砂漠の砂となっていたらいい」

砂から救い出されて意識を取り戻したレアは、自分の体が僕から  
離されることを知り声なき叫びを上げた。

「アテン」

黒衣に抱きかかえられたレアが、僕から離れて行く。レアは唇を  
必死に動かして僕の名を呼んだ。

「アテン！」

「アテン！」

「レア……」

這い寄って伸ばした手の、小指に結ばれた髪の毛が音を立てて切  
れた。

力尽きて僕は砂の上に腹這いに倒れた。

髪が食い込んだ指の皮膚が切れて血が滲んでいた。僕はその指を  
レアに伸ばした。神に自分の血を捧げる気持ちで、全力を振り絞っ  
て願った。

「生きて、レア……どうか  
僕の代わりに。」

最後の言葉を唇だけ動かして伝えるとレアは、大粒の涙を流して首を振った。手足を動かして必死に抵抗しているけれど、力が及ぶはずもなく、三人の黒衣に連れられて行った。

残された三人の足跡はやがて砂に埋もれて消えた。

目の前の足跡が消えて行く様を眺めながら、僕は彼らが口走った言葉を考えていた。

妹……。

そうか。レアは、僕の妹……。

鏡であり、半身。きつと生まれる前は一つに繋がっていた体に違いない。それがどうして分かれて生まれて来たのか、どうして別々の人生を与えられなければならなかったのか。

そもそも、いったい、どのようにして僕たちは生まれたのだろう。ユインが言ったことはやはり嘘だった。

僕の両親は皇帝でも后でもない。僕とレアの本当の父母は、誰なのか。今、どこでどうしているのか。

もしも生きているのなら会いたかった。一度でいいから呼びたかった。

お母さん。……お父さん。……

太陽は天頂に昇り砂上の体を無情に焼いた。

意識も光に溶かされ薄れていった。

誕生の謎は謎のまま、僕は刻々と死に近付いていた。

第四話（18）

ザッ。

砂が崩れる音を聞いた。

瞼の裏で光が閃く。

不意に戻った呼吸で咳き込んだ。全身の苦痛が蘇り、呻いた。

生きて……？

まだ自分は生きているのか……。

遅しい腕が僕の身を掴んでいた。

一気に砂の中から引き上げられる。高く抱えられ、視界が反転した。

薄く開いた瞳に赤い空が映った。その色を見て意識を失っていた時の長さを知った。

意外なことにまだ自分は生きている。安らかな死に向かっていた魂は、乱暴な力で引きずり戻されたのだった。あとほんの一時、日が没するまで寝ていれば僕はこの生を終えていただろうに。

救い主は太い腕で僕を抱え、赤子をあやすような姿勢で覗き込み言った。

「ご無事ですか」

耳を傾け、僕の呼吸があることを知って彼は満足気に頷いた。

「間に合って良かった」

その言葉に生存を喜ぶ響きはなかった。ただ義務を課せられた者の安堵だけがあった。

声の主をよく見た僕に戦慄が走った。それはレイリアの兵士の姿をした男で、背後にも大勢の同じ姿の男たちが控えている。

追っ手だった。僕を牢獄へ連れ戻しに来た使者だ。

悲鳴を上げようとしたけれど声が出ない。乾ききった唇が開き、

微かに上下に動いただけだった。その唇へ、無理やり水の入った袋をあてがわれた。どっと流れ込んで来た大量の水はほとんど喉を通らず、唇から溢れて虚しく砂に落ちた。

吐く力も残っていない僕は息を詰まらせ、砂の上へ降りて苦しんだ。皇帝の苦しみを兵士たちは静かな面持ちで眺めていた。

しばらくして声が出せるようになり、呟いた。

「何故……いつたい、何故」

僕を救い上げた兵士は笑った。

「何故ここが分かったのかと？ あの建物の出口は一つ、この砂漠のみ。すなわちあなたの居場所はここしかありません」

「……だけど、早過ぎる」

ラウス・ロウの部下たちが告げ口することはないはずだ。テイオンが僕の逃亡に気付いてから出口を探し出すまで、ユインの手引きがあつたとしても、少なくとも一昼夜はかかると計算していたのだから追っ手の到達はあまりに早過ぎるように感じた。

僕の疑問に兵士は冷淡な目をして答えた。

「あなたにとつては一日でも、我々には三月が過ぎていきます。あの建物は遠い距離を、短い時間で超えるのです。従つて建物を通れば一時でここへ到達出来る。しかし完全に通り抜けることが出来るのは、あなただけだ。我々はここへ辿り着くまで海を越え、砂漠を越え、死ぬ想いをして三月かかったのですよ」

声に憎しみが籠もっている。見ると背後の男たちも一様にぎらつく瞳で僕を睨んでいた。

混乱した頭の隅で考えた。あの建物は時を歪める。それで螺旋へ潜るたび違和感を覚えたのだった。兵士たちが命懸けで遠い距離を使わされたということは、ユインも手引き出来なかったということだ。螺旋の先の地下道を通ることはユインでさえ不可能だったのだ。「いたずらが過ぎましたね、陛下。さあ。帰りましょう」

言つて兵士は僕の腕を掴んで立たせようとした。思いがけない力が蘇り僕は抵抗した。

「嫌……だ。やめる。帰りたくない。連れ戻すくらいなら、頼む、この場で殺してくれ」

僕の腕を握る手に力が籠もった。

「何を仰いますか。そのようなことをすれば、我々と我々の家族の命がなくなる」

容赦ない腕が僕の身を抱え、肩に担ぎ上げた。そして恐ろしく冷めた横顔で彼は独りごちた。

「あなたに死なれてたまるか」

歩く力を失っていた僕は棺桶に似た小さな箱に横たわり、兵士たちに引きずられて砂漠を渡った。

海に着くと船の底に押し込められて、何日も寝ながら波に揺られて過ぎた。水と食料はふんだんに与えられ、虐待を受けることもなかった。そのため体力を快復し自分の足で立つことが出来るようになった。

陸地に着いた後は前後を兵士に挟まれ、ゆっくりと歩を進めた。

抵抗する気はとうに失せていた。

罪人のごとく従順に、腫れた足が破れて流れる血も厭わず、自ら進んで歩き続けた。

始め憎しみの眼差しで僕を見ていた兵士たちに変化が生じたのは、その歩き旅の間だった。人としての同情心が芽生えたのだろう。下級兵士の幾人かが、こっそり声をかけて来るようになったのだ。た。

「足は痛くないですか」

「よろしければ、肩をお貸ししますが」

「背負って歩きましょうか」

親切な申し出を頑なに断り、必死に歩き続ける少年を見て彼らの同情はさらに募る。

上官たちは部下たちの様子を遠巻きに眺め苦々しい顔をしていた。

時おり彼らを叱責したが、それでも下級兵士たちの労わりはやまなかつた。

「だってうちの息子と同じ歳くらいなんですよ、皇帝様は。まだほんの子供でしょう。いくらなんでも可哀想で」

上官に対する抗議の声がたびたび背後から聞こえて来た。久しぶりに触れる人間的な優しさに、心が溶けて足が萎えてしまいそうで僕は耳を塞いだ。

ある日のことだった。上官の一人が僕へ近付いて来て耳打ちした。「やけに素直になられましたね」

問いかけて来たのは砂から僕を救い上げた兵士だった。あの時の抵抗を知っているのも、僕の態度の変化を不思議に思っていたに違いない。

「どのような心境のご変化です。ご自分の足で、嫌いなお家へ歩かれるとは。逃げられないと分かって観念されたのですか？」

「使命を悟ったのです、」と答えた。

「僕が生きて戻れば、あなた方は生きていけるのでしょうか。ならば僕の今の使命は、生きて牢獄へ帰ることだ。そうして、あなた方を生かすことだ」

兵士は不審げに眉を寄せて僕を見た。僕が何を言っているのか分からない様子だった。

僕は前を向いてきっぱりと言った。

「あなた方は、テイオンの命令に従って僕を捕まえに来た。それは、自分が生きるためだ。そんなあなた方に、何の罪があるのか……」

初めて兵士が下を向き唇を噛んだ。

「もう無意味に人が殺されていくことに耐えられないんです。……それだけです」

僕の独り言に耳を傾けながら兵士はうつむいて黙々と横を歩いている。

大柄な、自分より遥かに力の強い兵士を見上げて僕は思った。この人たちを守らなければならない。自分を生贄として。

もしあの時、僕が砂漠で死んでいたら、ここにいる全員が命令を遂行出来なかったという理由で殺されることになっていた。また無意味に人が死ぬことになったのだ。彼らが救われるなら喜んで賛となろう。

生きていて良かった、と今は身が痺れるほど思う。

レアを救い出すという目的は果たしてしまった。

一緒に自由な人生を生きたいという夢は叶わなかったが、それは僕には出過ぎた夢だったのだ。

しよせん、屑のごとき命。

せめて他人を生かすために犠牲となれるなら、この屑にとって身に余る幸福ではないか？

第四話（19）（前書き）

死体描写があります、ご注意ください。

第四話（19）

腐臭が強くなっていた。

風に煽られ辺りを漂う臭いに、兵士たちの誰もが気付きながら何も言わなかった。

「この臭いは？」

僕の問いかけに答える者もない。

皆一様に暗い顔で下を向き黙々と歩くだけだった。

やがて臭いの正体が明らかとなる光景に遭遇した。

いや、遭遇したのではない。それは見ざるを得ないものだった。何故なら、都の周囲一帯、余すところなくその光景で埋め尽くされていたのだから。

人、人、人。

かつて人だった肉の腐った物で、地は覆われていた。

折り重なる死屍の多くは形を崩し、白い骨を晒している者もいる。かろうじて肉の原形を留めている者も、痩せ細った奇怪な体をしていた。まだ新しい幼子の屍は、小枝のような手を空に伸ばしたまま倒れている。

「……これは……どうして」

死屍の野の中央に僕は呆然と立ち、問うた。

しばらく答える余裕のある者はいなかった。周りの兵士たちは次々と座り込み嘔吐した。木の幹に手を当てて激しく嘔吐を続ける者もいる。眩暈を起こして倒れ込む者さえいた。

しかし、僕は吐くことも出来ず立ち尽くしていた。

……何故だろう、屍を前にして不思議と心は静かだった。深い静寂に満たされ、ただ悲しみの想いで死屍を見つめていた。その想いは一瞬を焼き付けた絵のように静止して、心を覆った。

「飢えて死んだ人々です。殺された者もいます」

ようやく問いに答えたのはハウクだった。僕を砂から救った兵士の会話を交わしたあの日以来、彼は常に僕の背後を守るかのように歩いていたのだった。

落ち着いた性格の彼も、この惨状には顔をしかめて言う。

「我が国の多くの場所でこのような光景が見られます。なるべく避けて歩き、陛下のお目に触れさせないようにとの命令でしたが。都市部では一帯がこの有様ですので、避けることは出来ませんでした。汚い物をお見せしてしまい申し訳ありません」

「汚い、だと？ 汚いとは思わない」

鋭い声で答えた僕をハウクは慰めるように見た。

「しかし、このような光景は初めてご覧になるのでしょうか。目の毒となります。私が背負って歩きますから、ここから先は目を覆って進まれてはどうですか」

「いけない。目を覆うことなど僕には出来ない」

答えた自分の声は悲鳴に近かった。

改めて足元を眺める。腐り果てて色を変えた肉。蟲むしたちに取り憑かれた傷口。かつて瞳が入っていた暗い穴。

全て、つぶさに見ることが出来た。

何もかも見なければいけないと感じていた。そして見たものを記憶に刻み付けなければならぬ。人間だった者たちの、人間としての悲しみを表す最期の形を。

僕はハウクにすがりついた。彼の正直な性格に賭けたのだ。彼なら、きつと答えてくれる。

「お願いだ。どうか答えてくれ。どうしてこんなことになった？ 誰がこの人たちを殺した？ この国の誰が悪いんだ？」

一瞬青褪めた彼の顔に決意がみなぎった。

決意の奥に喜びも感じられる。これまで押し殺して来た想いを語ることの出来る喜びだ。彼は顔を紅潮させ真実を明かしてくれた。

「悪いのは誰なのか……。さあ、それは自分たちには分かりません。我が国は十五年前からこの状態です。

反乱を起こした影島の民たちは全て殺されました。当然の報いだと言われています。

しかしクオートと食料を生産していたのは、影島の民たちなので

影島の民が滅んだために、あらゆる物資の供給が途絶えてしまいました。

今の本国にはクオートはおろか、食料さえほとんどありません。

本国の住人は大量に餓死しております。食べ物を奪う盗賊に殺される者も多くいます。

この状況を打開すべく、ティオン様は他国の資源を求めて戦争を計画されているそうです。

戦争に勝つためには厳しい統制が必要とのことで、少しでも謀叛の疑いがある者は処刑されます。

裏切り者が出た家は一族ごと処刑されますし、街ごと潰されることもあります。

ですが近ごろはたいした理由もなく、見せしめとしてティオン様の気の向くまま殺されているように思えます。

ただでさえ人が少ないのに、さらに処刑されて減っていく。

いったい、これで戦争が可能なのでしょうか。弱りきった我が国が他国を征服出来るものでしょうか？

ティオン様は本当は何を恐れ、何を目的としてらっしゃるのですか？

我々も今はこうして兵士の姿をしていますが、この間までは穏やかな生活を営んでいた民間人でした。

国のために家中の品を捧げ、食べ物も捧げ、最後に残った身をこらして兵士として捧げているのです。

我々にはもう捧げる物はありません……。戦う力も、希望も、そも

そも最初からありません。

捧げる命すら、このように弱く無力です……」

いつの間にか周囲に集まって来た兵士たちが驚いた表情で僕を見つめている。

頬へ手をやると冷たかった。

泣いていることに自分で気付けぬほど静かに、涙を落としていたのだった。濡れた頬が風に晒されて冷たくなっても、涙を止めることは出来なかった。

意志を超えて涙は溢れる。

あの静止した悲しみの場から、痛みを伴い、血の代わりに涙が零れ落ちて行く。

「そうか。よく分かった。誰か悪い者がいるとしたら僕だ。何も知らず玉座で眠りこけていて、あげく逃げ出して自分の人生を得ようとしていた。……済まなかった」

呟いた僕の身を、すすり泣きが包んだ。

周りに集まった兵士たちが泣いていた。深い苦悩が刻まれた顔を歪ませて。

僕は詫びる気持ちでその場に膝を突いて平伏した。

自分が殺したも同然の死屍が額の前にある。

どの骨も肉も、慈しかった。

ここに在る死が、たまらなく慈しく、悲しい。

立ち上がった時、心は穏やかだった。泣いている兵士たちを振り返って言った。その時、自分は笑顔だったかもしれない。

「さあ。連れて帰ってくれ、牢獄に。今こそ僕が贄となって、あの人の横暴を食い止めよう」



第四話（20）（前書き）

痛そうな描写あり。苦手な方はご注意ください。

#### 第四話（20）

そこは真の闇だった。

目を開いているのか閉じているのか。生きているのか死んでいるのかも分からない闇の中に横たわっていた。

湿り気のある闇がまとわりつく。生暖かく、重く、息苦しい。

体が動かなかった。身を起こそうとすると、腕と足がぎしぎし痛んだ。

どうやら両手と両足を鎖で縛られているようだった。両手は上に、足も一つに束ねられている。鎖は背後の台に固定されていた。仰向けの格好で僕は堅い台に縛り付けられているのだ。

上から落ちて来た水滴が額を濡らした。その冷たさが背筋に悪寒を走らせた。本能的にこの場所の用途を察し、恐怖が全身に満ちる。何故、このような場所にいるのだろうか……僕はどうしたのだろうか……。

記憶の一部が消えていた。途切れる前の記憶を必死でたぐり寄せ、思い起こす。

そうだ。

都の門を潜ると同時に、待ち構えていた廷臣たちに僕の身は引き渡された。

周囲から兵士たちのすすり泣きが聞こえた。丁重に扱おうと嘆願する声もした。しかし彼らの願いに構うことなく、廷臣たちは僕へ薬を飲ませたのだ……。

「陛下は長旅でお疲れのことと存じます。しばらくお眠りください。お目覚めになる頃には、テイオン様との再会が叶うことでしょう。薄れる意識で恐ろしい予定を聞いた。」

それから瞼を撫でられ僕は暗い眠りへ落ちたのだった。

突然、扉が開き、赤い光が目を射た。

松明を手にした男が戸口で高笑いしている。眩しくて男の姿は影にしか見えない。

やがて光に目が慣れ蘇った視界に、赤く照らされた石牢の壁が浮かび上がった。壁は湿気で濡れており、てらてらと不気味な輝きを放つ。その壁に幾つもの不可解な器具が下がっていた。刃物や鎖、他は何か分からない様々な金属の器具等で、ここが拷問に使われる部屋であることをはつきり悟らされた。

僕は上半身に衣を着けていなかった。錆びた鎖は両手両足に食い込んでいる。寝ている間に動いたのか、縛られた足首からは血が滲んでいた。

松明を持つ男が部屋へ入って来た。彼が灯りで僕を照らした時、男の顔も照らされて見えた。

ティオンだった。

異様な興奮状態にあるらしく、瞳を大きく見開き血走らせ、口元は笑みの形に歪ませていた。人の本性の、最も恐ろしい心が表れた顔だった。恐怖で思わず目を背けた。

「この裏切り者が」

と、低い唸り声をティオンは吐き出した。

「貴様は裏切り者だ。俺を裏切り、顔に泥を塗ってくれた。優しくしてやればつけあがりやがって。これからは今までのような生ぬるい扱いはないものと思え。裏切ったことを後悔させてやる」

彼は平手で強く僕の頬を打った。

唇が切れ血が散った。耳が痺れ頬が燃える。しかしこれはまだ始まりの合図に過ぎない。

「レアはどうした？」

問われた僕は反射的に首を振った。真実を答えるつもりは毛頭なかった。

「レアは死んだよ。砂漠の砂に焼かれて……。今頃、レアの体は砂に飲み込まれてしまっているだろう。きっと探しても見つからない

はず……」

頬がまた張られた。

「よくも！ よくもレアを！」

怒りにまかせてティオンは僕の両頬を激しく打ち続けた。次第に頬が腫れていき感覚が失われる。

「何もかも台無しにしゃがって！ このクズめが！」

殴るだけでは解消しきれなかった怒りを彼は寝台にぶつけた。台を殴った彼の拳に血が滲む。肩で息をしてから、ティオンは静かな声で言った。

「いいか、二度と俺を裏切るな。逃げようと思っても無駄だ。お前は俺から逃げることも出来ない。絶対に。お前は、死ぬまでここに留まるのだ。俺のもとに」

彼は寝台の横に座り、僕の耳元に唇を近付けて囁いた。

「どうして俺から逃げられないか分かるか？」

怯える目を向けることしか出来ない僕をティオンはせせら笑った。そして高らかに宣告した。

「教えてやろう。お前は、俺の息子だからだ」

頭が痺れている。

認めたくない事実の衝撃が、意識を現実から遠のさせる。

少しの間、ぼんやりと、ただティオンの様子を目で追っていた。

彼は何をするつもりなのだろうか、壁に掛けられた器具を物色していた。ふと一本の小さな楔くさびに目を留め、手に取って先を指で撫でる。楔の先は六角で、黒い金属で出来ており、松明の灯りに鈍く光っていた。

ティオンはその先端を炎で焼き始めた。

先が赤くなつた楔を握り締めこちらへ歩いて来る彼を見て、これから自分の身に起きることを悟った。体をよじつたが無駄であることは分かっている。

「お前は、俺の息子。俺の血を与えてやった者だ」  
繰り返し、ティオンは僕の胸へ楔を近付けた。

「お前は、俺がいなければこの世に存在することさえ出来ない。俺が、お前を、この世に引きずり出した！俺こそが、お前を作り出してやったのだ！」

ティオンの言葉とともに鋭い楔の先端が裸の胸へ食い込んだ。

ッ！

叫びは声にならず苦痛の喘ぎだけが石壁に響いた。胸から床へ、細い血の筋が滴り落ちる。

楔は皮膚を切り裂きながら、ゆっくりと胸を横へ滑った。

「この横線は、悪しき大地を表す。お前を育み産んだ者だ」  
それが終わるとティオンは楔を離し、今度は首の少し下辺りに突き刺した。

またゆっくりと上から下へ皮膚が切り裂かれていく。

「これは天。神の血を表す。……見よ。天と地が交わり生まれた、お前にふさわしい印だ」

鮮やかな赤い十字が自分の胸に刻まれていた。痛みと恐怖で脱力していた僕は、すぐにその印の意味を思い出すことも出来なかった。

十字の印はこの国で、“悪魔”の証なのだった。

遠い未来、十字を胸に持つ“悪魔”がレイリアに生まれて国を滅ぼす。そんな伝説が遙か昔に語られていたと先生から聞いたことがある。

今では十字は単に禁忌の象徴となり、交わるべきではない血が交わって生まれた赤子たちに付けられる印となっている。十字を胸に刻まれた赤子は生きていてはならないから、すぐに大地に葬られるのだ。無論、拾って育ててもいけない。十字を印に持つ子が生きて

いれば、その子は育てた者もろとも処刑される。

つまり本来なら生きてはいけな子、という意味の十字。

それは確かに僕の出生から今までを表していた。この世に生まれさせてくれ、生かしてくれているのは父親であるティオンだ。

僕の命は、あの男の付属。

僕は最初からあの男の“物”でしか、なかった。

闇の先にはさらに濃い闇があるという。

しかし絶望の果ては虚無だった。

何も無い。

諦めも、自己否定も、世界の崩壊も、安らかな死さえも。

“物”である自分には始めから何も与えられていない。

「お許しください、お父様。あなたを裏切った僕は愚かでした。ごめんなさい。どうか、どうか許してください。もう二度とあなたを裏切るようなことは致しませんから」

自然に涙を浮かべて僕は父へ許しを請うていた。

可愛らしい声を繕い、憐れみを誘うように。

卑屈に堕ちた僕を見て父がどれほどの満足を得たか。言葉にはせずとも、勝利に酔い緩んだ彼の口元に、その気持ちが表れていた。

満たされた彼はその日、虐待を終えた。あくまでもその日は。

こうして彼を満たしていったなら彼は他の贄を必要としなくなるかもしれない、と思った。もしこの身で彼の不満を受け止められたなら、彼は国政を忘れ、戦いを忘れるかもしれない。

これ以上、人々の血という購いを求めることのないよう、神の目を逸らさせる。

きつとそれだけが物として生まれた自分に来ること。贄として相応な使命だろう。



#### 第四話（21）

「真実を知ってしまったわけです」

寝台の傍らで、傷の手当てをしながらユインは呟いた。僕の耳にかかる溜息は憐れみを含む。

窓から吹き込む冷たい風が胸の傷に沁みた。窓に新しく取り付けられた格子越しに見上げる空は、今日も青く澄み切っている。見つけていた空が明る過ぎて、室内に目を移すと視界が暗くなる。相変わらず湿気た石壁の臭いが鼻をつく。固く閉ざされた扉は以前よりも威圧を感じさせた。

僕はまたあの寝室に戻っていた。

最初に連れて来られた寝室、“皇帝の間”という名の牢獄に。

今度は宮廷内を歩く自由も与えられなかった。扉には外側から錠が降ろされ、二人の兵士が向こう側に常に立っていた。ただ一人ユインだけが出入りを許され、食事を運んだり汚れ物を取り替えたりする。

「私はお伝えしないようにとテイオン様に申し上げたのですが……それが先帝のご意向でもありますし……公にされている話とは異なりますし。嘘のままでも良かったのです。出来れば一生、ご存じないほうが陛下にはよろしかったのではないかと」

隠していたことを罪と思っているのか。ユインの声には懺悔の響きがあった。

彼の懺悔は僕の心に触れることなく耳元を流れた。瞳に沁みる空の青を見つめたまま、僕は本心を吐いた。

「知っていた気がする。最初から本当は気付いていた。この体に流れる血の卑しさを、僕は」

僕の胸の傷に布を巻いていたユインの手が、止まった。

「僕は確かにあの男の息子だ。血は嘘をつけない。どのような嘘を ついても、この体に流れる血は変えられないんだ」

言ってからユインの目を真つ直ぐ見つめた。

青褪めた彼の顔は心なしか怯えているように見えた。僕が厳しい目をしていたのだろうか、それともこの目の中にあの男の気配を感じたのだろうか？

「だから、ユイン。どうかもう嘘はつかないで欲しい。何もかも教えてくれ。僕は……僕なら大丈夫だ。何を聞いても傷付いたり、壊れたりほしくない」

「何を聞いても？」

「そうだ。もう何も感じない。だけど知りたいんだ。どうして自分が生まれたのか。どうしてここに居るのか。誰から生まれたのか。母は 僕を産んだ人は誰で、今どこでどうしているのか」

ふっとユインが目を逸らした。

「それは私から申し上げることではございません」

また彼はいつものようにお互いの間に幕を降ろし、冷めた表情を繕って言う。しかしその頬は震えていた。

「ユイン。頼む。母は、今どこに」

彼の着物の襟にすがって訊ねた。するとユインは僕の手を取り、そっと離して立ち上がった。

「……ご存命ではありません」

それだけ答えてユインはうつむき黙り込む。

僕は息をつき、微笑んだ。穏やかな気持ちだった。

「そうか」

分かっていた。母がもうこの世にはいないということ。

あの時、塔で見た映像で、赤子を抱えて来た兵士の衣には大量の血が付いていた。あれはおそらく、赤子を産んだ女の。母の、最期の。

「会いたかった……な」

空を見上げて微笑み呟いた僕をユインは暗い顔で見つめた。

さすがに憐れに思ったのか。彼は寝台の横に置いてある、水を張った盥たらいを指差した。

「水面を鎮めて覗いて御覧なさい。いつでも母君にお会い出来るでしょう」

言われたことの意味が分からず僕がぼんやり盥を眺めていると、ユインが昔を懐かしむ笑顔で言った。

「あなたは母君に生き写しでらっしゃいますから」

扉を激しく叩く音が穏やかな時を破った。

「いるのか。ユイン！」

父だ。

ユインの顔から血の気が引く。僕は両手で耳を塞いだ。

「時間だ、出て来い」

乱暴に扉が開け放たれた。

ティオンは見開いた目で部屋を見回した。寝台の傍らにユインの姿を認めると、口端を上げて笑った。

「子守の時間は終わりだ、ユイン」

「ずかずかと部屋に入って来て、

「来い」

と叫んだかと思うと僕の腕を掴んで寝台から引きずり降ろした。

「おやめください。いったい何を？」

ユインが僕をかばって座り込みティオンの腕にすがりついたが、彼の手はたちまち振り払われた。

「教育だ。これからこいつを強く育てていかねばならん」

僕はティオンに両腕を持たれて引きずられた。

そのまま廊下へ出る。驚いている兵士たちの前を、僕の体は引きずられて行った。

「お待ちください、ティオン様！　どうか！」

廊下の半ばで駆けて来たユインが追いついて叫んだ。彼の肩は荒

い呼吸で波打っている。驚くべきことに、あの重い着物で全力疾走して来たのだ。いつも冷ややかな彼の額に玉の汗が浮かんでいた。「陛下への乱暴はおやめください。後生です……お願い申し上げます」

ティオンの足が止まり、鼻で笑う声が聴こえた。

「乱暴だと？ 何を言う。子の教育は親として当然の義務だろう」「しかし」

背を向け歩き出そうとしたティオンにユインはなおも追いつがろうとした。「やめる」、誰のものか分からない声がその時、廊下に響いた。

「やめる。ユイン」

僕の声だった。無意識に叫んでいたのだった。

ユインが呆然と僕を見つめ返す。彼の目の下の隈が青く透けて見えた。その色を見て僕は、ユインも憐れな人だと思った。

「もう、いい。構わないでくれ。それ以上、うるさいことを言えば君が罰せられる。皇帝である僕が処刑されることはない。でも君は、一介の家臣に過ぎない」

君は殺されるかもしれない、と言ったのだ。打ちのめされた顔をしてユインは僕を見た。悔しそうに頬を震わせ、下を向いて唇をきつく結ぶ。

ティオンの嘲る声あざわらひが頭上から降って来た。

「お互い、犠牲を覚悟してかばい合う。美しい君臣愛だな」

ティオンが前を向いて歩き始めたので僕の体も引きずられてまた先へ進んだ。

ユインの姿が少しずつ遠くなり、やがて曲がり角で見えなくなつた。

## 第四話（22）

長く暗い虐待の日々はそうして始まった。

少なくとも七日に一度、多い時で毎日、父は生贄を求めた。

たいてい陽が傾き始める暖かな午後、人々がくつろぎを求める時刻。父は休憩を取る代わりに息子の部屋を訪れる。そして抵抗の声をすら上げられない息子の両腕をつかみ廊下を引きずって行く。

きっかけなどない。もちろん僕のほうに親から叱られるような落ち度もない。

ただ彼は虫の居所が悪いが、退屈しているか、あるいは欲望にかけられたかして、とっておきの玩具で憂さを晴らそうと思いつくだけなのだ。

いつその時が訪れるのか僕には読むことが出来ない。

予測不能な恐怖を僕は毎日、“皇帝の間”で震えながら待っていた。

そして迎えが来た後は儀式を耐え忍ぶだけだ。終わりをひたすら待ち望んで。

父は自分の寝室に閉じ込めた生贄の腕をまず寝台に縛める手順から始める。

それから夕刻まで、時には明け方まで暴力を愉しむ。

殴る、殴る、殴る。

とめどなく、殴る。

始め平手で、時に拳で。

僕の皮膚はあっさり裂けて血が流れる。

敷布は、いつも血で濡れた。

それでも僕が死ぬことはなかった。父は必ず手加減をしていたからだ。

彼の目的は子を殺すことではない。血を見ることだった。苦痛を与えることだった。

苦痛ゆえに卑屈に墮ち、従順に変わる我が子を眺めることだ。最後に欲を満たす行為に及ぶとき、彼にとって暴力は、甘美な悦びを増すための最高の添え物となった。

不思議なことに僕はこの光景を少し離れた視点で眺めている。虐待が繰り返されている寝台を、やや斜め上の角度から見ているのだ。

ちようど空中に浮いて自分の体を眺めていることになる。そのために苦しみを直接に味わうことはない。離れた体から、痛かった、苦しかったという感想を受け取るのみだ。

これは何かの勘違いなのだろうか。この記憶を思い出している今の自分が、苦痛を味わうことを拒絶して視点を体から離しているのか？

否、当時から既に僕は自分の体を突き放していたとを感じる。つまり半ば死んでいる状態でその当時を過ごしていたように思う。生きながらにして死体となり、父の暴力を受け入れる器となったのだった。

ユインはもはや何も言わなかった。無論、教育のためなどではないと始めから気付いていたが。

他の廷臣たちも虐待を知っていながら何も言えなかった。

皆の見ている前で彼らの“皇帝”は貪り喰われ続けた。

誰も僕を救えなかった。

また救って欲しいとも思っていなかった。

犠牲となることは有意義だと信じていた。そんなことでしか自分は他人を救えないと。

実際、父は僕への暴力に溺れることで戦争を忘れた。この間、短い期間でしかなかっただろうが、国は父の独裁から解放された。戦いはやみ、弱りきった民は息をつくことが出来た。

「おとう……さま」

殴られている最中、不意に意識が戻ることがあった。

この日も意識が戻り下から父を見た。

自分の身に馬乗りになり、腕を振り下ろし続けている父の恐ろしい顔がはつきりと見えた。その顔は興奮で赤く染まり、瞳は大きく見開かれ、口元は愉悦で歪んでいた。腕が振り下ろされるたび彼の振り乱した髪から汗が降る。

何故、あんな顔をしているのだろうと僕は思った。

もう人間ですらない。獣に成り果てた顔。

その獣は泣いているようにも見える。

何がそんなに悲しいのか、ただ純粹に不思議で僕は呼びかけたのだ。

「おとう、さま」

苦しみの下から必死に呼び続けると、殴りつける腕がひととき止まった。

いつも静かに耐えている子供が悲痛な声を上げたので、さすがの彼も気になって耳を傾けたのだろう。

「なんだ」

「お父様……。あなたは何故このようなことをされるのですか？」  
すると一瞬だけ彼に冷静が戻った。

当たり前過ぎる問いを不意打ちに浴びて彼は隠しようのない羞恥しゅうちを顔に表す。

ユインへ答えたように“教育のため”等という嘘をつく余裕はなかったらしい。さっと顔を赤くしたかと思うと、

「お前が悪いのだ」

と呟いて前よりいつそう強い力で殴りつけて来た。

殴りながら繰り返し、繰り返し、

「何もかもお前が悪い。

レアを壊したお前が。

全てを台無しにしたお前が。

言うことを聞かないお前が。

俺を裏切ったお前が。

心から俺の物に、ならなかったお前が……」

涙が流れた。

父は僕を愛していたのだった。

憐れな父よ。

愛を叶えることが出来なかった人よ。

叶わなかったがために腐り果てた愛を、怒りとしてぶつけていけば、いずれ相手が改心して自分を愛してくれると思っていたのか？

あなたをその暗い場所へ追い込んだのは、最終的には僕かもしれない。

あなたの愛は虚しかった。

僕のほうは遂にあなたを愛することが出来なかった。子が親を想う暖かい情はおるか、こうして屈辱の記憶を再生しても怒りの気持ちさえ湧かない。憎しみも。

憎しみさえも……！

## 第四話（23）

朝、白い光に晒さらされて目覚める。

顔を横に向けると四角く切り取られた空が見える。四角い青の中を、丸い雲がゆっくり過ぎるのをしばらく眺めて過ごす。

父の部屋には壁を長方形に切り取った大きな窓があった。寝台の横の、クオートの入っていないその窓から吹き込む風は乾いて冷たく、傷付いた全身に容赦なく突き刺さった。

それでも朝は穏やかな時間だ。

疲れ切った父は別室で眠りこけている。

僕に与えられた心安らかな時は、唯一、父が寝ている僅かな間しかない。この時だけ僕の心は自由を取り戻して空を彷徨うことが出来るのだ。

やがて遠く、硬い足音が聞こえる。

足音は次第に近付き部屋へ入って来る。ユインだった。

ユインは淡々と虐待の後始末をする。僕の縛めを解き、無防備な体へ布を掛ける。

布を掛ける時の一瞬、いつも彼の目には嫌悪の色が浮かぶ。僕に吐き気を催しているのが分かる。

何故、だろう。

血で汚れた敷布のせいか。癒えない傷痕のせいか。それとも僕そのもの、心を含めた僕の全てに嫌悪を覚えるのか。

「何故……そんな顔をする？」

ある朝、僕はユインに訊いた。ユインは横目で僕を見ただけだった。

「何故だ。何が悪い。僕が何をした。ただ暴力を受けているだけだ」というのに

しつこく問いかける僕からユインは目を逸らす。吐き気を必死で飲み込もうとしているが、隠しようのない嫌悪は彼の頬を強張らせていた。

分かっている。暴力を与える側、受ける側、眺める者からすれば一体だ。

決して暴力を悦んでいるわけではない。快楽に溺れているわけでもない。ひたすら抵抗なく虐待を受けるしかない側も、与える側と同じ嫌悪の対象。

欲を受けた物。そうか。僕は汚れ物か。

卑屈な気持ちで込み上げる笑いを口元に浮かべた。怒りも悔しさも湧かなかつた。むしろ嫌悪されたほうが心地良い。救済の希望を持たなくて済む。誰も恨まなくて済む。この世で二人きり、僕を生み出した父と一体となり、汚い場所で腐り果てていけば良い。

「このようなことをいつまでも続けられると思っているのですか」  
不意にユインの低い声が頭の上から降った。

薄笑いを浮かべる僕をユインはさらに不快な面持ちで見下ろしていた。低い、唸りに似た声で呟く。

「あなたは自分だけ犠牲になればいいと思っている。救世主のおつもりなのですか」

苛々とユインが部屋を歩き回り始めた。僕は寝台の上に身を起こして訴えた。

「でも、現に戦争は止んでいる。父は僕に溺れている。そのうち戦争を忘れてくれるだろう」

「愚かな！」

吐き棄てるように言ってユインは僕を睨んだ。

「あなたはまだ何もご存じないのです。ご自分について、何も」

「教わらないから知らないのだ。無知を責めるなら僕の秘密を教えてください。全て。母のことも」

責め返せばユインはまた口ごもると思っていた。しかしこの時の彼は怒りに満ちた目で僕を睨み、話を続けた。

「よく思い出されてください。ティオン様はあなたの頭を決して殴らないでしょう」

確かにその通りだった。平手で頬を打つことはあっても、拳で頭を殴ることはない。

「どのようなことがあってもティオン様はあなたの命と、頭は保護するはずです。何故なら、あなたのここに」

と彼は自分の頭部を指で示して見せて、

「世界を制する大切な兵器が詰まっているからです」

そう言っただけの額を見つめるユインの目には侮蔑の色が浮かんでいた。わけのわからぬ恐怖にかられ、僕は子供のような気弱な心持になり視線を泳がせた。

「何……のことだ。分からない。もっときちんと教えてくれ」

「お教えする必要はございません。使わないで済めば越したことはない。ティオン様ですら簡単に使うことはためられる兵器なのですから。けれどティオン様は今すでに、外国に対してあなたの存在を脅しの材料として使い始めている。今以上に追い詰められたならそれを現実に使うこともあり得るでしょう」

馬鹿げた話だと思った。この身が兵器？ 馬鹿馬鹿しい。弱い僕に何が出来る。抵抗出来ず殴られることしか出来ない自分に。

啞然としている僕へ、しかしユインは真剣な顔で諭す。

「ティオン様の最終計画は失敗に終わりました。あなたがレア様を逃したおかげで。でも、だからこそティオン様は自棄になって何をなさるか分からない。あなたはどうか意志を失わないでください。あなたが意志を失えば世界は終わるのです」

急に怒りが込み上げた。

無理なことを言う。勝手なことばかり。ユインも国民もずっと何もせず僕に望んでばかりだ。僕は言った。

「仮にその話が本当だとしよう。では、どうすればいい？ どうすれば暴力の下で意志を失わずに済む？ いったい……、これ以上、僕にどうしろと？」

ユインが黙って僕を見つめる。

苦渋に満ちた彼の視線を浴びて悟った。

ああ。なるほど。そういうことか。

「自分で、命を絶てと言っただな」

ユインは顔を赤らめた。そして何も答えず身を翻し部屋を出て行ってしまった。

独り、僕は自分の腕を見つめた。皮膚の下を赤い血が流れている。幾度肌から吹き出しても、弱いながら流れを保って来た血が。

久しぶりの涙が落ちた。

暴力の苦しみでは決して落ちることがなかった、心の痛みが流した涙。

せめて国民のため、犠牲となつて生きようと思っていた。けれど生きることもまた皆の迷惑になるのだとユインは言う。砂漠で会った黒衣の者たちも同じことを言っていた。あのまま自分が砂漠の砂に焼かれて死ぬことが、やはり世界にとって幸いだっただのか？

それでも今はこの身を生かして父の横暴を食い止めなければならぬのだ。

もし父が人を殺す目的で僕の身を使うことがあれば、その時こそ自分で命を絶とう。

今さら躊躇う理由などない。

そのためユインが言うように僅かな意志だけは残しておかなければならないと思う。苦しみの下でも最後の意識は保っておかなければ……。

「何をする」

終わりの日まで苦しみは続くと思っていた。

思いがけない風が吹いたのは、季節が変わり始めたある日のことだった。

これからいつものように虐待の儀式が始まるうとしていた昼下がりに、父の突然の怒鳴り声で、廊下を引きずられていた僕は顔を上げた。誰かに唐突に腕をつかまれた父が、血相を変えて横の男を睨み付けていた。

父の腕をつかんでいたのはラウス・ロウだった。

ラウス・ロウ。

そうだ。その時までしばらく僕は彼の名を忘れていた。

彼と彼の部下たちはあまりにも静かに存在していたからだ。いつの間にか廊下や部屋の角に立つ彼らを、お飾りの家具か何かのように皆が感じ始めていた。彼を雇ったティオンでさえ、ラウス・ロウの名を忘れてしまったかのようにだった。

その“お飾り”が突然に動いて父の腕をつかんだのだ。

「無礼な。離せ」

父は叫んで腕を振り払おうとしたが、動じないラウス・ロウの瞳は兜の下から鋭く父を捕らえていた。

呆然と見上げる僕の前で、父の顔がみるみる怒りで青褪めていった。

#### 第四話（24）

始め何が起きたのか分からなかった。

怒りに震える父、父の腕をつかみ微動だにしないラウス・ロウ。

僕はこの光景を廊下の床に倒れた姿勢のままぼうつと見上げていた……。あまりに意外な光景だったので驚くことすら忘れた。父の体に自分から触れた人間を見たのは、いや正面から視線を合わせる人間を見たのは、この時が初めてだった。

「いったい何をしている、ラウス・ロウ。離せ。離せと言っているのだ」

必死で腕を振りほどこうともがく父の声は、次第に高まり狂気じみていく。

しかしラウス・ロウは動くことなく父を見据えている。

彼の瞳は感情なく、底まで冷たく冴えていた。僕はその冷たさに寒気を覚えた。

ふっと、突然にラウス・ロウが父の腕を解放して囁いた。

「こここのところ毎日だろう。いい加減にしろ。死んでしまっぞ」

あの静かな、遠い波に似た声だった。

「貴様。立場もわきまえず俺に説教する気が」

さも痛そうに腕をさすりながら、父は恐ろしい形相でラウス・ロウを睨みつける。それでもラウス・ロウの瞳が揺らぐことはない。

無言で冷たい視線を父の顔に据えたままだ。

答えを返さないラウス・ロウが怯えたと勘違いしたのか、父は傲慢さを取り戻し顎を上げて笑った。

「死んでしまっぞ、だと？ 俺の作り出した子供だぞ？ 俺が自分の作った物を壊すはずがないだろう。俺は俺の物を、俺のやり方で自由に扱っているだけだ。壊さないよう細心の注意を払っている。お前には分からない。俺がどれだけこいつに気を遣っているか。俺が、……俺がどれだけこいつを必要としているか」

静かに立つラウス・ロウの前で喚く父は、大人に叱られて泣いている子供に見えた。

「こいつを壊してたまるか。こいつを失ったら俺は終わりなんだ。貴様ごときに分かってたまるか。外国人に、他人などに、分かってたまるか」

ラウス・ロウはもう何も言わない。

父はラウス・ロウから目を逸らし、僕の両腕をつかんで引きずり歩き始めた。その足取りは心なしに重く、疲れているように感じられた。

気紛れに過ぎなかったのか。

その日以降、ラウス・ロウは父と僕が目の前を通り過ぎてても手を出すことはなかった。ラウス・ロウと彼の部下たちは再び壁の“お飾り”へと戻った。

ラウス・ロウは父へ説教するつもりなど毛頭なかったのだろう。

あの日はたぶん、たまたま虫の居所が悪かったか何かで、目の前を横切る不快な光景を遮ってみたくなくなっただけなのだ。

けれど、その気紛れがラウス・ロウの運命を変えることになる。

父の愉しみを邪魔し父の誇りを傷付けた彼は、相応の代償を払うことになったのだった。

数日後、寝室に連れ込まれた僕が目にしたのは思いがけない人影だった。

寝台から少し離れた壁際に人が立っていた。長い外套に身を包んだ兵士。ラウス・ロウだ。

父は彼の見ている前で平然といつもの儀式を始めようとした。

僕の狼狽を察して手を止め、父は説明する。

「最近、俺の身边には怪しい動きがある。刺客しかくがこの宮中に潜り込

んでいるという噂があるのだ。いつ何時、襲われるか分からない。たとえ寝室でも気は抜けないだろう。だから、あいつに警護してもらうことにした」

嘘だ。この間のことが気に食わなかったのだ。

父は自分に説教を垂れる者を決して許さない。自分の誇りを傷付けた者は必ず殺してきた。しかしラウス・ロウは数少ない利用価値のある人間だ、失うわけにいかない。そこで腹の虫を治める手段として考えたのだろう。ラウス・ロウを虐待の現場に立ち会わせて、全てを見せつけよう。

暴力を見せることがラウス・ロウに対する嫌がらせになると思っていたのか。それとも、彼を共犯に仕立て侮辱するつもりだったのか。

分からない。僕にはここまでする父の考えがどうしても分からなかった。

「異常だ……お父様あなたは」

困惑のあまり思わず口にした非難を父は喜んで受け取る。この男は他人が自分のしたことと狼狽したり、泣き喚いたりする姿を眺めることを至上の喜びとしている。非難したり騒いだりすればまた喜んで何を始めるか分からない。

淡々と状況に耐えるしかなかった。

そうしてまた一つ常軌を逸した暴力に僕は無抵抗で晒されることになった。

殴られている時、視線を人影へ移してみた。

ラウス・ロウは無表情で壁際に立っていた。感情のない瞳を、自分の立つ床の少し先へ落として。

いつも通り気配さえ感じさせない静かな佇まいだった。

彼がこちらへ視線を向けることは決してないと分かった。しかし虐待の光景は彼の目の端に映り、心に映っているのだろうか。彼が

何を考えながら立っているのか、知ることは出来なかった。

#### 第四話（25）

ラウス・ロウは今日も壁際に立つ。

斜めに落ちる自分の影へ冷めた瞳を向けながら。

寝台の頭側、少し離れた壁際に立つ彼は飾り物であることに徹している。

幾つかの午後が過ぎた今、その姿は自然に寝室の景色へ溶け込んでいた。

父はラウス・ロウへの信頼を深めた。この懲罰的な命令に従った彼の忠誠を認めたのだらう。彼への怒りはいつしか忘れてしまったようだった。それどころか、虐待の場に無言で立つ彼を本当に共犯者であるかのように思い始め、以前よりも心を許すようになった。

「大陸へ行ってくれないか、ラウス・ロウ」

父が虐待の手を止めラウス・ロウへ話しかけたのはそんな午後のことだった。

話しかけられた時だけ一瞬、ロウの瞳が動いた。だが言葉はなく、熱のない視線を父の顔に向ける。

「俺が長く戦を休んでいたせいで外国の警戒が緩んでいる。今こそ大陸を、世界を制する絶好の機会。……本来は俺が行くべきだ。だが、俺はもう疲れた。ラウス・ロウよ、お前が軍を率いてくれないか。お前なら必ず栄誉を手にすることが出来るはずだ」

父は自信に満ちた顔で相手の答えを待っている。否、の答えではなく当然に従うという答えだ。

僕は耳を疑っていた。虐待に溺れた父が戦争の意欲を失ったことは確かだった。でもまさか他人に、まして外国人であるラウス・ロウに軍隊を授けて戦争を頼むとは思っていなかった。

「お前には全軍を授けよう。レイリアの隅々から集めた、我が国の

全ての力を」

父の言葉を聞いて僕の胸にハウクの顔がちらつく。

レイリアの全軍。それはハウクのように、国家への最後の供物として自らの身を差し出した一般国民たちだ。絞りに絞ったこの国の血の、最後の一滴だ。

「駄目、だ」

とっさに身を起こし叫んでいた。

「行くな！ 大陸へ行くな、ラウス・ロウ」

ぎよつと目を剥いて父が僕を見る。

最近では縛められることもなく虐待も穏やかとなっていたから僕には力が残っていた。それで心の赴くまま叫ぶことが出来たのだが、無論、叫ぶことは許されていない。

たちまち父の平手が飛んで来た。

「気でも触れたか。口出しをするな」

僕はうつ伏せに組み伏せられ殴られた。それでもラウス・ロウへ手を伸ばし叫ぶことをやめられなかった。

「駄目だ……行ってはいけない……戦争は駄目だ。頼む……頼む、から、行くな……ラウス・ロウ」

「黙れ！ 貴様ごときに戦の何が分かる」

殴られ続けて意識が朦朧もうちゅうとした。血の味が広がる口で、しかし僕はうわ言のように繰り返していた。

「行くな、ラウ、ス、ロ、ウ……行か、ないでくれ……」

その間。壁際から視線が注がれていたのを僕は感じていた。

意識を失う直前、さざなみに似た声を聴いた。

「俺は護衛だ。軍隊の指揮はしない」

行かせておけば良かったのだ。そう悔いるのは遥かに後のことだ。もしあの時ラウス・ロウを行かせておけば、運命の輪はこれほどまでに長く延びることはなかっただろう。

だが選択の誤りにはいつも後から気付く。そしてその誤りもまた、結末のために予め用意されていた迷い道であるのかも知れない。

……闇に光が射す。

そして物語が始まる。

薄く開いた瞼に光が溢れた。

意識が戻ったとたん、全身に痛みが走った。

辺りに視線を走らせた。蜜色の光が寝室に満ちていた。まだ陽が落ちる前で、殴られてから少しの時間しか経っていないと分かった。久しぶりの激しい暴力で疲れた父は他の部屋で眠りこけているらしい。僕は安心して、体の力を抜いた。

掛布で身を覆い、血に濡れた体を仰向けにする。しばらく脱力して天井を眺めていた。板を繋ぎ合わせて作った、継ぎ目だらけの“原始的な”天井だ。幼い頃にいつも見つめていた、傷一つない滑らかな金属質の天井が懐かしくなる。

思い出にふけていた僕の耳に、ふと小さな呼吸の音が入った。顔を横へ向けると壁際に立つ人の姿が見えた。

ラウス・ロウはまだそこに居たのだった。相変わらず身じろぎもせず自分の影へ視線を落としている。

不自然なほど彼は静かだった。今日のような壮絶な暴力を目撃しても、いつもと変わらずに静かだ。その静か過ぎる態度が皮肉に思えて妙に可笑しくなった。

諦めから来る穏やかな息を吐き、僕は笑った。

「ラウス・ロウ。……あなたは、いつも何を考えてそこに立っているのですか」

責めたわけではない。ただ純粹に傍観者の気持ちを感じてみたくなっただけだ。

「そうしてそこで虐待を眺めていて、人の苦しみをいつも黙って眺めていて、いったいどんな気持ちでいるのですか？」

「ラウス・ロウは瞳だけ動かして僕を見下ろした。」

僕は彼の瞳を見つめた。瞳の奥を見てやろうと思った。傍はたで見ているだけの観客の心を読み取りたい。ラウス・ロウも僕の視線に動じることなく見つめ返す。

合わさる視線が張り詰めた。

瞬間、僕はラウス・ロウの瞳の底を知った。

彼の目はいつも冷たい。でもユインが僕へ向ける目の酷薄な冷たさとは違う。父が獲物としての僕を見る時の残虐さもない。

痛みだ。

目深に被った兜の下で陰る瞳は、しんと心の深くに積もる痛みを湛たたえていた。その痛みを隠すために冷たい光で覆っているのだ。打たれた僕はラウス・ロウの瞳を食い入るように見つめた。彼は僕に何かを悟られたと気付いたのでろう、目を細め顔を逸らした。

気のせいだろうか、苦しげな声が僕の頭へ降った。

「中庭へ来い。いつだか最初に言葉を交わした場所だ。監視は遠ざけておく」

それだけ言っただけで彼は外套を翻し、背を向けて寝室を出て行った。廊下を去る彼の靴音を僕は驚きの気持ちで聴いていた。

#### 第四話（26）

ユインが迎えに来る前にここを出なければならぬ。迷っている暇はなかった。

寝台から這い降り、衣を身に着けた。クオートの衣を羽織ると少し痛みが引いて動けるようになる。クオートの繊維にはある程度、人の体を癒す力があつた。度重なる虐待を受けても僕が生き延びていたのは衣のおかげもあつたらう。

だがそんな高度技術の恩恵を受けてもまだ、歩き出すと全身が悲鳴を上げた。

這うようにして寝室から廊下へ出る。裸の足裏が廊下でひたりと冷たい音を立てた。クオートののおかげでかろうじて傷口がふさがり、歩いた後に血が落ちないのが幸いだつた。

廊下には誰もいなかった。中庭まで歩いて行く間に、一人の兵の姿もなかったし廷臣ともすれ違わずに済んだ。

ラウス・ロウが手を回したようだ。

何故、ラウス・ロウは危険を承知でこんなことをするのか。父にばれたらただでは済まない。何のつもりなのだろう。

何か裏の思惑があるのかもしれない。疑いが重く胸に募る。けれども人払いされた廊下の様子にラウス・ロウの並々ならない決意を感じて、僕の足は進んだ。

いつかと逆だつた。

砂利を踏む僕の足音に、中庭の隅で待つ男が振り返つた。

一つに束ねられた髪が背で揺れる。かつて黒髪だつたらしい髪は乾いて灰色に褪せていた。長い前髪の隙間から、あの静かな瞳が僕を見た。

鎧も兜も身に付けていない。初めて見るその姿は意外にも小さく

感じられる。実際、彼は思ったほど長身でもないし、体格が良いわけでもなかったのだ。鎧が体格を良く見せていたのか、それとも怖いと思う僕の気持ち<sup>が</sup>彼を大きく見せたのか。……ああそれに、考えてみれば僕は少し成長して背が伸びた。以前に中庭で会った時よりは確かに、彼との身長差が縮んでいたのだった。

心なしか背を丸めているせいでいつそう威圧感を失っている。身を包む外套の下にはたぶん、長剣も隠し持つてはいないだろう。

「よく来てくれた」

と、ラウス・ロウは言った。

思いがけずその声は優しかった。

いつかのように風の強い日だ。慣れてしまった鼻にはもう腐臭は感じられない。髪が風に煽られ、時々露<sup>あせ</sup>になるラウス・ロウの瞳だけが、前と同じ憂い<sup>うれ</sup>を宿している。彼は穏やかな顔で高い壁を見上げて呟いた。

「あれから、どれくらい経ったのだろうな」

前にここで会った時のことを言っているらしい。

「さあ……どれくらい、時が過ぎたのか。分かりません」

僕は答えた。本当に分からなかった。月日の感覚は完全に手放してしまった。教えてくれる人もいない。ただ自分の伸びた身長を考えれば数年は経っているのだと思う。いったい、僕はいくつになったのだろう。

「あの時のことは、感謝しています。あなたのおかげでレアを逃がすことが出来た。僕は逃げる<sup>こと</sup>が叶わなかったけれど」

急いで告げた。ようやく感謝の言葉を告げられて少しほっとする。

彼はしかし寂しげな瞳で僕を見て言った。

「残念だ」

僕が逃げる<sup>こと</sup>が出来なくて残念だ、と言ってくれるのか。

「いえ、僕は……いいのです。贄<sup>にえ</sup>として生まれついたのですから。

これは運命です。あの人の子として現世に引き出された時から決まっていた運命。ただ僕はレアだけ逃げる<sup>こと</sup>が出来て嬉しい。彼女

は僕の幸福です。彼女がどこかで自由に生きていてくれるなら、それだけで幸せなのです」

心から嬉しくて、笑った。笑う僕をラウス・ロウは見つめる。

「親に定められる運命などない。神にもだ」

彼の言葉に僕はやはり笑って首を振るしかなかった。

「それで、いいのか」

ラウス・ロウの声が変わり始めたことに僕は気付いた。いつも感情の気配も感じられない声が、次第に熱を帯びていく。

「それで本当にいいのか。王子さまよ」

海の薫りが近付いて来た。ラウス・ロウの外套から漂う薫りだった。彼が僕へ詰め寄って来たのだ。不意のことに僕は驚き、自分より少し背の高い人を見上げた。見下ろす瞳は怒りで光っていた。

逃げる間もなく両肩をつかまれ揺すられた。

「真に人として目を覚ませ。あなたは皇帝であると同時に人間だ。

人間である自分を、棄ててはならない」

「どういう、意味ですか」

「人は誰でも幸福を求めることが出来る。苦しみを受け続けなければならぬ運命などない。どのような場所、どのような立場で生まれついたとしても、幸せに生きていい。それが人間だ。あなたも例外ではない」

見開かれた彼の目は今にも泣き出さんばかりに赤く染まっている。驚きのあまり呆然とした。まさか、ラウス・ロウは同情しているのか。不幸な境遇に置かれた皇帝に。

今日ここへ僕を呼び出したのも他意はなく、ただ可哀相な少年を励ましたいという優しい気持ちから……？

まさかそんな、有り得るのだろうか。自分の利益に関わり無いところで他人に同情するということが。誰もが自分の保身しか考えないこの宮廷で。まして、ティオンの犬と呼ばれている男が。

しかしラウス・ロウの瞳は否定しようもなく純粹で、素朴な人間の光を放っていた。いつも自分の存在さえ打ち消すほど静かだった

この男はどこに、これほど熱い感情を隠し持っていたのだろう。真つ当な、人間らしい同情を浴びたのはここへ来て初めてのような気がする。でも今の僕はその同情が恐ろしい。父から与えられる暴力の恐怖とは違う、本当のことを告げられる恐ろしさだ。

僕は彼の手から逃れ、後ろに退きながら言葉を吐いた。

「だ……だからと言って、どうすればいいのですか。逃げることはとうてい、叶わない」

衣を少しずらして胸を出す。そこに十字の傷跡がある。

「見てください。ご存知でしょう。この印しるし。これがある限り逃げようにも逃げられない。世界中のどこへ逃げてもすぐに見つけ出され、父のところへ連れ戻される」

もとより逃げる手段もなく、逃げるつもりもなかった。だがラウス・ロウを納得させるためだけに印のことを言った。自分は逃げられる運命にはないのだと。そしてそれは現実でもある。

「それに。あなたは僕のことを人間だと言うけれど、僕は人間らしいものを何も持っていない。友さえ、いない」

うっかり口にしてしまってから自分の言葉に打ちのめされた。悲しみで胸が詰まり、呻いた。

「ただ一人の友も……、ない」

僕が語る間ラウス・ロウは無言で見つめていた。

「友が、いないと言うのか」

怒りを含む低い声が僕の耳を打った。

「あなたは何も見えていない。周りを見ようともしていない」

そう言ってラウス・ロウは外套の内から短剣を引き抜いた。青白い刃先が、夕刻の薄暗がりで煌いた。

#### 第四話（27）

「友ならここにいる」

外套が風に煽られた。

「俺があなたの友だ。友の証を示そう」

煽られた外套の下は粗末な一枚の衣だけだった。その衣をラウス・ロウは片手で引きちぎった。浅黒い胸が露あらわとなる。

彼は短剣の柄を握り締めた。青く光る刃先が、彼の裸の胸へ近づく。

僕は悲鳴を上げた。

「いつたい、何を!？」

目を塞ぐ余裕もなかった。僕の見ている前で赤い飛沫がほとばしった。

左から右へ赤い線が刻まれる。

端まで刻むと次は縦に。上から下へ赤が流れる。

彼は無表情だったが、僕は幾度も悲鳴を漏らした。自分が傷付けられるよりも遥かに深い痛みを覚えたからだ。

鮮やかな赤の十字が彼の胸に浮かび上がったのを見た時、ついに僕は目を覆って泣いた。

「何ということ……ラウス・ロウ、あなたは」

目を覆っていた僕の手をラウス・ロウはつかみ自分の傷を見せた。「よく見る！ これで俺はあなたと同じ傷を持つ者。どこへ行こうともあなたと同じ差別を受ける友となった」

震えて見上げた僕の耳に彼の低い声が響く。

「だが、こんなものは薄い皮膚一枚に刻み付ける仮の印に過ぎない。肉の印など誰もが簡単に付けることが出来る。しよせん、死ねば簡単に消える。こんなくだらないものにこだわってはならない」

そして彼はゆっくり、こちらの魂に刻み込むように告げたのだった。

「忘れるな。俺はあなたの友だ。遙かな時の果てまでも消えない契りを交わした、永遠の友だ」

何故、とその時の僕は呆然とする頭で考えていた。

人を信じることを忘れた僕には、他人が何故ここまで言うてくれるのか分からなかったのだ。今まで誰からも告げられたことのなかった“友”という言葉に戸惑うだけだった。

疑っても良かった。いや、疑うのが当然だったろう。

僕の立場や権力を利用してこのような甘い台詞を吐くのだと。

だが疑うにはあまりに彼の瞳は優しく、血の誓いは鮮烈過ぎた。

「本当はあなたも殺すつもりだった」

え、と僕は思わず聞き返した。耳に入って来たラウス・ロウの眩きの意味が理解出来なかった。

あなた、“も”？

意味を問う僕の瞳から彼は目を逸らし、苦しげに顔を歪ませた。

「奴と一緒にあなたも殺す計画だった。あの独裁者が生み出したものは根絶やしにするはずだった。そう出来たらどんなに事は早く済んだろう。……しかし……殺せなかった、あなただけは。どうしても」

“奴”とは他の誰でもない。父のことを言っているのだと分かった。

分かった瞬間、総毛立った。

ラウス・ロウ。この男は！

宮廷に暗殺者が潜んでいると父は以前から肌で感じていたようだ。

だがその暗殺者がまさか自分の唯一信頼している男だったとは気付かなかった。ラウス・ロウ、この男は、父を殺す決意を持って父の傍にいたのだ。きつと、ずっと。始めから。

「何故、僕を殺さなかったのですか」

僕は自然と口にしていった。そうだ。今までどうして気付かなかつたのだろう、父と一緒に死ねば良いと。それこそ国民を独裁から解放する最高の解決策だったはずだ。

だが僕の問いにラウス・ロウはくしゃりと顔を潰した。

「……分からない。心が許してくれないのだ」

笑おうとしたのかもしれないが、彼の顔は泣いているようにしか見えなかった。泣き笑いの形に歪んだ顔が優しく僕を見下ろした。

「先ほどの問いに答えよう。“人の苦しみを眺めていてどんな気持ちですか”という問いだ。あなたの苦しみを見てどんな気持ちか？

苦しい。苦しくて、たまらない。俺は苦しみと怒りで毎日、身が焦げる想いでいる」

背を向けてラウス・ロウは語り始めた。

「ずっとあなたを見ていた。あなたは父親が言うような人形ではない。慈しみの心を持つ人間だ。そんなあなたが酷い目に遭うのを眺めて、不憫で不憫でたまらなくなった」

ラウス・ロウの声が次第に細く弱くなっていく。ふがない気持ちだが、丸まったその背に滲んでいた。

「今となつてはあなたの父である奴を殺す機会も見失っている。奴と一緒にいるあなたの姿を見ると手が出せない。あなたが悲しむかもしれないと思うと、俺は動けない」

本当に泣いていたのかもしれない。語る彼の肩が小さく震えていた。

“何故”という想いがまた僕の心にこだました。どうして僕ごときのために泣いてくれる人がいるのだろう。泣く義理など何もない、赤の他人が。

僕の頬にも涙が流れていた。凍りついた心を一気にとかす暖かい

涙だった。

そうして二人で中庭に立っていたのは短い間だったはずだ。しかし記憶にある全ての人生に等しいほど永い時に思えた。

「永遠の友」という言葉をラウス・ロウは未来について使ったのか、過去について使ったのか。

ここが始まりなのかそれとも、ぐるりと巡る輪の一点に過ぎないのか。

いずれにせよラウス・ロウは核心を知っていた。僕より先に核心に気付いていて、決して見失うことがなかった。

永劫に続く絆きずなというもの、切りようがない関係。肉の双子があるなら魂の双子もある。世界の果てと果て。対極に生まれながら始めから深く結びついている。人の目には遠く見えるその繋がりも血よりも濃く、気付きによって急激に距離を越える。

運命はいつでもそれらの繋がりから生まれる。運命が先にあるのではないのだ。

しゅ、という布が擦れる音を聴いて僕は永遠から“今”へ意識を戻した。

ラウス・ロウが外套の下から黒い布を引き出していた。その布を彼は短剣の刃に巻いている。

「これを持って」

黒い布で巻かれた短剣が僕の顔の前に突きつけられた。

意味をはかりかねて見返すと、ラウス・ロウは鋭い瞳で僕を見つめた。

「黒衣の者たちを信頼しろ。彼らは俺の友であり、あなたの味方だ」  
黒衣の者、と聞いて思い出した。砂漠で会った三人組。レアを連れ去った民のことだ。この宮廷内で、柱の影から忠告して来た者も

同じ民だろう。あの者たちは常に宮廷に潜んでいるのか。

「彼らは日ごろ、兵士の姿をして宮廷を歩いている。目印として黒い布を体のどこかに身に付けているから注意して見ておけ。あなたの味方が大勢いることを知るだろう」

恐る恐る僕はその黒い剣を受け取った。僕の手には剣が収まるのを確認してからラウス・ロウは深く呼吸し、囁いた。

「心が決まったらこれを黒衣の誰かに渡せ」

びりびり痺れる気が剣から指先へ伝わったように感じた。

“味方”にこれを渡すということは、つまり……。

「自らの人生を生きる、友よ」

ラウス・ロウが言った。その強い声に僕は顔を上げた。

「生きることが諦めてはならない。我々は必ずあなたを救い出す」

泣きそうな気持ちで彼を見つめ返した。ラウス・ロウは瞳を逸らさなかつた。

「我々はあなたの命令を待っている。あなたが命を降せば、即座に全ての反勢力が動く」

執政ティオンを排除する密命を、皇帝たる僕自身が、降す。

#### 第四話（28）

ユインが迎えに来たのは夜も更けた頃だった。僕が抜け出したことに気付いた様子もなく、いつもと変わらぬ無表情で彼は僕を牢へ連れ帰る。

扉の前に見張りの兵士が二人立っている。これもいつものことだった。しかし、その夜の僕は気付いた。兵士たちの腰に黒い紐が巻かれていることに。ユインが持つ灯りに照らされて、紐は確かに黒々と浮かび上がって見えた。

救いはこれほど近くにあったのだった。手を伸ばせば届くほどに。衣の下に隠した短剣を握り締めた。今すぐ差し出しそうになる衝動を必死で堪える。

扉が閉ざされた後は闇の中で苦しみにのた打ち回った。激しい熱が胸を焼いていた。

もしかしたら父から解放される未来があるのかもしれない。不意打ちに舞い降りた希望は、きらきらと輝いて僕を誘った。救われたい、救われたらどんな気持ちだろう、自分の意志で人生を選ぶとはどれほどの幸せか……。想像しただけで死んでいた心が蘇る。凍りついた感情が融けていく。

けれど希望に伸ばしかけた手はすぐ暗い気持ちに引きずり戻されてしまう。

“父は死ぬのだろうか？”

一点。心に落ちた染みはたちまち広がる。冷たい短剣を胸に抱え、声を殺して泣いた。

「父は、死ぬのですか」

あの時、僕の問いにラウス・ロウは答えた。

「生かすと約束することは出来ない」

当然だ。約束すればラウス・ロウたちの身が危険に晒される。納得して僕は頷いた。これを使うも使わないも僕が決めればいい。手の中の物を見つめていると、

「しかし、」

ラウス・ロウが言葉を継いだ。

「最後まで生かすよう努力をする。あなたに父殺しの罪を負わせた  
くはない」

見下ろす瞳の憐れみを僕は忘れない。瞳は本心を映しているのだ  
ろうと思った。彼の言葉も本心だろうと。

だからと言って迷いが消えるわけではなかった。

しばらく変わりのない日々を過ごした。父は子を貪り続け、貪られる子を眺める兵士が壁際に立つ。

「戦争へ行け。ラウス・ロウ」

相変わらず父が繰り返す命令も儀式の一つになった。ラウス・ロウが心えない不満で父の暴力は増すのだが、暴力の激しさと比例して僕の感覚も麻痺していった。

短剣を使うのか使わないのか。いつしか気持ちは使わない方向に傾いていた。もしかしたらこのまま何も変わらず、自分も何もしなくて済むのではないかと思いはじめた。やはり、父と自分が死ぬまで耐えれば済むことなのでは。

僕は忘れていたのだ。父が他人の拒絶を決して許さないこと。自分の欲求は、どんな手段を用いても叶えようとすることを。

「ラウス・ロウがやってくれないなら、仕方がない。こいつを使う  
しかないな」

ある日、父が僕を指差して言った。

正確には僕ではない　僕の頭部をだ。

意味はまだ分からなかった。だが父の笑みを見て全身に悪寒が走った。いつかユインが与えてくれた忠告が現実には近付いたことを悟

った。“破滅”だと承知でも、“最後の手段”を使う。父はそういう人だ。

悦に浸り笑う父。理由を知らない恐怖に震える僕。張り詰めた空気を破ったのはラウス・ロウだった。

「……承知、した。俺が兵を率いて戦おう」

応えたラウス・ロウの視線が自分に注がれていることを感じた。

彼は諦めかけている。僕が決断を降すことはない、差し出した救いの手を握ることはないと思いつている。だからせめて僕の代わりに盾となり破滅を防ごうとしている。

一刻の猶予もない。

今が決断する最後の機会だと悟った。

交代の時間、牢の見張り兵は扉を開けて中の様子を確認する。

それが、日に二度。昼と夜更けとあり、黒を身に付けた兵士が来るのは夜更けだと確認していた。

運良く次の日は父に連れて行かれることもなく部屋で過ごした。

僕は扉の前で膝を抱え、黒い布で巻いた短剣を握り締めて時を待った。

やがて日が暮れる。

闇が降りて長い時が過ぎた頃、足音が近付いて来る。

扉が開いた。廊下の灯りが隙間から差し込み、僕の顔を照らした。覗き込んだ兵士と僕の目が合った。僕は真っ直ぐに腕を伸ばして短剣を差し出した。

兵士は少し意外そうに瞬きをし、僕の顔を見る。僕の瞳に揺らぎがないことを知ると緊張の面持ちで命令を受け取った。

それから、深々と頭を下げて言った。

「かしこまりました。陛下」

#### 第四話（29）

「船を用意してくれ」

翌日。ラウス・ロウが父へ言った。

「船」

父が訊き返す。

「ああ。原始的な船を頼む。敵に侵入を察知されない、人の手で漕ぐ船だ。それを十万人分」

十万、という人数を聞いて父は躊躇するかと思つたが、案外快く答えたのだった。

「なるほど。船で密かに敵地へ上陸するのだな。……了解した。十万の兵のための船を用意するくらい、たやすいことだ」

父は上機嫌だった。僕に対する手もいつになく優しい。

僕は寝台から顔を上げて壁際のラウス・ロウを盗み見る。彼と目が合う。彼の目には決意がみなぎっていた。僕が決断したことへの感謝と、喜びも。

ラウス・ロウのその変わりようを父は完全に勘違いしていた。彼が心を入れ換えて自分への忠誠を示してくれていると思ひ込んでいた。

憐れな父。滑稽なほどに。僕は胸の痛みを覚え目を瞑る。

それからのことは速やかに進んだ。

父の命令で船は早々に用意された。全国から疲弊した民がかき集められ兵士としての訓練を受けた。武器も着々と揃えられていく。いざという時にはクオートに反応して威力を増す、銅で出来た鎧も山と積まれた。

飢餓に苦しむ民からは怨嗟えんさの聲が上がったが、民の声を潰すことにかけて父は天才だった。虐殺という恐怖をちらつかせるだけで、

あつさり民の声は消えた。

この間、父から僕への暴力はやんでいた。

暗い牢に放置された僕は黒衣の者たちの報告を受けながら時を待った。

そうして、その夜が来た。

ばたばたばた、と慌しく人が駆ける足音が聞こえ、扉が開け放たれた。

振りかざされる松明に目が眩む。しばらくして明るさに慣れた僕の目に、黒衣に身を包んだ兵士たちの姿が映った。

頭を包む黒い布の隙間から、ざらり光る白い目が僕を見据えた。

「陛下。時は満ちました。どうぞお越しく下さい」

僕は一つ呼吸し、震える臉を閉じた。それから目を開き、頷く。

一步前に進み出、恭しく差し出された彼らの手を取った。自分でも不思議だったが自然にそのような仕草が出来た。無言の仕草が黒衣たちの忠誠への応えとなった。

長い廊下を黒衣に囲まれて歩く。

所々、手足を縛られた兵が床に転がっている。事情を知らない警備兵たちだろう。黒衣を見ると敵対心を剥き出しにして唸るが、僕の姿を見てはつと青褪める。僕は彼らへ近付いて耳元で囁いた。

「手荒なことをして済まない。あなた方を傷付けるつもりはない。間もなく解放する」

歩くごとに黒衣の数は増えた。宮廷を出る頃、僕は百人近い黒衣集団を引き連れていた。

この他にも奥で父を抑えている部隊がいるはずだった。いったい宮廷には何人の反対派が潜入していたのだろう。知らずに過ごしていた父の境遇を想って身震いする。

宮廷を過ぎてまた長い廊下を歩く。初めて本土へ連れて来られた日に通った、広い廊下だ。

あの日、廊下の両側にはたくさんの家臣たちが歓迎の声を上げていた。今の僕には、あの声が嘘だったと分かる。僕は歓迎されるどころか独裁者の子として憎まれていたのだった。きっと誰もが僕が皇帝となることを認めておらず、怒りを持って僕を見つめていたのだ。

今は、どうだろうか？

人気のない静かな廊下を見回した。巨大なクオートをはめ込んだ壁の向こうは闇に沈んでいる。伸び放題の草木の影だけが闇の中、薄っすら浮かび上がる。ふと、草の間から小さな光が舞い上がった。蛍の光だった。

温かい光が胸に沁みて、知った。ここには熱狂的な歓声も歓喜の涙もない。ただ世界は僕を許している。僕を含む全ての命を。小さな一個の存在を、世界はいつでも静かに認めている。

だから恐れる必要はない。

自分の足で歩くこと。自分の意志で選ぶこと。生きること、本当は誰もが恐れる必要などない。

生まれて初めて踏んだ都市の土は冷たかった。

ひび割れた石の道は雑草で覆い尽くされている。この荒れた道が海まで続いているようだ。

最初の日に通った、船着場への渡り廊下は避けた。建物内を通って行けば船着場まで早いのだが、この建物は他の多くの建物と網目状の廊下で繋ぎ合わされている。事情を知らない都市住民が眠る建物の横を通るのは危険過ぎた。代わりに僕は外の道を歩き、市内に待機している味方を連れて行くことになった。

建物を出たところで縛られて転がされている警備兵を見つけた。

兵の顔を見て僕は足を止めた。

「ハウク」

わけが分からないまま憎しみの目を周囲に向けていたハウクは、

僕を見て目を丸くした。

急いで近付き口の覆いを解いてやる。興奮した声が漏れた。

「陛下？ 何故このようなところに」

「済まない。これは僕が命じたこと。どうか騒がないで欲しい」

ハウクに囁いてから周りの黒衣たちを見回して、「誰かこの人を解いてくれ」と頼んだ。躊躇する彼らに、ハウクは安全だと説明し拘束を解いてもらう。

「驚きました……。いったい、どういうことですか。何事があったのですか」

縛られていた腕の痣をさすりハウクは僕へ訊ねる。説明している間も、再会の喜びに浸る間も今はない。僕は背の高い彼を見上げて命じた。

「ついて来てくれないか。君に頼みたいことがある」

#### 第四話（30）

夜の市街をさらに進む。

荒廃しきつた都市にはもはや人の暮らしの気配はなかった。高層の建物は古びて崩れかけている。壁は黒く汚れ、草木の侵食を許し、中には傾きかけている建物もあつた。港まで続いているはずの道は途中から草に覆われて見えなくなった。

手入れが行き届いていたのは都の中央、宮廷とその周りだけだったのだ。つまり役人たち上層部の人間しか都市に住んでいなかったということだ。他の都市の住人たちはとうの昔に出て行ったか、死んでしまったのだろうか。

悲しみで胸が詰まった。だが僕は表情を変えず、顔を上げて歩く。前を向かなければならない。

従う人々の足音はまた増えていた。声一つしない市街に重い足音がこだました。

説明なしに連れて来られて戸惑っていたハウクも、彼なりに状況を讀んだのか、今は力強い足取りでついて来る。僕を見つめる目に熱があり、期待に頬を紅潮させている。

やがて苦い薫りが身を包んだ。

濃い霧が立ち籠めているので眺めることは叶わないが、すぐ先に海があると分かった。静まり返る岸辺に波音だけが雄々しく響いている。港に着いたのだった。

岸辺へ降りて行くと、霧の壁の向こうから巨大な黒い影が姿を現した。天に届くかと思うほど高く、怪魚のごとく丸々と太った影。それが幾つも海上で揺れていた。あの巨体には今、十万の人々が飲み込まれている。兵士のために父が用意した船で、今、船の中には各地から集められた兵士たちが戦を待ち眠っているのだ。もう戦を

する必要などないことも知らず。

岸辺で待つていた十数人が僕の姿を認めて一斉に跪いた。

黒衣の精鋭たちが港で待つているという説明は予め受けていた。彼らが僕を護衛し、都から脱出させてくれるという。

「お待ちしております。船は整っております」

船へ導こうとする彼らに少し待つよう頼み、ハウクを呼びつけた。ハウク、よく聞いてくれ」

僕の前に跪いたハウクの期待は最高潮に高まっているようだった。陶醉した声で答える。

「はい。何なりと仰せください、陛下。いよいよ立ち上られたのですよね？ 国を建て直しされるのですね？ 逆賊ティオンを倒して陛下が国家の建て直しをされるのでしたら、私もお手伝いさせていただきます。あなたのために戦います」

「逆賊なんかいない……戦う必要などないんだ、ハウク。君は興奮で赤くなった彼の頬に手を当てて言った。

「逆賊と言わないでくれ。あれでも僕の父だ。皆に悪いことをしてしまったが、償いはいずれ僕がする。だからどうか、もう父を憎まないでくれ」

僕の目に浮かんだ涙をハウクは不思議そうに見つめた。何を言っているのか理解出来ない様子だった。

「君へ頼みたいのは戦うことではない。憎しみを忘れて、戦いをやめることだ。兵士であることをやめてもとの平和な民に戻ってもらうこと。あそこに眠る人々とともに」

巨大な船を指して言った。ようやく命令の意味を悟ったハウクは激しく首を振った。

「いけません。あの兵士たちは陛下のために戦うべき者たちです。国家の建て直しをなさるのですから、これからいくらかでも兵士が必要となるではありませんか」

「何を言っている。君たちの願いは平和な生活に戻ることではなかったのか？」

「それは国家の建て直しが終わってからです。皆、ティオンのために戦うことはうんざりしている。でも国家の希望のために戦うなら、命など惜しくない。誰もが怒りに燃えています。そして本当の戦いをしたいと願って来たのです。自分と家族を踏みにじった連中へ復讐をし、未来を手にするための戦いです。本当に生きるための戦いです。私は……私は、この日が来るのをずっと、ずっと願っていました。真の戦いの時を。我々の導き手が立ち上がってくれる時を！」

感極まって泣き出したハウクを冷たい瞳で見つめ、「駄目だ」とだけ言い放った。ハウクから視線をはずして周囲を見回し、全員に聞こえるよう大声で下命した。

「軍は解散だ！ 全ての武器を海に投げ捨てるように！」

裏切られたハウクは呆然と僕を見つめる。

「では……私に頼みたいこととは何ですか。私にどうしろと？」

僕はハウクに笑いかけた。今は民の希望となった彼が、民そのものであるかのように慈しい。

「あの時の君の話を僕は忘れていないよ、ハウク。家族を愛する君だから、この大事業を頼めるのではないかと思う」

跪いたままのハウクの前にかがみ、瞳を覗き込んで言った。

「君には最も大変な仕事をお願いしたい。あの船に乗る人々を、船ごと大陸へ導いて欲しいんだ。それが終わったら同じ船でレイリアに帰り、あの人たちの家族を乗せて大陸へ連れて行ってくれ。しかしこれだけ大量の民を乗り込ませたら、外国からは侵略軍と誤解されて攻撃されてしまうかもしれない。だから侵略軍ではないという証に、これを」

おもむろにクオートの上衣を脱いだ。彼の手に握らせる。

「レイリア皇帝からの友好の印として、この衣を持って行って欲しい。レイリアに残った最後のクオートを」

手の中の薄い衣を握り締めた時、初めてハウクは僕の気持ちを理解したようだった。

「……承知、致しました……。陛下のご命令は必ず果たしましょう。」

でも果たした暁には、あなたのもとに馳せ参じてよろしいですか。私も、あなたのもとでお手伝いさせていただきますませんか？」

背を向けて首を振った。

「いいや。僕のほうが後を追いかける。準備が整えば、新しい地で国を建てるつもりでいる。その時までどうか頼む。民を、大陸へ

」

指差した先、霧の彼方には大陸があるはずだった。

かつて父が侵略戦争を仕掛けた国々がある地。今は我々の唯一の希望となった、遠い東の地。

ハウクを後に残し、素早い足取りで岸边へ向かった。

黒衣の精鋭が僕を取り囲み船へと導く。一人が耳元で囁いた。

「時間がありません。お急ぎを。ひとまず影島へ逃れます」

僕は無言で頷いた。ハウクには嘘をついてしまった。大陸で建国する計画などない。本当はまだ自分の周囲で起こっていることを正確に把握していなかったし、何も決まっていなかった。ただ、“都から逃れる”こと。黒衣たちが僕に約束してくれた未来はそれだけなのだ。

小さい船に乗り込む前、思わず港を振り返った。

「待って……もう少し待ってくれないか。ラウス・ロウはどうした？ 彼を待てないのか」

「なりません。今、ラウス・ロウは宮廷で追手を食い止めています。彼はテイオンを斬った後、すぐに影島へ来ることになっています。他の味方もテイオンとの戦いが終われば影島に集結します。ご安心なさって先に影島でお待ちください」

「そうか」

答えながらも港へ視線を走らせてしまう。

数えれば、黒衣の精鋭は十二人のみ。宮廷からついて来た兵士たちも港に整列し、敵を迎え撃つ姿勢を取っている。心細さから僕の

目は無意識に知った顔を探していた。

「あっ」

港に並ぶ人々の中に一人、こちらを見つめる人影があった。その顔が見慣れたものだったので僕は名を呼んでいた。

「ユイン！」

#### 第四話（31）

真つ直ぐに背筋を伸ばし、ユインはこちらを見ていた。幽鬼のごとく血の気がない顔で。

捕らえられているわけではない。自らの意思でここに来たらしい。しかも、僕よりも先に。

ユインは計画を知っていたのだ。そうだ。僕の最も身近にいたユインが気付かぬわけがない。ユインが阻止しようと考えれば、たやすくこの計画は潰れていただろう。ユインが知っていて、許してくれているならば、僕は今夜ここに来ることは出来なかった。

と言うことは、ユインも協力者なのか。黒衣の組織と手を組み、テイオンの暗殺計画を支援していたのか。

しかしそうではないということを僕は、伸ばした手の虚しさで知った。

「ユイン！　こちらへ！」

岸へ向かって手を伸ばし、声の限り叫んだのにユインは表情を変えなかった。さらに乗り込んだ船を岸に寄せ、届く場所に近付いてユインへ手を伸ばしたのに、やはり彼は僕の手に触れようとしな

い。いつもの冷たい瞳を淡々と僕に注いでいるだけだ。自分は僕や黒衣の味方というわけではない。ただ、今回の逃亡計画だけは、虐待に同情して見逃してやったのだと瞳は語っていた。

「私は参りません」

ユインがぼつりと答えた。

「どうして。一緒に逃げよう、ユイン」

「いいえ。行きません。行きたくないのです」

焦りが血を逆流させた。僕は片手で船のへりを掴み、もう一方の手を限界まで伸ばして叫んだ。

「何故だ！　あなたはここに留まってはいけない。あなたは、僕と

同じ先生の弟子ではないか！ テイオンに仕えるのは不本意だつたはずだ。ずっと本当の人生を生きたいと願っていたはずだ。今こそ時が来たんだ、ユイン！ 僕と一緒にいこう！」

冷やかな笑みがユインの口元に浮かんだ。諦めの微笑みにも見えた。

「それでも私はテイオン様に仕えて来たのですよ。二十余年、テイオン様に生かされて来たのです」

笑いを消すとユインは僕の目を見据えた。冷たい光が憎しみの色に変わった。彼の目が強い意思の光を放ったのを、この時初めて見た。

「私はテイオンが嫌いです。でも、あなたのことはもつと嫌いです」愕然と僕は彼を見つめ返した。ユインの声には心の底からの嫌悪が籠められていた。

「今はいい。あなたはまだ先生の教えを守ろうとしている。けれどもあなたの体には、テイオンの血が流れている。その血はどうあがいても入れ替えることは出来ない。……私はね、お傍に居て、あなたの中にテイオンを見ることが度々ありましたよ。瞳の奥底に、あの人と同じ光を宿すことがあったのです。そんな時、父親とは似ても似つかぬ顔をしているあなたが、テイオンとそっくりに見えた。背筋がぞつとしました」

責め苦に近いその言葉を僕は受け止めた。ゆっくりと心に傷が刻まれていく。

「怖いんです、あなたが。私には分かる。あなたはいずれテイオンと同じになる。いや、テイオン以上に残酷で、穢けがらわしい者になるでしょう。先生の教育で清らかに育てられたぶんだけ、あなたはテイオンよりも遙かに恐ろしい存在です」

僕にはユインの言うことが真実だと分かった。その通りだ。きつといつかユインの言ったことは現実となるだろう。その未来は僕にとつて完全なる絶望だ。

「ですから、私はあなたにはついて行きたくありません。あなたに

ついで行くのでしたら、このままティオンに仕え続けるほうがましだ。少なくともティオンには生かされた恩があるのだから」

僕は伸ばした手を下ろした。

見かねたのだろう、僕の横に立っていた黒衣の一人がユインに声を掛けた。

「しかし宮廷に戻っても未来はないぞ。あなたの仕える主人は、間もなくこの世からいなくなるだろう。そうならばあなたもただでは済まない。我々としても、ティオンの側近であるあなたを生かしておくことは出来ない」

「その時は、どうぞご随意に」

背中を向けたユインをぼんやり見送る僕へ、黒衣たちが進み寄って言った。

「彼を留まらせてはいけません。ユインは危険な相手です。陛下に従わないのなら、今、ここで処分しましょう」

その進言に応じることが僕には出来なかった。力なく首を振り、命令を降した。

「船を、影島へ！」

漆黒の波を滑り、船は進む。

暖かい思い出の棲む地、故郷と思っていた地、あれほど帰りたかった影島へ僕は今、逃げている。

帰る場所と思っていた地へ進み、進む場所と思っていた地を後にする。

いつたい未来へ戻るのか、過去へ進むのか。

僅かに晴れた霧の隙間から、覗いた月の光を浮かべて揺れる波が、前途を呑み込むように黒い底を見せていた。

#### 第四話（32）

霧が立ち籠める崖に我々は立っていた。

十二人の黒衣と、年若い皇帝。少数の精鋭に囲まれた皇帝は腰に薄衣をまとうだけの姿だ。人が見ればみすばらしい集団と思つたろう。

声を出す者はなかった。東側から徐々に日が当たり、乳白色へ変わり行く霧を、皆うつむき加減の視線で見つめていた。

疲れ果て、弱りきつた朝だった。

ついに影島へ辿り着き、恐ろしい虐待から逃れることが出来た希望の朝だというのに、晴れがましい気持ちにはなれない。歓喜の声を上げた者はまだ一人もなかった。

我々は待つていたのだ。ここへ集まる同志たちを、勝利宣言を。

僕は待つていた。親友ラウス・ロウの無事な姿を。

「まだ、報告の船は来ないか」

「まだ見えません。しかし、間もなく。間もなく到着すると思いません」

幾度、下の海岸へ人を使って船の到着を確認させたことだろう。

しかしそのたびに返つて来る答えは同じ。答える者も希望は少ないと知りながら、虚しい言葉を繰り返していただけだった。

本国へ置いて来た戦闘部隊が、影島で集結すべき約束の時はとうに過ぎていた。希望を持つにはもう遅過ぎた。

嫌な予感が胸に満ちて来る。予感は次第に覚悟へ変わっていった。おそらく失敗したのだろう。ティオンの首を取るために宮廷へ斬り込んだ戦闘部隊は、敗北したのだ。

後は生き残りの人数に期待をかけるのみだった。そして僕は速やかに、“これから”のことを考えなければならなかった。

“これから”と言っても選択肢は限られている。  
逃げるか。それとも影島に留まって朽ちるか……。

丘を駆け上がったて来る兵士の足音に全員が振り向いた。

ようやく戦況報告の船が着いたのだ。こちらへ走って来る兵士の弱々しい足取りを見れば、良い報告ではないことは遠目にも分かる。我々のもとへ辿り着いた兵士は全身、血にまみれていた。その姿を我々は暗い面持ちで眺めた。

兵士が僕の足元へ跪く。絞り出した声は震えていた。

「ご報告、致します！」

聞きたくはない。けれど僕は彼の命がけの報告を受け取らなければならぬ。先を促すと、兵士の目から涙がこぼれた。

「ご報告、致します……テイオン征討は失敗に終わりました。戦闘部隊、全滅。テイオン独裁に反対して立ち上がった我々の同志、陛下の忠実なる廷臣たちも捕縛され、即刻処刑されました。計256名……、死亡」

戦慄が走った。黒衣の精鋭たちが血走った目を見開く。

「同志256名、全員死亡だと!？」

「馬鹿な！」

叫んでいなければ気を失ってしまうのだろう、口々に報告した兵士を責め立てた。兵士は涙と血にむせながら答えた。

「テイオンに従う者、いまだ多く……思いのほか、国軍の抵抗が強く敵わず……」

僕はこの時、報告をきちんと把握していたか定かではない。

視線は宙に浮かび定まらなかった。兵士の声は遠くで流れる音楽のようにぼんやりと聴こえた。ただ頭の隅で、やはり、と考えていた。やはり、無駄だった。皆、父に殺されてしまったではないか。こうなることは分かっていたはずだ。

「陛下」

兵士が僕の前に何かを差し出したので、視線を戻した。

「陛下に、これを」

跪いた姿勢のまま兵士が頭上に掲げたのは、丁寧に折り畳まれた赤色の布だった。所々まだらに黒い染みが付いている。どこかで見ることがある布だと思った。思い出しかけたが、心がそれを拒絶した。

「ラウス・ロウの外套です。陛下にこれをお持ち頂きたい」

ラウス・ロウの外套……？

何故、そんなものがここにある。ここにあつてはいけない。ラウス・ロウが羽織っていないければ。

「捕らえられたラウス・ロウは拷問を受けた後、処刑されました。

他の全ての者が処刑されるのを見届けてから逝かれたのです。拷問を受けている最中も、処刑されるその時も、わめき声を上げるなど取り乱した姿を見せませんでした。ご立派な最期でした」

僕は赤色の布を受け取った。

広げて、眺める。海の薫りがした。

「陛下。これもお受け取りください」

長い、鞘に納まった剣を差し出された。

「ラウス・ロウの長剣です。この剣も外套も処刑場に捨て置かれていたのですが、忍びなく、決死の想いで拾って参りました。……陛下しか、これをお預けする方はいないと思ったので」

鞘から剣を取り出して見つめた。

白銀に輝く剣の端には骨を砕いた時の刃こぼれがある。

父の命令で多くの人を処刑した長剣。かつて僕も恐れた長剣。だが本当は、人を救おうとしていた長剣。

不意に息苦しくなった。

詰まった喉から息を吐き出そうとした時、声が漏れた。

あ、  
あ、  
あ……

「ああ  
！」

ガッツ。

「絶叫とともに岩を砕く音が響いた。

手元を見れば、長剣が崖の先端の地に突き刺さっていた。

「陛下……」

「気付くと周囲の者たちが気の毒げに僕を見つめていた。

先程、叫んだのは僕だった。

剣を突き刺したのも僕だ。

ああ、ああ。

「叫びながら泣いていた。頬が濡れて、酷く冷たい。

「触るな。この剣には何人も触ってはいけない。遠い未来、生まれ変わった持ち主がここへ戻らない限りは、何人たりとも！ たとえ朽ち果てようともこの剣は、ラウス・ロウ以外の者が抜いてはならない！」

「叫び狂い、涙が流れるにまかせて泣いた。

熱かった。

心が焼けるほど熱かった。  
どうしてだろう、この熱をどうすればいいのだろう。

しばらく熱い胸の苦しみを吐き出そうと、地に伏して泣いていた。  
やがてゆっくりと怒りの塊が腹の底からせり上がって来た。

それは先生がこの崖から突き落とされた時の怒りに似ていたが、  
その時よりもずっと覚めていて、冷たかった。

父はまず先生という大切な人を僕から奪った。

その次は僕を人形に仕立てて閉じ込め、人生を奪おうとした。

閉じ込めるのが不可能と知った時、ただ一つ残ったものを奪った  
のだ。最も奪ってはいけないものを。

僕の、最後に信じた人を。

冷たい笑みが自分の口元に浮かぶのを感じていた。

「殺す」

地に刺さった剣の柄を握り締め、呟いたのは僕の声だったろうか。  
暗い声だった。誰かの声によく似ていた。

「殺す。父を、殺す」

立ち上がり、ラウス・ロウの外套を羽織った。

海風を孕んだ外套が肩の上で高く翻る。

薄らと海の向こうに浮かぶ本国の影を指差して叫んだ。風に煽ら  
れ、僕の声は朗々と海岸に響いた。

「今ここに宣言する！ 私、アテラン二十八世は反逆者ティオンを  
倒すため、本国レイリア首都に戦いを挑む！」



#### 第四話（33）

思うに僕は父の望んだ息子となつたのではないか。

憎しみを行動の源泉とし戦いに生きる、……この時の僕を見れば父は泣いて喜んだらう。自分の分身が完成したと言って。

夜遅く、兵士は息を引き取つた。

最善の看護を受けたのだが、既に大量の血が流れ過ぎていた。柔らかな寝台の上で彼は永遠の眠りについた。

亡くなる寸前まで兵士は義務を果たそうとして戦闘の様子を報告し続けていた。その話から分かつたことは、ラウス・ロウが父を斬るべき瞬間に躊躇ちゆうちゆうした、ということだった。全て敗因はその躊躇にあつたのだ。

「何故だ！ 何故、ロウはティオンを斬らなかつたのだ！」

呻き声に似た叫びが精鋭たちの間から上がった。

理由を知っている僕は血の気を失つた。あの時、“父は死ぬのか”と聞いた僕にラウス・ロウは答えた。“最後までティオンを生かすよう努力をする”と。彼は約束を果たそうとしたのだ。ただ僕に父殺しの罪を負わせまいとして。

何ということだろう。

僕のせい、だった。

僕のせいでラウス・ロウは死んだ。これほど多くの人が、死んだ。精鋭たちの中にも事情を悟つた者がいたようだった。打ちひしがれている僕の背に、憎しみの籠つた声が投げられた。

「ラウス・ロウめ。若い皇帝にたぶらかされて血迷つたか」

「だから反対したのだ。こんな、魔物の子を味方に引き入れるのは」  
味方に引き入れる、と黒衣は言った。その言葉で理解した。自分が本心から黒衣たちに歓迎されているわけではない。

兵士の遺骸が片付けられ、皆が出て行った寝室で一人考えていた。どうすれば復讐を可能に出来るか。どのように戦えば父を殺すことが出来るか。

腹の底で粘着質の想いが渦巻いていた。憎しみの心だった。憎しみは父を殺すために高められていく。殺す、確実に殺す。今度こそ迷いなく、間違いなく。僕はあの男の手で闇から引きずり出された。ならばこの手で、責任を持ってあいつを地の底に引きずり戻さなければならぬ。……

足音が聞こえて考えが中断された。

寝室に入って来たのは精鋭の中で最も背の高い男だった。静かな佇まいがラウス・ロウを思い出させる。黒衣の間では少し浮いて見える男だ。

その浅黒い顔を眺めていて気付いた。ラウス・ロウといつも一緒にいた男だ。コオスの処刑の朝も、ラウス・ロウの隣で血を浴びていた。彼についてはユインから少し話を聞いたことがあった。ラウス・ロウと同郷の男で、確か名をウーといった。

床に座り込んでいる僕の背後に立ったウーは、暗い心を見透かすような視線で見下ろした。

「何を考えていた」

慇懃な言葉遣いをしない。そんなところもラウス・ロウと似ていた。

「これからのことを」

ウーは僕を睨んだ。静かに呼吸してから、問う。

「あなたは“テイオンと戦う”と言った。しかし味方は少数で、我々はこのような島に閉じ込められている。我々が脱出することは難しく、援軍が来る見込みもない。この状況でどうやって戦うつもりだ。算段はあるのか？」

僕は後ろを振り返って、首を伸ばしてウーの目を覗き込んだ。自

分の口元に微かな笑みが浮かぶのを感じた。

「さあ。分からない。これから、探る」

「探る？」

「そう。知っているだろう、最後に残された兵器のことを。父さえ恐れる兵器」

答えはなかったがウーの瞳は動いた。彼がその話を知っていることは確かだった。どうやら兵器の正体を知らないのは世界中で僕だけのようだ。

「その兵器の正体を僕は知らない。だが、先生は答えを必ず用意しているはずだ。答えを今から、探ろうと思う」

ウーは僕を見つめ覚悟を問うた。

「分かっているのか？ 何もかも秘密を知ることになる。あなたは自分の過去に耐えられるのか」

「分かっている。いつか過去は明かされるもの。耐えるしかない」  
「……それに、我々はレイリアという国家の未来を考えているわけではない。たとえ戦いに勝ったとしても、レイリア国の建て直しに協力するつもりはないのだぞ。むしろ我々は、ティオンもともレイリア国を滅ぼすつもりで侵入したのだ。あなたが生きているのは、ラウス・ロウによる計画変更があったためだ。ラウス・ロウは何とかレイリアの国体を保護し、あなたという新皇帝を中心として国家の建て直しをはかるべきだと主張したのだが……、見よ、そのような甘い考えの結果がこの大量の犠牲だ。やはり当初の計画通り、あなたも殺すべきだったのだ」

呻き、頷いた。

「分かっている。全て僕のせい……分かっている」

黒衣たちが何者であるのかは知らない。だが彼らが外部からの侵入者であることは確かだ。当然、我が国の明るい未来を願う者たちではない。レイリア国家の建て直しだとか、新しい地で新レイリアを建てるなどということは、最初から黒衣たちは考えていなかった。

そもそも、打倒テイオンの旗は皇帝を中心として掲げられたものではなかった。これは始めから黒衣たちだけの戦いだっただ。僕すなわち皇帝の命令は宮廷内の反対派を結束させるために使われたに過ぎない。それはたぶんラウス・ロウの考えた策略で、僕を“味方に引き入れる”ための大義名分だった。

つまり僕が命を救われ、今ここに居ることは単純にラウス・ロウの厚意による。だから僕がここに居ることに、深い意義はない。けれど自分がこれからすべきことは知っている。

「僕のせいだからこの手で終わらせる。やっと覚悟が出来たんだ」  
言つとウーは鋭い視線を僕に据えた。

「良いのだな、それで」

頷いた。この期に及んで迷いなどなかった。兵器は破滅をもたらすという。国の滅亡は免れないだろう。

「僕はレイリア最後の皇帝となるう」

#### 第四話（34）

クオン……。

澄んだ音が夜の空にこだました。

鈍色にびいろに輝く板はまだ僕のことを覚えていた。指先が触れた瞬間、大きく扉を開いて迎え入れてくれた。

歩き出した僕の足音が塔の静寂を破る。緩やかな螺旋で登る廊下が、この足を思い出の部屋へ導いていく。

滑らかに扉が横すべりして目の前に現れた大教室は、あの夜のままだった。階段状に並ぶ細長い椅子。クオートの壁を通して降り注ぐ満月の光に青白く光っている。

ついに帰って来た！

先生の大学校、レイリアの記憶を蓄えたこの塔に。

あの時、途中のまま終わってしまった伝言を最後まで受け取るため僕はここへ帰った。

月光に満ちた青い室内を見回し小さく震えた。全身の肌が栗立つ。まさか帰ることが出来るとは思っていなかった。生きてここに立っていることが不思議で仕方がない。

浮かびかけた涙を堪え、深く呼吸した。

教室の中央に進み出る。それから、長い外套の裾を踏まないよう、丁寧にさばいてその場に腰を下ろした。石床の冷たさが腰から背筋を突き抜けた。

深く呼吸して精神を額の中央に集中させる。ゆっくりと瞼を閉じた。

すつと腕を伸ばし、手の平を上方へ向けた。

もう一度穏やかに呼吸した。

そして、あの時とは少し違う命令を口にした。

「レイリアの歴史と、僕に関する全ての過去へ導きたまえ」

塔が震えて小さな唸りを立てた。まるで喜んでいるように聞こえる。

塔も待っていたのかもしれない。隠し続けた過去の記憶を吐き出す時を。

しばらくして塔は迷いもなく、時系列に映像を映し出し始めた。

.....

## レイリアの歴史

レイリアの歴史は古く、前身となった国家はどれほど昔に興ったのか定かではない。

塔はここに在る“新しいレイリア”については詳しく記録しているが、古いレイリアや外国のことは臆ろにしか記録していないからだ。

この塔の記録によれば、新しいレイリアの歴史はまだ浅く、建国は千年前のことである。

千年前。

砂漠の民、正確に言えば“自国を砂漠化させた民”たちがこの島を見つけた。

彼らのもといた国、つまり“古いレイリア”は高度な文明を持っていたのだが、民たちは戦争に明け暮れて国を荒廃させてしまった。彼らが戦争に使った技術は光と熱を主とする。何度もその技術を使ううちに植物は死に絶え、水が干上がり、ついに“古いレイリア”の地は砂漠化したのだった。

生きるために民たちは国を捨てた。

船に乗って海を漂ううち、やがて遙か遠い北の島へ流れ着いた。

地上はまだ冬から春になったばかりの頃だった。溶け始めた氷の海に、二つのよく似た島が連なって浮かんでいた。

砂漠の民たちは二つの島を「双子島」と名付け、ここに新しいレイリアの国を建てることにした。

大きいほうの島には国の中心を置いた。

もう一つの小さいほう、影島と名付けた島には、彼らが「人形」と呼んでいた模造人間を置いて必要な資源の採掘や食料の生産をさせた。

……模造人間！

僕にはそんな残酷な過去を想像することも出来なかった。

かつてのレイリアでは、当たり前のようにこの「人形」と呼ばれる模造人間たちが造られていた。そうだ。造られて、いたのだ。

人の手で、肉体の素もとを使って新しい命の種たねを生み出す。

種は特殊な液体に満たされたクオートの箱に収められる。透明な丸い箱は、あたかも卵のように見えた。その卵は土に埋められた。今の僕には理解することが不可能な、高度な技術を用いて土中で暖められ育てられる。

赤子の形にまで育った頃、土から掘り出す。

これが模造人間の誕生だ。まるで野菜のように農場で栽培されて収穫される。だが、見た目は普通の人間と変わらない。もちろん、肉体の機能も普通の人間と同じだ。だからこの赤子には人間と同じ

ように“餌”を与え、環境を整えてやれば何の問題もなく自然に育つ。

レイリア人たちはこの模造人間を、大規模な農場で生み育て続けていた。人形の大量生産だ。

働くことが出来るくらい成長すると、これがだいたい十五歳前後とされていたが、人形たちは農場から出されて影島へ送られる。

強い体を持つ雄オスは肉体労働へ。

貧弱な雄と、雌メスは食料生産の作業へ。または、好まれる容姿を持つ者たちなら欲望を満たす玩具として有力者に配られた。

悲惨な人形たちの生涯を眺めていて僕は吐き気を堪えることが出来なかった。

もはや死体を眺めても吐き気を覚えることなどない僕だが、生きている者の苦しみは腸はらわたを掻き乱す。

模造人間とは言ってもその肉体は人間と同じに出来ている。当然、人間と同じように苦痛を感じる。心で感じ取る痛みも同じだ。

その人形たちが死ぬまで強制労働させられる。

あるいは組み伏せられ欲望のままに弄ばれる。

終わりのない地獄の苦しみはかろうじて、彼らの口から嗚咽として発せられる……。

泣く代わりに吐いた。何度も、何度も。腹から何も出る物はなかったが、吐き続けるしかなかった。

そこに映る光景はまさにこれまで自分が経験してきた虐待だった。

僕は“人形”たちに、自分を見た。

#### 第四話（35）

“十字”の意味

人形が人間のもとに配られた結果として、当然、人形と人間のあいだに多くの子が生まれた。

しかし人形と人間のあいだに生まれた子たちは“禁忌の子”として忌み嫌われた。

今の僕にはよく分からない理屈なのだが、複製の子と、複製の素となった人間（またはその子）が万が一にも出会って交わると何かまずいことが起きるのだという。ちょうど親子や兄妹のように、血の近い者同士が子を成すことになるからだ。血の近い者同士が子を成すことは道徳に反するだけでなく、生物としての根幹に異常をきたし、子孫が正常に続いていかなくなるらしい。たとえば怖い病が蔓延するように、人間の肉体そのものがおかしくなってしまう。

だからもし禁忌の子たちが世間に放たれて人間と混ざり合ったら、必ず大混乱が起きる。レイリア国が滅ぶことは確実だった。

そのため国家は、禁忌の子たちを厳重に取り締まることにした。

“人形と人間のあいだに生まれた赤子には、生まれてすぐに体のどこかに十字の印を付けなければならぬ”

このような法が出され、厳しく守られるようになった。

もし国家の法を守らなければ、人形と人間の区別なく両親ともに処刑された。

禁忌の子であることを隠して育てようとする親がいても、後で肉体の一部を切り取って調べた時に露見してしまう。その時は親子全員が厳しい拷問を受けて処刑されなければならなかったから、どの親も子に印を付けることは律儀に守ったのだ。

十字の印が付けられた赤子は国家に差し出され、処分場に集められて廃棄される。つまり殺される。

仮に誤って禁忌の子たちが廃棄処分から漏れたとしても、十字の印があるため世界中のどこへ行ってもそれと分かる。十字を見つければ誰でもその場で処分して良いし、処分出来なければレイリア政府に知らせなければならぬ。

禁忌の子たちが生き延びることは、絶対不可能だった。

十字の印には当時の人々が一見して理解出来る意味があった。

十字の横線、“ ” は大地を表す。……つまり土から生まれる人形を意味する。

十字の縦線、“一” は天を表す。……天から自然に降りた命、人間を意味する。

すなわち十字とは、“（大地）”と“一（天）”が交わって出来た“禁忌の子”を表す。単に処理作業を円滑にするためだけの分かりやすい標識に過ぎなかった。

こうして人形と人間の境に厳重な線を引いたレイリア国は、上下の階層に二分されていった。

下は地を這う人形の階層。

上は天に近い人間たちの階層。

人間たちは、“天から自然に降りた命”であることを自負する意味で、自らを「神」と名付けて呼ぶようになった。そして人形たちのことを憐れな偽物の命としてますます蔑み、「禁忌を生む悪魔」と呼んで果てしなく見下ろすようになった。

時代を追うごとに、二分された階層の距離は広がった。

人形は人形同士で子を成し、影島で自然に増えていった。人間が本島で人形を生産する必要はなくなり、人形たちの血も混ぜ合わさ

れて薄まった。

相変わらず美しい人形は玩具として配られていたが、複製の子と複製の素となった本人が出会う可能性はとも低くなった。

血の近い者同士が交わることで人間の体がおかしくなってしまう、という危険は少なくなったと言える。もう禁忌の子のせいで国が滅ぶと恐れる必要もなくなった。

だが「禁忌」を恐れる伝統だけは残り、何かの理由で不吉とされた子に十字を刻む習慣も続けられた。

僕の生まれた時代。

建国から千年を経て、「禁忌の子が国を滅ぼす」という話はもはや伝説に過ぎなくなっていた。

それどころか「十字」の意味や、「禁忌」や「悪魔」という言葉の本来の意味すら忘れ去られていた。

人々は漠然と伝説を恐れ意味も知らず伝統を守っているだけだった。

しかし、漠然とした恐怖ほど恐ろしいものはない。

誰かが「悪魔はクオートを濁して国を滅ぼす」と言えば、皆が鵜呑みにする。

権威ある者によって、ひとたび「悪魔が生まれた」と宣言されたなら、悪魔の本来の意味も知らない人々は恐怖を倍増させて混乱する。

だから、あの日もそうだったのだ。

僕が生まれた日。「日食」があったとされた日。

マル口という能力者が、「悪魔が生まれた」と宣言した。

その宣言を人々は何の疑問も持たずに信じた。信じるしかなかった。

「本日に生まれた全ての赤子は処分すること。不可能なら、十字の印を刻み国に差し出すこと」

という国家の命令に叛くことなど誰にも出来るはずがなかった。

その日、レイリアに住む親たちは泣きながら我が子に手をかけた。あるいは、十字を刻んで処分場へ差し出した。

人形同士の子も、人間同士の子も、全て区別なく殺されてしまった。

本来の「禁忌の子」ですらなかったというのに。

何のため、誰のためにこの大勢の子供たちは命を奪われなければならなかったのだろうか。

……生き延びた僕はいつたい。何なのだろう。

どうして僕一人、生きることが可能だったのか。

落ちた涙を拭うことも出来ずに僕は映像を先へ進めた。

## 第四話（36）

皇帝の血統、個と全体の進化

自分の過去を知るためには先祖の歴史を辿らなければならない。ティオンや僕へと続く血、祖父たち代々皇帝の血はどのように生まれ、受け継がれてきたのか……。

“古いレイリア”の景色が朧ろに映し出される。そこにはまだ皇帝の姿はない。

かつてのレイリアには統率者などいなかった。

一瞬にして全国民の意見を集め、まとめる技術があったからだ。古いレイリアの人々は光の力を用い、天空を通じて思いを飛ばす技術を持っていた。距離に関わらずお互いの思っていることを直接に伝え合えた。数の限界もなかった。どれほど大勢の意思でも瞬時に一つの場所に集めることが出来た。つまり全ての国民がお互いに読心術・伝達術が使えるようなもの。手紙も要らない。文字も要らない。言葉さえ、たいして必要ではなかった。

この力があつたから、国の行いはまとめられた全国民の意思によって決定された。統率者たちが知恵を絞って決める必要はなかったのだ。

しかし、古いレイリアはその技術のために戦争を繰り返すようになってしまった。

何故なら人々の心は時代の風にまかせ、たゆたう。

多数の心に生まれる意思はお互いを引き寄せ合い膨れ上がり、やがて一つの大きな流れとなる。巨大な意思の流れは、反対を向く小

さな意思などたちどころに飲み込んでしまつ。

こうしてレイリアは小さい意思を押し流し、大きい流れにまかせて右へ左へと揺れ続けた。

ひとたび争いの方向へ意思が流れたなら、国は戦争へと転がり落ちて行つた。

争いへの流れは留まるところを知らない。レイリアは力尽きるまで戦争を繰り返さなければならなかつた。

度重なる戦争で国を砂漠化させた反省から、新しいレイリアの民たちは意思を直接に伝え合う技術を封印した。

そして国の行いは全体の流れで決するのではなく、優れた統率者が知恵を絞つて決めることにした。

この時、最初に選ばれた統率者がアテラン一世だつた。

彼は砂漠から出ようと人々に呼びかけ、双子島まで率いて来た者だ。統率力を認められ、多くの人々から推薦された。

まだ“神々を統べる者”という意味の「皇帝」という言葉はない時代。当初アテランは人々から選ばれた代表に過ぎなかつた。

しかし代表者としての権利が子や孫に引き継がれていくうちに、アテラン一族の力は次第に強くなつていった。

アテランの子孫が「神々を統べる者、皇帝」と名乗り始めた時、もはや意義を唱えることが出来る者はいなくなつていた。

何故、アテランの子孫だけが力を持ち続けることが出来たのか。

人々は自分たちの意思で国の行いを決めることに疲れていた。代表者を選んだ時、その者に全てを任せてしまえば楽であることに気が付いた。

誰かに任せておけば、何も考えなくていい。

怠けることを覚えた国民は誰も責任を負おうとしなくなつた。ア

テラン一世は独りで全責任を負う代わりに、他の誰よりも強い権力を持つようになったのだった。

さらに、新しいレイリアでは血統を重んじた。血や肉に含まれる小さな“素”<sup>もと</sup>が人間の全身を作ると知っていたからだ。この知識は人形を生産するために使われたが、人の能力を測ることに使われた。血肉の“素”こそが人の能力の優劣を決め、親から子へ受け継がれるのだと考えられた。

実際には必ずしも親の能力が子へ受け継がれるとは限らなかったのだが、レイリアではその考えを伝統として重んじた。

このためアテランの子孫が代々皇帝を務めることは自然だと考えられた。初期の頃はアテラン本人の複製（人形）が代表の権利を継いでいたのだが、人形が卑しい奴隷として差別されるようになっていくに廃止された。それから自然に生まれた子や孫たちに代表権が与えられた。どれほど能力がなくても性根が腐っていてもアテランの子孫たちは皇帝の地位を独占することが出来たのだ。

要するに。

古いレイリアでは、肉体を含めた“個”をないがしろにした。他者と自分との区別はなかった。そのため全体に個が押し流されてしまった。

新しいレイリアでは、古いレイリアでの反省から“個”を分けよとした。心に壁を作り、お互いに距離を置いた。また体の素を調査して、血肉での差別化も行った。皇帝を頂点として厳密な階層を作り、個別の生まれ持った血統で振り分けた。

つまり、差別が進化だった。

他者と自分を分けることこそが、我々の目指した未来だった！

いつだかユインが言った言葉が思い出される。

「我々は生まれ持った肉によって振り分けられ、相応しい運命を負って生きなければならぬ。これが地上の理。進化のための道理です。我々は地上に結びついて進化するために、正しく分類されなければならぬ」

ユインの言葉は本当だった。それが我々の選んだ進化の道だ。

おそらく我が父テイオンもその道を目指している。先祖が考えた“進化の道理”を信じて今も分類を推し進めている。もしかしたら父はただ、先祖の言いつけを愚直に守っているだけの人なのかもしれない。

しかし……、と僕は思う。

血肉で個を振り分け、差別した結果が今のレイリアだ。

一部の者だけ幸福な生を享受し、下層に振り分けられた人々は生きることもままならず苦しみに喘いでいる。

誰かの苦しみを犠牲にして得られる幸福は幻に過ぎない。

下層に追いやられた人々が苦しみ、滅びれば、彼らを下敷きとして安穩と暮らしていた人々も生きることが出来なくなる。苦しみは下から上へ浸透し、いずれ全体に及ぶ。

一部が苦しめば必ず、全体が滅びるのだ。

今のレイリアがこの真理を証明している。

古いレイリアから見れば、新しいレイリアは確かに“進化”と言えた。

曖昧模糊とした全体から個を切り離さなければ我々の未来はなかった。

だが、新しいレイリアは極端に走り過ぎた。

個を追求するあまり厳密に分類し過ぎて、全体を忘れた。

他人と自分が同じ人間であることを忘れた。

他者の苦しみが、自分の苦しみに等しいことを忘れてしまった。

僕の先生、ダイ・アイデウの思想とは、再び個が全体に還る未来を目指すことではなかっただろうか。

差別をなくし、他者が自分と同じ人間であることを思い出し、もう一度かつてのように心を繋げて生きる。そうしなければならぬ、と考えた。

“全体に還る”ことが、滅びかかっている今のレイリアから見れば逆に進化だからだ。

もう人々は個でいる苦しさに耐えられない。

個としての孤独に耐えられない。

だから、戻るしかない。

再び繋がれ。全体へ還れ、と先生は呼びかけていた……。

全体から個へ。

個から全体へ。

分裂し、統一し、また分裂し、また統一し。

ぐる、ぐる、巡る。永遠に終わらない螺旋。

ああ！

気が遠くなる。目が回る。

いつになれば我々はこの“進化”をやめることが出来るのか？

進化とは名ばかりで本当は進んではない。どちらも離れた場所に行きたいだけの衝動に過ぎない。

極端が極端に走り過ぎることで行き詰まると、またもとの極端を目指して駆け出しているだけ。冬が夏に憧れ、夏が冬に憧れているだけだ。そうして巡る、何度でも。

赤と黒の巨大な輪が、渦を巻いて絡み合っている様を僕は目の前に見た。

これは幻覚か。それとも世界の背後に蠢く力が映像に記録されたものか。

二つの巨大な力が主導権を争い、渦巻き、廻り続けることでこの世は永遠を保つ。人類は永遠に果てない“進化”を目指し続ける。

「平衡だ、平衡が必要なのだ」  
知らず呟いていた。

そうだ。平衡が必要だった。

個すなわち“我”が失われていた、古いレイリアが正しいのではない。“我”にこだわり個別の肉体で分類を進めた、新しいレイリアが正しいのではない。

我を失うことも、我だけに閉じ籠もることも、正しくはなかった。中間でなければならなかった。

極の端と端のどちらも正でもなければ誤でもないし、善でも悪でもない。

極端に走れば必ず終わりが来る。終わりが運命だとしても、せめて緩やかな破滅を。そのためには緩やかに進まなければならなかった。もし少しでも長く穏やかに過ごしたいなら、平衡を。真ん中に留まることが必要だった。

しかし……、もう遅い。

今、レイリアは極の端に偏り過ぎてしまった。

終わりの時は訪れている。

そして終わりの場に生まれたのが、僕なのだった。

## 第四話（37）

### 父の少年時代

映像は近い過去を映し出していた。

僕もよく知っている場所が映った。クオートの壁、磨き上げられた廊下。宮廷の映像だ。僕が閉じ込められていた頃とほとんど変わらない。一瞬、あの場所に連れ戻された錯覚に陥った。反射的に体が記憶を再生する。痛みと記憶と恐怖で心が縮み上がった。

透明のクオート越しに見える庭の草木だけが今とは違い、綺麗に整えられている。

これは現在ではないのだ。僕は自分に言い聞かせ、逸らしかける目を必死で映像へ向けた。

宮廷に少年が居た。

まだ十歳を過ぎたばかりに見える年若い少年だ。クオートの生地で作られた衣を着ていることから、相当に身分の高い少年であることが分かる。

容姿は、美しいと言いたい。細い目。巖のように大きい顔。短い手足。髪だけは目の醒める黄金。

どこかで見えたことがある気がした。無意識から湧き上がる嫌悪を抑えて映像を見つめた。

ティオンだ、と気付いた。父の少年時代を見ているのだ。

意外にもその頃の父は大人しい少年に見えた。言葉遣いは礼儀正しく、顔には弱い笑みを浮かべている。とても良い子だ。しかしどうやら良い子らしく振る舞っていただけだったらしい。彼の小さい瞳はいつも卑屈に光っていた。

彼が良い子らしく振る舞ったのは恐れのためだった。彼は周囲の人々から嫌われ孤独になることを恐れていたのだった。何故ならずと、「醜い子」と呼ばれて育ったから。

同じ両親から生まれた兄たちもティオンとほとんど変わらない容姿をしていたのだが、兄たちは末っ子のティオンを「お前が一番醜い」と言ってからかった。幼いティオンは兄たちの冗談を真に受け傷付いた。醜さゆえに、自分は周囲から見捨てられるのではないかと恐れた。

成長とともに恐れは強くなり、やがて根深い劣等感へ変わった。

もう一つティオンが劣等感を抱いていたことがあった。

それは自分の宿命だった。

皇帝の子に生まれながら彼は、決して国の頂点に立つことは出来なかった。上に二人も兄がいたからだ。

仮に病弱なアン皇子が死んだとしても、次兄のレン皇子がいる。レン皇子は優れて健康体だった。レン皇子が死ぬ可能性などほとんどない。よほどの奇跡が起きない限りティオンに皇帝の座が回って来ることはないのだった。

ただでさえ「醜い」と邪険にされ、卑屈に生きなければならない。そのうえ兄弟のなかで最も下に置かれている。

どれほど良い子に振る舞っても、笑顔を振りまいても、一生努力が報われることはないのだ。

“何故、自分だけが”。

ティオンは自分の劣等たる境遇を呪った。兄たちを、周囲の人々を、世界の全てを憎んだ。

劣等感。

それは人を欲へ向かわせる爆発的な原動力となる。

良い欲へ向かえば良い事業を成すことも出来るのだろう。しかし憎しみと合わさった劣等感が良い欲へ向かうことは、ほとんどないのではないかと僕は思う。

対象が人である場合、つまり憎い他人に勝ちたいというためだけに心を動かした時、欲望は腐る。

父は憎しみに燃えるあまり他人に勝ちたいと願った。誰もが欲しがるものを手に入れたなら、他人が自分へ平伏してくれると信じた。そのためだけに欲の方向を定めた。

暗い欲望は彼の心を焼き、じくじくと腐っていった。

少年の心に生まれた欲望に両親も兄たちも気付かなかった。

ただ一人、家庭教師だけが彼の歪みを感じ取っていた。ティオンの家庭教師 新しいクオートの設備を開発して国に貢献し有名となった学者、ダイ・アイデウ教授だ。

科学者であり、精神の向かうべき道を説く思想家でもあった彼は当時、国の最高学府で教鞭をとっていた。そこから招かれて皇子たちの家庭教師も勤めるようになっていた。

当初、ダイ教授は皇子たちに学問を教えられることを喜んだ。国の上に立つ者たちが正しい教育を得たなら国も正しく動くようになると考えていたからだ。特にまだ幼かったティオンへは期待し、意欲的に教えた。若ければ若いほど心が柔らかく、正しい教育を身に付けることが出来ると彼は信じていたのだった。

ところが、ダイ教授は自分の学問がティオンの心をすり抜けて行くことに早々に気付いた。

穴の開いた器に水を注ぐように、教えても教えても少年の心に学問は留まらないのだった。

この子をどう教育すれば良いのかと思案していたダイ教授に、ある日、初めてティオンのほうから質問した。

「なあ、先生。この世で最も価値あるものは何だろう」

「人として正しい行いをし、正しく生きることです」

常日ごろ教えている言葉をダイ教授は繰り返した。

“では、正しい行いとは何か”。

当然その質問が続くものと教授は期待した。だが、少年は即座に「違う」と断じたのだった。

「それはおかしい。何が正しいか正しくないか、など分からない。そんな目に見えない曖昧なものは、誰にも分からないはずじゃないか」

教授が正しいという言葉の定義を説こうとした時、既にティオンは聞く耳を持っていなかった。彼は教授から目を逸らし窓の外を見て言った。

「この世で価値あるものは、美だよ」

「美」

教授は眉をひそめてティオンを見つめた。ティオンは陶然とした顔で言う。

「そう、美。美なら見れば分かる。美ほど確かなものはない。そして美は力だ。美しいもの前には、みんなが無条件に平伏すだろう」

少しの間、教授は口を噤んで少年を見ていた。暗い表情だった。ため息を吐いてから首を振り、「いけません……いけません」と繰り返した。

「人や物の美など求めてはいけません。目に見える美は害毒です。

求めるなら、物の背景にある目に見えない美しさを求めなさい。この世の核心にある究極、真なる美を」

その美は正しさの果てだけに見出すことが出来るのです。

続けようとして、やはり少年が聞いていないことに教授は気付いた。ティオンは独り楽しげに呟いていた。

「美だよ、美。美さえあれば叶うんだ。美……そうだ。いつか必ず、手に入れてみせる」

その時、陶然としたティオンの視線はどこへ向かっていたのか。  
宮廷を囲む高い壁。その向こう。  
澄んだ泉を中心に抱く小さな神殿があった。  
そこにティオンの言う、“美しいもの”がいた。

## 第四話（38）

美しい姉と醜い弟

その神殿は宮廷に寄り添うように建っていた。

高い塀で丸く囲われた素朴な神殿だ。壁も柱も天井も全て、クオートの混ざらない、太古からの無垢な白い石で造られていた。

神殿の中心、中庭に青い水を湛<sup>た</sup>える泉があつた。

中庭の天井は丸く切り取られ、朝から正午まで高い塀を越えて陽光が差し込む。白一色の仄暗<sup>ほのく</sup>い神殿に、泉を目がけて光の帯が降りる様は静謐<sup>せいひつ</sup>で美しかった。

光の帯の中、少女の姿が浮かび上がった。

中庭に降り立った少女の年の頃は十二か十三。

腰まで伸びた金の髪は緩やかに波打ち、クオートの衣に包まれた肌は白く透き通る。眩しげに空を見上げる少女の顔を見れば、彫像のように人工的に整っている。小作りな顔に輝く瞳は神殿の泉に似た澄んだ青だ。少し均整を崩した唇だけが、冷たくも見える顔に愛嬌を添えていた。

多くの人が可愛らしいとか、美しいと呼ぶ少女だろう。

しかし僕は何か違和感を覚えて彼女を“美しい”と思うことが出来なかった。

違和感の理由を考えていて気付いた。僕が彼女を他人のように賞賛することは不可能なのだ。何故なら少女は、あまりにもレアに似ていたからだ。

映像を眺めているうち少女は成長していき、ますますレアへ似ていった。

十五歳頃になった彼女を見て僕は息を飲んだ。まるでレアその人ではないかと思うほど同じ顔が目の前にあつた。

だがレアであるはずがない……、これは過ぎた日の映像。

映像に命はない。触れることも出来ない。

思わず彼女に伸ばしかけていた手を止め、代わりに瞳を覗き込んだ。僕を見返すことのない少女の目は悲しみを湛えていた。自分で悲しいと意識することさえ出来ない悲しみだった。

どつと、少女の心の底に押し込まれた悲しみが僕の心に流れ込んで来た。

僕には彼女の悲しみの理由が分かった。彼女はずっと一人ぼっちなのだ。

少女は神殿に閉じ込められていたのだった。生まれた時から外へ出ることを許されず、独りきりで扉の中で過ごすことを強いられてきた。

なんとという残酷だろう。この神殿は少女を閉じ込める牢獄だった。乾いた少女の瞳と対照的に僕の瞳は濡れた。

「レア・セレデウ」

甘い声で囁く人の声を聞いて、僕は涙を拭き少女とともに声の方を振り向いた。

神殿に入つて来たのは壮年の男だった。

今までティオンの父、僕の祖父として映像に登場して来た男。第二十七代皇帝アテランだ。

レア、セレデウ。

再び甘やかな声で呼んで、皇帝は少女の足元に平伏した。驚くべきことに皇帝ともあるう男が年端もいかない少女の前で膝を突き、彼女の足に口付けする。

皇帝が少女を心から愛していることは彼女を呼ぶ時の優しい声から分かった。

始めそれは情欲から生じる愛ではないのかと僕は疑った。壮年の男が少女を欲し、神殿に囲ったのではないかと。

しかし映像を眺めているうちそうではないと分かった。

何故なら少女は皇帝の、実の娘、であったからだ。

つまりティオンの実の姉ということになる。僕から見れば伯母、に当たる人か。

映像が少し過去へ戻り、少女の出生が明らかとなった。

少女は皇帝のために用意された選りすぐりの“人形”から生まれた。

アテラン二十七世は自分に献上された人形を本気で愛してしまった。人形と自分との間に子が生まれた時、本来なら処分しなければならなかったのだが、愛する女が産んだ子を彼は殺すことが出来なかった。

処分しない代わりに、気を浄化する泉を祭った“神殿”へ閉じ込めることにして周囲を納得させた。

こうして少女は“気の守護者（巫女）”となり生涯を神殿で過ごす運命を負わされたのだった。

父親は娘を愛し大切に育てていたが、彼女の人生は幸福とは無縁だった。言葉も知らず、心を交わす相手もない。気を浄化する巫女たるもの男性に触れられてはならず、従って子を持つことはなく、独りきりで神殿で朽ち果てていかなければならない。何も無い人生だ。絶望さえ感じることも出来なかったろう。

彼女の姿を、神殿の扉の隙間から見つめる目があった。ティオンだ。

テイオンは父親の後をこっそりつけて扉の隙間を覗いた日から、神殿に通い続け少女を見つめて来た。

初めて見た日、美しい姿に打たれ虜こいつとなっていたのだった。

彼女を見つめる時には胸が掻き乱される。そして見つめていない時には渴かわきが付きまとう。その気持ちは未知なる恋に近かった。

いや、もしかしたら既に恋そのものだったのかもしれない。

テイオンは朝な夕なに彼女を見つめ、痛々しく焦がれ、愛しさを抱き続けた。

しかしある日、彼女が自分の実の姉だという秘密を聞かされた時、テイオンは衝撃とともに激烈な嫉妬を覚えた。

実の姉！ 自分と血の繋がった人。それなのに自分とは違い過ぎる。彼女は神殿に祭られ大切にされ、自分は父親にも兄たちにもないがしろにされている。

同じ血を持つ姉弟なのに、この違いはなんだろう。何故こんな不公平が生じたのか。

テイオンは考え、不公平の理由が美醜にあると結論付けた。

姉は美しさ故に大切にされ、自分は醜いから皆にないがしろにされているのだと。

生まれつきの容姿や立場の違いが人生を決める。この時もテイオンはどうしようもない宿命に苦しんだ。ほんの少し生まれるのが遅かっただけで自分は皇帝になることが出来ない。そのうえ醜く生まれ付いてしまったために、家族に愛されることさええない。

何故、何故、何故。

何故、自分だけがこれほどに不運で不幸なのか。

テイオンは宿命というものの不公平を憎み、不公平を生み出している世界を呪った。呪うあまり、世界の全てを滅ぼしたいという欲求にかられることがあった。そうでなければ手に入れ、自分の思うまま踏みにじりたいと。彼は確かにこの時、自分をないがしろにした世界への復讐を胸に誓ったのだった。

ティオンにとって不運だったのは姉の出生の秘密を詳しく知らなかったことかもしれない。

神殿で暮らす姉がいる、という話だけ親から聞かされたが、彼女の生い立ちについては知ることが出来なかった。そのためティオンが姉の不幸に気付くことはついになかった。

もっとも、たとえ聞かされていたとしても彼が他者の不幸を理解出来たかどうかは分からないが。

父親が彼女の前に平伏し、足に口付けする様子を覗き見るたびにティオンの心は嫉妬で焼かれた。

“美”は皇帝さえ平伏させるのだとティオンは知った。

美は絶対的な力であり、権力以上のものだ。その力を何の苦労もなく手にしている姉が妬ましかった。そしてそんな自分の幸運に感謝さえせず恩恵を当たり前に受けている彼女が、憎くて憎くてたまらなかった。

しかしどういいうわけか憎しみが募るほど彼女への想いは増すのだった。

嫉妬、憎しみ、呪い、復讐心。それらは一つの肉体的な痛みとなつてまとまり、恋の炎を煽る。

憎い相手を踏みにじりたいと思う。

踏みにじるために手に入れたいと欲する。

欲しい。彼女を。

手にしたい 美という力を。

屈折した恋心は日増しにティオンの心を熱くした。

熱い、熱い視線をティオンは何年も恋しい相手に注ぎ続けた。

#### 第四話（39）

テイオンの初めての友達

その頃、ダイ・アイデウが国立大学校の教授職を辞し、影島に自ら学校を設立した。

国立ではない学校が建てられるのはレイリアでは初めてのことだったが、有名なダイ・アイデウの理論を学べるとあって、国内だけではなく海外からも影島に学生が殺到した。

それまで影島は“人形”たちの居住区であり、クオートの採掘や食料生産等の重労働の場でしかなかった。貧しく惨めだったこの人形の島が、ダイ・アイデウの学校設立で一変、若い学生たちで賑わい活気に満ちた。

もちろん学生たちの住居は本島を望む海岸付近に限られ、内陸部に住む人形たちとは隔てられていた。だが学生たちの多くは積極的に内陸へ赴き人形たちと交流を持つようになったのだ。

“全ての人は人である点で平等である”

“男も女も人形も、同じ人である”

“人形に対する差別をなくし、人と人として対等の付き合いをしていかなければならない”

これが、ダイ・アイデウが学生たちに教えていた基本的な思想だったからだ。

ダイ教授の思想や彼の学生たちが影島で行っていることを、当然ながら皇帝は快く思っていなかった。

危険思想の持ち主としてダイ・アイデウの宮廷への出入りを禁じるべき、という廷臣からの進言もあった。しかし二十七世は落ち着

いた態度で

「様子を見よう」

と言い、皇子たちの家庭教師を解任することはしなかった。

その時の皇帝は何よりもダイ・アイデウの技術が欲しかったのだ。息子があの技術を習得してくれるまでの辛抱。技術さえ得られたら、ダイ教授に依存しなくて済む。国家に反抗的な学生どものご機嫌を取る必要もなく、ダイ教授を切り捨てることが出来る……。

父親の思惑など知らないティオンにとって、ダイ教授の講義は退屈なものでしかなかった。

相変わらず恋に苦しみ、暗い願望で心を焦がしているだけだったから、ダイ教授の話が耳に入っていくはずがなかった。

ダイ教授もこの生徒を何とか教育したいと思いつつながら、頑なに耳を貸さない相手はどうすることも出来ず困り果てていた。

皇帝から「早く本題を教える」と急かされても、まだ早いと断り続けていた。まずティオンの心の歪みを取らなければ重要な知識を授けるわけにはいかなかった。諸刃の剣モロハとなり得る知識は、歪みのない思考を持つ人間にしか与えてはならないからだ。

そうしているうち、ダイ教授は自分の大学の講義が忙しくなった。何故だか数の減ったダイ教授の来訪を、ティオンは単純に勉強の苦痛が減ったと喜んでいた。

ある日、しばらくぶりに宮廷を訪れたダイ教授は、影島から学生を連れて来ていた。

多忙なため自分がここへ来る機会は少なくなる。代わりに、この学生たちと付き合っただけませんか。

そう言っただけで、ダイ教授は背後にいた学生をティオンの前へ進み出させた。

「皇子であるあなたを影島の大学校へ通わせるわけにはいかない。私がこちらへ通うことも難しくなってきた。ですからせめて、この学生たちと交流していただいて、学問への志をお忘れなきように……」

ティオンに学問を続けさせるためにダイ教授が考え出した手段だった。しかしティオンは教授の話聞いてはいなかった。

彼は自分と同じくらいの年に見える少年の、濡れたような黒髪に魅せられてしまっていたのだ。

少年は整った顔を柔らかく崩し、笑いかけた。ティオンの視線は優しく細められた青い瞳に吸い寄せられた。

「初めまして、ティオン。あなたも僕と同じ先生の弟子だね。

僕は、ユイン。友達として、どうぞよろしく」

## 第四話（40）

### ティオンとユインの秘密

屈託ない声にティオンは驚いていた。

慇懃な言葉遣いに慣れていたティオンにとって、ユインの対等な態度は衝撃だった。その無礼にも近い遠慮のなさはあるさりとティオンの心をつかんでしまった。

ユインはこの時、ティオンと同じ十三歳。

まだ大学校に入るには早い年齢だったが、秀才ゆえに特別に認められてダイ教授の教えを受けていた。

誰に対しても分け隔てなく接するユインは、学友たち皆に好かれた。時々、目上の者に対する失礼な態度が咎められることがあった。だが「公平」「平等」を主義とする先生の学校では許されていた。

だから初めて会う皇子にさえ、ユインは気楽に挨拶したのだった。

「あ……、私の名は、ティオン。友達、として、よろしく」

生まれて初めての挨拶をぎこちなく返したティオンへユインは明るく微笑んだ。

自分だけに向けられる笑顔をこの時、ティオンは眩しいと思った。

笑顔を向けられて嬉しかった。それだけは確かだった。

けれど残念ながら、ティオンには友達というものが何であるのか分からなかった。

一対一で結ばれる「友達」という契約は相手を独占すること。そう誤解した。誤解したからこそ、ティオンは束の間でも幸福になれたのかもしれない。

初めての訪問以来、頻繁に通うようになったユインにティオンは

次第にのめり込んでいった。

ユインは学問だけではなく、ありとあらゆることを開けっぴろげにテイオンに話した。自分の出身地。両親や兄弟のこと。どんな想いで子供時代を過ごしたか。どういう理由でレイリアの首都に出て来たか。どうしてダイ教授の学問を修めることを決意したのか。影島での暮らし。今の楽しみ。将来の夢……云々。

ユインが個人的な話をしてくれたことをテイオンは喜んだ。自分だけに秘密を差し出してくれたものと思い込んだのだ。

秘密を得たのだから、この少年を独占することが出来る。

「もう自分は一人ぼっちではない」

そう思うとテイオンは今まで感じたことのない安心感、幸福感に満たされた。

自分のものである友達の顔を見るたび、幸福を噛み締める。ほとんど少年に中毒しているような心持で、あれだけ夢中になっていた姉のもとへ通うことさえしばらく忘れた。

秘密を差し出してくれた友達へ自分も秘密を返さなければならぬ、とテイオンは考えた。

そうすればお互いがお互いを独占し合うことになり、“友達関係”が強くなるからだ。

ある日、テイオンはついにユインへ秘密を披露することを決意した。

彼の秘密。

それは自分の恋の相手、あの美しい宝物のことだ。

久しぶりに神殿を訪れたテイオンは最愛の友達、ユインを伴っていた。

促されるまま扉の隙間から奥を覗き見たユインは、目に飛び込んできた少女の可憐な姿に驚愕した。さらにその少女が生まれた時からここへ閉じ込められ、この先も一生出ることはないと聞いて心底

から衝撃を受けた。

「あれは私の姉だ」

青褪めているユインの横で、ティオンはとうとうと姉の美しさを称え自慢した。そしてこのような至高の宝物を身近に閉じ込めておける自分の幸せを語った。

「……幸せ、だって？」

血の気の失せた顔でユインは友達に問い返した。

「うん。幸せだよ。以前は姉に手が届かないことが苦しくてたまらなかった。姉の美しさを憎んでいたこともある。でも、今の私には君がいるし、もう一人ぼっちではない。今はこうして美しいものを眺めることが出来るだけで幸せだ。なにせ、これからも一生、ここで彼女の姿を眺めて暮らしていけるのだから」

この時のティオンは正直だったのだが、ユインの軽蔑を買っただけだった。

「本気で言っているのか？ 君にはこれがどんなに酷いことなのか分からないのか。お姉さんと言ったな……、実の姉がこんな目に遭っていて君は何とも思わないのか」

ぽかんと口を開けてティオンは怒るユインを見た。

「何を怒っているんだ」

「何を？ 本当に分からない？ 人がこんなに酷いことされてるんだぞ」

ユインは低い声で怒った。しかしティオンはぼんやりした目でユインを見つめ返すだけだった。

「人？ ……人、なんかではない。あれは女だ。美しい女の人形」

何も知らないティオンは無意識に人形という言葉を使ったのだ。た。 “愛める物”、という意味で。

いっぽう大学校で教えられた歴史の知識があるユインは直感的に真相を悟った。少女が神殿に閉じ込められている理由。彼女の血筋を。

人形に対する差別、人形たちの苦しみは影島でユインも目の当た

りにしていた。

人形差別は最も憎むべきもの、最大の罪だとダイ教授から学んでいたし、彼自身も心からそう思っていた。人形差別をなくすべく活動していくのが将来の目標でもあった。

おそらくその人形の子、しかも実の姉だという人を閉じ込めて皇子は当然だと思っている。当然と思うどころか、自慢さえしている。「ティオン。君は……おかしい。間違っているよ」  
呟いたユインをやはりティオンは虚ろな目で見つめるだけだった。ユインは初めて、ティオンへ薄ら恐怖を覚えた。

ティオンにはユインが何を怒っていたのかどうしても理解出来なかった。けれど、自分の秘密が拒絶されたことだけは気付いていた。その時から、自分とユインとの間に見えない壁が出来たことにも気付いた。ユインの笑顔はどこか冷たくなり、言葉にも熱がなくなったのだ。あれほど豊かだった会話も消え、ユインは学問の話以外しなくなった。

ティオンは拒絶されたことに深く傷付いた。急に冷たくなった友達の状態に苦しんだ。

もしかしたら友達を失うのではないかという恐怖に毎晩、苛まれ

た。  
だがまだ自分を拒絶した友達を憎むところまではいかなかった。何故なら、彼と交わした“友達”という契約を信じていたからだ。ユインと自分はお互いに独占し合うことを誓った仲ではないか。一度自分のものになった相手が失われるなどということはない。あつてはならない……。

しかしユインの気持ちはティオンから離れるばかりだった。

正直なところユインはティオンが怖くなったのだ。やはり皇子は

自分とは違う感覚を持つ、違う世界の人だと思い知った。

友達の多いユインにとって、もともと皇子は新しく知り合った友達の人に過ぎなかった。ティオンが誤解していたように、ユインは皇子を最も大切な友達と認めて秘密を差し出していたわけではない。ただ他の友達と同じく、気楽に何でも話していただけたことだった。

ところが皇子を怖いと思うようになってからは気楽に接することなど出来なくなった。

だんだん、皇子と一対一で話すことが苦痛になっていった。

でも先生から仰せつかった義務を放り出すわけにはいかない。

それで、ユインは学友たちを宮廷に連れて行くことにしたのだった。大勢の友達と一緒になら皇子と話す苦痛が紛れるのではないかと考えて。

ぞろぞろと、たくさん学友たちを伴って訪れたユインの姿を見て、ティオンは自分でも何故だか分からない胸の痛みを覚えた。

ユインは丁寧に一人一人、学友たちを皇子へ紹介した。皇子を孤独にしないためのユインの優しさではあった。

だが大勢に囲まれたティオンは真に孤独となった。

学友たちと明るく会話を交わすユインを見るたび、ティオンの疎外感は深まり、気持ちが悪く落ちていく。

ユインにこれほど多くの友達がいるとティオンは考えたこともなかった。独占としての“友達”の契約はまだ続いていて、ユインは自分だけのものだと思っていたけれど、自分には見せたことのない楽しい笑顔で学友たちと話しているユインを見ると信じる心が揺らぐのだった。

それでもこの時のティオンは堪えた。堪えて健気にも新しい学友たちと話を交わすことさえした。

ひとえに、ユインを失いたくなかったからだ。



#### 第四話（41）

##### 仮面の皇子

友情を失うまいとするティオンの努力は涙ぐましいものだった。新たな友人たちと積極的に会話し、彼らのことを好きであるかのように振る舞い、彼らの輪の中にいる間は楽しげに装った。

その様子は傍目にはティオンの性格が明るく変わったかのようにさえ見えた。

皇帝と皇后は息子の変化を喜び、学生たちの頻繁な訪問を許した。危険な思想を持つ学生たちなど、本来なら宮廷どころか首都に出入りさせることも禁じたいと皇帝は思っていたのだが。

演技が功を奏し、学生たちはティオンに「気さくで心根の良い皇子」という印象を抱くようになった。ユインが陰で皇子のことを「怖い」と言っていることも彼らにはよく理解出来なかった。

だから気楽にティオンを自分たちの遊び仲間として受け入れた。始め宮廷を訪問するだけだったのが、いつしか皇子のほうを街へ誘い、歓楽街で宴に参加させるまでになった。我が子に友達が出来たことを喜ぶ皇帝も皇子の外出を黙認するしかなかった。

生まれて初めての街遊びの経験に皇子は狂喜しているように見え、誰よりも破天荒にはしゃぎ回った。その様子がまた面白いと学生たちは言つて、皇子を玩具のように連れ回したのだった。

思うに学生たちはティオンをなめていたのだ。

皇室の者など皆、世間知らずで扱いやすいものと決めつけていた。しかしティオンには生まれつき人を操る才能があった。本能で人の心の弱い部分を察知し、どうすればその弱さに付け入って相手を

自分の虜とらにさせるか知ることが出来る。そのために陽気さや愚鈍さの仮面を被り、相手の警戒を解くよう振る舞うことも出来た。

それはティオンがもともと他人に対して恐怖を抱いていて、自身の中にも多くの弱さを持っているから持ち得た才能なのだった。ユインの時は本気で好きになってしまったから失敗したが、ひとたびティオンが道具として操ろうと定めれば誰であれ彼の虜囚となるだろう。

こういった手管てくだを少年ティオンはまだ無自覚に、けれど確実に実行していた。明るく人付き合いがうまい人間ほど内面は暗く恐ろしいものだと、若い学生たちにはとうてい気付けなかった。

皇子と遊び回る一方で学生たちは裏の活動を進めていた。

人形に自由と平等の権利を与えるための、革新的運動だ。悲惨な生活に苦しみ喘ぐ人形たちの姿を間近に眺めていた彼らは、以前から「この国には革新が必要だ」と話し合ってきた。その話し合いが現実の運動として盛り上がり始めたのだ。

出来れば穏便に革新を進めたいと学生たちは考えていた。ダイ教授は暴力を嫌っていたからだ。

しかし正当な手続きを経て皇帝に出していた

「人形を解放し、人間と対等な自由・権利を与えて欲しい」という請願はことごとく無視され続けていた。

そもそも一般の国民が政府の方針に口出しして国を変える手段などレイリアにはないのだった。初代皇帝アテランに政治を押しつけた時から、レイリア国民は自分たち自身で国政に参加する権利を放棄していた。

国民の権利として残されていたのは皇帝にお願いし、願いが叶えられる日をひたすら待つことのみ。

そして「人形に自由を与えてくれ」などという、レイリアにおいて非常識な学生たちの願いが叶えられる希望は皆無だ。

毎日、瀕死ひんじの人形たちを目にしている学生たちの焦燥は募った。

“この人形たちを早く救わなければ”

“早く、安らかな生活を与えなければ”

中には人形に恋をし、愛し始めている者もいた。

早く普通の人間同士の恋のように許される関係になりたい。何よりも、愛する人を過酷な労働から救いたい。

そう願う者たちにとって状況は逼迫ひっぱくしていた。放置していたら自分の恋人が、これから生まれるはずの我が子が死んでしまうかもしれない。皇帝の答えを待つ余裕はなかったのだ。

彼ら人形を家族とした者たちの間から強硬な意見が声高に上がるようになったのは当然だった。

「アテラン政権を倒し、古いレイリア国にならって皆で政治を決める世の中にすべきだ」

次第にその意見は他の学生にも伝染していった。

学生たち全体が過激な考えに傾き、“革新”ではなく“革命”

すなわち打倒アテランの熱望に燃え上がるまで時間はかからなかった。

革命の熱が高まるなかで、皇子ティオンを利用しようという声も出た。

学生たちにとって皇子はただ楽しいだけの相手に過ぎず、本気で友と考えている者は一人もいなかった。それでも皇室の人間であるに違いないティオンの利用価値は絶大だった。知性もなく、幼子のように単純に見えるティオンを説き伏せて自分たちの仲間とし、革命の手伝いをさせようと言うのだった。

しかしその意見にはユインが強く反対した。

「あの皇子は駄目だ。芯から僕らと違う人間だ。仲間になどきつとれない」

だが学友たちがユインの曖昧な意見を聞き入れることはなかった。

「何故お前はそんなに皇子を恐れるんだ？」と不思議がつて笑うだけなのだった。

その時、ユインは皇子の秘密を皆に話しておけば良かったのかもしない。

人形の子である姉が閉じ込められているのを眺めて、平気な様子。平気どころか悦に入っていたティオンの姿を。

けれどユインはついに打ち明けることが出来なかった。

あの日、「友達」として最も大切な秘密を差し出す」と言ったティオンの言葉が真剣だと気付いていたからだ。いくら自分のほうは友達と違っていなくても、真剣だったティオンの気持ちを踏みにじることは道義的に許されないはず。既に冷たい態度でティオンを傷付けてはいたが、さすがに秘密を暴露するほどの酷いことはユインには出来なかった。

……ユインもまだ本当にはティオンを知らなかったと言える。この時はまだどこかティオンを見くびっていたし、僅かながらも人間らしさを信じようとしていた。

仲間に入れることは出来なくても、革命の話を入れたらいいのではないか。それが好意を示してくれた相手に対する道義ではないのか。冷たくしている罪滅ぼしの気持ちもあって、ユインはそんな甘い夢を見た。

## 第四話（42）

光が導いた闇、ダイ教授の栄光と苦悩

革命計画はダイ教授の知らない所で進められた。

学生たちは計画を彼らの教師に伝えることはなかった。きつと止められるだろうことは分かっていたし、何よりいざというときのことを考えていたからだ。これは自分たちだけの革命であり先生には関係のないこと、と言って革命の失敗時には彼を守ろうと考えていた。

しかしダイ教授が“関係がない”などと言い逃れることは始めから不可能だった。その革命の原因を生み出したのは彼自身なのだから。

……映像はまた少し過去に遡る。

黒い髪の痩せた青年が映し出された。利発そうな灰色の瞳を持っている。その瞳を見て僕は青年が、若い頃のダイ先生だと気付いた。彼は薄暗い研究室で一人、クオートの欠片を観察していた。古いレイリア時代のクオートを光にかざして見つめていたある瞬間、歓喜の声を上げた。重大な発見をしたのだった。

ダイ・アイデウはまだとても若い時に、クオートを通過した光が次元を越えることを発見した。

“次元”とは、現にここに在る世界と平行して同時に存在する数多くの世界のことである。この時代の学問の話は格が高過ぎて今の僕にはとうてい理解出来ないのだが、とにかくも、世界はそのよう

な“多次元”が層を織りなす構造になっているらしい。

“過去”も、実は現在と同時に存在する次元なのであるという。人の目には絶えず流れて変化しているように見える“時”だが、その時が刻みつけた道筋は永遠に変わらない次元として存在している。

たとえるなら、時は水であり過去・現在・未来は水が流れる河である。未来は現在が流れる水の方で決まり、現在は過去の水が流れて来た方向で決まってきた。

愚かな人の目には水が「流れて消える」ため河も消えるかのように見える。しかし過去の河は、今見える水の遙か後方に遠ざかっても存在し続けている。

これが、永遠。

「永遠でなければ不幸」と言うのは愚かなことだ。

永遠とは無理に留める形のことではない。流転し消え去るのは目に見える物だけ。その物に囚われているから、移り変わる時だけを真実と思い違いする。時にしがみつこうとあがいたり、逆に《永遠》を信じる人をバカにし罵倒する。

しかし永遠は存在を続けている。人間ごときに認められようと認められまいと関係なく厳然と。どこか特別な場に誰かが記録した過去帳があるわけでもなく、ただ在るがままの、時の次元として。

ダイ・アイデウは次元を越えるクオートの性質によってこの永遠に気付いたのだった。

さらに研究を続けていくうち、彼はクオートを用いて過去次元を垣間見ることに成功した。

人の体の頭部にある アイデ（ここでは脳のこと） という臓器とクオートを共鳴させ、頭の内部に直接、“過去”という別次元の映像を映し出すことが出来たのだ。

僕の現在の知識では頭部にあるのはさまざまな体液を作り出す臓

器だったはずだが（ 古代東洋ではまだ脳の役割は解明されていないかった）、どうやらこの知識は間違っていて、頭には考え事をしたりを動かす命令をしたり、映像を観たりする臓器が詰まっているらしい。

この、当時 アイデ と呼ばれていた臓器にクオートから送られて来た映像を直接、映し出す。

こうすると本人にはまるで現実に目で見ているかのように感じられる。

だからクオートの塔で過去の映像を観せられた僕は目の前にあることのように感じたし、触れられるようにも錯覚した。けれどそれはあくまでも頭の中で映し出されている映像に過ぎないから、触れることは不可能だったのだ。

……そうだ、今まで僕はこの映像を「塔に記録されたもの」と思い込んでいた。だがそれは間違いで、実はクオートを通して直接に過去という次元を観ていたのだ。だから誰も記録しているはずのない場所、立ち会い人のいない場所の映像も観ることが出来た。映像だけではなくその場の人の感情まで感じ取ることが出来たわけだ。

つまり触れることは出来なくとも、直接に過去と接していたことになる。

僕はこの事実気付き身震いした。本能的に違和感を覚える。こんなことをして大丈夫なのか。この技術は、侵してはならない神の領域ではないのか。

しかし若い科学者だったダイ・アイデウに神域を侵す恐れはなかった。

彼は精力的に研究を重ね、少なくともレイリアに関する過去だけ

は自在に観察することが可能な設備を開発した。

過去を細かく観ることが出来るようになった結果、ダイは国家の根本にある歪みに気付いた。

それは人の複製として生まれた人形たちの悲劇だ。

人と同じ肉体を持ちながら自由を奪われ、奴隷として苦しみを与えられ続ける人形という差別の不自然。

この不自然がある限りレイリアはいずれ必ず滅ぶだろう、とダイは悟ったのだった。一部の弱い者を苦しめたならやがて苦しみは巡り全体が滅ぶのだから。

こうして彼は現代レイリアにおいて初めて人形の本来の歴史を知り、“十字”の禁忌の意味を知る者となった。そして初めて、人形差別をなくすべきだと考える者になった。

新しい技術で得られたのはレイリアの歴史知識だけではなかった。もう一つ、古いレイリアの封印された技術を知ることにも可能となった。かつての戦争で使われていた大量殺戮さつりくの技術だ。

兵器にも精製されたクオートが用いられる。光源は主に太陽の光。クオートの内部に太陽光を集め、極限までその力を高めていく。閉じ込められていた力がクオートから解き放たれた時、光は全てを焼き尽くす最強の破壊兵器となる。

封印されていたこの兵器の話はたちまち科学者たちの間で噂となった。噂話を耳に入れた皇帝は嬉々として、ダイに「過去の兵器を再現しろ」と命じた。

ダイは始め強固に反対した。もちろんその兵器がかつてレイリアや他の国々を滅ぼしたと知っていたからだ。そんな恐ろしいものを再び蘇らせるわけにはいかない。

しかし皇帝の命令は絶対だった。従わなければ彼の未来はなかった。

それに、かつての国々が滅んだのは全ての国が同じ兵器を大量に

持ち、同時に使ったからだ。技術を我が国だけにとどめておくならそれは逆に平和を生むのではないか、とダイ・アイデウは考えた。絶対的で最強の兵器を一国だけが持てば、他の国々は抵抗出来ず、戦争も起きようがない……。

「平和のために」

そう、自分に言い聞かせ続けた彼の声は欺瞞だっただろう。

最終的に彼を動かしていたのは科学者の本能だった。科学者は自分の発見を実現したい、という欲求に勝つことは出来ない。目の前に開けた新しい道へ踏み込まずにはいられない。たとえ闇へ続く道と気付いていても。

光の兵器を手にしたレイリア国は文字通り、最強の力を持つ最高の国家となった。

かつてレイリアへ渡った民とは別に大陸へ移り住んだ民たちもいた。大陸の民たちはレイリアとは違う文化の国を発展させ、長年にわたりレイリアと対抗していた。小規模だがつまらない争いをしたこともあった。しかし最強兵器の開発で他の国々はレイリアに平伏し、争いは消えた。現実に平和が訪れたのだ。

兵器を開発した科学者を皇帝はおおいに褒め称えた。これによりダイ・アイデウの名声は国内外へ轟き渡った。

だが、栄光の陰でダイ教授は苦悩していた。

とんでもない怪物を生み出してしまった、と彼は気付いていた。もしこれが間違って使われることがあればレイリアは再び滅ぶだろう。レイリアだけでは済まず全ての国、全ての生き物がこの地上から消え去ってしまうかもしれない。

苦悩しながらも、彼は皇帝の命令に従って全国から殺到する学生たちに兵器の使い方を教える日々を送った。

自分出来る償いはただ一つ。この機械の用い方を正しく教えることだけ、とやがて彼は考えるようになっていた。

そのためまず第一に、学生たちの精神を正しく養うよう心がけた。恐ろしい道具を抑制する人間の心は必ず歪みなく、正しい方を向いていなければならない。だから彼の講義は精神的な教えから入り、技術は最後という順になったのだった。

精神を重視するようになってからのダイ教授がますます募らせたのは

“国家の歪み、人形差別をやめなければならない”  
という想いだった。

国の歪みは国民の心を正すことでいずれ緩やかに矯正されるだろう。

国家から切り離された自分だけの学校を持ち、若者に自分の得た思想を教えたい。いつしかそのような夢をダイ教授は抱くようになった。

兵器開発から数十年後。

皇帝の命令で影島に、最新にして最大規模の兵器施設が建てられることになった。

その時、ダイ教授は自ら影島へ行くことを申し出た。影島に自分の学校を建てたい、と希望したのだ。

兵器の技術をより多くの学生たちに学ばせる必要があったため、皇帝はダイの学校設立を許可した。開発者がじきじきに最新兵器の現場で技術者たちを育てると言うのなら、国にとってこれほど好都合なことはないだろう。

こうしてダイ・アイデウの大学校が影島に設立された。

大学の教室は、兵器施設と同じ塔の中となった。

この塔で学生たちは精神を鍛え、殺戮兵器の使い方を学び、レイリアの歴史や人形たちの悲惨を知り、革命への熱を高めていったのだった。

#### 第四話（42）（後書き）

ここでの多次元の考え方はオリジナルのフィクション（SF）です。現実の学術学説通りではないので鵜呑みにされないよう。

「次元」という言葉の正しい意味は他で学ばれてください。なお、ここでは未来次元までの実在は設定していません。

#### 第四話（43）

ダイ・アイデウの革命

時は熟した。

後に“ダイ・アイデウの革命”と呼ばれる反乱事件は、霧の晴れた満月の夜に起きた。

その夜、月が中空高く昇る時刻のことだった。

居住区を脱走した数十人の人形たちが、人形管理のために本島から派遣されていた役人を全員殺害した。

同時刻、人形居住区では学生たちが『解放宣言』を行つた。

居住区に響き渡つた解放の声をきっかけとして、人形たちを閉じ込めていた石の塀が次々と打ち壊された。こうして瓦礫の山を越えて外へ飛び出した人形たちは一斉に自由行動を始めた。

十万、二十万、三十万、……百万、二百万と膨れ上がっていく人形たちの集団は浜辺を目指した。

明け方、浜辺に集結した人形たちが本島へ向かつて上げた関とぎの声は、クオートの通信設備を通して政府に届いていた。

慌てた皇帝が影島へ調査の役人を派遣したが、遅かった。

既に イジス と呼ばれる新しい設備が学生たちの手で起動されており、影島は封鎖されていた。

イジス の壁を強行突破しようとした役人たちは、見えない壁の波動に焼かれて悲鳴を上げる間もなく絶命してしまった。

ちょうど本島を訪れていたダイ教授は寝ているところを叩き起こ

され説明を求められた。しかしダイ教授は何一つ答えることが出来なかった。当然だ、教授は何も知らなかったのだから。学生たちはあえて教授が出掛ける日を狙って行動を起こしたのだ。しかしそれでも教授の疑いは晴れず、宿泊中の建物に軟禁されることとなった。数刻後、学生たちは政府へ通信をはかり、高らかに宣言した。

「皇帝アテランと政府に告ぐ。我々は人形解放のための国家改革を求める。皇帝の位は廃し、皆で意見をまとめて国の行いを定めていく制度に改めることを望む。アテランは即刻その座から退け。人形差別を撤廃し、全ての者に同等の権利を与えよ。要求が受け入れられない場合は、クオートの技術をこの影島にて永久に封じる」

クオートの設備を扱うことが出来るのはダイ教授の学生たちしかない。

またクオートの原料を掘り出し、本島の人々の食料を生産しているのも影島の人形たちだ。

全ての学生と、唯一の労働力である人形たちが影島に閉じ籠もることは、レイリアの国家としての力を奪うことを意味する。

だから

「クオートを永久に封じる」

という宣言は、本島へ向けて最強兵器を放つこと以上の脅迫になるはずだった。

無論、その気になれば学生たちは例の兵器を用いて本島を脅すことが可能だ。だが始めから学生たちに兵器を使う考えはなかったのだ。最終手段としての選択肢にも入っていなかった。ダイ教授に教えを叩き込まれた彼らはその兵器が過去にどれだけ恐ろしい結果をもたらしたか知っていたし、道義としても、無実の人たちを一瞬で大量に死に至らしめることはしてはならないと考えていたからだ。残念ながら既に何人が役人たちの血が流れてしまったが、仕方がなかった。

これ以上の殺戮はしたくないと学生たちは心から願っていた。最初の脅迫で効かなければ、いよいよ百万人の人形たちとともに本島を襲撃し、力づくで皇帝から権力を奪うしかない。その最低限の戦闘さえ出来れば避けたいと考えていたほどだ。

革命を志した者として学生たちは皆、甘かったのだろう。ティオンに義理を通そうとしたユインはさらに甘かった。

……反乱事件より数日前。

革命計画をユインから聞いた時ティオンは、裏切られた、と感じた。

皇族に対する不義を裏切りと感じたのではない。家族がどうなるかとティオンの知ったことではない。国家のこともどうでもいい。我慢ならなかったのは、自分に対する侮辱だ。友人として親しげな笑顔を向けながら、裏で自分をのけ者にしていた友人たちの嘘だ。

結局、自分は最初から最後までのけ者だったのだとティオンは思い知った。

価値がない奴らに仕方なく付き合ってたのに。それなのに裏で奴らに侮辱され、嗤われていたのだ。あのクズどもに。地位も低く低能で醜い容姿の寄り集まりでしかない、腐ったクズどものくせに！

「だから、ティオン。どうか理解して欲しい」

煮えたぎるティオンの腹の裡を知らずにユインは誠心誠意、懇願を続けた。

「決して陛下や皇后様を傷付けるような真似はしないつもりだ。反乱の日には少しだけ手荒なことをしてしまうかもしれないけれど、最後まで話し合いの努力は続ける。君はしばらくどこかに隠れているか、抵抗はしないで欲しい。そうすれば絶対に傷付けることはな

いから」

「それで？」

どす黒い心とは裏腹にティオンは涼しい顔でユインに訊ねた。

ユインが言葉を止めてティオンを見返すと、彼は落ち着いた瞳をユインに向けた。

「もし、両親が抵抗したらどうするのだ？ 殺すのか」

ユインはたちまち青褪め、不快な虫を払うように顔の前で手を振った。

「それはない。それだけは。しばらく拘束することになるだろうが、理解してもらおうよう説得を続ける」

ふっ、とティオンは吹き出した。

「説得だと。結論が先にある説得で“理解してもらおう”、も何もないだろう」

いたたまれずユインが黙り込むと、不意にティオンは神々しいまでの笑みを口元に浮かべた。

「いいよ。殺してくれて、構わないよ」

ぎょつと見返したユインにティオンはさらに優しく笑いかけた。

「両親を殺してくれて構わない、と言っているんだ。脅迫して無理やり納得させるのも、殺すのも同じことだ。だったら手っ取り早く殺してくれて構わない」

「何てことを……。君のご両親だろう？ 我々はそんなことまでしない。決して無意味な人殺しはしない」

隠し切れない偽善に冷や汗をかいているユインをティオンは心で嗤った。顔はあくまでも穏やかで、優しかった。

「そうか。ありがたい。それでこそ友達だ」

言ってティオンは手を差し出した。

「では、協力しよう。君たちの革命に」

信じられない想いでユインは差し出された手を見つめた。

「どうした？ 友達であり、仲間だろう。協力して当然だ。それに前からダイ教授の考え方には賛成だったんだ。人形差別は良くない

ことだ。これからは皇帝だの階級差だのにこだわるのをやめて、新しい時代を迎えなければならぬ。さあ、この手を取ってくれ」

ユインは自分の今までの評価が揺らぐのを感じた。ひよっとしたら自分は皇子を誤解していたのではないか？ この人こそ待ち望んだ、本物の改革者ではないのか。

「ありがとう、ティオン……。その言葉だけで嬉しい。これからも友達でいよう」

気付けばユインは涙ながらに皇子の手を握り締めていた。

甘過ぎたのだ。皇子への生理的嫌悪感より人間への期待を選んだ。しかしそれは痛みや憎しみを知らない故の甘さだった。人を嫌うことよりも好くこと、疑うよりも信じることに喜びを見出す少年が温もりへ手を伸ばしただけに過ぎない。

だからこの時、皇子の手を握り締めたユインを他の学生たちも責めることは出来ないはずだ。

ティオンは「協力する」という言葉通り、ついに革命計画を両親に話すことはしなかった。

約束が守られたことに感激したユインはティオンの友情を本気で信じてしまった。

彼の人間性を疑い、友情を遠ざけていた自分に罪さえ覚えたほどだった。間もなくその罪悪感を激しく後悔することも知らずに。

#### 第四話（44）

##### 愚か者の戦い

革命は学生たちの思うようには進まなかった。

国は要求をのまず学生たちも譲らない。お互いに歩み寄りのないまま、実に一月以上も膠着状態が続いた。ダイ教授からの直接の説得も試みられたが、無論、教授の声で心を動かされる学生たちではなかった。その程度の決意なら自分たちだけの判断で革命を起こしたりはしなかつただろう。

一月が過ぎた頃から少しずつ、国は学生たちに譲歩の姿勢を見せ始めた。

「民の声を確実に聞き入れるための制度を創設する」  
「人形たちの労働環境と生活環境は、必ず改善することを約束する」  
、等々。

しかし政府から届くこれら譲歩案を学生たちが聞き入れることはなかった。

学生たちの要求はあくまでも国家制度を根本から変えることだった。

皇帝という地位がなくなり、人形という差別階級がなくなるまで彼らは戦うつつもりでいた。このまま皇帝が自分たちをなめきつて要求を受け入れないなら、武力に訴えるしかない。

やはり百万の人形たちを本島へ乗り込ませるべきだ。日を追うごとにそう主張する学生たちが増えていった。その準備も整えられつつあった。

本島には既に先陣として三十人の学生たちが上陸していた。

この三十人は首都に潜り込み、都の扉を開けるべく反乱軍の到着を待っていたのだ。

いっぽう宮廷では反乱討伐の準備が着々と進められていた。

討伐軍を率いるのは、第二皇子のレン。ティオンの兄であり、父からの信頼あつい皇子だった。ちょうどその頃、第一皇子のアンが病で臥せっていたため、代わりに討伐軍を率いることになったのだ。

レン率いる討伐軍を乗せた船は闇に紛れて影島へ近付いた。

クオートの反応しない限界の距離で、そつと島を取り巻き待機した。

その兵数、十万。

数では反乱軍に遠く及ばない。しかし鍛え上げられた職業軍人の力には、体力のない人形たちが束になっても敵わないだろうと考えられた。彼ら国軍の兵士たちは伝統的な訓練を受けており、古い金属を用いた武器の扱いにも長けていた。だから接近戦となれば、機械の扱いしか知らない学生たちなども敵ではない。

問題はやはり、イジス という新設備だった。

イジス とはダイ教授と学生たちが開発を進めていた設備だ。開発に成功したという報告は国にされなかったが、どうやら既に使えるようになっていっているらしい。

この設備は言ってみれば、目に見えない巨大な楯だ。

イジス は波動を発する。色も熱もなく、触れることも出来ない波動とはまるで“気”の壁。この不思議な壁が、島全体を覆う。こうして近づく全ての物から島を守る。

無理に イジス の壁を越えようとすれば、波動に焼かれる。正確には熱で焼かれるのではない。通ろうとする物自体が熱を持ち、自身の熱で焼けてしまうのだ。金属は溶け、生物は破裂する。

イジス の壁は特定の攻撃を跳ね除けることも出来る。

たとえばもし敵国がクオートの兵器を用いて光線を放ったとしても、イジスの壁が光を跳ね除け無力化する。つまり最強の兵器

からさえ防御することが可能なのだ。古代にも存在しなかったこの設備があれば、まさに無敵となる。

本来、国家のために使われるべきその無敵の楯が今、反乱軍のために使われている。

国としては屈辱的な、頭の痛い現状だった。

当面は イジス の壁をどうすれば越えられるか、が問題となった。しかしこの時代における最高の技術を使って開発された設備を上回る方法などあるはずがなかった。

「イジスを突破する方法を教えよ」

皇帝に尋問されたダイ教授でさえ、 イジス の壁を突破する方法を思いつくことが出来なかった。そもそも弱点があるものなら、彼が無敵の設備として開発を進めることはなかった。

申し訳ないですが不可能です、とダイ教授は皇帝に詫びてから説明した。

「イジスは、使う者のアイデ（脳）と連動しています。ですから使用者が眠ったり、集中力が途切れたりした場合には停止します。…しかしその時がいつなのか外部から確認することは出来ません。それにおそらく、学生たちは交代でイジスを起動させているものと思われます。この場合、停止するのは交代時間の一瞬のみです。一瞬の隙を狙って突破する計画は非現実的と言えるでしょう」

淡々としたダイ教授の答えに皇帝も廷臣たちも憤慨した。

だが開発者の答えは正しかった。

当分の間、討伐軍は影島を遠巻きにして手をこまねいているしかないのだった。

宮廷の騒ぎを一人、後方で眺めていた者がいる。

ティオンだった。

末の皇子が意見も言わず、大人しく後ろに控えていることに誰も気付かなかった。

もちろんこの時、彼が薄笑いを浮かべていたことも誰も知らない。ティオンは愚かな人々を眺めることを愉しんでいた。青褪めた顔で右往左往する父親や、無能ぶりをさらして冷や汗をかく廷臣たちを眺めては、心から嬉しがつて笑った。

彼の目に宮廷の騒ぎはたまらなく滑稽な劇に見えた。

あれほど偉そうに振る舞い、自分を馬鹿にしてきた大人たちが何もすることが出来ず走り回っている。なんと愚かな人々だろう。

馬鹿ほど他人を馬鹿にする。これは真実。

比べて自分は賢い、とティオンは思った。賢いのは世界で自分だけだ。

今、確かに人々の運命はティオンの掌にあつた。皇帝や国家も、学生たちの行く末も、国民の命も、彼がほんの少し力を入れたなら握りつぶされてしまうのだ。

ぞくぞくと快感がティオンの背中を駆け抜ける。

まるで本物の神になった気分だった。彼はこの時を待っていた。自分は今この瞬間のために生まれたのだと感じていた。馬鹿どもに馬鹿にされ踏みにじられ、屈辱に耐えてきたのもきつとこのためだった。

快感に震えながら彼は頭上を仰ぎ、心の中で宣言した。

“時は満ちた。今こそ迎えに行こう。自分のために用意された未来を”

大きく口元を歪め、にやりと笑ったのを最後にティオンは宮廷から姿を消した。

次の日、日没間近に一艘の船が影島へ向かった。

少しでも大きな波が来れば転覆してしまいそうな、小さな船だった。

質素な造りの船だったためクオートの警報は鳴らなかった。だが、遠隔映像で海を見張っていた学生が、イジスの壁の間近に漂う船

を発見した。

学生たちは遠くの景色を見ることが出来る機械を使い、船を拡大して見た。

乗員は三人の若者のみ。

人形が着るようなみすぼらしい衣服に身を包んでおり、それぞれ一つの袋だけ持っている。袋の口からは食料とおぼしき物がはみ出して見えた。武器らしいものを持っている様子はなかった。

さらに拡大して乗員の一人の顔を見た時だった。学生たちは息を飲み、声を上げた。

「ティオン！」

## 第四話（45）

彼らの失敗

学生たちは顔を見合わせた。

一度は仲間に引き入れようと考えた皇子だ。警戒しつつも、気持ちには緩む。

丸腰で来ているティオンが敵対行動を目的としていないことは明らかだった。敵対どころか、両手を掲げて振るさまは友好的で、まるで“仲間に入れてくれ”と言っているようだ。

皆の視線が一斉にユインへ集中した。

「ユイン……、どうすべきだ」

「ティオン皇子を信頼して良いのか」

「皇子を通すべきか、否か」

あっけに取られてティオンの映像を眺めていたユインは、同志たちの視線を受けてぼんやり首を横に振った。

曖昧な返事をしてしまったのはユイン自身にも迷いがあったからだ。確かにティオンは約束を守った。ユインの中でティオンは今や、“信頼すべき友”に変わっていた。だが、イジスの壁を通してこちら側へ引き入れて良いかどうかは、すぐに答えが出せなかった。

しかし革命の最中に迷っている暇はない。

「どうなんだ？ 早く答えろ」

同志たちに決断を迫られてユインは心を決めた。

「……いい、だろう。通してくれ。皇子は僕との約束を守ってくれた。信頼して良い」

見えない門が開かれた。イジス は一時だけ停止し、皇子と近

衛二人を迎え入れた。

この時、停止の隙を狙って攻撃される可能性はあったのだ。イジスを停止させるためにティオンが送り込まれたと考えても良かった。しかし政府側からの攻撃はなかった。このこともティオンの信頼の証となった。

ティオンら三人は塔へ招き入れられ、作戦本部となっていた大講堂へ通された。

イジス や兵器を操作する司令室は塔の最上階にある。いつぱう千人ほど収容出来る広さで、大人数が一斉に同じ映像を観ることが可能なこの大講堂は、当然ながら学校としての講義を行うための部屋として造られた。ここが革命時には学生たちの作戦本部となった。

常に イジス を操作している者を除いて全員が大講堂に集まっていた。彼らは大講堂で話し合い、食事をとり、あの薄くて暖かい布 クオートが織り込んであり適度な体温を保つ を掛けて寝た。

大講堂へ入ったティオンは全体を見回して事情を把握した。

「皆でここに寝泊りしているのか？」

ティオンの質問に彼をここまで案内して来た学生が「そうだ」、と答えた。

「もしあなたが床で寝ることにご不満なら、寝室に泊まっていたらこう。皇子が何をしに来られたのか分からないけれども、この塔へ入った以上はすぐに帰っていただくわけにはいかないんだ。我々の仲間になるとなるまいとに関わらず」

学生が淡々と言うとティオンは頷いた。

「分かっている。帰るつもりはないよ。君たちの仲間に入れてもらうために来たのだから」

そう言うてから、彼は大仰に頭を下げ礼をした。

「どうか友人として、革命の仲間に入れてくれないか？ 私も君たちと同じようにここで寝泊りしよう」

皇子の入場に始めは戸惑っていた学生たちも、ティオンがつぶさに国の状況を話したため次第に心を開き始めた。

兄のレンが十万の討伐軍を率いて本島を出たこと。

何日も前から、影島の間近に潜伏していること。

けれど兄たちは イジス の楯に阻まれて近付けずにいること。

全て学生たちが塔の映像で把握していた情報ばかりだったが、把握出来ることを知らないティオンが正直に語ったという事実は重かった。ティオン皇子は本心から我々の仲間になろうとしている。本気で、高邁こうまいな理想のために家族さえ投げ出そうとしている素晴らしい人格の持ち主だ。学生たちはそう思った。

ティオンが革命の理想を語り始めた頃には皆が彼に心を許していた。

彼の口から出る熱の籠もった言葉は先生の思想そのものだったし、自分たちの考えた理想と同じだった。

彼が「人形は我々人間と同じだ。同じように生活させるべきだ」と力強く発言した時には、感動に打ち震えて涙する者さえいた。皇族にこのような人格者がいたとは。何故、今まで気付かなかったのだろう。皇族であるティオンのことを先入観で見っていたのかもしれない。高い地位にある人々を差別していたのは我々のほうではないか？

いつの間にかティオンの周囲に輪が出来た。皇子と学生たちの心は固く結ばれ、話は盛り上がった。

それに相変わらずティオンは明るく話術が達人だった。遊び歩いた日々と同じようにはしゃいで見せて、学生たちを笑わせた。革命が始まって以来、神経をとがらせ疲れ切っていた学生たちの気持ちは久しぶりにほぐれた。こうして和気藹々（わきあいあい）とした

夜が更けていった……。

談義の間、学生たちは順に食事をとっていた。しかしティオンに食事を勧めても彼は「最後でいい」、と頑なに断っていた。

「自分は新参者だ。食事など、最後の最後でいい」

なんとという憤み深い態度だろうか。皇子のこの態度でまた学生たちはティオンの評価を上げた。

ついに真夜中を過ぎた。

それまで談義の輪の傍にしながら、あまり喋らずに座っていたユインが立ち上がった。

交代の時間だった。この日、深夜過ぎの イジス を操作する担当者はユインだった。彼は立ち去る前に皇子に視線を投げ、「ティオン」と声をかけた。

「君も疲れているだろう？ そろそろ食事をとって休んでくれ。君はもう我々の仲間なのだから、どうか遠慮なく」

優しさのつもりだった。ティオンに対する親愛の情をユインはこの時、抑えることが出来なかった。

ティオンは談笑をやめて顔を上げユインに笑いかけた。心から嬉しそうな笑顔だった。

「ありがとう。ユイン、君は、ほんとうに優しいな」

暖かい気持ちでユインは大講堂を後にした。今初めて確固たるものとなった友情を、明日からも大切にしていこうと思いつながら。

大講堂では既に寝ている者が多くて迷惑になるから、食事は食堂でとるとティオンは言った。

食堂に案内されたティオンと近衛たちは、目の前に出されたご馳走を喜んで口に入れた。が、すぐに吐き出してしまった。

申し訳なさそうにティオンは下を向いた。

「済まない……。やはり、私たちには無理なようだ」

食事を出した学生は「仕方ないよ」と言って笑った。

「ごういう食事に慣れていないんだろう？ 始めはみんな吐き出してしまうものだよ。僕もそうだった。すぐに慣れるから大丈夫さ」

この時、学生たちが食べていたのは“模造品”だった。

肉は肉らしく菜も菜らしく見えるが、現実には人が生きていくために必要な食べ物の“素（栄養素）”を粉にしたものを口に含んでいるだけに過ぎない。粉にわずかに含まれるクオートと機械の作用でアイデ（脳）が見た目を作り出し、味を作り変える。まさに仙人が食らう霞のごときだ。

初めての場合はアイデがうまく味を再現することが出来ず、混乱して吐き出すことがある。ティオンが吐いたのも慣れないためのようだった。

「ええと。それでは、君たちの食事をどうしよう。革命中は腐る食料を置いておけないから、この“模造食”の備蓄しかないんだよ。

悪いがしばらく果物か何かで我慢してもらえるかな？ 僕が近くの森に行つて採つて来よう」

そう親切に言つて食堂を出て行きかけた学生をティオンは止めた。

「そんな。面倒をかけるわけにはいかない。こんなことになるかもしれないと思つて、自分たちの食べ物は持つて来ているんだ」

彼は近衛の顔を見た。近衛たちも、「そうだ」と言つるように頷いた。

「え、そうなのか？ ああ、そう言えば君たちは食料の入った袋を持つていたっけ」

学生は夕方に観た遠隔映像を思い出していた。ティオンと近衛たちの船には確かに袋が詰まっていた。袋の口からは果物などの食料が覗いて見えた。

「あの袋は今、どこに？」

聞かれてティオンは少し思ひ出すような顔をした後、答えた。

「まだ船にある。重い荷物を運ぶよりも先に、君たちに挨拶しなければと考えたんだ。……そうだったな？」

ティオンが近衛たちを見回して問うと、二人は静かに頷いた。

「袋はさぞ重いんだろう。僕も手伝うよ」

どこまでも親切な学生の申し出をティオンは丁重に断った。

「自分たちだけで運ぶから大丈夫だ。その代わり、君は扉のところ  
で待っていてくれないか。私たちが声を掛けたらすぐに開けて欲し  
い」

彼は笑顔で、「君たちを閉め出すわけにいかないものな。待って  
いるよ」と頷いた。

最初に死ぬのはこの学生となった。

#### 第四話（46）

ばしゃっ。

果物が弾けるような音が響き、僕はとっさに目を瞑る。

しかし当然ながら映像は消えてくれない。目の奥で鮮やかに散つた赤は、僕の頭上に降り注ぐ。

すでに観た映像だ。一度だけではなく、あれから何度も夢に出て来てうなされた。よく知っている、けれど慣れて平気になることは決していない。初めて観た時は衝撃だけだったが、二度目にはその衝撃が重い悪心おしんをともなつて押し寄せた。

壁に、天井に、赤がばら撒かれる。

腕が、首が、かつて人の体の一部だった様々な肉片が宙を飛び交う。

たちまち血の海と化した床に、肉塊が積み重なっていく。

学生たちの悲鳴と断末魔の呻き声は、灯りの消えた講堂に繰り広げられる惨劇をさらに暗く彩る伴奏として響いた。

僕は過去の映像に見えないはずのものを観ていた。山積みとなった肉の塊から、どす黒い気が立ち上がっているのだった。あれは何だろう。唐突に命を奪われることになった学生たちの、悲しみ、怒り。いや、恨みの念か。それが観ている僕のほうへ漂って来て、肩に押し掛かるのを感じた。

念は体の重みとして感じられた。腹をかき乱す吐き気と、念の重さに耐え切れず僕は思わず床に手をついた。床は血に浸されている。ひたひた波打つ赤い液に僕は膝まで浸かっていた。だが、手をついた床はひやりと乾いた感触を伝えて来て、目に見える光景が今の現実ではないことを教えてくれる。

「友たちよ。私は君たちを欲していた。心から、欲していたのに……」

静まり返った大講堂にティオンの薄ら寒い声が響いた。勝利の宣

言がなされたのだった。

学生たちの敗因は考えるまでもない。

失敗はティオンを馬鹿にした瞬間から始まっていた。馬鹿にしていたからこそ騙されたのだ。

あの時ティオンたちは食料の入った袋などではなく、武器の入った袋を船に積んでいた。クオートの反応しない素朴な金属を用いた鎧や、剣などの殺人道具だ。近代機械の扱いしか知らない学生たちの目を欺いて島に持ち込むことは実に簡単だった。

食料を取りに行くと告げて、船に戻り武器を抱えて戻ったティオンら三人を扉の内側で待っていた学生は、微塵の疑いもなく扉を開けた。そしてその場で袋から取り出された剣の、最初の餌食となっていた。

塔の玄関で装備をかため、ティオンたちは塔の廊下を昇って行った。

彼らの肩に担がれた剣は月光を映して瞬いていた。その輝きは塔の透明な壁を通して、遠くからでも見えたはずだ。けれどクオートが警戒音を発することはついになく、学生たちが寢床についた後の深夜の塔は静まり返っていた。

講堂の扉をティオンが叩くと、近くで寝ていた学生が起きて出迎えてくれた。

「お帰り。食事はどうだった、模造食は喉を通ったか？」

扉が横に滑り、からかい気味の笑顔の学生がティオンに話しかけた。しかしその笑顔は凍りつき、見る見る歪み、絶叫を最後として動きを止めた。

犠牲者の悲鳴で学生全員が目を覚ましたが、遅かった。

出入り口は一つ。その扉は敵に塞がれている。

慌てふためき、正常な思考が出来なくなった学生たちは扉に殺到し、次々と剣の餌食となった。

学生たちの間に反撃を試みる者など当然、誰一人としていなかった。たとえその気概があつたとしても、生まれてから一度も機械以外の武器に触れたことがなく、しかも丸腰で寝込みを襲われた彼らに抵抗する術はなかつただろう。

もはや逃げることさえ叶わないと知つた学生たちは講堂の中を右往左往するのみだつた。扉の前を離れて講堂の中央に斬り込んで行つたティオンの剣を、学生たちは悲鳴を上げて身に受けることしか出来ない。

こうして虐殺は明け方近くまで続けられた。

ティオンは一人、一人、丁寧に憎しみを籠めて斬り刻んでいつた。かつて友と呼んだ相手の体を、ただの一体も漏らすことのないように。

殺戮を終えたティオンは死体の山を冷たい瞳で眺め回している。細い目に悦びを浮かべ頬を紅潮させて、汗で額にまとわりついた金髪をかき上げるティオンの姿は、爽やかな体操でも終えた者のようだ。

彼の全身には快樂がみなぎつていた。それは復讐を果たした者が手にする、これ以上ないほどの快樂だつた。けれどその快樂は何も癒すことがない。一時の慰めだけで心を覆い、傷は塞がれずますます痛みを増すのみ。すぐに渴いて、再び同じ快樂を欲する。

快樂の味をしめた者は癒されることのないまま快樂に溺れていく。これがこの時、父が選んだ道だつた。

知らず僕はまた強く瞼を閉じていた。気の毒に、と、父に対して思つた。

返事のない“友たち”に語りかけた父の言葉は本心だつたはずだ。本気で、彼は“友”を欲した。誰か“友”になつてくれる人間が彼にはどうしても必要だつた。もし本物の“友”が得られていたなら父の人生も変わっていたに違いない。しかし、ついに“友”は得ら

れなかった。誤解と裏切りだけが彼に与えられた全てだった。

父は確かに友情について勘違いをしていた。だが人の温もりを求めたという点では他の人々と変わらない。誰しも愛情が、人の優しさがなければ生きていけないはずだ。幼い頃から家族に見捨てられていると感じ、劣等意識の中で生きてきたティオンには特に誰かが強い優しさを教えなければならなかった。けれど誰も彼に愛情を注ぐとはせず、逆に手ひどい裏切りで踏みにじるだけだった。

だから父だけが一人、一方的に悪いと言うことは出来ないのだらう。

始めからティオンを見下して弄もてあそび続けた学生たちには明らかに罪がある。

父に全力を注ぐことが出来なかった先生にも少し責任がある。状況が許さなかったのは残念だが、先生が教師としてもう少し注意深く父を見ていてくれたなら、もしかしたら彼にも変わる機会があったかもしれない。

さらに罪深いユイン。あの人に少年時代の父の欲求を全面的に受け入れることはとうてい無理だったらう。そんなことをしていれば彼が父に食い潰れてしまうことになっていた。でも、それにしても彼はあまりにも曖昧に父を棄てた。半端に棄てるのではなく無理なら無理、と強い口調で教えてくれていたなら父も少しはましな人間になれたらうと思うのに。

それから、僕……。最終的に父を地獄の底へ突き落とすのは他の誰でもない、この僕だらう。

自分自身が生み出した分身である子供なら、決して裏切ることなく全面的に愛情を受け入れるはずだと父は信じていたに違いない。けれど僕には出来なかった。父の考えた“愛”を受け入れる単なる容器になることは、とても。

僕はどこまでも人であった。物にも、神にもなれなかった。

人として不可能なことを強いられたが故に、僕が他の誰よりも徹底的に父を拒絶することになる。父を裏切り、打ちのめすのだ。完

膚なきまでに。

廊下を駆けて来る足音が聞こえた。

ユインの足音だ。時間をとうに過ぎてても交代者が来ないので、胸騒ぎを覚えた彼は司令室から降りて来たのだった。彼が持ち場を離れて操縦者がいなくなった結果 イジス は一時停止となり、影島は無防備で危険な状態となっていた。廊下を降りるユインの足は自然と速まった。

扉を開け、講堂へ足を踏み入れたユインの目に飛び込んで来たのは地獄の景色だった。

澄んだクオートの壁を通して、煌々と降り注ぐ月の光は無慈悲な白さで講堂を照らし出していた。

床の一面を浸して微かに揺れている暗い色の水が、光を浴びて明るく見える所だけ鮮やかな赤に輝いている。

折り重なる黒い物の山から人の手の形に似た物が飛び出していた。いや、それはかつて人の手だった肉だ。

肉の山の中によく知った友人たちの顔を見つけた瞬間、痺れていたユインの頭に感覚が戻って来た。状況を悟ると同時に恐怖が押し寄せた。

恐怖と衝撃のあまりユインは声を発することも出来ない。

青褪めた顔で、壁にもたれ掛かりずると腰を落としたユインをティオンは一瞥する。その表情が変わることはない。

「なんだ、ユイン。遅いじゃないか」

まるで今までそこで平和な講義が行われていたかのように、学生の遅刻をたしなめる教授を演じて大げさな息をついて見せる。

「今日の講義は終わったよ。残念だったな」

言いながら、ティオンは殺戮を手伝ってくれた近衛兵を引き連れて歩き出した。死体の山が彼らの足に踏みしだかれる。

必死で逃れようとあがき、しかし足に力が入らず身を僅かに動か

すことしか出来ないユインの前でティオンは立ち止まった。冷たい視線を足元に注ぐ。

くっ。

小さな笑い声が響いた。

ティオンの喉の奥から発せられた笑いだった。彼の口元には薄い笑みが浮かんでいた。とても微かな笑みだ。けれどこの男が激しい愉悦に全身を震わせているのが、今の僕には分かった。

この場面こそティオンが待ち望んだものだろう。死の恐怖に青褪め顔を歪めて、もがいているユインのみつともない姿。屈辱にまみれているのに、逃れることも出来ずにいる。完全に自分の物となった。指一本で命を奪うことさえ出来る、そんなユインを眺めることはティオンにとって鳥肌の立つ悦楽だった。

殺すのは簡単だ。しかしティオンには最初からそのつもりはなかった。ユインには至上の屈辱を与えるつもりだった。生かす、という屈辱を。

ユインから視線を逸らしたティオンは、それきりユインの姿が見えなくなったかのように感情の消えた顔を前へ向け講堂を出て行った。ユインを殺すべきかどうか迷っていた近衛たちも、ティオンが彼を無視して出て行ったため慌てて後を追った。

ただ一人、生きている人間としてユインは講堂に取り残された。

床に座り込んだ姿勢のまま、長いこと呆けた顔で死体の山を眺めていた彼の瞳に涙が浮かんだのは、朝が近付いて闇が濃くなった頃だった。

瞳からこぼれた大粒の涙がユインの頬を滑り落ちた。

「終わった……。皆、死んでしまった」

白く輝く涙に滲んでいたのは絶望的な喪失感と、何もかもを悔いる心だった。

#### 第四話（47）

影島を閃光が襲ったのは七日後のことだった。

ユインは東の空が煌めくのを見た。

本能的にそれが何であるのか悟って目を閉じたため、彼は失明を免れることが出来た。しかしその光によって昔の影島は失われ、本当に何もかもが終わったのだ。

七日の間、ユインは塔で生きながらえていた。

仲間たちの遺骸から逃れるように大講堂を避けて塔を歩き回り、失意で半ば呆然とした意識のまま、繰り返し司令室に入っては遠隔映像で国の様子を眺めていた。そこに希望などないことを知りながら。

遠隔映像はティオンの様子を映し出していた。

影島で学生たちを殺戮した後、ティオンはすぐさま近くの海上で待機していた兄レンの隊と合流した。

ティオンが持ち帰った“おみやげ”は、全身を染め抜くおびたらしい返り血だけだ。当然ながら、「反乱者たちを抹殺してきた」と言う弟の話をレンは半信半疑で聞いていた。だが、実際に船で境界を越えて イジス が機能していないことを確かめると、弟の功績を称えて喜んだ。

同時にレンは内心で脅威を覚えもした。末の弟に先を越されたことで自分の立場が危うくなったのだ。

レンも将来は皇帝となる道が閉ざされている。せめて父に気に入られて引き立てられ、皇帝に次ぐ地位を得たいと考えていた。そのためにも今回の討伐で功績を挙げることは絶対に必要なのだった。

焦ったレンは船を影島へ直行させ、人形たちに急襲を仕掛けた。ティオンはあえて止めなかった。結末が自分にとって都合の良い

ものに終わると感じていたからだ。

始めこそ人形たちは兵士の武器に怯えて散り散りに逃げ惑った。けれど自由を意識した数百万人の集団は、やがて十万人を圧倒した。たかが奴隷として人形たちを見くびっていた兵士たちにとって思いがけない展開だった。木切れを手に立ち向かう人形たちにレンの軍は次第に追いつめられ、逃げ場を失い、残虐な袋叩きに遭って全滅した。

丘の上で高みの見物をしていたティオンのもとへ、レンは二人の部下だけを伴い命からがら逃れて来た。

「こんなところで何をしている、ティオン。一時撤退だ。さあ、早く逃げよう」

弟を救い出そうとその肩に手をかけた時、レンの喉を短刀が切り裂いた。

レンの部下はティオンの近衛たちが斬り捨てた。

息絶えて地に横たわる三つの体をティオンは傲然と見下ろした。

ティオンはただこの時を狙って影島に留まっていたのだ。兄、レンの命を奪う時を。

覚めた表情でティオンは次の作業に取り掛かる。兄の首を切り落とし、髪をつかんで無造作に持ち上げた。それから近衛を連れて丘を駆け下り、人気のない浜辺に隠しておいた小船に乗り込んで本島へ帰った。

人形に殺されたというレンの首は母を悲しませ、父を怒らせた。

戦いの一部始終をティオンは、最後まで作り変えて見事に物語った。自分が密かに塔へ忍び込み学生たちを倒したこと。それで、イジスが解除されて、兄たちが影島に踏み込めたこと。けれど思ったより人形たちの抵抗が強くて兄の軍は全滅してしまったこと。兄が人形たちに殺される場面、自分が決死の想いで兄の首だけ持ち帰った経緯を語る時には、涙でむせて見せることさえした。

そしていかに人形が恐ろしい存在か、あの奴隷たちを放置していると国が滅んでしまう可能性があることを父に説いて聞かせた。

さらにティオンは学生たちとの会話で得た情報も差し出したのだ。都に三十人の学生たちが潜伏していることだ。潜伏している場所さえティオンは知っていた。

「……この者たちを捕らえ、兵器を使わせてみたらどうでしょう？」  
息子の提案に皇帝は青褪めた。

「兵器だと」

「そう、あの最強の兵器です。あれを使う以外、数百万人もいる人形たちを殲滅する方法はありません」

皇帝は躊躇した。兵器を使えば人形は完全に根絶やしとなり、影島も滅んでしまう。

「しかし……、人形は我が国の唯一の労働力だ。人形がいなくなり、影島がなくなれば我が国はどうなる？ 若いお前でも想像出来ないことではあるまい」

「外国があるではありませんか」

迷う皇帝に、十五歳の皇子は明るく言い放ったのだった。

「兵器で脅して外国をいただけばいいのです。外国で土地と労働力を得れば、我々は生きていけます。しかも、今までより遥かに豊かになるでしょう。だって、そのための兵器ではないのですか？」

皇帝は驚嘆した。皇子の言葉は皇帝の内心を言い当てていたからだ。

一人で塔に乗り込み反乱者たちを倒し、一人で生き残って帰って来た皇子。今は驚くべき鋭さで父の内心まで言い当てている。無能だと思っていた末っ子がいつの間にもこれほど成長したのか。空恐ろしい想いで息子を眺める父親に、ティオンは続けて言った。

「これは最高の機会です。外国にあの兵器の力を、我が国の脅威を見せ付けるための。だいたい、まだ現実で兵器の力を試したことはないのでしょうか？ 実験台として、人形ほどちょうどいいものはありませんよ」

“ちょうどいい”という言葉が皇帝の心を動かした。そう、もし兵器の威力を試したいなら、影島の人形たちほど心の痛まない相手はいない。あれらは人間ではないのだから。

都に潜伏していた学生たちが捕らえられ、拷問を受け始めたところまで観てユインは映像を切った。

影島の同志たちは死んだ。本島に潜んでいた生き残りも捕らえられた。

自分一人では影島から攻撃することさえ出来ない。兵器の作動には最低でも、十三名の人員が必要なのだ。

ユインは静かに死を待つことにした。人形たちへ避難を呼びかけなければと心の隅で思っていたが、食料を絶つた体は力を失い、もはや立つことも出来なかった。自分は影島と心中するのだと、それだけが残された自分出来る唯一の償いだと考えた。

そして七日目の朝、東の空が煌めいた。

始めは微かな光の筋だった。その筋が細く長く天に向かって延びたかと思うと、鋭い一本の光矢となって降りて来た。

刹那、影島は光に包まれた。

世界を白く染め抜く、圧倒的な光だ。一切の色や形は失われた。

その一瞬には音さえ消えた。上も、下も、右も左も、光。ただ光のみがあった。

肉眼で見えていたら視力を失っていただろう。続いて鳴り響いた轟音は熱波が起こした風か。熱い風を連れた光は一瞬にして影島のほぼ全域を舐め、生きとし生けるものを焼き尽くした。

動物たちは悲鳴を上げる間もなく絶命した。森は膨大な灰の山と化した。痛みも死の恐怖もそこにはなかった。

しかし、人形たちの折り重なる死体は人の形をしていた。確かに人の形をしていた。

天に向けて伸ばした手の形をそのままに残した灰は、まだ熱の残

る風に吹かれて少しずつ崩れていった。

光が消え、地を揺らす風の音が去った後、目を開けたユインは自分がまだ生きていることを知って愕然とした。

なんとということだろう。光は塔を避けたのだ。

自分はまた取り残されてしまった。

孤独の冷たさにユインは耐え切れず、気を失った。

第四話（47）（後書き）

訂正しました。「司令室に籠もり」 「塔を歩き回り」

#### 第四話（48）

意識を取り戻した時、ユインは暖かい床に寝かされていた。

金属質の磨き上げられた床だ。ほのかな温もりを持っている。

体にはクオートの布が掛けられていて、全身に力がみなぎっていた。飢えて死ぬのを待つだけだった体に栄養が行き渡っている。誰かが自分の寝ている間に手当てしてくれたのだとユインは気付いた。ぼんやり辺りを見回した。金属質の壁、天井をユインは不思議そうに眺める。

「気が付いたか。何日も眠っていたのだよ」

穏やかな声があった。いつの間にか部屋に男が入って来ていたのだ。その声を聴いたユインは驚き、涙ぐんだ。

「先生……」

頭を下げて声を詰まらせるユインに、先生は近付いて来て傍らへ腰を下ろした。初老の先生の髪には白髪が増えている。疲れた様子だったが弟子を見つめる目は優しくかった。

「……申し訳ありませんでした。私たちは、勝手なことを。私たち……」

それきりユインは言葉に詰まった。共に謝罪すべき仲間がもういないことを思い出して打ちのめされていた。ユインの嗚咽だけが部屋に響く。先生は穏やかな表情で弟子の肩を抱いた。

「もう大丈夫。全て終わったのだよ。終わったのだ」

そう繰り返して優しく肩をさすり、弟子の涙が止まるのを先生は待った。ようやく顔を上げることが出来るようになったユインは怯えた声で訊ねた。

「ここはどこですか」

「影島だ。私の住居」

先生の答えにユインは少しほっとした表情を見せた。ここは本島で、自分は既に牢屋に入っているのではないかと思っていたのだ。

学校の傍にある先生の住居にユインは入ったことはなかったが、外からは何度も眺めたことがあった。壁にはめられた大きなクオートを見れば、確かにその建物の中にいるのだと分かった。

「では、先生が救い出してくださったのですか？ あの殺戮の場所から？」

先生は少し悲しげな目をして、いいや、と答えた。

「君を救い出したのは国の兵士だよ。私が兵士を連れて来て、塔に入れた。廊下で気を失って倒れている君を彼らが見つけ、ここへ運んで来て手当てをしたのだ」

そう、ですか。

力なくユインは答えて目を伏せた。当然だ。もう国は影島を取り戻しているのだ。

「皆の遺体は家族のもとに帰った。反逆者の汚名を拭うことは出来ないが、一人一人、丁寧に埋葬された。陛下の温情に感謝しなければならぬ」

監視を意識した先生の報告をユインは頭を垂れて聞いていた。

敗北感も悲しみもユインの心に湧くことはもうなかった。彼の心にはただ生き残ってしまった罪の意識だけがあった。

体力が回復したユインは本島へ戻されることになった。

先生は国の命令で影島に残らなければならないと言う。

別れの日、「見せておかなければならないものがある」と言っ

先生はユインを影島の奥へ誘った。

そこに荒涼とした景色が広がっていた。

見渡す限りの、赤茶色の大地。灰色に霞む空。

一片の緑も見えず、動く物もない。

焼け焦げた大木の幹は、貧弱な一本の炭と化して地面に突き刺さっている。

一面、大量に積もった灰は人の形をしている。クオートの光で焼

き尽くされた人形たちの死骸だ。時折吹く風が無慈悲に灰を舞い上げる。舞い上げられた灰で空が霞んで見えていたのだった。風に削り取られていく人形たちの死骸は、既に生きていた頃の形を失い始めている。

「なんとという……恐ろしい……」

海岸の一部を残して影島は地獄と化していたのだった。初めて革命の結末を目の当たりにしたユインは震え、目に涙を浮かべた。死骸をとんでも見ていられず目を逸らしかけた。それは自分たちの罪を悔いたからでもあった。

先生は小さな声で、しかし厳しくユインを叱咤した。

「目を逸らさずに見るがいい。これが、人間の所業だ。これこそが、クオートの業だ」

誰より重い責任を持つ者として先生は言った。

クオートを生み出してしまった自分も、使ってしまった者も人。

これが人のやることなのだ。

ユインはその場に座り込み、嘔吐した。人の罪深さに堪えきれなくなったのだった。先生は微動だにせず人形たちの死骸の山を見つめていたが、瞳には諦観の色を浮かべていた。僕がよく知る先生の瞳だった。

「先生……。もう終わりですね」

地に顔を伏せたままユインが言う。

「何もかも、終わってしまった。我々は、……私はこれからどうすれば？」

拳を握り締めて呟いたユインを先生は立ち上がらせ、両手で肩を握り締めて揺さぶった。

「ユインよ。君の人生はまだ終わらない。生きるのだ。生きていれば、いずれ希望も見出せるだろう」

「でも、どのようにして生きるといいますか」

「ティオンのもとへ行け。奴がお前を求めている。ティオンの家臣となれば少なくとも、処刑されることはないはずだ」

ユインは絶望した声で「ティオン！」と叫んだ。

始めから、そう、ティオンはこうすることを計画していたに違いない。ユインをただ一人生かしたうえで、赦し、屈辱のもとで飼いきれさせる。それがユインに対する屈折した愛情の実現。愛を返さなかつた者に対する復讐なのだ。

だが本来が素朴で純真なユインには、ここに至つてもまだティオンの暗い執着を理解する力はなかつた。何故、自分だけがティオンに求められるのか分からないと思つていた。

ただユインに分かるのは自分にはそうして生きる他に道がないということだつた。

彼は唇を噛み締めて悲しみを堪え、やがて顔を上げ言った。

「承知しました。私はティオンのもとで生きる屍となりましょう。

そして、いつの日かまた、あなたにお会い出来る日を夢に見ております」

一礼したユインの瞳から涙が落ちた。

気持ちを振り切つたように先生に背を向け、丘を駆け下りて行く。愛弟子の背を見送つた後も先生はしばらく地獄の光景の前に立ち尽くしていた。

その頃、国は第一皇子を失つた。

アンは病のために亡くなつた、という医師の見立てを疑う者はいなかつた。生まれつき病弱で何度も病に倒れていた皇子なのだから、これは天命と誰もが思つた。

しかし反乱の勃発に、第二皇子と第一皇子の死。

立て続けに国を襲つた不幸に国民は打ちひしがれた。特に皇帝と皇后の悲しみはあまりに深く、二人とも病床に臥せつてしまつた。

この当時の国で氣力に溢れていた者は一人、ティオンだけだつた。

第四話（48）（後書き）

訂正しました。「司令室で倒れているところを」「廊下で

#### 第四話（49）（前書き）

注\* 女性への暴力の場面があります。特に衝撃に弱い方、フィクションと現実の区別をつけられない方は避けてください。

#### 第四話（49）

ティオンは高揚していた。彼の夢はこの時、ほとんど叶えられたも同然だった。

自分を馬鹿にしていた者たちへ完全な形で復讐を果たすことが出来た。反乱鎮圧の功績と兵器実験の成功によって、父親からの信頼も得た。そして邪魔だった兄二人を殺すことも出来た。当然ながら長兄のアンもティオンが殺したのだった。もともと病弱な兄には手を下す必要さえなかった、陰で医師たちを脅して治療を阻止するだけで充分だった。

彼の夢を妨げる壁はもうない。

あとはただ待てば良いだけのはずだった。“皇帝”の位が手に入る時を。

けれど彼は渴きを覚えていた。不思議なことに、一つ一つ望みが叶うごとに渴きは増していたのだ。

“もっと欲しい。もっともっと自由に、好きなものを手に入れて良はずだ。自分にはそれだけの価値があるのだから”

自分は何でも手に入れることが出来るという万能感。時期皇帝であり、特別な人間であるという優越感が彼を満たしていた。それまでの劣等感の裏返しとしての強烈な傲慢が、彼の心に僅かに残っていた抑制を取り払った。

もう、ほんの少しも待つことなど出来なかった。自分が皇帝になるまで待つなど、とても。

兄アンの死で宮廷が混乱している最中、ティオンは最も手に入りたい物がある場所へと向かった。

少年時代からティオンが想い焦がれ続けた物はまだ同じ場所にあった。

忙しくてしばらく見に来られなかったが、恋を忘れたわけではない。むしろ堪えた時間が長かったぶん、恋心は燃え上がり欲望は抑えがたくなっていた。

神聖な建物の扉に身を寄せ、子供の頃からそうしてきたようにそつと扉の隙間に目を近付けた時、ティオンの興奮は絶頂に達した。久しぶりに見たその物は恐ろしいほど美しく成長していた。細い手足は長く伸び、泉にうつむけた顔は大人びた憂いを湛えている。まるで誰かを待っているかのよう。待ち続けて、待ちくたびれたという表情だ。その待っている相手とは自分に違いない、とティオンは思い込んだ。

何故ならあの物を手に入れるに相応しいのは自分しかないからだ。

今の自分だけがあの美しい果実を食らう資格がある。大人として成長し、皇帝になることが約束されている自分なら。

今こそ、手に入れるのだ。今こそ！

ティオンは衝動に突き動かされるまま、迷いなく扉を押し開けた。

石の扉が乱暴に開け放たれた。

神殿の清浄な空気がかき乱される。

扉が石壁に当たる高い音と、一気に流れ込んで来た外の風に驚いて少女は泉から顔を上げた。

レア・セレデウはちょうど泉での水浴びを終えて衣を身に着けたところだった。大きく見開かれた彼女の瞳に映ったのは、彼女がそれまで一度も見たことがない若い人間だった。白地に金の飾りを散りばめた派手な衣装を着て、肩の辺りで短く切りそろえられた金髪も陽光に輝いている。幼い女の子が夢で見る王子様のような眩い姿だが、レア・セレデウはその男の目を見て恐怖を覚えた。男の目は吊り上っていて、興奮のため淵が赤く染まっていた。

レア・セレデウは助けを呼ぼうとした。だが、彼女は声を上げる

ことが出来なかった。一生を神殿で過ごす巫女である彼女は言葉を話す必要がない。いや、言葉を操って神殿を穢してはならない。だから彼女は幼い時に声を出すための器官を切り取られていたのだ。きらびやかな衣を身にまとった“王子様”、ティオンは大股で真っ直ぐに少女のもとへ歩いて行った。

そしていきなり、少女の髪をわしづかみにした。その緩やかに波打つ髪の柔らかさを味わうことさえせず、強い力で下へ引いた。

少女は痛みに顔を歪めて声にならない悲鳴を上げた。

「やめる！」

僕もとつさに映像へ向かって叫んでいた。しかし声は虚しく現在の空間へ落ちた。

僕の制止の声はもちろん意味がなく、少女の声にならない悲鳴もティオンの妨げにはならなかった。彼は少女の髪を引き、そのまま泉に頭を沈めた。

苦しみで少女が暴れるたび、その手は虚しく泉の水面を叩いた。激しい水しぶきで神殿の庭が白く染まった。

少女が力を失いかけるとティオンは彼女の顔を泉から上げる。呼吸を整えた少女が再び逃れようとして抗い始めると、またティオンは彼女の髪をつかんで泉に沈めた。

何度も、何度もティオンはこの暴行を繰り返した。少女の顔を泉に沈め、救い出し、また沈め……。

暴行の間ティオンは酷く冷たい顔をしていた。僕がよく知る、興奮状態にあるこの男の顔とは違う。無表情で機械的な動作は、始めから決められた作業をしているかのようだった。それは奴が何度もこの場面を想像の中で練習して来たからだ、と気付いて僕は怒りに身を震わせた。

しばらくして少女はぐったりとし、虚ろな瞳で空中を見つめるだけとなった。

ティオンが彼女の背へ手を回しても力なく身を預けることしか出来ない。

レア・セレデウがこうして力尽きるのを待っていたティオンは、今度は慎重に彼女の体を仰向けに泉に浮かべた。それから彼も泉に入ると、彼女の上に覆いかぶさり、その体を包んでいる薄い衣を剥ぎ取り始めた。

とたんに欲情に歯止めはなくなり、彼は獣の形相で彼女を乱暴に貪り始めた……。

や、め、ろ！

やめろ、頼むからやめてくれ。お願いだ、父よ！

駄目だ、その人は。僕の、大切な。

大切な！

怒りと衝撃に全身を震わせながら僕は心の中で絶叫していた。

嫌だ、こんな場面は見たくない。

目を閉じてみた、目を逸らそうとした。だが何をしてても映像は容赦なく頭の中に流れ込んで来る。

レアによく似た女性が、僕の大切な人と同じ顔をした女性が踏みじられ貪られていく。自分の父親が実の姉を犯している。どちらにしても僕には耐え難い罪の光景が瞼の裏で展開される。

気が、狂ってしまいそうだった。堪えるために噛み締めた唇からは血が滲んだ。立ち上がり、呻きながら頭を抱えてその場を歩き回った。

それでも映像を止めるわけにはいかなかった。ここまで来て、中断するわけにはいかない。自分は全てを知る覚悟があると宣言したはずではないか。

“全てを、知る”？

そつだ。全てとは何だ。この映像を観る前にウーは僕に何と言った？

あの時、ウーは「何もかも秘密を知ることになる。あなたは自分の過去に耐えられるのか」と言ったのだ。

僕は重大なことに気付きかけていた。とても簡単なことで、もうとつくに答えが分かっているように良いはずだった。だが、しばらく心が抵抗していて認めることが出来なかった。

やがてゆつくりと答えが体の底から溶け出してきた、愕然とした。足から力が抜けた。崩れるようにその場に座り込む。

生温い涙が頬を伝い、落ちた。

「母さん……」

レア・セレデウへ向けて僕は自然に呼びかけていた。

#### 第四話（50）

ようやく分かった。

僕はティオンとレア・セレデウの子。禁忌を犯して出来た、人形の子だった。

この胸に刻まれた十字は本来の意味で正しかったのだ。

耳元で囁いた父の声が蘇る……「見よ。天と地が交わり生まれた、お前にふさわしい印だ」。

父は母の生い立ちを詳しくは知らなかったはずだ。しかしおそらく、周りの者たちがレア・セレデウを罵倒する声を耳に入れていたに違いない。

「悪しき血の者」、と。

母に向けられたその残酷な言葉は僕自身に向けられたに等しい。

床を見つめてむせび泣いた。胸の傷跡が熱かった。

レア・セレデウへの暴力はそれから幾度も繰り返された。ティオンは足繁く姉のもとに通い、許されない行いを続けた。

二十七世が息子の犯している罪に気付いたのは、娘の腹が膨れからだった。

二十七世は激怒した。そして、ティオンを廃嫡した。つまりティオンから次の皇帝となる権利を奪った。

（かつてユインは僕に「ティオン様は反乱分子と関わっていたために廃嫡された」と話したが、あれはもちろん嘘だった）

二十七世、この鈍い親は、ここへ至ってようやく末の息子の本性に気付いたのだ。いや薄々気付いていたが認めたくなくて目を瞑っていた、とも言えようか。しかし何もかも手遅れだった。二十七世はすでに影島という貴重な財産を失い、長男と次男を失い、愛娘を穢された。そしてたった一人残った跡継ぎへの望みも絶たれた。末

の息子をよく見ていなかったために、全てを失う結果となってしまうのだった。

憐れなのはレア・セレデウ、何の非もなく暴力にさらされた美しい人形の娘だった。

皇帝といえども、腹の目立ち始めたレア・セレデウを神殿に置いておくわけにはいかなかった。穢れた娘は“気”を守る巫女としての資格を失う。

二十七世はやむを得ず、娘を牢に送った。

だが廷臣たちはその措置では納得しなかった。彼らは断固としてレア・セレデウの処刑を主張した。“穢れた子供”をこの世に出してはならない、そのために“穢れた娘”を処刑せよと言うのだった。「そもそも初めからレア・セレデウは処分すべきだった」

そう強く主張していたのは皇帝に最も近い男、マルロだった。

マルロには、機械を使わなくとも直接アイデ（脳）によって気を感じる事が出来るという特殊な能力があった。この能力がある人々はレイリアで昔から重宝され、皇帝に助言を行って来た。気を浄化する泉の周りに神殿を造るようになったのも、かつて彼ら特殊能力者の助言があったからである。

無論、この人々の能力は肉体の器官に頼るため微弱なもので、発言も曖昧だ。ダイ教授が開発した機械の正確さと情報の膨大さにはとうてい敵わない。しかし昔からの伝統で、彼らを宮廷に置き、助言を仰ぐということはまだ行われていた。機械よりも彼らの能力を信奉する人のほうが多かった時代なのだ。そのため当時の宮廷でのマルロの発言力は大きく、皇帝でさえ無視することは難しかった。マルロは皇帝が人形に子を産ませた時から「その赤子を処分せよ」と主張してきた。

彼の場合、単なる伝統に従って殺せと言うのではなかった。

「人形の子は気を乱し、国を滅ぼすから処分せねばならない」

とマルロはその時に言っている。事実としては正しくはないが、まだクオートが開発途上でレイリアの歴史も分かっていなかった当

時の発言としては、驚くべき正確さで過去を見抜いていたと言える。愛する女の娘を殺したくなかった二十七世が、「何とか生かす方法はないか」と相談したところ、しぶしぶマルロが神殿に「巫女」として娘を封じ込める案を考え出したのだった。

しかし穢れた行いで巫女としての資格も失った以上、レア・セレデウを生かしておく言い訳はなくなった。

「やはり赤子のうちに殺しておくべきだった。災いのもととは最初から絶たなければならなかったのだ」

マルロは身を震わせて怒った。全てはレア・セレデウを生かしたことになる災い、皇帝に甘い顔を見せた自分の失態だと思った。今度こそは許すまいと、「レア・セレデウを処刑せよ」と叫ぶ廷臣たちとともに皇帝に詰め寄った。

なかなか決断することが出来なかった皇帝も、宮廷内が暴動寸前の騒ぎに陥るに至って重い腰を上げた。

二十七世は涙を堪え、ついに我が子を処刑する命令を降した。

その頃レア・セレデウは都の外にある塔の、最上階の牢に閉じ込められていた。

石壁に開いた穴からは遙かに都を望むことが出来た。彼女は毎日、陽光に輝く都市の町並みを眺めながら、いつか自分もあの綺麗な場所へ行つてみたいとぼんやり思っていた。彼女は自分がその都の神殿から来たことを知らなかった。

石の壁や床は冷たく、手足を痺れさせる。

右手と右足を鎖で繋がれ、牢の中でさえ自由に動き回ることが出来ない。

冷えて痛む体をさすりながらも、どうして自分がこのような酷い目に遭わなければならぬのかと考えることはなかった。誰かを恨んだり、憎んだりする考えさえ思い浮かべることが出来なかった。

自分の未来を考えたりすることも、もちろんない。

この先どうなるのか。自分はどういう状況に置かれているのか。考えることはないから、恐怖を覚えることもない。

何も知らない彼女は自らの不幸にすら気付かず、処刑までの短い時を過ごしていた。

そんなレア・セレデウを見つめていた熱い瞳があった。

牢を管理していた若い看守たちの瞳だ。

下級役人である彼らは、美しい女がここに閉じ込められている事情を知らなかった。だが言葉を話すことさえ出来ない弱い女が、悪いことをして牢に放り込まれたのだとはとうてい思えなかった。

しかも女はどうやら子を宿している。日増しに大きくなる腹と、彼女の苦しい様子を見て彼らの同情は募った。

「気の毒に……。あの女をどうにか救えないか？」

女に恋をしていなかったか、と問えば彼らはきつと答えに困っただろう。

ともかく若さにまかせて理屈抜きに、憐れな罪人を救い出したいと彼らは思った。

特にある青年の情熱は痛々しいほどだった。彼は毎日、牢の覗き窓からレア・セレデウを見つめ続けた。その真摯な横顔はどこかラウス・ロウに似ている、と僕は思った。

#### 第四話（51）

ある日、青年は決意した。女を救い出すことを。

情熱に身をまかせた無謀な計画だ、と彼は自分でも分かっていた。厳しい警備を潜り抜けて囚人を救い出し、果たして逃げ延びられるのか？

外国へ逃げる事が出来れば何とか生きていける。もともと青年は外国の出身で、自分の故郷へ女を連れて帰るつもりでいた。だがレイリア国の最先端の機械を駆使した警備網を突破し、脱獄を果たした囚人は未だかつていない。

女も自分も、死ぬかもしれない。

危険は充分に分かっていた。分かっていたが、ラウス・ロウによく似た面立ちのその青年は情熱を抑えることが出来ない性質だった。

そんな青年の情熱に賛同する友が現れた。

青年と同じ故郷の出身で、ともに看守の仕事をしていた弟分だ。

外国出身者である彼らの名前は僕には分からない（外国の情報  
は過去見の機械で読み取ることが出来ない。塔で得られる映像はレイリア国内に限られる）。けれど彼の人柄の善さは映像から伝わってきた。

背丈は低く手足も短いが、筋肉質で体格の良い友は力持ちだった。同僚との力比べで負けたことはない。ただし性格は温厚で、強面こわもての外見に似合わず周りに気を遣い、いつも滑稽な仕草をして仲間を笑わせていた。

囚人の様子を見に行く時もおどけた表情をつくり彼女を笑顔にさせていた。

もちろん女に同情していたからでもあるが、友もまた彼女に恋心を寄せていた一人だったのだ。最後まで恋心に無自覚だった青年と違い、友のほうは焦がれる気持ちを隠すこともなかった。

青年の計画を悟った時、協力を申し出たのは当然だったろう。優しい友だった。しかし彼も青年と同じように、無謀な人だった。

場面が切り替わった。

一面の、深い緑。闇と光が目の前で交互に入れ替わり、ざわざわと揺れる葉音が響いた。

森の中だ。木々の間、生い茂る枝の下を潜り抜けるようにして駆けている三つの人影が見える。

先頭は細身の若い男。男が手を握っているのは薄い衣を身に纏った女。透ける衣の裾と、長い金の巻き毛が風に翻っている。二人の後を追うのは短躯の男。体が重いのか、少し遅れていた。

三人の荒い呼吸が聞こえた。苦しそうな息遣いだ。

看守たちとレア・セレデウはどれほど長い間、全速力で駆けてきたのだろう。レア・セレデウの額は汗で濡れ、青年と友は看守の鎧をとくに脱ぎ捨てている。

たびたび怯えた表情でレア・セレデウが後ろを振り返る。最後尾の友が地面に突き出た枝によくつまずく。そのたび三人の足並みは乱れて遅れる。

追っ手の足音はもうすぐそこで聞こえていた。追いつかれるのは時間の問題だろう。しかし彼らは諦めることなく必死で駆け続けた。ようやく木々の隙間に光が見えた……希望の光だった。これで、生きられる。

視界が一気に開けた。砂浜へ出たのだ。砂の反射する白い光が三人の目を射た。

三人で海に向けて手を伸ばした瞬間、短躯の男が崩れた。

追っ手に背後から斬りつけられたのだ。血飛沫を上げて倒れる友の姿を見て青年は叫んだ。しかし森から次々と兵士たちが飛び出て来る。友のもとへ駆け寄ることを諦め青年は前を向き、走り続けた。レア・セレデウの手をかたく握り締め。

せめて。せめて、彼女を救いたい。

逃げてくれ。俺の命を盾として。どうか、生きて、くれ！

青年の心の叫びは虚しく潰された。伸ばした彼の手に海は届かなかった。崩れ落ちる青年の視界は闇に覆われた。

青年を斬り捨て、海に放り投げた兵士たちは弱い女を取り囲んでゆっくり詰め寄って行った。怯えて抵抗する女の細腕を一人が掴むと、他の数人が飛び掛かり捕獲した。彼女は無造作に兵士たちの肩に担ぎ上げられ、森の奥へと消えて行った。

僕の母を救い出そうとした若い看守の計画は無惨な失敗に終わったのだった。

囚人が看守の手引きで脱獄したという情報は瞬時に都へ伝えられた。皇帝は大げさにも百人からなる武装した兵士の集団を追跡に向かわせた。素人の若者三人はたちまち追いつかれた。囚人は捕獲され、無事に国外逃亡を防ぐことが出来た。看守の二人はその場で処刑された。あまりにも簡単に解決した事件だった。

ところが青年は生きていた。

幸運にも傷は浅くまだ息のあるうちに海へ投げ捨てられたため、命拾いしたのだ。

気を失って波に漂い、近くの浜辺に打ち上げられた青年が目覚めたのは翌朝だった。彼は自分が一人生き延びたことを知り、慟哭した。

その悲鳴に似た叫びは天にまで響いたが青年を慰める者はいなかった。

愛した女を救うことも出来ず、友も失った。

深い傷と絶望を背に負った青年は黙然とレイリアを去った。

小船に乗った青年の暗い瞳が波間に消え、やがて遠い海の向こう

へ小船の影も消えて行き……それきり、青年の姿は観えなくなった。  
青年がその後、どこでどう生きたのか。僕には知る術がない。

第四話（52）（前書き）

\*注 処刑描写、残酷設定があります。

#### 第四話（52）

数月後、母は処刑された。

それはよく晴れた初夏の朝だった。

目隠しをされて宮廷の処刑場に連れ出された母の腹は大きく膨らんでいた。妊婦に対しても刑の執行は容赦なかった。石畳の広場の中央に膝を突いて座らされた彼女を、背後から二つの剣が襲った。残りの一つの剣は苦しみが少ないよう罪人の首を狙っていたが、地面に倒れた彼女は既に事切れていた。しきたり通りの、三人の処刑人による執行だった。

白く明るい処刑場に赤い二つの円が描かれた。

美しいとも言える光景だった。ついに最後まで自分が処刑されることも知らず逝った女の横顔も安らかだ。

しかし、処刑人がしきたりとは違う不謹慎な行動を起こした。女の死体を仰向けに転がせたのだ。そして、張ち切れそうに膨らんだ腹へ剣を向けた……。

「うっ」

思わず声を漏らし、吐き気を堪えて口を押さえた。これが自分の誕生の場面なのだ。

父の言う、僕が“地下から引き出された”瞬間。

この光景を当時見ていた者は処刑人の他に誰もいなかった。

二十七世はこの時、心労で臥せていた。体力的にも精神的にも愛娘の処刑の場に立ち会うことはとうてい出来なかったし、廷臣たちも皇帝の立ち会わない処刑を覗き見することをはばかった。

立会い人なく行われた処刑だったため、処刑人たちは違反を行う

ことが出来たのだ。

処刑人たちを操っていたのは やはり、ティオン。  
ティオンは密かに処刑人たちに取り入り、「後で高い地位に就けてやる」と約束して罪人の腹から赤子を取り出させたのだった。

レア・セレデウの腹の中に自分の子がいると知った時から、ティオンの彼女への執着は失せた。代わりに興味を抱いたのは新しい命に対してだった。自分の分身がいるなら、その分身を使って思いを遂げることが出来るのではないか。未来永劫に自分の分身が国を支配し続けることも可能なのでは。

それは自分が国を支配することよりも“素敵”で“素晴らしい”計画だった。思いがけず開けた希望溢れる道、この新しい計画にティオンは取り憑かれた。

皇帝となる道が絶たれた今、自分には将来がない。だからなんとかしてでも、計画を実行しなければならぬ。そのためにはまずあの分身を手に入れなければならない。処刑から救い出して、計画実行の機会が来るまで隠しておかなければ。

ティオンはこの時、処刑人と共謀してレア・セレデウの命を救うことも可能だったはずだ。だが父の頭に母の命を救うことなどほんの僅かも浮かばなかった。既に父の頭は新しい人形をどう使うかという楽しい考えで一杯だったからだ。

血の中から取り出された赤子はかろうじて生きていた。

しばらくして弱々しく呼吸を始めた赤子に、処刑人たちは眠り薬を嗅がせた。泣き声を上げて宮廷の人々に気付かれたら困るからだ。こうして僕は一度も泣くことなくこの世に生まれた。

赤子を胸に抱え、急ぎ足で処刑人たちが向かったのは宮廷の中央にある中庭だった。

そこにダイ先生が待っていた。

宮廷での長い軟禁生活で先生の顔は青褪め、やつれていた。その

うえこれから秘密の赤子を育てるといふ過酷な任務を負わなければならぬのだ。まだ初老の先生の髪はすっかり白くなってしまっていた。

近付いて来る処刑人たちの足音に振り向いた先生の胸へ、ぐいと赤子が押し付けられた。先生は悲しげな瞳で処刑人たちの衣に付いた血を見つめた。処刑が行われたことを知って彼はレア・セレデウへの憐れを覚えずにいらなかった。

「ダイ。頼んだぞ」

処刑人たちはそれだけ言い、足早に立ち去った。

中庭に取り残された先生は悲しみを吐き出すように息をつき、そっと腕の中の赤子を覗き込んだ。

赤子の僕は体を強張らせて眠っていた。生きているとは思えない静かな眠り方だった。だが先生は赤子の額に浮かぶ汗に健全な命を認め、瞳に希望を浮かべた。

先生が指でそつと撫でた金の髪は、僕がティオンとレア・セレデウの子であることを表していた。先生はその髪を撫でながら決意溢れる声で囁いた。

「必ずあなたを生かしてみせる。必ず、人間にしてみせる。……我々の希望、最後の一つ星よ」

瞬間、どつと先生の意識が頭の中に流れて来た。

衝撃に打たれた僕は全身を駆け巡る痺れに息をすることも忘れた。

「違う。そうでは、ない」

呟いていた。疑いを抱いていた自分に。先生を裏切り者と教えた言葉に。「あなたを、傀儡にするつもりだったのですよ」と僕の耳へ囁いたあの声に。

「先生は……先生は、」

確かに、僕を愛していた。

赤子の僕を抱き留めた瞬間、先生の胸の内にあつたのは素朴な愛

ただだった。人として、人の子を大切に育てなければならないという愛だ。

そして確かにこの時、先生は希望を抱いていた。

新しい国の未来を造り得るかもしれない、ただ一つの命へ。

#### 第四話（53）

生まれてはならない赤子が、生まれてしまった。

マルロの直感により事は発覚した。処刑の夜、「赤子が生まれた」とマルロが騒ぐので、罪人の死体が掘り起こされ調べられた。するとマルロの言った通りレア・セレデウの腹の中は空っぽだった。

犯人を捜すどころではなかった。罪の子が国のどこかへ逃げてしまったのだ、事態の重大さに取り乱した皇帝はマルロにすがった。

「どうすればいい？ 私はどうすべきだ？」

「このまま罪の子を逃してはなりません。罪の子が大人になれば国が滅びます。これは国の一大事です……、手段を選ぶべき時ではありません」

マルロが皇帝に進言したのは漏らさず赤子を殺すことだった。

つまり、国でその日に生まれた赤子は必ず殺すよう全国民に命じると言うのだ。こうすれば国の隅から隅まで、生まれたばかりの赤子が逃げて生き延びる場所はなくなる。

さすがの二十七世もこの残酷な命令を降すのは躊躇した。しかしマルロは血相を変えて強く進言したのだ。

「一人一人の赤子の血筋を確かめることは出来ません。また、生まれたばかりでなければ子供の誕生日を見分けることさえも出来ません。一月も経てば手遅れとなります！」

ちょうど僕の生まれた日に、日食があつた。そこで「今回の日食は不吉だ」とマルロが嘘の宣言をすることにした。

こうして「日食の日に生まれた子供は不吉だから全て殺すよう」、国民に命令が降されたのだつた。

その日。たくさんの赤子が殺された。本当は死ぬ必要のないたくさんの、たくさんの赤子が。

親たちの涙が大量に流された。生きるはずだった数多の命が天へ昇った。

そして本当に死ななければならなかった唯一の赤子、僕は影島へ逃れてのうのうと生き延びてしまった……。

“ 僕の、せいだ ”

事実として自分の存在が起こした惨劇に頂垂れた。罪が重過ぎて顔を上げることも出来ない。

今まで自分は大きな不運に巻き込まれた人間だと思って生きてきた。

しかしそうではなかった。

自分こそ、その大きな不運を巻き起こした源だった。

その後の僕の思い出が幸福であればあるほど、理不尽に殺された同じ日生まれの子供たちの怨嗟の聲が大合唱となって耳朶に響く気がした。

第四話(53)(後書き)

「お知らせ」 この小説でモデルとした物語、参考書籍を解説ページに掲載しました。解説ページはサイトにあります。http://rainydays2.web.fc2.com/eienshou.html

#### 第四話（54）

国中の嬰兒が殺されて間もなく、アテラン二十七世もこの世を去った。

相次ぐ息子たちの死、息子の裏切り、娘の処刑。さらに生まれたばかりの赤子を殺せという命令を全国民に降さなければならなかったことの心労が重なり、病篤くなってついに力尽きたのだ。

二十七世が去り時代は変わった。

新しい皇帝を立てなければならなかったが、ただ一人残った皇子のティオンは廃嫡されている。

“次の皇子が生まれるまで”、つまりティオンが正式に婚姻して子が誕生するまでの間、ティオンが執政として国政を担うことに決まった。無論、ティオン自身が執政になることを名乗り出て、誰も反対の声を上げることが出来なかったただだが。

マルロだけは反対の言葉を堂々と口にした。さすがのマルロも海を隔てた影島で僕が生きていることには気付かなかったが、ティオンの心の中で立てられている計画の不穏さは感じていたようだった。しかしマルロはティオンが権力を得てすぐ牢に幽閉されてしまった。

ティオンにとって古い時代の“預言者”は役立たずなばかりか、独裁の自由を奪う邪魔者でしかなかった。

こうしてティオンの独裁政治が始まった。

皇帝にこそなれなかったが頂点に立ち、全権力を手にしたティオンは望みを叶えたと言えるのではないか。全てが彼の思い通り、やりたい放題となった。反対する者は殺してしまえば良かった。

殺されたくないから廷臣たちは口を揃えてティオンを「有能」と褒め称えたが、ティオンには政治の才能などなかった。そもそも始

めから国をまともに治めようという気など彼にはなかったのだ。

すでに人形は死に絶えており、労働力を失った国は食料さえ満足に作る事が出来ず、国民は飢えて次々と死んでいった。

苦しさに耐えかねて誰かが反乱を計画すれば、ティオンはその者が住む地域一帯の住民を虐殺した。

無辜の民は死に、国は荒れ果てていく。

このままでは国家滅亡の日も近いと廷臣たちは陰で泣いていた。しかしティオンは国が荒廃することなど気にも留めなかった。

彼には計画があったからだ。

自分の生んだ息子が成長した暁に、全世界を手中に収める計画が、そしてその権力は自分とレア・セレデウの複製である子供たちが、未来永劫繋いでいくのだ……。

不意に幼いレア・セレデウの映像が目の前に映し出された。

淡い金の輝きを帯びた髪、青白い皮膚。まだ二歳か三歳の彼女は幸福そうな瞳をぼんやり周囲の壁に向けている。

レア・セレデウ？

いや、顔はレア・セレデウだが、気配が違う。彼女の座る場所もあの神殿の泉の傍ではなく、堅く冷たい石床だった。

ようやく懐かしい思い出と映像が繋がり、呟いた。

「レア」

あの子は母のレア・セレデウではなく、レアだ。僕と一緒に過ごしたレア。僕の、可愛い妹。

「妹よ……」

映像に手を伸ばしかけた時、違和感を覚えて身震いした。違う。あれは、妹ではない。

次の瞬間、レアが誕生するまでの経緯が映し出された。

ティオンがユインを得た直後のことだった。ティオンはユインを尋問して様々な話を聞き出していた。ユインは古代に複製人形が作

られていたことをつい話してしまった。その話を聞いて、ティオンは最終計画を思いついた。

母の腹から僕を取り出した時、同時に母の体の一部も切り取らせた。その体の一部をもとにユインが作り出し養育したのが、地下牢に閉じ込められていたレアなのだ。あの地下牢も人間の複製である人形を安全に育てるための装置だった。光を養分に変えて与えることで、体が弱くて病気にかかりやすい複製人形を安定した状態で育てることが出来る。複製人形がさかんに作られていた時代の栽培装置だった。

つまり、レアは母の“複製”。

妹などではなかった。僕とレアは双子だったのではない。双子であるのは母とレアだ。中身は別人でも体は同じ。レアの体は母そのもの。

「僕は、母と結婚させられたのか」

ティオンの計画は僕とレア・セレデウを契らせることだった。

自分の息子である僕と母の複製が交われればあの美しい血が濃く深まる。

これを将来、永久に繰り返していけば美しい血はさらに完全な美へと近付いて行くだろう。そうして子供たちは完全な美を手に入れることになる。

そんなことは不可能だし、血が濃くなれば肉体に破綻が生じることを父はユインから習わなかったらしい。

彼は自分の子孫に、未来永劫にわたる完全な美を与えることが出来ると思じた。自分の複製である子供たちが美と権力を完璧に支配する。それが父の最終計画だった。

その計画を、僕がぶち壊した。

罪に罪を重ねる危ういところで僕たちは逃げ延びた。

レアはあれからどうしただろう。

砂漠の国で元気に生きているか？

立派な男と出会い、幸福であつてくれているか？

不幸だった母の代わりに、複製である君が人間として自由に生きて欲しいと僕は強く願う。

外国の映像はこの機械で観ることが出来ない。だが、レアの明るい笑顔が心の目で見えた気がした。

#### 第四話（55）

それからの映像は僕の思い出に寄り添っていた。

影島の、海に近いあの家で過ごした先生との穏やかな日々。

赤子の僕を必死で育てる先生の姿が映し出された。

一人きりの子育てに先生は大変な苦勞をしていた。子を育てる、という初めての経験に悪戦苦闘する老いた人の姿は滑稽でさえあった。でも、彼の頬には笑顔が浮かんでいた。研究の間も、大学で講義していた時にも見られなかった健康的な笑顔だ。

時には疲れ果てて僕を叱ることもあった。驚くべきことに、一人で泣いている姿もあった。怒り、泣き、笑い、先生は生まれ変わったように感情の豊かな老人となった。

先生は人間になろうとしているように見えた。

「この子を必ず人間にしてみせる」

常にその決意が彼の胸にあった。

人形の子であり、文字通りの操り人形としての宿命を背負って生まれた僕を「人間」にするために、まず育ての親である自らが最も人間らしい人間になろうと心がけていたのだ。学問だけを目指して来たそれまでの彼には考えられないことだ。

教育にも熱心だった。僕が立つて歩けるようになる前から先生は僕に言葉を教え、語りかけていた。それから自分で創作した様々な物語を話して聞かせた。古いレイリアにまつわる伝説、英雄たちの闘いの物語、優しい女神たちの愛の物語。映像の中の僕は先生の膝の上に座り、目を輝かせて先生の話を聞いている。

その光景は僕の記憶にもある。先生の話してくれる物語が大好きで、時間を忘れて聞き入っていた。

大人になつた僕は先生の話聞いていて、その創作物語の内に周

到な訓練が織り込まれていると気付いた。喩えをふんだんに用い、抽象的なものを別なものへ転換したり結び付けて考える訓練が出来るように創られていたのだ。

僕が言葉を覚えるとすぐに先生はさらに抽象的なものを使って訓練を始めた。朝から晩まで毎日続けられた訓練を僕は飽きもせずこなした。あの頃、与えられた唯一の遊びが楽しくて仕方がなかった。五歳になる頃には先生の要求する答えを正確に返すようになった。

その訓練は後に塔へ命令を降したり、迷宮を潜り抜けるための暗号を解く能力を養った。

始めから、僕は先生の作った機械を操作する者として徹底的な訓練を受けていたのだ。

疑いが頭をもたげてくる。

やはり先生はテイオンの命令通り、僕を殺戮兵器として育てたのではないか？

最初から僕を、自分が育んだ研究の一部として愛した？ ただの機械として

「アンよ。私の、最後の希望」

優しい声が響いて暗い想いが吹き飛ばされた。

幼い僕の耳元で先生が囁いている。それは何度も、何度も聞かされた言葉だった。

「先生？ それ、どういう意味？」

僕が訊ねている。三歳の頃だったか。その時のことはあまり覚えていない。そう言えば訊ねたことがあった気もするが、あの後に先生が何と応えたのかは記憶にない。

くす、と先生は目を細めて笑い、僕の髪を撫でながら言った。

「お前が人々を救うんだ。先生の望みを叶える、たった一つの可能性なのだよ」

幼い僕は素直に訊ねた。

「先生の望みって、なあに？」

そうだ。それを探るために自分は今、この映像を観ている。先生の望みが何であるのか。僕が為すべきことを為すために、必要な答えは何であったのか。僕は固唾を呑んで先生の答えを待った。

ところが先生は今度は笑って答えなかった。ただ瞳が悲しげに伏せられた。彼は僕を自分の前に座らせて、真剣な表情で言った。

「アン。よく聞きなさい。最後の時が訪れたら、お前が扉を開けなければならぬ。お前の他に誰も扉を開けることは出来ない。そのための鍵は既に、お前の中にある」

先生は僕の額を指先で優しく叩いた。それから僕の瞳を覗き込み、ゆっくりと言葉を区切って発音した。まるで瞳の奥の頭脳に直接刻み付けるように、あるいは過去の僕を通じて未来の僕へ伝言を届けようとするかのように。

「お前は、全てを、知っている」

意味が分からなくて首を傾げている幼い僕へ、大人に話すのと同じ口調で先生は続けた。

「最後の時にはどうか君の思う、為すべきことを為して欲しい。それがどのような結果になろうとも私に異存はない。私は生んではならないものを生んでしまったのだから。君に後始末を頼むのは申し訳ないが、私にはそうする権利がない。最後を決めるのは君しかない」

彼は僕を抱き締めた。そして僕に気付かれないよう背中の方で側で泣きながら囁いた。

「その時には思い出せ。最も危険な鍵の言葉、君の本当の名を……」

「ほんとうの、名って？ 僕の名はアンだよ」

無邪気に答える僕へ先生は声を震わせて言った。

「君には本当の名がある。誰にも呼ばせてはならない、自分で名乗

つてもならない、本当の名。その名を唱えた時に扉は開け放たれる。名の意味が君を導くだろう。君の名は、最も明るい\*\*\*」

パシーン。

音が弾けて映像が飛んだ。

“接触不能”

頭に言葉が浮かんだ。ここだけ映像が消されているようだった。

誰かが兵器の鍵を探ろうと映像に接触したとしても答えを知ることとは出来ないようになっていたのだ。だが、この世でただ一人だけ答えを知ることが可能な者がいる。

僕だ。この記憶を現実に持っている僕。

鍵を思い出そうとしているうちに映像は進んでいった。

優しい思い出ばかりが流れて行く。

先生に手を引かれて海岸を散歩したこと。海岸から美しい夕陽を眺めたこと。暖かい部屋で、先生の膝の上で眠ったこと。毎日、毎日、笑ったこと。

老人と少年の、何気ない日常は他人が見たら何の価値もない光景だろう。

けれど僕には充分過ぎる価値があった。自分は愛に育てられた、と知ることが出来た。

先生は僕を愛してくれた。兵器として愛したのではない。子供を育てるための素朴な愛情を抱いてくれていた。人として最も基本的な、けれど実は最も得がたい愛情を僕は惜しみなく与えられて育った。

僕は確かに幸福だった。

それから、先生も僕を育てることで幸せを感じてくれていたと知った。人生の最後に先生は僕へ愛情を注ぐことで人としての幸せを

感じてくれた。

先生の言う“望み”、その最後の時が来なければいいと先生はずっと願っていた。彼が本心から本当に願っていたことは、ただ

「この子が人間として幸せに生きられますように」  
だった。

願ってはいけないことだと知っていながら、僕が外国へ逃れて無名の人間として生きて行けたらいいと先生は願うようになっていた。いつの間にか先生は子の幸福を願う一人の親となっていたのだった。

“独裁者も兵器の後始末も、どうでもいい。ただアンが人間としての幸福を得られたら”

だが願いはあの日、先生の命とともに海の底へ沈んだ……。

……………クオン……………

微かな停止音が塔を震わせた。

映像がゆっくりと淡く薄くなっていき、消えた。長い物語がようやく終わったのだ。

明け方の灰暗い光が差し込む講堂で、僕はぼんやり何も映らない宙を見つめていた。

温かい涙が胸を濡らしていた。

苦しい物語の最後に残ったのは愛の確信だった。先生の愛情に溶かされるようにして記憶の鍵が浮かび上がった。

僕はこの時、全てを思い出していた。



#### 第四話（56）

朝の光が全身を包み込むまで、床に座り込んだ姿勢のまま過ごした。

終わりを噛み締める。これで僕は自分の過去の全てを知ったのだ。瞼を閉じるとまだ生々しい残像が浮かぶ。出生の真相は胸に突き刺さっていたが、身動き出来ないほどの衝撃を受けたわけではない。立ち上がる力くらいは残っている。

涙の跡を拭き、ゆつくりと立ち上がった。

ふらりと体が揺れた。睡眠不足と長時間の集中は予想以上に体力を奪っていた。足に力を入れ、裸足で冷たい床を踏みしめた。重い体と外套を引きずって出口に向かい歩いて行く。

扉の前に立ち、深く息を吸う。

手をかざすと扉が横へ滑った。現在の空気が流れ込んで来る。

開いた扉の向こうに黒い人影があった。壁際に立ちこちらを見つめている。

「ずっと……待っていたのか」

長身の影を見上げて訊ねた。鋭い瞳が僕を見返して頷く。黒衣の精鋭の一人、ウーだった。

「何時間経った」

僕の問いに彼は一呼吸置いて答えた。

「一晚」

「そうか。皆を長く待たせてしまって済まなかった」

詫びて頭を下げようとした瞬間、目の前が暗転した。

「危ない」

次に瞼を開いた時には、僕はウーの腕に抱きとめられていた。一瞬だが気を失っていたのだった。床に崩れかけた僕の体を素早く歩

み寄った彼の腕が支えてくれた。

「大丈夫か」

思いがけず本気で案じる声が掛かった。冷めた表情とは裏腹に優しい瞳が見下ろしている。その瞳にラウス・ロウの面影を重ねて胸が熱くなった。

「大丈夫だ」

努めて強い声で答えて自分の足で立ち、歩き始めた僕の背になおもうーは手を添えて支えようとする。

「少し、寝たらどうだ？」

背後から諭すようにうーが囁く。僕は彼の優しさに笑顔で応えた。「ありがとう。そのつもりだ。少しだけ休ませてもらう。これから休めなくなるのだから」

言っていると彼は答えなかった。ただ背中を支える手に力が籠められた。二人で黙々と螺旋の廊下を降った。時折、遠のきかける意識を繋ぎとめながら僕は足を前へ運んだ。

「皆は、どうしてる？」

訊ねると背後から生真面目な答えが返って来た。

「塔の最上階で待機している。あなたが来るのを皆、待っている」  
最上階という言葉で皆の覚悟を知った。そこには革命の日にユイ  
ンたち学生が使った部屋、この塔の最も重要な部屋があった。

「ありがたい。もう少しだけ待たせることになる。そう伝えてくれ」  
「分かった」

静かな声が答えた。その声の後を追うように言った。

「眠る前に一つだけ知りたいことがある。教えてくれるか？」  
後ろを振り向いて見上げるとうーは少し困った顔をして言葉を返した。

「あなたは過去観をして、全てを知ることが出来たのではないのか」  
「その通りだ。僕は全てを知った。レイリアの過去を。自分の、出生の秘密を」

うーが痛ましげな視線を僕に注ぐ。彼ら黒衣の者たちは全員、忌

まわしい僕の出生を知っているのだろ。僕は労わりの視線から目を逸らして訊ねた。

「ただ一つだけ分からないことがあった。君たち、黒衣のことだ。外国から来た者のことはあの映像では分からない」

しばらく沈黙した後、ウーは話し始めた。話すことのアマリ得意ではなさそうな彼はぽつりぽつりと、考えながら話したが、言いよどむ様子はなかった。何も隠す必要はないようだった。

「あの黒衣の者たちはレイリア人だ。古いレイリアの民たち。かつてレイリアが滅んだ時、砂漠に留まった者たちの子孫だ。あるいは新しいレイリアから帰った者たちもいる。彼らは今も少数ながら、砂漠で暮らしている」

僕は砂漠で出会い、レアを連れ去った人々のことを思い出した。

僕たちを“忌まわしき双子”と呼び僕の死を願った人々だ。彼らこそ砂漠で今も暮らしている古いレイリアの民だった。するとレアは、今は古いレイリアの民たちのもとで暮らしているのだろうか。

「古いレイリアの民たちは、新しいレイリアの繁栄を遠く眺め、その傲慢に胸を痛めていた。かつての自分たちのようにいずれ自滅すると気付いていたからだ。それだけではない、今のレイリアは過去の封印された智慧を漁って地上全ての命を滅ぼす力まで得てしまった」

胸に痛みを覚えて一瞬、瞼を強く閉じた。それは僕の先生がしたこと。僕も責任を継いでいる罪だった。

「長年黙って眺めて来た彼らだったが、レイリア皇国の力が強大になつたうえ、ここにティオンという独裁者が誕生するに至って監視を強めた。密かに宮廷へ多くの間諜を潜り込ませティオンを監視していたのだ」

ウーは少し黙った後、抑えた声で続けた。

「……ティオンの横暴は極まり、罪に罪を重ね、産み落とした罪の子をついに皇帝の座に据えてしまった……。よって、ティオンと新しいレイリアは、古いレイリアの民たちの手で処分されることに決

まった」

それがあの闘いだった。決して憐れな皇帝を救出しようとしたわけではないし、レイリア皇国の再興を願っての革命でもない。レイリア皇国はその親である古いレイリアから見限られ捨てられたのだ。ウーはそこで言葉を切り、しばらく黙々と歩いた。それからふと思い出したように付け足した。

「私とラウス・ロウはレイリアの民ではない。私たちは大陸から来た。レイリア皇国の侵略を恐れている国の国民の一人だ。……貧しい国の者だよ」

自嘲するように彼は笑う。

「ラウス・ロウの出自は知らない。知り合う前までは海賊をして生き長らえてきたようだな。私は、身寄りもない流れ者だ。ちょうどレイリアの民が暗殺者を求めていたので話に乗った。そこでラウス・ロウと会った」

いつの間にか離れていた手が再び背に添えられた。

「私は食料が欲しかった。それだけだ。ラウス・ロウが来た理由は知らないが、きっと独裁者が嫌いだったのだろう。私たちにティオンへの個人的な怨みはない。あなたに対してでもだ」

それきり彼は言葉を絶った。僕たちは黙々と歩き、塔の最下層へ辿り着いた。

扉の前で僕は振り向いて告げた。

「話してくれて感謝する。それでは後で会おう。皆に伝えてくれ……、僕はすぐに行くよ」

暗がりで見えたウーの姿を見てから前を向いた。片手を扉にかざす。

心地良い音が響いて巨大な扉が二つに割れ、眩しい日差しが降り注いだ。

かつての自分の寝室へ辿り着き、柔らかな敷布へ身を投げると同

時に意識を失った。

この島へ帰ってから初めて自室で眠ったのだが思い出に浸る余裕すらなかった。夢を見ることもなく眠りを貪った。これが人生で最後の睡眠になると、体も気付いていたのかもしれない。

昼過ぎには目覚めた。

クオートの敷布は体を清浄にして力を与えてくれた。目覚めた僕の体には力が漲り、意識は明瞭となっていた。

始めに身なりを整えた。清潔な衣を探して身に付けた。クオートの衣はもう残っていなかったので、かつて先生が着ていた植物の繊維で織られた衣を着た。白い布を身に纏い肩で留めるだけのその衣はクオートの衣と違い、全身にずしりと重みを与えた。動きづらいが分厚い布で暖かい。

上にラウス・ロウの外套を羽織った。白い衣に赤い外套はよく映えた。

裸足もやめ、先生が履いていた“足を包むもの(靴)”を借りる。木で造られたそれを履いて歩くと床とぶつかって高い音が鳴った。かつん、かつん、と。先生が大講堂の壇上を左右に歩いた時に響いていた、あの音だ。

銀色の壁の前に立つ。そこに映った自分の姿に息を飲んだ。

ここで過ごした時と比べて背が伸び、顔に暗さが刻まれた青年の姿だった。他人のように見えた。もう母にもレアにも似ていない。父とも違う。孤独な一人の大人に生まれ変わっていた。

深く呼吸し、扉が開くよう念じる。自分の姿を映していた壁が四角く切り取られ目の前から消えた。

僕は寝室から足を踏み出した。二度とここに戻ることはないと思いながら。

映像を観ながら年を数えてようやく分かった。この時、僕は十八歳になっていた。



#### 第四話（57）

白い光の中、乾いた靴音が響いていた。

緩やかに昇る螺旋の廊下が僕を運命へと導く。塔の透明な壁を通して降り注ぐ光は、最後の道へ赴くため魂を浄化してくれているようだ。

心は澄み切っていた。

迷いはない。恐れもない。戦いに赴く高揚も、ない。

生まれる前から定められていた一筋の道をただ歩いて行くのみだ。

塔の最上階へ辿り着き、一つ呼吸をする。そこに堅く閉ざされた銀の扉があった。

初めて触れるその扉にそっと手をかざす。

す、と扉が目の前で二つに割れ両側に滑った。

陽の光より眩しい人工の光が目射た。四方の壁と天井が銀色に光っている。簡素な司令室の中央には、楕円の卓があった。卓の前に座った十二人が一斉にこちらを見た。

始め椅子に腰を落ち着けたまま呆然と僕を見つめていた黒衣たちだが、ウーが立ち上がって頭を下げると他の者たちも次々と立ち上がって頭を下げた。

「陛下」

「お待ちしております」

僕は皆を見回して頷いた。“陛下”と呼んだのは儀礼ではない、と感じていた。今、この扉をくぐった瞬間に彼らが本心から僕へ従ったことが分かった。

奥の司令席へと真っ直ぐ歩んで腰を下ろした。皆も着席した。すると、一つだけ空白の席が目立った。

ラウス・ロウの席だった。僕はその空白を言葉なく見つめた。

僕の視線に誘われて皆も無言で空いた席を見た。しばらく静かな時間が流れる。誰もが胸の中でラウス・ロウの魂が共にあることを感じていた。

「聞いて欲しい」

ラウス・ロウの席から皆へ視線を移して、僕は言った。

「始めに告げておく。我々の運命は定まっている」

刺すほどに鋭く真剣な眼差しを全員が僕へ向けた。

「この部屋に居るということは、未来がないということだ。戦闘が始まってしまえば生きてここから出ることは出来ないだろう。承知の者だけ、残ってくれ」

一人一人、視線を合わせながら言った。視線が揺らぐ者はいなかった。

「もし生きたいと思う者がいれば、今が最後の機会だ。今すぐこの部屋から出て行き、島の対岸へ避難せよ」

室内は静まり返った。誰一人、立つ者はいない。

僕は瞼を強く閉じた。

「済まない……。あなたたちの命を、預かる」

呟いて再び瞼を開けた時にはやはり揺らぎのない視線が僕に注がれていた。

僕は頷き、左手の人差し指を立てた。そして指先を自分の両目の中央、少し上あたりに付け、すぐに離して天井へ向けた。

「それでは 始める」

宣言すると、関とぎの声こそ上がらなかったが静かな情熱が全員の体から立ち昇るのが感じられた。

勇壮な人の声の代わりに、低く厳かな塔の震えが響き渡った。

僕の正面の銀の壁が画面に変わった。壁一面に映像が映し出される。遠隔視の映像だ。

画面は明るい青だ。晴れ渡る空と海の景色だった。巨大な船が数

十隻、凧ぎの海を悠々と渡っていた。

「ハウクはどうした？」

訊ねた僕の声に即座に答えが返って来た。

「あれが、ハウクの船です。集められた十万の兵士たちは既に大陸へ渡り終えました。迅速に引き返した船に彼らの家族が乗せられ、今ちようど本島を出たところです」

「そうか……、ハウクは、やってくれたのか」

ありがとう。ハウクよ。

涙の滲んだ目を映像へ向けながら僕は、今生で二度と会うことのない忠実な友人の名を心で呼んだ。

素早く涙を拭き、次に意識を本島の首都へ向けようとした。だが、映像は曖昧な影を映すのみだった。どうして観ることが出来ないのか、その理由は分かっていたが訊ねた。

「本島の、都の様子は？」

「分かりません。既に本島の兵器にも搭載されている イジス が起動され、映像に鍵が掛かって観ることは出来ないようです」

「ユイン、か」

「そうです。彼と、彼の育てた数人の部下が イジス を操縦していると考えられます」

「部下……。ユインの部下が」

「ええ。十五年前からティオンの命令で密かに訓練していたようです。……と言っても、教育は充分ではないようですが。とてもあなたの能力には及ばないでしょう」

とは言え向こうは人数と塔の数で優る。

こちらは先生が造ったなかで最も新しい塔と、十分な教育を受けた自分がいる。だが、塔は一基。満身に操縦出来る人間も、一人。

対する向こうの塔は旧式だが十基ある。おそらく、操縦する人数も塔の数に足りている。

十対一、か。

背筋を寒気が昇って来た。

勝利は始めから求めていない。相打ちを狙っていた。だが、果たしてそれも可能だろうか。もつか、この身が？

一瞬だけ僕の心を支配した不安に精鋭たちは気付き、案じる視線を投げて寄越した。

僕は弱気を振り払い、顎を引いて視線を皆へ向けた。やらねばならない。この身が力尽きる最後の時まで。

僕を止められるのは死のみだ。

#### 第四話（58）

影島の イジス は昨夜から起動されており、黒衣たちが交代で操縦していた。

見えない城壁で守られた影島と本島は張り詰めた静寂に包まれている。影島と本島、どちらが先にこの静寂を破るのか。そして破られた静寂は当分の間、戻ることはないのだ。

嵐が訪れる前の短い、張り詰めた時を僕たちは味わった。椅子に座る全員が無言で目の前の卓へ視線を落としていた。磨き上げられた金属質の楕円形の卓は、運命の配置に就いた我々の硬い顔を映している。卓の中央には明滅する青白い光が浮かんでいた。光は呼吸するようにゆっくり明るくなり、暗くなる。それは人の命令を待つて長い間眠り続けてきた塔の意識なのだった。

心を決めて僕は兵員たちの顔を見回し言った。

「先に確認しておく。あなた方は、この塔の操縦方法を知っているか？」

黒衣の一人が答えた。

「はい。古代の知識に基づき、国で最低限の訓練は受けてきております。ですがなにぶん古い知識ゆえ、新型の兵器に対応出来るかどうか」

「充分だ。操作の基本は同じとなっている。ただ、新型は旧型よりも処理速度が上がったかもしれない」

一人一人の目を見ながら続ける。イジスを操縦しているため卓に顔を伏せている者以外、鋭い視線で応えて来る。

「念のために皆で復習しておこう。この機械の操縦方法は単純だ

命令実行への過程は、たった二つきりの答えで構成される。“是か、“非”かだ」

右手の人差し指を真つ直ぐ立てて示した。

「このように縦の印が、“是”」

次に左手の人差し指を横に伸ばして見せた。

「横の印が“非”」

十字に交差させた指を今度は自分の額の中央に持つて行った。

「額のこの辺りを強く意識し、実行したい命令を思い浮かべる。すると機械が暗号、問いを出して来る。ここで問いに対する答えへ導く論証を、“是”と“非”を重ねて組み立てていく。この論証過程がそのまま命令実行へ導く処理言語となる。始め、問いは各人の能力に合わせて理解しやすい人間の言葉に変換されて出される。能力が上がって来れば、数や記号や、記号すら必要としない抽象的な意識のみで出題されるようになり、処理速度が上がる。問いに対する答えは、始めのうちには指を使って答えて良い。慣れてくれば頭の中に印を思い浮かべるだけで機械が反応してくれる。こうして塔と“対話”しながら正しい答えを出し、正しい道筋を通って処理して行けば、最終的にアイデ（脳）に対応した機械の力が発動されて命令は実行される。それだけのことだ」

全員が緊張した面持ちで話に聞き入っていた。既に知っているはずの知識だった。だが彼らは全員、現実に機械を操縦することに関しては初心者なのだった。

「よく聞いて欲しい……それだけのことだ、と今言った。しかし、“それだけのこと”がいかに難しいものか、これから全員で体験していくことになるだろう。危険な操作の実行ほど道のりは長くなる。つまり、論の過程が長くなる。一つ一つの是非は単純だが、全てにおいて正しい答えを出せなければ実行することは出来ない。一つでも誤って論が破綻すれば、」

二本の指を丸めて円を作つて見せた。

「“無”だ」

円は無、または始まりを表す象徴だった。全ては振り出しに戻る、の意。誤った答えを踏むとこの印が頭に浮かび、命令は実行されず

最初から操作のやり直しとなる。たとえばあの地下迷路でこの失敗を犯した場合は、同じ場所を何度も回ることとなり死ぬまで出口へ辿り着くことが出来なくなるのだった。

「かつて先生はよく仰っていた。“明瞭なる精神のみが光へ導く”、と。出口を見つめると眩しさで意識が曇るといふ。地道に、目の前の問いだけに取り組むことだ。焦らずに、ゆっくりでいいから確実に答えを出して行って欲しい」

「陛下、しかし」

黒衣の一人が質問を挟んだ。

「ゆっくり解説せよ、などとは言っていない状況では？ もはや訓練ではなく実戦なのですから」

「始めはゆっくりで構わない。実戦に入ればすぐに慣れるだろう。それまで、私が皆を補う」

全員が沈黙して僕の顔を見つめた。僕一人が重い負担を背負うしか方法がないと誰もが分かっていたが、果たしてそれが可能なのか。彼らの疑問と恐れが伝わって来た。

「一つ、質問よろしいですか」

沈黙を破って一人の黒衣が僕へ言った。

「この塔における最終的な命令を実行するためには、最低でも十三名の人員が必要だったはず。しかし」

言い淀む彼の後を僕が継いだ。

「この場には十三名しかいない、と言うのだな？」

イジス を操

縦する者を除いて、動けるのは十二名」

「そうです。一名足りない。いかがなされるおつもりですか」

青い顔で皆が頷く。全員が察じていたことのようにだ。

塔の最終命令を実行するためには、最低でも十三名の人員を必要とする。そもそも多大なるアイデ力を必要とする最終命令を一人や二人で行うことは不可能なのだが、少人数による暴走を防ぐためにも命令実行の必要最低人員数が機械に設定されている。その設定が十三名なのだった。

「ラウス・ロウが生きていれば……」

一人が呟くと全員が悔しげに下を向いた。始めから彼を含めて精鋭の兵員は集められていたのだ。

「案ずることはない。欠員は私が埋める」

僕の言葉を皆は信じられないといった表情で聞いた。

「いったい、どのように？」

「イジスの操縦と同時に命令を実行する」

司令室は騒然となった。黒衣たちは立ち上がり口々に叫んだ。

「お一人で、イジスと兵器を同時操縦？」

「無茶だ！」

覚めていく気持ちを抱えて僕は告げた。

「無茶でもやるしかない。最初からどのような無茶でもやるつもりだ。皆もその覚悟でここに留まったのだらう」

静まり返った室内にウーの声が響いた。

「何日、もつ？」

瞼を閉じ、少し考え、答える。

「三日」

目を開けると全員の強い視線が注がれていた。懐疑、恐怖の混じる視線だった。僕は続けた。

「少なくとも三日はもたせよう。少なくとも、だ。出来る限り引き伸ばす。可能なら、四日。五日……」

青褪めた黒衣たちの呟きが耳に入った。

「可能なのか、三日も」

「片時も休まず、アイデを満量一杯動かし続けることが。人の力として」

僕は椅子から立ち上がり卓へ両手をついて繰り返した。

「やるしかないのだ。可能かどうか考える権利は我々には与えられていない」

全員が口を噤み静けさが司令室に戻った。

しばらくして、年配の黒衣がふうと息を吐きながら笑って言った。

「……眠れませんな」

僕も笑顔を返した。

「ああ。最後まで」

それから全員の顔を見回して訊ねた。

「これで確認は終わりだ。皆、良いな？」

誰一人意義を唱える者はいない。僕は卓に手をついた立ち姿勢のまま目の前の壁を睨んだ。壁には霧がかかった本島の影が映っている。息を深く吸い、宣言した。自分でも意外なほど静かな声だった。

「戦闘、開始」

## 第四話（59）

戦闘、開始。

待ち構えていた号令を受けて精鋭たちは卓に向かい瞼を閉じた。

「発射用意。 第一の扉、開錠」

独り瞼を開けている僕が命令すると、卓の中央で明滅していた青白い光が輝きを増して一筋の光が枝分かれした。分かれた光は細く長く伸びて、卓の上を素早く走り端の席の前で留った。その席に座る者の眉間にしわが寄った。与えられた暗号を頭の中で必死に解いているのだろう、彼の額に汗が滲んだ。

しばらくしてようやく疲労した声に応えた。

「第一門、開錠しました」

第一門の席に伸びていた細長い光が弾けて消えた。時間はかかったがこれで最初の閉門が解除されたのだった。

この塔で最終命令を実行するためには、十三個の架空の閉門を解除していかなければならない。解除の実行のためには各担当の席に座った人員のアイデ（脳）を少なくとも一度は経由しなければならず、これにより必要最低人員数の制限が機能していた。ただし暗号解読作業は他の人員が交代して行うことが出来る。つまり戦闘中、解読につまずく者があって時間がかかり過ぎるなら交代可能だ。この時は初めてだったため、僕はどれほど時間がかかっても全員に門を開錠させようと考えていた。

「第二の門、開錠」

続けて命令した。また中央の大きな丸い光から、細長い足のよう

に伸びた光が走って行く。少し時間を置いて第二門の係が応えた。

「第二門、開錠しました」

「第三門、開錠」……「開錠しました」

「第四門」……「開錠です」  
こうして端から順に第十一門まで開錠された。第十二門は イジ

又 を操縦している者の代わりに僕が開ける。

「第十二門、開錠完了」

たどたどしかったが途中で間違えて無効になることもなく、十二の門を開くことが出来た。黒衣たちの仕事は初めてにしては上出来と言えた。僕は満足していた。

最後に十三番目の門を開いたならば本当に全てが始まり、終わる。全員の視線が僕へ集中した。皆の目は血走り頬は青褪めていた。“本当にやるのか？” 緊張の極みに達した視線は僕へ問うている。

「第十三門を開錠する」

僕は覚めた声で宣言して椅子に深く座り、瞼を閉じた。

瞼の裏で青白い光が明滅していた。

光は深い呼吸を繰り返しながら僕の最後の意志を試すかのように額の奥へ潜り込んで来た。

大量の、言語も記号も越えた象徴がなだれ込んで来る。一気に増えた情報に掻き乱されて頭がきりきりと痛んだ。光は僕のアイデを直接に読み取り、言語を介さずに暗号を次々と繰り返して来た。僕は複雑な暗号に絡めとられる前に素早く解きほぐしていった。

鬱蒼と茂る暗号の藪を掻き分けて進んだ先に別の光が見えた。

柔らかな白い光に浮かび上がったのは巨大な石造りの扉だった。

アイデ内で映像化されたその象徴は十三番目の門。最後の関門だ。

既に暗号は解読し尽くしていた。扉は僕が近付いたと同時にあっさり開いた。青白い光は弾け飛び、瞼の裏は闇となった。

「第十三門、開錠した」

声に出して告げると周囲が息を飲む気配がした。皆の緊張が瞼を閉じていても伝わって来る。

「これから光の充填が行われる。最後の鍵となる言葉を唱えれば、発射されるはずだ」

淡々と皆に説明しながら頭の中の映像を先へ進めた。

僕は象徴の世界を歩いて行く。現実世界では、塔が低い唸りを上げて力を充填し始めていた。

さらに頭の中の象徴世界を歩く。先へ、先へ。不意に足元がおぼつかなくなり立ち止まった。

一步先は崖だった。下を覗き込むと、果てしない奈落の底が見えた。吸い込まれそうな心地がし、目眩がして吐き気を覚えた。あの闇に飛び込めばもう二度と戻れまい。

「鍵を」

天上から声が聞こえた。

“鍵の言葉を投げよ、皇子よ”

空を仰ぎ見る。頭上を覆う黒雲の一部が割れて、一条の淡い光が差し込んでいた。光とともに降りて来た声は先生のものに似ていた。“鍵の言葉を知ることが出来たか？ 覚えているか、私が教えた言葉の意味を？”

僕は跪き雲間の光を仰いで応えた。

「ええ。覚えています。全て、思い出しました」

“では口に出して答えよ。鍵の言葉を”

現実の僕の瞳には涙が浮かんでいた。

ゆっくり瞼を開いて周囲を見回す。現実世界の光景が目映る。

卓を囲んだ黒衣たちが息さえ止めて、熱烈な視線を僕へ注いでいた。最後の決意を籠めてもう一度瞼を閉じた時、涙が零れ落ちた。僕は震える唇を開いて小さく呟いた。

「アーン」

奈落の底に吸い込まれる感覚があった。

瞬間、轟音とともに塔が激しく揺れた。そして外界を映していた画面が白く染まった。



#### 第四話（60）

ア。 最大級の。

テン。 天から降り注ぐ光。

ア＝テン。

数少ない古代レイリア語で「最も強く明るい光」の意味を持つその熟語こそ、先生が最後の塔に設定した鍵言葉であり、この兵器の名でもあった。

そして赤子の僕に先生が付けた、隠された名でもある。兵器の本当の名、つまりは僕の真の名が呼ばれた時、レイリア国が終わるように先生は仕組んだのだった。

僕は泣いた。先生は僕に殺戮兵器の名を付けたのだ。

過去生を思い出している遠い未来の僕も泣いた。幾度目かの転生の後、再び巡り合った先生は僕をあの兵器の名で呼ぶ。無意識だったのか気付いていたのか分からないが、あまりに悲しき名付け親だった。

どうして先生は僕に兵器の名など付けたのだろうか。

先生にとっては、終末をもたらす名が「最後の希望」だったのか……。だとするならば、僕は進んでその名を受け入れるしかない。

ついに戦闘の火蓋は切って落とされた。古代の殺戮兵器は再び蘇って光の矢を降り注いだ。

今度の犠牲は影島ではなく本島となった。

轟音とともに影島から放たれた光は本島の首都周辺を焼き尽くし、生きとし生けるものの存在を消し去った。一帯は灰と化した植物と黒く焦げた大地で覆われた。

幸いにもハウクの誘導で周辺の住民は避難した後だったため、無辜の人々が焼かれることはなかった。

首都にも イジス の防御があつたので実害はなかった。しかし首都が恐慌に陥つたことは想像に難くない。

こちらの影島には稀代の科学者が造つた、最新にして最終の兵器 アーテン がある。いつぱう本島には古代の設計のままの、単純で処理能力が遅い兵器しかない。数にすれば本島は十基と多いが、十基を束にしてようやく最新兵器と互角となる。

イジス の防御力も完璧ではない。これは先生もあの革命後に調べて気付いたことだが、光の攻撃を短期集中で幾度も浴び続けられれば、やがて負荷に耐えられなくなった操縦者のアイデ（脳）とイジス本体が破綻し、防護壁が消失する可能性が高い。そうなれば次の一撃で“終わり”。レイリア国は地上から消滅することになる。

首都の廷臣たちは僕が攻撃しないことを願っていたはずだ。

いや、まさか攻撃するはずがないと高を括り安心しきっていたに違いない。

国家の元首たる皇帝が、自分自身の手で、自国を滅亡させるために戦争を始めるなど。これほど滑稽で奇妙な出来事があるうか。人間の歴史が十万年続いたとしても起こり得ることではない。

その起こり得ないことが起きてしまったのだった。

腐りきつたレイリア国を存続させるため、それから何よりも自分たちが生き残るために、彼らは僕の宣戦布告に応えなければならなかった。廷臣たちに選択の余地はなかったのだ。生きなければ、攻撃には攻撃を返すしかない。

ユインとその部下たち戦闘要員は廷臣たちの命令を受けて、即座に配置に就いただろう。

そして、ユインは本島の兵器を揺り起こした。こうして本島の十基も永い眠りから目覚めた

轟音が響いて塔が揺れた。

画面は強烈な白い光を放った。正視を避けて僕たちは下を向いた。揺れが収まってから画面を見ると、泡立った海から昇る蒸気で空が霞んでいた。海面が黒いので何かと思つてよく見れば、大量の魚の死骸が浮いているのだった。イジスの防御により影島に害は及ばなかったようだ。

「本島からの第一撃あり。我が島に被害なし」

報告を僕は遠い地から届く声のように聞いていた。魚は死んだけれども、と頭の隅で思う。苦い想いが胸からせり上がって来る。

皆を見回して鋭く命令した。

「続いて第二撃が来る。こちらも続けて攻撃を仕掛けて行く。全員、次の攻撃準備に就け」

卓上の青白い光が再び輝きを強め、端の席から順に細長い光の筋を伸ばして行つた。焦りからか今回は暗号解読に少し時間がかかっていた。皆、額に汗を浮かべて眉間にしわを寄せているが時間ばかりが過ぎて行く。

しばらく後、画面の端の空が光った。僕は卓に手を掛けて叫んだ。「来る！」

本島からの第二撃が影島を襲った。続いて、第三撃。

連続して受けた攻撃で塔は大きく揺れた。卓にしがみついて揺れを耐えなければならぬほどだった。動揺したのか誰かが暗号解読を誤り、開錠は振り出しに戻った。

このままでは先にこちらのイジスが破られてしまう。

「解読作業を私へ回せ。十回のうち、九回までは私が担当する。君たちは後から来る暗号を落ち着いて、確実に処理して欲しい」

僕が頼むと皆は申し訳なさそうに目を伏せ了解した。

僕は卓上の光を見つめた。中央の輝きが増すと同時に青白い稲妻が卓上の十二箇所を走り、一つの束となって僕の席へ届いた。

瞼を閉じ、一呼吸の間に暗号を解き、鍵を唱える。

「ア=テン」

画面が白く染まった。

そこまで、束の間のことだった。瞼を開けると場の空気が一変していることに気付いた。

全員が恐怖とも嫌悪ともつかない表情で僕を見ていた。

「速い……」

呟かれた声には感嘆も賞賛もなく、ただ戦慄があった。

別の生き物を見るかのような恐怖と好奇の目から僕は視線を逸らして下を向いた。じわりと湧いて来る屈辱に堪えながら自分に言い聞かせるように呟いた。

「仕方がない。僕はそういうふう育てられた。兵器の一部として育てられたのだ」

顔を上げ、今度は憐みの籠もる視線を送っている兵員たちを睨んで告げた。

「もう立ち止まっている暇はない。遠慮もしない。攻撃を続けさせてもらう」

皆は一瞬だけ意識が飛び、第七撃の暗号解読が無効

瞬間に卓上を稲妻が走り、第三撃が発射された。一拍置いて、第

四撃。続けて五、六……。

「ごおっと塔が揺れて額に痺れが走った。

本島からの第三撃を受けたのだ。塔と繋がっていた僕のアイデ（脳）は衝撃を受けて一瞬だけ意識が飛び、第七撃の暗号解読が無効となった。冷たい汗が一筋、額から流れ落ちた。

「第七撃、十一門まで開錠終わりました」

ありがたい報告が上がった。その頃ちょうど、黒衣たちが協力し合って進めていた解読が終わったのだ。

「よし。十二門の後を引き受ける。それから……、約束通り、次回の攻撃から イジス の操作も私が引き受けよう」

青い顔で イジス の操作をしている者の顔を見て僕は言った。

もう限界だろう、と思ったからだ。彼にはこれまで暗号解読作業をさせてこなかったが、 イジス 操作をしながら暗号を僕へ引

き継ぐだけでも負担は大きかったはずだ。

イジスの操作をしていた者は救われたように顔を上げた。だが、他の者たちは不安げに僕へ視線を注いだ。

「いよいよ イジス と アッテン の同時操作が始まる。」

「本当に大丈夫なのですか。あなたは我々と比べても体が丈夫なようには見えませんが……」

卓の向こうから声が上がった。僕が質問に答える前に、本島からの第四撃を受けて塔が揺れた。唇を噛み締めていた僕は唇を切ってしまった。

口の端から流れる血を手の甲で拭って答えた。

「愚問だ。同じ質問は二度としないよう。話している時間も、もうないのだ」

全員が不安を飲み込み黙り込むのを見届けてから、僕は瞼を閉じた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1911h/>

---

永遠の雨、雲間の光

2011年11月27日01時57分発行